岩手県埋文センター発掘調査報告書　第68集

東北縦貫自動車道建設関連遺跡発掘調査報告書

九戸郡
軽米町

馬場野Ⅰ遺跡

(財) 岩手県埋蔵文化財センター
日　本　道　路　公　団

岩手県埋文センター発掘調査報告書第68集　馬場野Ⅰ遺跡正誤表

頁数一行数	誤	正	頁数一行数	誤	正
②—19	樹種同程は、	樹種同定は、	44—8	）主とし、	）を主とし、
②—22	口腔解部学	口腔解剖学	44—11	を切る	を切って
6—4	北側の部には	北側の谷部には	50—2	側（図上方）	東側(図上方)
6—12	全域に	全域には	50—3	高い、	高く、
7—10	叭屋敷Ⅲ遺跡	叭屋敷Ⅱ遺跡	50—3	CⅥ—009土坑	CⅥ-009B土坑
7-11・12	埋沿谷地形	埋没谷地形	50—19	150±a cm	150±α cm
7—14	合わせるとこ	合わせると	52—8	平面図在下	平面図左下
7—18	埋沿谷地形	埋没谷地形	52—28	断面図は	断面図では
9—6	壁より設け	壁よりに設け	55※—20欄	CⅥ-011の切って	CⅥ-011を切って
10—15	のぞいたら	のぞいた	76—22	…が検出	…が、獣骨が検出
17—12	細粘浮石	細粒浮石	76—22	）本遺骨に…	本遺骨に…
18—14	Ⅲ～Ⅶ層の	Ⅲ～Ⅴ・Ⅶ層の	76—24	上坑長軸	土坑長軸
19(2図の)	Ⅵ Ⅷ	Ⅵ～Ⅷ	77—13	直円筒をして	直円筒をなして
22—29	シルト質上が	シルト質土が	77—15	から出土遺物	からの出土遺物
23—3	3本	3口	80—5	その台石	台石類
23—19	またNo.8は	また図版48—14は	80—12	(図版38-2・5・6	(図版38-2～6
23—19	手掊り形土器	手焙り形土器	80—12	写真図版33-2・5・6	写真図版33-2～6
26—(上図)	作業白石	作業台石	81—11	幅2m	幅2mm
28—23	柱は6口	柱穴は6口	90—31	数本の淡線	数本の沈線
34—27	南部浮石面	南部浮石層	102—6	残っていた骨の	残っていた。骨の
36—3	不整は	不整な	104—22	両端より2基	両端よりに2基
36—18	である○層	であるⅥ～Ⅷ層	106—4	＋1某	＋1基
39—12	Ⅵ層上部	Ⅵ～Ⅷ層上部	108—4	加な地点	別な地点
39—23	4本は	4口は	108—6	いるから、	いることから、
41—4	色鮮やかな赤変	色鮮やかな赤色	109—註.1	麻生Ⅰ優	麻生 優
41—18	340±a	340±α	図版4	DⅦ	CⅦ
41—26・27	Ⅳ～Ⅷ層	Ⅵ～Ⅷ層			
42—2	住穴が	柱穴が			
42—5	住穴状	柱穴状			
43—13	枯土質	粘土質			

東北縦貫自動車道建設関連遺跡発掘調査報告書

九戸郡 軽米町 馬場野（ばばの）Ⅰ遺跡

昭和56・57年度発掘調査

昭和５８年１０月

1. 南西より撮影（昭和57年10月撮影）

写真図版Ⅰ：遺跡遠景（含周辺遺跡）—Ⅰ

2. 遠景―2（南より撮影）

3. 近景（叭屋敷Ⅲ遺跡より撮影）

写真図版２：遺跡遠景・近景

4. （昭和57年８月18日撮影）

写真図版３：馬場野Ⅰ遺跡遺構全景

5. 深掘D地点土層断面

6. 尾根部西区域の土坑分布状況

写真図版4 ：土層断面と土坑分布状況

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活を豊かにする開発指向との均衡を保つことは大きな課題でもあります。

一方、地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業も本県にとって重要な施策となっており、特に東北縦貫自動車道建設に対する期待も大きいものとなっております。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連し、昭和56・57の両年度にかけて発掘調査した軽米町馬場野Ⅰ遺跡の成果についてまとめたものであります。

当遺跡は、県北北上山地内の瀬月内川と雪谷川に狭まれた丘陵の尾根に立地しており、縄文時代中期末から後期にかけての竪穴住居跡や土坑・陥し穴状遺構が地区ごとにまとまりをもつなど縄文時代集落研究を進めるうえでの好資料が提示できると思われます。

この報告書が研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

これまでの発掘調査や報告書作成にいたるまでの間ご援助、ご協力賜わりました日本道路公団仙台建設局、同八戸工事事務所、軽米町教育委員会をはじめ関係各位に衷心より感謝申し上げるとともに、今後のご指導・ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年10月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター

理事長　金　子　彰　吉

例　言

1．本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に関連して行われた発掘調査のうち、九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野地内に所在する“馬場野Ⅰ遺跡”の調査成果を集録したものである。

2．本遺跡の調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議にもとづき、財団法人岩手県埋蔵文化センターが発掘調査を担当した。なお発掘調査は、粗掘・遺構検出を主とした第１次調査（昭和56年度）と遺構精査を主とした第２次調査（昭和57年度）とによって終了している。

3．本報告書の作成は専門調査員畠山靖彦・工藤利幸が担当し、写真撮影・遺物実測・墨入図作成は、室内作業員が行い、一部の墨入図を盛岡製図株式会社に依頼して作成した。

4．遺構の実測図は、強風被害による紛失図面以外、全遺構図を掲載した。これらの実測図（住居址・土坑類・土層断面図）は、縮尺１／40で掲載しているが、炉断面・土器埋設部等は縮尺１／20となっている。また地勢図・地形図・遺構配置図は各々に縮尺・スケールを表示している。

5．遺物の実測図版は縮尺が任意のため各図版毎にスケール等を表示しているが、写真図版は同一図版内でも縮尺不同となっている。図版凡例については“調査方法等”の章および各図版中に記している。

6．

（１）石器・石製品の岩質分類は県立大船渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏による。

（２）遺構出土木炭の樹種同程は、岩手県木炭協会　早坂松次郎氏による。

（３）遺構出土木炭による年代測定（炭素14法）については学習院大学木越邦男研究室に依頼した。

（４）墓坑出土の骨についての鑑定分析および原稿は、岩手医科大学歯学部口腔解部学第一講座野坂洋一郎教授・伊藤一三両氏によるものである。

7．調査期間中ならびに本書作成にあたり、指導・協力をいただいた方々を記して感謝の意を表したい。(敬称は省略させていただく。)

軽米町教育委員会、二戸市教育委員会、工藤　大・春日信興・三宅徹也（青森県埋文センター），工藤竹久（八戸市教委），船木義勝（秋田県埋文センター），岡村道雄（東北歴史資料館）鎌田俊昭，松山力（青森県立八戸高校）、高田和徳（一戸町教委）、本宮雄輔（二戸教育事務所指導主事）、関　豊（二戸市教委）。

(財)岩手県埋蔵文化財センター組織・役職員 (昭和58年度)

役　員

理事長	金子彰吉	(県教育長)		
副理事長	柴内　真	(県教育次長)		
常務理事	熊谷正男	(県埋蔵文化財センター所長)		
理　事	吉田良和	(県農政部次長)	高橋健之	(県林業水産部次長)
	穂積昭慈	(県土木部次長)	板橋　源	(県立博物館長)
	草間俊一	(県立短期大学長)	小形信夫	(元常務理事)
監　事	佐藤公志	(県教委総務課長)	小原吉雄	(県教委財務課長)

職　員

所　長　熊谷正男　　副所長　鈴木信吉

〔調査課〕

調査課長	嶋　千秋		
主任専門調査員	近藤宗光	国生　尚	
専門調査員	朝野孝二	菊池利和	鈴木恵治
	渡辺洋一	大原一則	田鎖寿夫
	佐々木嘉直	栃沢満郎	田村壮一
	岩渕　久	光井文行	玉川英喜
	石川長喜	工藤利幸	中川重紀
	高橋與右衛門	高橋義介	佐々木清文
	酒井宗孝		

〔資料課〕

資料課長(兼)	鈴木信吉		
主任専門調査員	昆野　靖		
専門調査員	平井　進	鈴木隆英	三浦謙一

〔総務課〕

総務課長	菊池　勉		
庶務係長	阿部詔夫		
主　事	佐藤久四郎	戸草内幸男	立花多加志
技能員	佐藤春男		

目　　次

序

例　言

(財)岩手県埋蔵文化財センター組織・役職員

調査の成果

（本文・図版）

Ⅰ．調査に至る経過および調査要項 …… 2～5

1．調査に至る経過 …… 2

2．調査要項 …… 2

Ⅱ．遺跡の位置・環境等 …… 5～11

1．遺跡の位置 …… 5

2．地勢概観 …… 5

3．遺跡の立地 …… 5

4．周辺遺跡の概要 …… 6

Ⅲ．調査の経過および調査方法等 …… 12～19

1．調査経過 …… 12

2．調査方法等 …… 12

3．実測図版の凡例について …… 14

4．土層等について …… 15

Ⅳ．遺跡・遺構について …… 20～79

1．遺跡・遺構の概要 …… 20

2．竪穴式住居址について …… 20

3．陥し穴状遺構について …… 43

4．土 坑 類 …… 47

※表2：土坑類一覧 …… 54

5．墓　　坑 …… 76

6．作業小屋跡……77
7．ゴロタガメ……77

V．出土遺物について……80～101

1．石器・石製品……80
※表3：石器・石製品一覧……82
2．土器・土製品……90

VI．鑑定・分析……102～103

1．DVI－026墓坑出土の骨について……102
2．炭素14法による年代測定資料について……103

VII．まとめ……104～109

1．住居址について……104
2．土坑類について……106
3．陥し穴状遺構について……107
4．墓坑について……107
5．遺構の廃棄について……107
6．その他の"場"……108
7．遺物について……108
おわりに……109

図版目次

1：軽米町周辺の河川系概略図……3
2：遺跡の位置……4
3：周辺地形と近隣遺跡(付図版)……
4：遺構配置図(付図版)※表1：遺構対照表……
5：土層断面図……19
6：BVII－01住居址(平・断面図)……24
7：BVII－02・03住居址(平・断面図)……26
8：CVII－01住居址(平・断面図)……29
9：CVII－02住居址(平・断面図)……30
10：CVII－03住居址埋土・炉断面図……31
CVII－02住居址炉断面図
11：CVII－03住居址平面図……33
12：CVII－04住居址(平・断面図)……35
13：CVII－04・06住居址炉断面図……37
14：CVII－05住居址(平・断面図)……38
15：CVII－06住居址(平・断面図)……40
16：CVII－07住居址(平・断面図)……42
17：陥し穴状遺構実測図(1)……45
BVII－001，BVII－008
18：陥し穴状遺構実測図(2)……46

CⅥ－006, CⅦ－003
19：土坑実測図(1)……59
(BⅦ－002, 003, 004, 005)
20：土坑実測図(2)……60
(BⅦ－006, 007, CⅤ－001, CⅥ－001)
21：土坑実測図(3)……61
(CⅥ－002(陥し穴状), 003, 004, 007)
22：土坑実測図(4)……62
(CⅥ 005, 008, 009A・B, 010, 011)
23：土坑実測図(5)……63
(CⅦ－001, 002, 004, 005)
24：土坑実測図(6)……64
(CⅦ－006, 007, 008, 009, 010)
25：土坑実測図(7)……65
(CⅦ－011, 012, 013, 014, 015)
26：土坑実測図(8)……66
(CⅦ－016, DⅤ－002, 003, 004, 006)
27：土坑実測図(9)……67
(DⅤ－005, 007, 008, 009, 012)
28：土坑実測図(10)……68
(DⅤ－013, 014, 015, 016)
29：土坑実測図(11)……69
(DⅤ－017, 018, 019, DⅥ－001, 002)
30：土坑実測図(12)……70
(DⅥ－003, 004, 005, 006)
31：土坑実測図(13)……71
(DⅥ－007, 008, 009, 010)
32：土坑実測図(14)……72
(DⅥ－011, 012, 013, 014)
33：土坑実測図(15)……73
(DⅥ－015, 016, 017, 018)
34：土坑実測図(16)……74
(DⅥ－019, 020, 021, 022)
35：土坑類実測図(17)……75
(DⅥ－023, EⅤ－001, 002, 003)
36：土坑類実測図(18)(墓坑・ゴロタガメ)
(DⅥ－024, 025, 026, DⅤ－001)……78
37：作業小屋跡実測図……79
38：石器実測図 (1)……84
39：石器実測図 (2)……85
40：石器実測図 (3)……86
41：石器実測図 (4)……87
42：石器実測図 (5)……88
43：石器実測図 (6)……89
44：土器・土製品(1)(実測図拓影)……92
45：土器・土製品(2)(拓影)……93
46：土器・土製品(3)(実測図)……94
47：土器・土製品(4)(拓影)……95
48：土器・土製品(5)(実測図)……96
49：土器・土製品(6)(実測図)……97
50：土器・土製品(7)(実測図)……98
51：土器・土製品(8)(実測図)……99
52：土器・土製品(9)(実測図)……100
53：土器・土製品(10)(拓影)……101

写真図版目次

1：遺跡遠景(含周辺遺跡)(1)
2：遺跡遠景(2), 遺跡近景
} 巻頭
3：遺跡全景(遺構分布状況)
4：土層断面と土坑分布状況
} 巻頭

5：BⅦ－01住居址…… 113
6：BⅦ－02住居址…… 114
7：BⅦ－03住居址…… 115
8：CⅦ－01住居址…… 116
9：CⅦ－02住居址…… 117
10：CⅦ－03住居址…… 118
11：CⅦ－04住居址…… 119
12：CⅦ－05住居址…… 120
13：CⅦ－06住居址…… 121
14：CⅦ－07住居址…… 122
15：陥し穴状遺構他…… 123
16：土坑写真　（1）…… 124
17：土坑写真　（2）…… 125
18：土坑写真　（3）…… 126
19：土坑写真　（4）…… 127
20：土坑写真　（5）…… 128
21：土坑写真　（6）…… 129
22：土坑写真　（7）…… 130
23：土坑写真　（8）…… 131
24：土坑写真　（9）…… 132
25：土坑写真　（10）…… 133
26：土坑写真　（11）…… 134
27：土坑写真　（12）…… 135
28：土坑写真　（13）…… 136
29：土坑写真　（14）…… 137
30：土坑写真　（15）…… 138
31：土坑写真　（16）…… 139
32：作業小屋柱穴・作業風景…… 140
33：石器写真　（1）…… 141
34：石器写真　（2）…… 142
35：石器写真　（3）…… 143
36：石器写真　（4）…… 144
37：石器写真　（5）…… 145
38：石器写真　（6）…… 146
39：土器写真　（1）…… 147
40：土器写真　（2）…… 148
41：土器写真　（3）…… 149
42：土器写真　（4）（土製品を含む）… 150
43：土器写真　（5）…… 151
44：土器写真　（6）…… 152
45：土器写真　（7）…… 153
46：DⅥ－026土坑出土の骨について（1）154
47：DⅥ－026土坑出土の骨について（2）… 155
48：DⅥ－026土坑出土の骨について（3）… 156

調査の成果

（本文・図版）

Ⅰ．調査に至る経過および調査要項

1．調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線における第七次施行命令は、昭和48年10月に出され、同建設工事にかかわる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては県教育委員会事務局文化課と日本道路公団仙台建設局との間で事前協議が重ねられていった。文化課では昭和50・51年度にわたり実施計画路線に沿い幅400m を対象に分布調査を行った。

昭和52年に路線発表となり、中心杭、幅杭設置作業が開始され、54年９月から用地買収へと進展した。その間、発表された路線幅内における遺跡範囲確認も文化課によって実施された。

しかし山林地域内における分布調査や範囲確認には限界があり、山林伐採後に改めて見直すことにした。

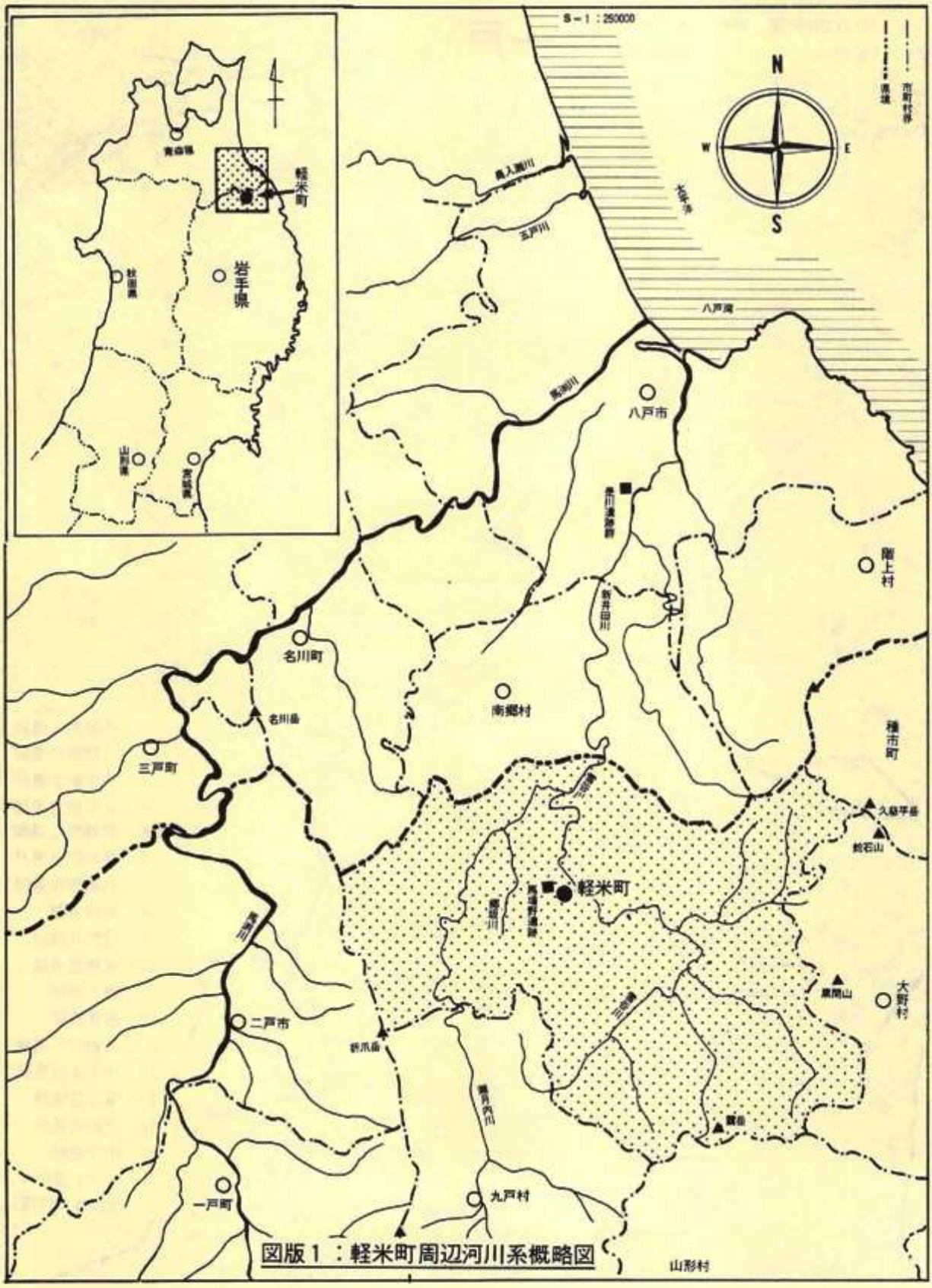
昭和55年度から当埋文センターは、文化課の調整にもとづいて八戸線にかかわる発掘調査に着手した。

馬場野Ⅰ遺跡は、これまでの分布調査等の結果では、馬場野遺跡となっており調査対象面積6,970㎡となっていたが、山林伐採後の再確認の結果、遺跡範囲の修正が必要となり対象面積も11,970㎡と変更になった。調査は昭和56年度に表土除去を主とする粗掘を行い、その結果にもとづき、昭和57年４月16日から７月31日の期間、遺構検出、精査を内容とする調査を行った。

2．調査要項

本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道路八戸線建設に関連した緊急事前調査である。発掘調査・整理報告に係わる事業主体・担当者・面積等は以下の通りである。

遺跡所在地　：　岩手県九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野
事業主体　：　日本道路公団仙台建設局
調査主体　：　（財）岩手県埋蔵文化財センター
調査期間　：　（第１次調査）昭和56年９月７日～11月６日
　　（第２次調査）昭和57年４月16日～７月31日
調査対象面積：　11,970㎡
発掘面積　：　11,970㎡
遺跡記号　：　BN・Ⅰ（81・82）
調査担当者　：　（第１次調査）　専門調査員　小平忠孝　　専門調査員　栃沢満郎



図版１：軽米町周辺河川系概略図

図版２：遺跡の位置（八戸線関係遺跡分布 軽米町・九戸村地区）

（第２次調査）　専門調査員　畠山靖彦　　専門調査員　工藤利幸

整理担当者　：　専門調査員　畠山靖彦　　専門調査員　工藤利幸

協力機関　　：　軽米町教育委員会　　二戸市教育委員会

Ⅱ．遺跡の位置・環境等

１．遺跡の位置（図版１・２）

馬場野Ⅰ遺跡は“岩手県九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野”地内に所在する。《国土地理院発行五万分の一地形図「一戸」ＮＫ－54－18－11（八戸11号　いちのへ）図幅中、北緯40度19分36秒、東経141度27分13秒付近に位置している。》（註１）軽米町は、岩手県北部に位置するとともに、南は宮城県牡鹿半島より北は青森県八戸市に至る南北 240㎞余・東西最大幅77km余の紡錘形に発達した北上山地の北部に形成された町である。東は種市町と大野村に、西は二戸市に、南は九戸村・山形村に、そして北は青森県名川町・南郷村などに接する面積約 240㎢の町域を有する。

２．地勢概観（図版１）

軽米町は、東を久慈平岳（標高 706m）・蛇石山（標高 525m）（姫ヶ森 489m），西を折爪岳（標高 852m），南を霧岳（標高 567m）などに囲まれているが、他にあまり高い山はなく、標高200～400m 前後の丘陵・山地が広がっている。これらの丘陵・山地は、折爪岳の東山麓を蛇行しながら北流する瀬月内川や九戸村雪屋地区周辺に始まる雪谷川、およびこれらの支流によって開析されている。瀬月内川と雪谷川とは軽米町大鳥付近で合流した後、その名を新井田川と変える。新井田川は、青森県南郷村および同県八戸市是川付近を経て八戸湾に注いでいる。これら両河川は、流域周辺の丘陵・山地を開析するとともに、所々に小規模な沖積地を形成しているが馬淵川流域に比べると谷底平野はもとより段丘の発達も小規模で地形区分等に不明な点が多い。また、これらの地域は表層を十和田火山起源などの火山砕屑物で厚くおおわれており、縄文時代以降の遺跡は火山砕屑物層の間に形成されている。

３．遺跡の立地（図版２・３・４，写真図版１・２・３…巻頭）

遺跡周辺の丘陵は、標高200～250m ほどで東側を流れる雪谷川と西側を流れる郷坂川（瀬月内川の支流）とに狭まれようにして軽米町北西部から北へと伸びている。丘陵の東縁は開析が進み、小さな谷および尾根は北流する雪谷川に向って掌指状あるいは鋸歯状に伸びている。遺跡は、これらの尾根の一つに形成されており調査対象地域は谷部付近の標高196m から211

mの舌状台地様の尾根にある。舌状台地とは言っても平担部が極く狭いヤセ尾根の地形であり、遺構は稜線に沿って細長く広がっている。尾根の西部つけ根は、南側の馬場野Ⅱ遺跡や北側の叺屋敷Ⅲ遺跡などを連ねる丘陵へと続き、同じ尾根の東端縁には叺屋敷Ⅰb遺跡が存在する。また、調査対象区域の南北両斜面は急傾斜となっており、北側の部には叺屋敷Ⅱ遺跡が、更にその北尾根に叺屋敷Ⅲ遺跡が存在する。南側には、小規模な尾根部と谷底部とから構成される馬場野Ⅱ遺跡が存在する。調査対象区の地目原況は、一部が畑地として利用されていた他、赤松・カラ松・杉の林地として利用されているが、古くには"アラキ型"に属する焼き畑農耕が営まれており、周辺の山林の中には焼き畑が常畑化した痕跡が多く残されている。(註2)

4．周辺遺跡の概要（図版2・3，写真図版1・2）

軽米町内における遺跡数および所在地の確認は、昭和50年代初めの東北縦貫自動車道八戸線や畑作地帯総合整備事業等に関連する事前分布調査により、飛躍的に増加している。しかし、これら遺跡の分布確認は前述のような事情から軽米町全域に及んでいない。岩手県教育委員会「埋蔵文化財分布地図」(昭和57年10月）によれば、軽米町内の遺跡数は360ヶ所を超えている。

これらの遺跡は、昭和30年代後半に県立軽米高等学校教諭であった鈴木孝志氏による"板橋遺跡""長倉遺跡"などの調査を除けば、昭和54年当センターによる八戸平原開拓事業関連の調査を皮切りに東北縦貫自動車道関連遺跡などの調査が本格的調査である。(註3）以下に、当センターが行なっている東北縦貫自動車道関連の遺跡8遺跡（軽米町のみ）について概略を説明する。説明の基礎資料は現地説明会資料ならびに各調査年度の調査略報を用いているので本報告書と異なる場合もあると思われる。昭和58年度継続調査中の遺跡をのぞいて発行予定の号数・月を列記しているので、詳細については本報告書を参照していただきたい。

1）君成田Ⅳ遺跡（岩手県埋文センター文化財調査報告書　第62集　昭和58年3月）

所 在 地　：　九戸郡軽米町大字軽米第22地割字君成田

調査面積　：　13,000㎡

調査期間　：　昭和55年6月24日～同年11月20日

本遺跡は、馬場野Ⅰ遺跡の南西 1.3kmほどに位置する洪積世低位段丘相当の丘陵派出部に形成されている。遺跡の地形的条件は、叺屋敷Ⅲ遺跡や馬場野Ⅰ遺跡などと類似しており、遺構の多くは尾根頂部から南側の緩斜面に分布している。

検出された遺構は、縄文時代住居址48棟（後期44棟，晩期4棟）奈良時代住居址2棟、土坑50基、陥し穴状遺構2基、石囲炉2基などである。縄文時代の住居址は、円～楕円形の平面を呈し最大600cm・最小260cmの規模を有する。炉は地床炉・石囲炉があるが、住居の中心に設け

られたものは少なく半数以上の住居址が壁よりに偏って設けられている。同晩期の住居址は大洞BC式期3棟、大洞A'式期1棟である。奈良時代の住居址は、斜面での検出のため平面形の一部が不明となっている。規模・形態は、長軸長 400cmほどの隅円長方形でカマドは何れも北西壁中央に設けられている。土坑50基の大部分はフラスコ形土坑で、尾根頂部に造られたものは少なく、多くが斜面に造られている。

2）叺屋敷Ⅰa遺跡（岩手県埋文センター文化財調査報告書　第61集　昭和58年3月）

所 在 地　：　九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷

調査面積　：　13,450㎡

調査期間　：　昭和55年4月14日～同年11月14日

本遺跡は、国道395号線沿いから叺屋敷Ⅰb遺跡へと続く区域である。叺屋敷Ⅰb遺跡とは、叺屋敷Ⅲ遺跡から流れる小沢によって区画されている。本遺跡で検出された遺構群は埋沿谷地形をさけるように形成されており、埋沿谷部の南側には縄文時代住居址群と土坑群とが分布し、北側には縄文時代・奈良平安時代の住居址と土坑群とが混在している。特に南側の区域では30基余りの土坑が群をなした所2ヶ所が存在し、北側の土坑群と合わせるところ群の土坑群分布に大別される。

検出された遺構は、縄文時代住居址41棟、奈良平安時代住居址6棟、陥し穴状遺構4基、土坑101基などである。縄文時代住居址の内訳は前期1棟、中期後葉32棟、後期3棟、晩期1棟、不明4棟である。また埋沿谷部は、遺物の廃棄の場となっている。

出土遺物としては、縄文時代の前期～同晩期、弥生時代、そして奈良・平安時代の土師器やその他の土製品が出土している。また石器・石製品の出土量は少ないながら、青竜刀形石器・石棒石剣類・石皿・磨石、その他各種の剥片石器が出土している。

3）叺屋敷Ⅰb遺跡（岩手県埋文センター文化財調査報告書　第63集　昭和58年3月）

所 在 地　：　九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷

調査面積　：　12,740㎡

調査期間　：　昭和56年4月13日～同年8月20日

本遺跡は、馬場野Ⅰ遺跡が形成されている丘陵派出部（尾根）の東端縁に発達した緩斜面（標高174～194m）に広がる遺跡である。検出された遺構は、竪穴住居址6棟（縄文前期2棟、同中期末～後期初頭1棟、縄文時代で時期不明2棟、平安時代1棟）建物跡1棟、小屋跡1棟陥し穴状遺構7基、土坑類29基である。

縄文時代前期の住居址は、平面形が290×240cmほどの隅円の台形を呈し炉は地床炉である。

出土遺物としては少量の土器片・石鏃等が見られる。中期末から後期初頭の住居址は楕円形の平面（580×470cm）で複式炉的構造の炉をもっている。平安時代と推定している住居址は、隅円の台形を呈し（460×390cm）カマドは検出されていない。この住居址を平安時代と推定した理由は、同住居址の埋土中にレンズ状に堆積する十和田a降下火山灰層が存在したことによる。また本遺跡で検出したフラスコ形土坑8基（平均規模：開口部径174cm、底部径191cm、深さ141cm）や陥し穴状遺構7基（平均規模：開口部長軸長447cm、短軸長157cm、深さ180cm）は、軽米地区で発見されている同種の遺構と比較した場合“大型”の規模を有している。

遺物としては、縄文時代（前～晩）の土器台、石鏃・石匙・石皿などの石器・石製品の他に墓坑と思われる土坑から赤色顔料塊（Hgを主とする）が出土している。

4）叺屋敷Ⅱ遺跡（岩手県埋文センター文化財調査報告書　第47集　昭和58年2月）

所 在 地　：　九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷

調査面積　：　7,680㎡

調査期間　：　昭和56年6月8日～同年10月31日

本遺跡は、馬場野Ⅰ遺跡の北側、叺屋敷Ⅲ遺跡との間にある谷部に形成された遺跡である。遺跡は谷頭よりの斜面が調査対象区域でその標高は190～200mにある。

検出された遺構は、縄文時代住居址18棟（中期末～後期初頭9棟、後期6棟、不明3棟）平安時代と推定されるカマドをもつ住居址1棟、土坑類13基である。中期末から後期初頭に属する住居址の多くは炉が南壁よりに偏って設けられており、炉の構造は複式炉に類似している。炉の周辺から南壁に接する部分の床は固く踏みしめられていることが確認されている。この固く踏みしめられた部分は出入口に接する部分と考えられている。後期の住居址は中央付近に円～楕円形の石囲炉あるいは地床炉が設けられている。平安時代の住居址としたものは北壁の東よりに偏って設けられたカマドをもち、床面には十和田a降下火山灰のブロックが観察されているが出土遺物はない。土坑類13基は、竪穴住居址に類似した300cm前後のもの3基、フラスコ形土坑他10基となっている。

5）叺屋敷Ⅲ遺跡（岩手県埋文センター文化財調査報告書　第48集　昭和58年3月）

所 在 地　：　九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷

調査面積　：　7,000㎡

調査期間　：　昭和56年8月21日～同年11月17日

本遺跡は、叺屋敷Ⅱ遺跡の北側尾根に形成された遺跡で馬場野Ⅰ遺跡と同様の地形的条件を備えている。尾根頂部の標高は220～222mで調査対象区域の標高は210～222mの範囲となって

いる。

検出された遺構は、縄文時代住居址13棟、土坑26基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基である。縄文時代住居址の内訳は中期末～後期初頭に位置づけられる一群（5棟）と後期前葉～中葉に位置づけられる一群（8棟）とに大別される。前者の一群には出入口状施設をもつもの2棟、焼失したもの2棟が見られる。また炉の形態では、前者の群は複式炉的構造の形態をもっているが、後者の群は地床炉で壁より設けられたものと中央付近に設けられたものとが存在する。土坑は、12基がフラスコ形土坑で他は直円筒形や皿状のものである。

遺物としては、縄文時代前期から晩期初頭のものが出土しているものの、遺構内出土のものは少なく、多くの遺物が南斜面などから出土している。

6）馬場野Ⅱ遺跡（昭和58年度も継続調査）

所 在 地 ： 九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野

調査面積 ： 20,500㎡

本遺跡は、馬場野Ⅰ遺跡の南～南西に続く尾根部とその南側斜面および沢沿いの平担地などから構成されており、時代・時期によって主な遺構分布区域が異なっている。

昭和57年度調査での遺構数は、縄文時代住居址40棟、弥生時代住居址9棟、住居址類似の竪穴遺構3基、土坑類 100余基などである。縄文時代住居址の内訳は、中期末～後期初頭10棟、後期24棟、晩期3棟、不明3棟である。平面形は円および楕円形で、壁際に壁体構造物の痕跡である小穴群がめぐっているものや、建替・拡張がなされたものなどが多く見られる。規模は、最小300cmぐらいから最大800cmであるが、500～600cmのものが多い。弥生時代の住居址は、東北地方における初期弥生式土器を伴なうものであり、土器型式上は同一時期に属するようである。住居址の形態・規模は、円形・楕円形・胴張隅円方形の3種類で、規模は600～700cmである。炉は、円～楕円形の石囲炉で土器を埋設したものも見られる

遺物は、前述した時期のものはもとより、縄文時代早期の押型文土器片・貝殻文土器片あるいは前期・中期などの土器片も出土している。

本遺跡は、周辺遺跡と共に縄文時代中期末から後期にかけての集落構造・変遷あるいは住居址構造などを知る上で貴重な遺跡である。特に初期弥生式土器を伴なう集落の発見は、東北弥生文化における集落構造の解明にとって画期的な遺跡である。

7）駒板遺跡（昭和58年度も継続調査）

所 在 地 ： 九戸郡軽米町大字山内第4地割字駒板

調査面積 ： 78,700㎡

本遺跡は標高300～340mの丘陵地に広がる広大な面積を調査対象としており、遺構群は数地点に分散している。この遺構群の分散は時代・時期ごとによる相違もあるが数本の尾根および谷が合わさっているという地形的条件によることが最も大きな要因である。

昭和57年度の調査で検出された遺構は、縄文時代後期～晩期の住居址36棟、奈良・平安時代の住居址3棟、陥し穴状遺構9基、土坑106基などが検出されている。その他に江戸時代の密銭鋳造跡や炭焼きガマなども検出されている。

8）土弓Ⅰ遺跡（岩手県埋文センター文化財調査報告書　第50集　昭和58年2月）

所 在 地　：　九戸郡軽米町大字軽米第15地割字駒木

調査面積　：　5,850㎡

調査期間　：　昭和56年4月13日～6月6日

本遺跡は、国道340号線沿いの丘陵の南斜面（標高200m付近）に存在する遺跡である。検出された遺構はその所属する時代・時期が不明の土坑5基である。また遺跡から出土した遺物は数点の石器と縄文時代に属する貝殻文土器片や表裏縄文土器片そして晩期や土師器片などが少量づつ出土している。

以上、当埋文センターが調査している九戸郡軽米町内に所在する東北縦貫自動車道関連遺跡について概略を述べてきた。土弓Ⅰ遺跡・君成田Ⅳ遺跡・駒板遺跡の3遺跡をのぞいたら5遺跡は本遺跡と非常に近接した遺跡群であり、これらがもつ遺跡の内容・性格には共通する点が多く、これらの各遺跡が単位集団をなしていたことがうかがえる。

註　書

註1. 緯度・経度の計算は、国土地理院発行の五万分の一地形図上で、図幅の比率から計算したものである。測点のズレや測定に用いたスケールの精度などから誤差として10～15秒が存在するものと考えられる。

註2. 当軽米地区などに見られた焼き畑農耕は、原史・古代から続く形態のものではない、と言われている。"アラキ型焼き畑農耕" については佐々木高明（1970年）などの文献がある。

註3. 板橋遺跡・長倉遺跡などの調査資料は「日本考古学年報－12」「岩手の土器」(岩手県立博物館1982年）などに一部公表されているが、鈴木孝志氏は病に倒れ昭和45年9月逝去された。

参考・引用文献

1）1975年「軽米町誌」　軽米町

2）1975年「二戸の地学」

3）1975年「九戸の地学」

4）1974年「埋蔵文化財分布地図」　岩手県教育委員会

5）1982年「埋蔵文化財分布地図」　岩手県教育委員会

6）1979～1982年「岩手県埋蔵文化財センター調査略報」

7）佐々木高明1970年「稲作以前」(日本の焼畑PP．80～　）NHKブックス。

8）　　「日本考古学年報」12

9）1982年「岩手の土器」　岩手県立博物館

Ⅲ．調査の経過および調査方法等

1．調査経過

馬場野Ⅰ遺跡に対する調査は、2年度にわたって行なわれている。第1次発掘調査は昭和56年9月7日から同年11月6日まで行なわれており、この調査の内容は遺構検出を目的とした粗掘作業および遺構検出作業を中心としたものである。次いで翌昭和57年4月16日から遺構精査を主体とした第2次発掘調査が開始され、同年7月31日まで調査が行なわれた。第2次調査の成果は、図版4（付図）に示した各種の遺構である。

昭和56年度の調査では、日本道路公団設定の測量杭"STA 222＋00"と"STA 222＋180との二点および二点間を結ぶ直線方向とを基準とした調査区割付が行なわれた（1辺を30mとする正方形を大区画としている。）これらの粗掘作業は、パワーシャベルおよび手掘の併用で行なわれ、この作業中に出土した遺物は大区画単位で収納されている。堆積土層観察のための畦畔は、幅1mおよび2mの2種類が地形傾斜に並行する形で設定された。

昭和57年度の第2次調査は、前年度調査の成果を基に調査工程・計画をたて測量基準杭および調査区割付杭の変動・誤差の確認・修正の作業から始めた。確認作業の結果、前年度設定の調査区割付杭に変動・誤差が生じていることが判明した。これらの誤差は、各辺と辺の角度が40秒から最大で1度40秒、辺の長さで1／200～1／350であった。また同時期に調査を開始した隣接遺跡の"馬場野Ⅱ遺跡"でも調査区割付に大きな誤差があることから両者共に同一基準点を基に調査区の割付をやり直すこととした。

2．調査方法等

〈調査区割付・測量基準〉

馬場野Ⅰ・馬場野Ⅱ両遺跡の共通基準杭および基準線は、"STA 219＋40"と"STA 220＋70"の2点とし、この2点の延長線と"STA 219＋40"杭を基に1辺30mの正方形に大区画の割付を行なった。

※基準点の平面直角座標値（平面直角座標第X系）
①STA 219＋40（X＝36241、4942，Y＝52612、0478）
②STA 220＋00（X＝36297、0262，Y＝52634、7630）

〈調査区の名称〉

30m四方の大区画に対しては、基準線に直交する方向を北西から南東にローマ数字（Ⅰ～Ⅶ）を、基準線に沿った方向には北東から（馬場野Ⅰ遺跡より）南西へアルファベット大文字

（A～……）を各々30m毎に附与し、これらの組み合わせで大区画名称を決定した。なお馬場野Ⅰ遺跡はA～Gの範囲、馬場野Ⅱ遺跡はH～Nまでとなっている。

（例）　AⅡ……，AⅢ……，KⅥ……，KⅦ……，

各々の大区画は、更に1辺6mの正方形に分割され、25区画の小調査区をもつこととなる。小区画の各々の名称はアルファベット大文字“A～Y”を附与し、大区画名と組み合わせて呼ぶこととした。具体的な位置関係については図版4（付図版）を参照されたい。

（例）　AⅡ・A，DⅤ・B，KⅥ・C，……

〈遺構の名称と精査方法〉

確認、検出した遺構に対しては、住居址と土坑類（フラスコ形土坑、直円筒形土坑・陥し穴状遺構・ゴロタガメ・墓坑・その他）とに大別し、大区画単位の中で通し番号を附与し、大区画名との組み合わせで遺構名とした。住居址に対してはアラビア数字2桁を、土坑類に対してはアラビア数字3桁を附与し、下例のような記号とした。

（例）　BⅦ－001，BⅦ－002，DⅤ－023，……　土坑類

BⅦ－ 01，CⅦ－ 01，CⅦ－ 02，……　住居址

精査の方法は、住居址および大口径土坑に対しては四分法を基本とし、土坑類に対しては二分法をとっている。住居址等における堆積土層観察の畦畔設定はほぼ円形のものについて地形斜面に対して直交および平行する二条とし、楕円形・隅円方形の平面形をもつものには長軸中心とそれに直交する位置に設定した。しかし、このような設定方法は必ずしも住居址の中心軸・直交軸を通るものではなく、特に円形住居址の場合に不都合が生じた。この理由については住居への出入口・炉の位置・柱配置から住居址の中心軸の方向が必ずしも斜面に対して平行あるいは直交する形には構成されていなかったためである。このことは、住居の構築が斜面に対する配置よりも日照・微気象あるいは社会的規制などにもとづいて設計・構築されたためと考えられる。

土坑類の場合、検出平面形の長軸中心で二分したが、崩壊や重複の関係から必ずしも底部の中心を通ってはいない。

〈遺物の収納・登録〉

遺物の収納、登録については、昭和56年度調査では大区画毎に“遺跡記号”“大区画名”そして“粗”（粗掘）の文字を附してとりあげているが、層位名はついていない。昭和57年度調査においては、遺構精査が主体であったため各遺構の名称と埋土の層名とを記入して収納している。住居址の場合、床面および直上層中に含まれるものについては、その位置・レベルを記録し

登録番号を附与して収納している。

〈図化作業〉

各遺構・遺物分布などの実測図化作業は、特殊な遺物分布状況や柱穴断面（一部のみ図化）を除いては縮尺1/20を基本とし、一部を縮尺1/10で実測図化している。この図化作業に伴なって検出面・床面（底面）等のレベル記録は50cmおよび100cm毎の何れかで記録している。

遺構配置図（図版4）の作成は、原地形図（縮尺1/500）と個別の遺構実測図とを拡大あるいは縮小して合成したものである。

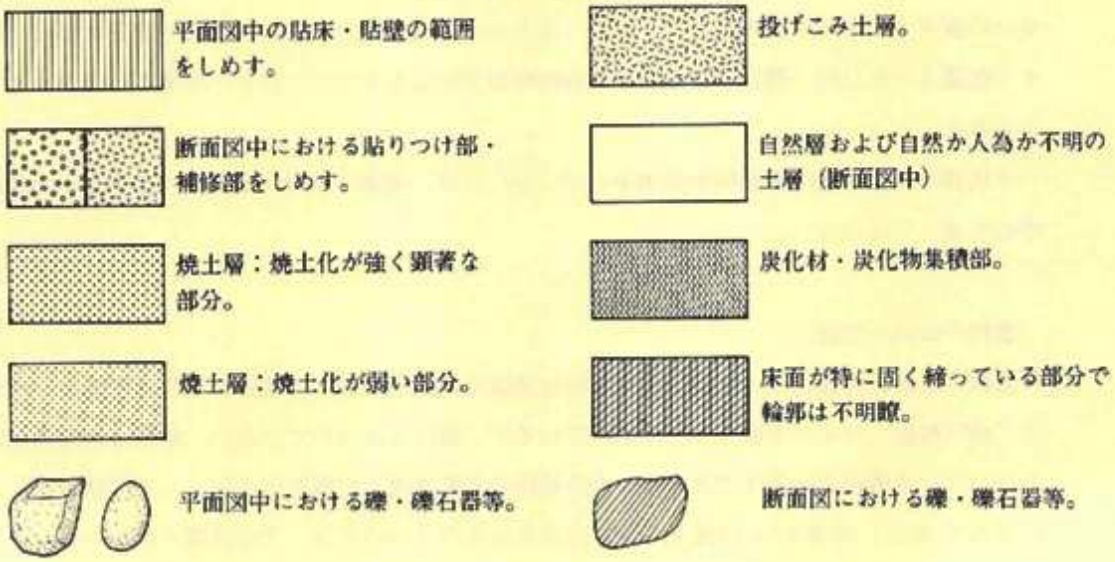
〈写真撮影〉

写真撮影にあたっては、調査開始時に35mm判カメラ2台とブローニー判（6×7cm）1台とを用意したが、4月末から6月初頭にかけて連日のように強い風が吹き、それに伴なう砂塵被害のため6×7判カメラでの記録を中止した。6×7判カメラの場合、ファインダーの汚損はもとより、35mm判カメラに比べてフイルム交換が多くなるため屋外交換では内部機構の汚損や可動部の不調を招き、清浄・フイルム交換に手間どることが大きな要因である。

3．実測図版の凡例について

本報告書における遺構実測図に用いた凡例は挿図1に示した種類およびその内容である。縮尺等については例言の中で述べており本項では省略する。住居址図版中"Po－1～Po－X"の附いた柱穴はその住居址に伴なうものであり、同記号のないものはその住居址に直接関係したものではない。

挿図1：遺構実測図凡例



4．土層等について

軽米町およびその周辺の地質は、主にチャート粘板岩・硬砂岩・輝緑凝灰岩などで構成される古世層が基盤岩類として分布している。しかし、軽米町軽米付近から西部の山地・丘陵につづく二戸市にかけては下斗米層・末の松山層に相当する新世代第三紀層である砂岩・凝灰岩・凝灰質砂岩あるいは礫岩などが分布している。これら基盤岩類は、その上を火山砕屑物層によって厚く覆われている。

本遺跡および近隣の遺跡で確認同定できる火山砕屑物としては、主に八甲田火山・十和田火山を供給源とする火山砕屑物群である。(註１)これらの火山砕屑物群は、古い順に天狗岱火山灰層・高舘火山灰層・八戸火山灰層、そして沖積世に属し黒色土～黒褐色土系土層にはさまれる南部浮石層・中掫浮石層・十和田ｂ降下火山灰層・十和田ａ降下火山灰層などである。これらのうち天狗岱火山灰層・高舘火山灰層・八戸火山灰層は洪積世に属し、各々の火山灰層は洪積世段丘の高位・中位・低位を被覆する下限火山灰層となっている。(大池昭二他1966，大池昭二1972，他)。

次いで本遺跡および隣接遺跡等に分布堆積する火山灰層等を見ると以下の堆積状況を示す。しかし、平担な地形面をもつ段丘等の発達が悪く、洪積世段丘の場合中・低位段丘相当の地形面をのぞくと小起伏山地・丘陵派出部（ヤセ尾根等）との区別が困難である。そのため火山砕屑物のうち特に沖積世に属するものの多くは竪穴住居址・雨裂・埋没谷などのくぼみ等で断続的にしか観察されない。

図版５－１に示した模式柱状図は、本遺跡ならびに隣接する遺跡での層順を模式的に合成したものであり、図版５－の２～４は本遺跡における深堀地点で記録した土層堆積の実測図である。(註2)

Ⅰ層：黒褐色土層であるが、耕作土として利用され、草根が広がる層である。層順的には山地・丘陵での未分解植物等を多量に含む層へと連なる。層厚15～20cm、所によっては30cm近い厚さとなる。

Ⅱ層：シルト質～砂質の黒色～黒褐色土層(7.5YP 2/1～2/3)で小粒・細粒の暗褐色・褐色の浮石を不規則に少量含む。締りが良い。層厚は５～15cmほどでやや不規則である。

Ⅲ層：十和田ａ降下火山灰層。細砂質～シルト質の灰白色火山灰である。本層は、自然地形面ではⅡ層あるいはⅣ層中にブロックで観察されるが、雨裂あるいは竪穴住居址等のくぼ地では数cm～30cmほどの不定な層厚を有し局所的にしか観察できない。叺屋敷Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅱ遺跡では平安時代の竪穴住居址等で埋土として観察される。また馬場野Ⅱ遺跡では弥生時代中期初頭に属する一部の竪穴住居址の埋土として観察される。この場合、二次堆積の層相を呈し数層に区分されている。

Ⅳ層：黒色～黒褐色土層（7.5YR 2/2～2/3）であるが、所によっては7.5YR 3/2～3/3黒褐色～暗褐色を呈するブロック土が混在する。一般的に上部が明るく、下部は黒色の色合が強い。なお下部に外皮が青灰色～暗灰白色を呈し、内部が灰白色の浮石（2～7㎜）を不規則に含んでいる。層厚10～20㎝で締りが良い細砂質～シルト質土である。（十和田ｂ混合）

Ⅴ層：十和田ｂ降下火山灰層で、平担部や緩斜面では暗灰色～灰白色の浮石が散在するだけであるが馬場野Ⅱ遺跡では縄文時代後期後半・晩期、そして弥生時代住居址の埋土の一部として堆積している。この場合、小粒浮石層部(層厚1～9㎝)と細粒浮石を含むシルト質青黒色土層（層厚3～12㎝）とに分かれる。

Ⅵ層：黒褐色～暗褐色を呈する浮石質土層である。多くの場合、中掫浮石あるいは南部浮石と判断される小粒～細粒の褐色浮石を小ブロックとして多量に含む。下位の中掫浮石層が観察されないところでは、上部から下部まで同様の混合組成・色調を呈するが、中掫浮石層がブロックあるいはレンズ状層として観察できる地点では上部が暗色で下部が明色と明度が漸移する。層厚15～40㎝。

Ⅶ層：中掫浮石層・細粒浮石層であるが、暗褐色～褐色土として存在し、層厚も不規則である。本浮石の純粋層は小ブロック状で断続的にしか分布しないが、埋没谷やくぼ地などでは再堆積ながら厚く堆積している。

Ⅷ層：全体的に南部浮石を含んだ黒褐色～極暗褐色土層で地点によって色調に差がある。層厚は起伏が大きく一定しておらず20～50㎝と変化が大きい。また、斜面から平担部へ移行する地点では二次堆積のため全体的に層厚が厚く、南部浮石の混合状態は不規則である。このような地点では、下部が緻密な細砂質黒褐色土（Ⅸ層5～20㎝）へと漸移する場合がある。

Ⅸ層：黒色～黒褐色（10YR 2/2～2/3）の緻密な細砂質土である。局所的な観察できるもので地点によっては径3～5㎜ほどの青灰色砂の小ブロックを観察する場合もある。

Ⅹ層：南部浮石層。明褐色（7.5YR 5/6～5/8）で主に3～15㎜ほどの浮石で構成されるが、なかには30㎜を起える偏平な浮石も混じる。未膠結の浮石密集層でその層厚は20～50㎝ほどである。

Ⅺ層：局所的にしか観察できない層である。黒褐色～暗褐色土（7.5YR 3/2～3/3）で層厚がうすく、下部はⅫA層に漸移する。層厚は3～10㎝ほどである。

Ⅻ層：本層は、八戸火山灰層群と考えられる4枚の火山灰・浮石層を一括し、各々の性状・組成状態の相違によりA・B・C・Dのサブ記号を付与した。その他に本層群の二次堆積層に対しては単に“Ⅻ′”の記号を付した。

A層：褐色～黄橙色火山灰（7.5YR 7/8～8/8）であるが、下部に少量の浮石（5～15㎜）が認められる。尾根頂部では極うすいか、あるいはB層と区別できない場合もある。層厚は、

地点によって異なるが10～30cmほどである。

B層：粘土質の黄橙色～褐色火山灰と浮石(5～15mmを主とする)とが混合した層で浮石の疎密の変化が大きいため色調も一定しない(7.5YR 8/6～8/8・7/8)。比較的硬く締っている。

C層：角ばった大粒の灰白色浮石層(N8/ ～)である。主に15～25mmほどの固い浮石が密集しており、中には40mmを起えるものも含まれる。なお浮石の間隙は下位のD層と同様の砂質の灰白色火山灰が埋めている。斜面下方になると浮石密度が小さくなりD層上部に浮石が含まれる形となる。層厚は、地点によって差が大きいが大概10～30cmほどで斜面では不規則となっている。

D層：砂質の灰白色火山灰で5～15mmのやや角ばった固い浮石を散在的に含む。斜面ではやや粘性のある砂質層となり、浮石は含まれない。

XIII層：粗砂質の火山砂・明褐色粘土質部あるいは細粘浮石などが不規則に堆積した層で、全体に黄褐色粘土質部と砂粒質部とに区分される。下位のXIV層とは不整合状態で堆積し層厚も不規則で15～30cmを呈し、斜面下位では観察できないところもある。

深掘C地点(図版5－3)では、小礫・粗砂あるいは粘土質部とが不規則に混合・分布し上位置・下位層とは不整合の状況を呈している。(※層順的には高舘火山灰層に相当する層位と考えられるが本地域では明確な高舘火山灰層は確認できない。)

XIV層：褐色～黄褐色の細粒浮石質層で層厚は10～30cmである。斜面下方では消失あるいは不明となる。天狗岱火山灰の“ヌカミソ”と呼称される層に類似するが、その所属については不明である。(註1)

XV層：にぶい橙色の浮石質粘質土層でガラス砂を少量含んでいる。またXIVとの境付近にはガラス砂がブロック状に散在している。締りは良好。

XVI層：橙色を呈するシルト質土で若干の粘性を有する。小礫・粗砂が散見され、また炭化物粒や短い糸状あるいは紐状の炭化物（植生痕？）そして鉄あるいはマンガン等と思われる赤褐色あるいは極暗赤褐色の結核粒が存在する。

XVII層：灰白～浅黄橙色を呈する細砂質層で、粗粒のガラス砂を多く含んでいる。粘性はない。

XVIII層：明褐色のシルト質粘土層でサンクラック・植生痕と思われる炭化物などが散見。また紐状炭化物の周辺には未硬化の鉄結核が形成されている。本層下部には、XIX層に含まれる小～中礫・粗砂が浮石礫層状に散在する。

XIX層：XVIII層よりも暗色で粘性も強い粘土層でサンクラック・植生痕も多い。小～中礫が不規則に含まれ、鉄結核も棒状（高師小僧）で硬化度が高い。

XX層：細砂質（ガラス質砂）の灰白色～浅黄橙色粘土質層である。クラック等を通じての他土

壌あるいは鉄分等の集積のため全体的にまだらとなっている。炭化物・高師小僧散見。

以上に略記した火山灰層群の層厚の程度は別にして、本遺跡全体に分布する層は南部浮石層・八戸火山灰層群・高舘火山灰層（相当？）・天狗岱火山灰類以層である。二ノ倉火山灰層はまったく確認できず、中掫浮石層は二次的なものながら西地区の埋没谷状の雨裂部やくぼ地に集積層が確認できる。十和田ｂ火山灰は確認できないが、十和田ａ火山灰は所々のくぼ地・縄文住居址の上部等でブロックとして散見される。

※土層記録における土色の記載は、標準土色帳に基づいている。しかし、過度の乾燥や砂塵付着のため十分な記録とは言えないものとなっている。そのため土坑関係図版中の註記と本文説明の土色表現が異なっているものも生じた。

註1：全体としては十和田・八甲田火山を供給源とする火山灰層群であるが層層とした浮石質褐色～黄褐色土層は、供給源を異にする可能性が強い。調査担当者等は、天狗岱火山灰層群の一部と考えていたが松山力氏による現地指導の際、「天狗岱火山灰のうち通称"ヌカミソ"に類似するが別火山による供給の可能性が強い。」との御指摘をいただいた。

註2：本遺跡内土層では模式図中のⅢ～Ⅶ層の判別が困難であるところから実測図中での層記号を略している。また実測図・模式図共に同層は同一のスクリーントーンで表現している。また各遺構実測図の自然堆積層部については可能な限り同一のスクリーントーンを用いて遺構の確認面・形成層位などが一見して理解できるようにしている。(層厚や層の起伏などについては実際と異なっている図も存在する……模式的表現とした。)

参考文献

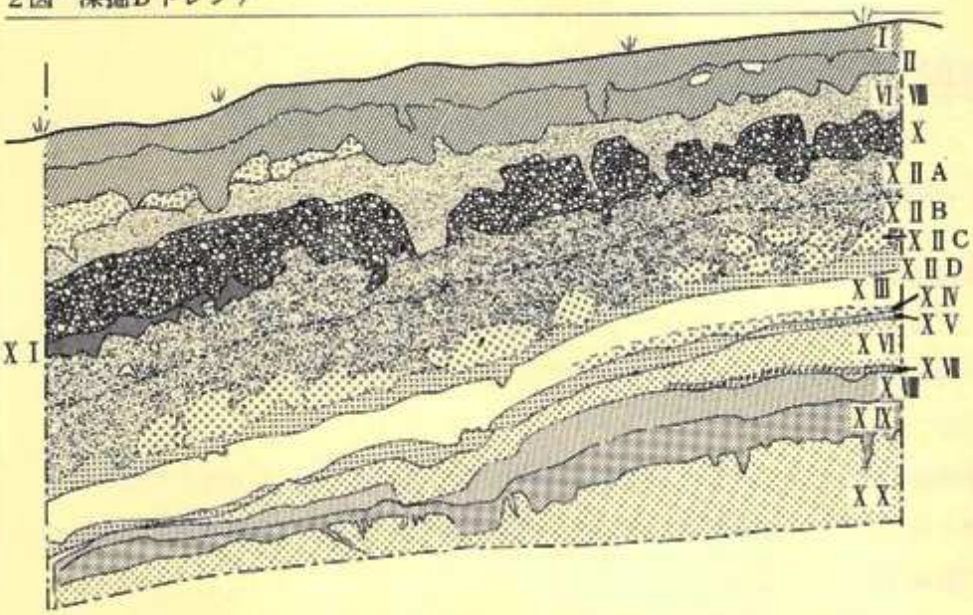
1）　「二戸の地学」

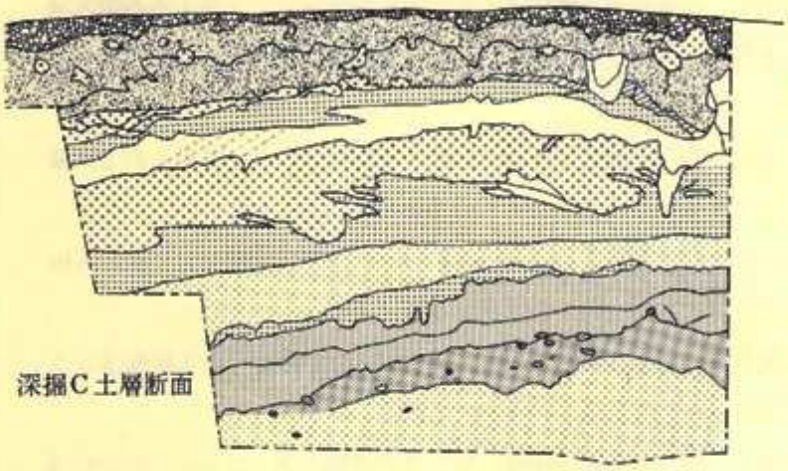
2）　「九戸の地学」

3）大池昭二他1966「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究』第5巻第1号

4）大池昭二　1972「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』第11巻第4号

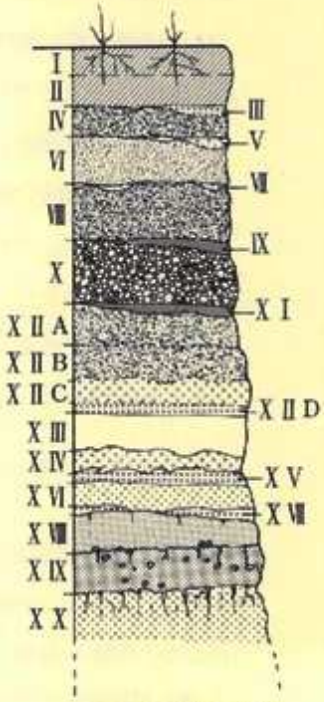
2図 - 深掘Dトレンチ





3図　深掘C土層断面

4図
深掘B土層断面



1図 - 標準模式図

図版5：土層断面図（S－1／40）

Ⅳ．遺跡・遺構について

1．遺跡・遺構の概要

調査の対象面積は11,970㎡という広い面積ではあったが、昭和56年度の調査成果から遺構配置図に示した区域（“尾根地区”と呼ぶ）と馬場野Ⅱ遺跡に連なる南西区域の急斜面とに大別されることが判明しており、57年度はそれらの成果に基づいて調査を進めた結果、以下に述べる成果をあげることができた。

1）馬場野Ⅱ遺跡に連なる南西区域は、斜面堆積物の流失、再堆積によって形成された地形である。遺構と考えられたものは堆積土層の起伏や倒木根痕跡などによる凝似現象で、土坑・住居址等の遺構は認められない。

2）尾根地区では、稜線に沿った細長い平担部を中心に縄文時代と考えられる竪穴住居址群・土坑群が分布している。しかも、これらの遺構群は、土坑のみが密集して分布する西側区域と住居址・土坑等が混在・重複した東側区域とに区別され、両遺構群との間には空白域が介在する。

3）尾根地区南斜面の下位から江戸時代と推定できる土坑墓３基を検出した。これらの土坑墓は、獣骨・寛永通宝を出土している所から必ずしも人間の墓とは考えられない。

4）尾根地区西はずれからは、縄文時代と考えられる土坑とともに作業小屋跡と考えられる掘立柱式の小建物跡、通称“ゴロタガメ”と呼ばれる肥溜を検出した。

5）叺屋敷Ⅱ遺跡に連なる北側斜面では極く新期の土坑と倒木根痕跡と考えられる攪乱落ちこみを多数検出しただけで、遺構と考えられるものは認められない。

6）検出・精査を行なった遺構は、竪穴式住居址10棟、陥し穴状遺構５基、フラスコ形土坑等76基、近世土坑墓３基、作業小屋跡１棟、ゴロタガメ１基である。これらは土坑墓・ゴロタガメおよび作業小屋跡を除けば、縄文時代中期末から同晩期初頭にかけての遺構と考えられる。

2．竪穴式住居址について

竪穴式住居址10棟は、何れも縄文時代中期末から同晩期初頭にかけてのものと考えられる。しかし、ほとんどの住居址は各々が所属する時代・時期を明確にしうる遺物を伴なっていない。住居址の形態・規模、炉の形態などから凡の判別は可能であるが明確なものとはならない。

一応、住居址の平面形・柱穴配置・炉のありかたなどの形態・規模をもとに区分すれば以下のようになる。なお、10棟の住居址は何れも周溝をもたない。

（A）平面形は、楕円形で長軸長 420cm・短軸長 360cmほどの規模をもち、炉は住居のほぼ中心

に1基だけ設けられている。炉の形態は円～楕円形で浅く掘りくぼめられた地床炉である。焼土周辺に石囲炉的な痕跡を残している。

柱配置は、次項にのべるBタイプと同様に将棋の駒形となる五角形配置を基本とする。

（CⅦ－01住居址）

(B)平面形はほぼ円形で、その径は450～500cmである。炉の形態・位置は、深さ10～15cmの円形に掘り下げられた部分と、これに接する所から南東壁までが不整楕円形、あるいは扇形に浅く掘りくぼめられた部分とから構成され（複式炉的構成)、平面形がマユ玉形～ダルマ形を呈する。円形に掘り下げられた部分およびその周辺は焼土化が著しいが、不整楕円形の部分は焼土粒・炭化物の分布が多量に認められるものの焼土化の程度は弱い。炉および住居址を通る線～中心軸～は、ほぼ南東－北西の方向である。

主な柱配置は(A)タイプと同様に将棋の駒形となる五角形を基本とするようであるが、柱穴の検出数は5～10数口である。なお、本タイプでは住居の中心には地床炉・その他の炉的痕跡は認められない。(CⅦ－02住・CⅦ－03住・CⅦ－06住)

(C)平面形は、各辺が大分外側へ張り出す胴張隅円方形で炉を2ヶ所にもつ。1ヶ所はBタイプと同様に南東壁よりに設けられており、その形態もほぼ同様である。もう1ヶ所の炉は、円～楕円形で住居の中心付近に位置する。本タイプの例としてはCⅦ－04住とCⅦ－05住との2例が存在するが、CⅦ－04住では掘りこみが15～20cmと深くしかも掘りこみの壁際に礫の抜きとり痕跡が認められる。CⅦ－05住では浅いくぼみが焼土化しているだけであり礫の痕跡は観察できない。

柱配置は、Bタイプと同様に五角形を基本とするようであるが、CⅦ－05住の場合、他の遺構に切られているため不明である。

(D)本例として掲げるのはBⅦ－01住居址1例である。平面形は、不整の楕円形で炉を2ヶ所にもつ。炉は何れも住居の中心から離れた長軸線上に設けられている。炉の大きさ形状は若干異なるものの、平面形が不整楕円形で内部を掘りくぼめている。なお炉の一部に礫の抜きとり痕と思われるくぼみが存在するところから石組炉あるいは石囲炉であったと考えられる。

柱穴は全部で6口あり長軸（中心軸）に沿って北東側と南西側とに各3口づつが配置され、両群の柱は対応する位置関係にある。

(E)平面形は円形～やや楕円形を呈するものと思われ、その径は300cmほどであるが、斜面下位の南側が不明のため実形状・規模は不明である。炉は方形の石組炉で住居の中心付近に設けられている。

柱穴は8口を検出しているが、2口は本住居址と関係ないものと考えられる。残6口から柱配置を推定すると六角形となる配置のようである。しかし、北側を土坑に切られていることや

南側が斜面のため実配置は不明である。(CⅦ－07住)

(F)平面形は不整の円～楕円形を呈し、その径が280～300cmの小さなものである。炉は住居の中心から南東壁より設けられており、その形態は不整円形の浅いくぼみとなっている。礫等の痕跡は明瞭ではないが、一部に抜きとり痕跡らしきものが観察される。

柱配置については、柱穴の一部を検出しているが不明な点が多い。(BⅦ－02住、BⅦ－03住)

また、検出後の竪穴住居址内の埋土の状態をみると自然流入堆積層と人為層（他遺構形成時に掘りあげた土を投げ込んでいる。)とに区分されるが、埋土の大部分は人為層が占めている。埋土形成の状況を“自然”“人為”に区分すれば以下のように分類される。

(A)住居焼失後、自然堆積層が竪穴を一部埋めもどし、その後、人為→自然→人為→自然の互層で構成されるもの。(CⅦ－03住・CⅦ－04住・CⅦ－06住)

(B)Aにおける焼失段階が不明のもの。床面には多量の炭化物が分布しているものの明確には焼失住居址と判断できないもの。(CⅦ－01住・CⅦ－05住)

(C)人為・自然の区別が不明確な第1段階以降→人為→自然、の互層となるもの。(BⅦ－01住)

(D)屋根・柱などの上部構造物を撤去し、全ての埋土が人為埋めもどしによるもの。住居解体時に落ちこんだと考えられる黒褐色土の小ブロックが壁際に認められる。(CⅦ－02住)

(E)一部に褐色土・明褐色土の小ブロックを含むものの、自然流入堆積層だけと考えられるもの。(BⅦ－02住・BⅦ－03住・CⅦ－07住)

※自然層の場合、部分的にはレンズ状層として厚いところもあるが、ほとんどの場合、層厚がうすく(0.5～2.0cm)図示できない場合が多かった。そのような部分は、断面図中の層界線を太い線としている。

※断面図中のスクリーントーンは、投げこみ層・壁・床等の貼りつけ部と遺構外の自然堆積層とに用いている。断面図遺構内の白ヌキ部は自然流入堆積層を示している。

※住居址埋土の土層註記は省略する。

BⅦ－01住居址（図版6，写真図版5－7～11）

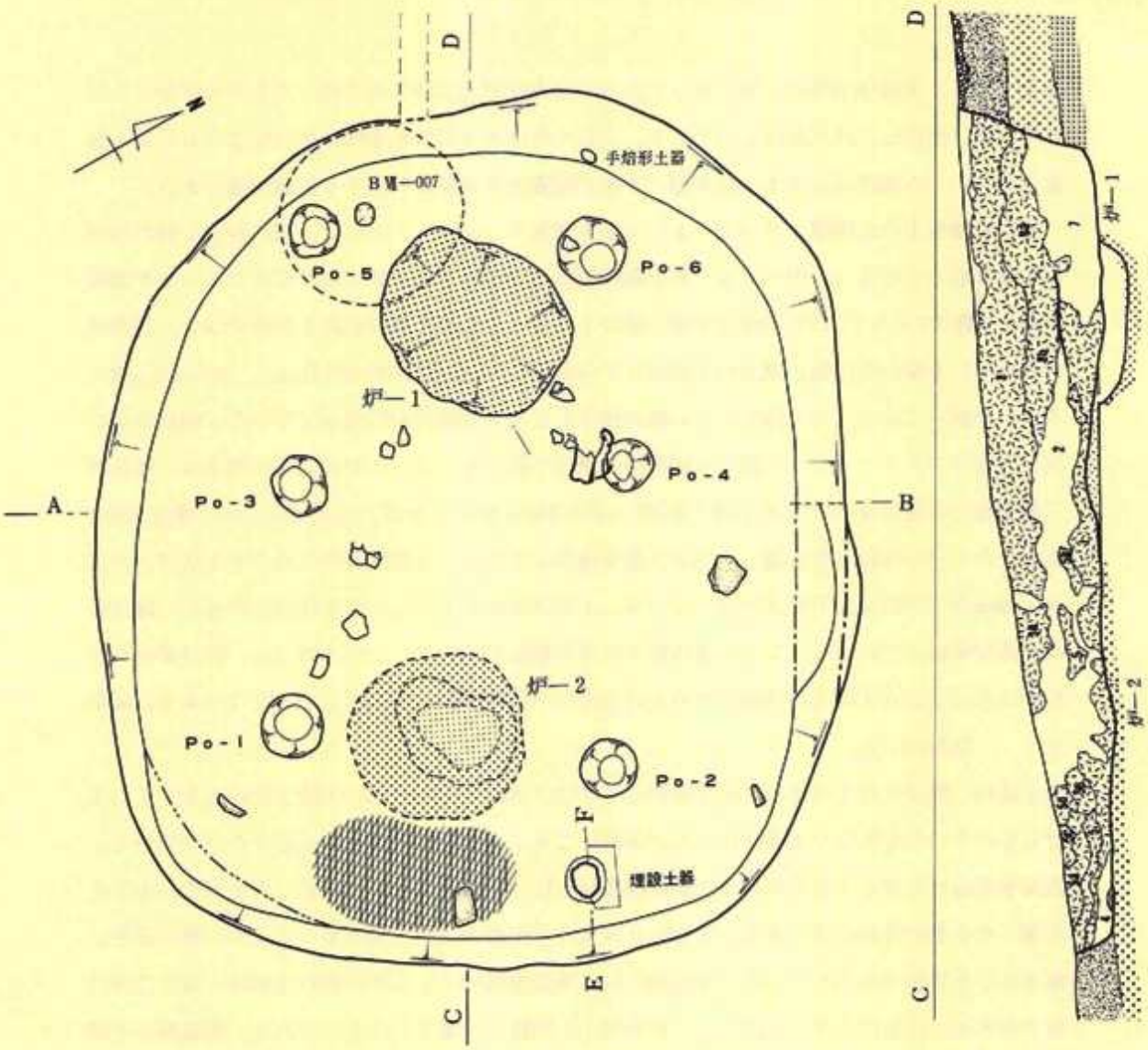
平面形は南東壁がやや直線的な不整楕円形で長軸長下端438cm（上端480cm）・短軸下端 366cm(上端420cm)、壁高は南東壁で20cm・北西壁で70cmである。床は、北西よりでは八戸火山灰層（C層）まで掘り下げられているが、南壁から南東では八戸火山灰層上面、あるいは南部浮石層中に形成されている。南から南東にかけての床および壁は褐色～暗褐色のシルト質土が貼りつけられている(スクリーントーン部が貼りつけの明確な範囲。二点鎖線部・一点鎖線部は掘りすぎ。)床面全体は、北西から北よりが高く、南から南東よりへ傾斜しており、その高低差は13cm

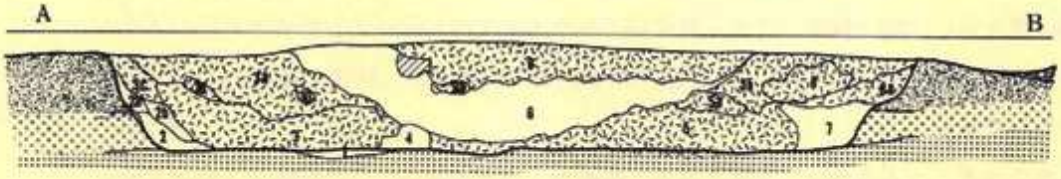
ほどである。床面は全体的に固く締っているが南東壁付近は特に固く締っておりわずかにくぼんでいる。検出した柱穴数は6口である。これらの柱穴は何れも本住居址に伴なうもので、長軸方向に沿った南西側に3本、北東側に3本が配置され両群は対応する位置関係にある。

炉は長軸線上の北西壁より（炉－1）と南東壁より（炉－2）との2ヶ所に存在し何れの炉にも礫は認められない。炉－1は、最深部16cmほどの平凸レンズ状に掘りこまれているが底面はあまり焼けておらず、むしろ縁辺が強く焼けている。また焼土層の形成も明確ではなく炉内部の埋土中に多量の炭化物と焼土粒が混在しているだけである、(110×92×16cm)。炉—2は、浅く不整形な掘りこみとそれを囲むように礫の抜きとり穴？が楕円形に点在していた。内部および周辺の床（スクリーントーン部）は同程度に焼けて固くなっているが炉内部の埋土は、炭化物と焼土粒との混合層だけである(焼土範囲：100×94cm、掘りこみ部：72×56×4cm)。埋設土器：東壁ちかくで口縁付近を欠損した埋設土器を検出している。土器埋設のための小土坑は、口径28×20cmほどで内部は不整形となっている。土器は底部を下にした正立埋設であるが口縁付近の一部が床面より高くなっていた他は粉々になり散乱していた。土器内部には、特に変わったものは入っておらず同土器の細片数点と浮石混じりの明褐色土が詰っているだけである。(図版6－　，図版49－3）

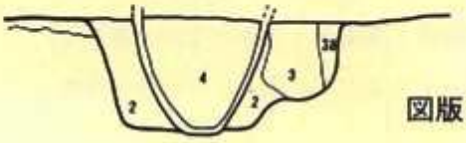
出土遺物：埋設土器をのぞいた出土遺物としては、土器・台石の他に大礫2点が出土している。台石をのぞいた土器片や土器はほとんどが投げこみによるもので床面から浮きあがっている。直接本住居址に伴なうと思われる土器は図版48－12、写真図版42－2に示した土器で、上半を欠損した小型台付鉢だけである。また№8は完形で小型の手捻り形土器であるが、壁の途中に座るような状態で出土している。(図版48－14、写真図版42－1)。その他の土器は、投げこみの埋土中あるいはその上下から出土しており埋土と同様に投棄されたものである。他遺構との関係：北西壁においてBⅦ—007のフラスコ形土坑と重複している。本住居址と土坑との新旧関係は、住居址埋土中に土坑の輪郭が認められないことや土坑上部に炉－1が形成されていること、そしてPo－5の柱穴が土坑の埋土中に形成されていることなどからBⅦ—007土坑は本住居址より旧いものである。

埋土：埋土の多くは人為投げこみ層である。南西および北西側からは炭化物・土器片を混じえた黒色～黒褐色土の厚い堆積が認められるが、東よりの床では極くうすい層となっている。埋土3・5層は投げこみの土器（図版46－1）を伴ない八戸火山灰・南部浮石などで構成された土層である。6層は、黒色～黒褐色土中に黄褐色土の小ブロックを散見する軟かく締りのない土層で、遺物は含まない（自然？）。上位のa層等は、黄橙色・黄褐色・黒色土などが混じりあった軟かい土層で図版48－9、51－4・9、52－6、45－1・2などが出土している。(自然→人為→……→自然)





E　　埋設土器断面図（S＝1／20）　　F



図版６：ＢⅦ－01住居址　平・断面図（S＝1／40）

住居址の長軸と磁北とがなす角度はNW60度で、2基の炉の中心間を結んだ線と磁北とがなす角度はNW55度ほどである。

BⅦ－02住居址（図版7，写真図版6－12・13）

あとに述べるBⅦ－03住居址と同様、越冬における霜柱の攪乱層を除去した段階でⅣ層中に住居址埋土5・6層を確認した。本住居址周辺の土層はⅠ～Ⅵ層の区別が明確ではなく、草本類の根が繁茂するⅠ層（10～15cm）を除去すると中擦浮石・南部浮石を多量に混えた暗褐色～黒褐色土層（Ⅵ層に一括）が（10～15cm）更にその下位に層厚10～20cmの南部浮石層が露出するが南部浮石層上部ではその間隙に黒褐色～褐色土が入りこんでいるため本来の南部浮石層とは色調が異なっている。

平面形は長軸長下端が264cm（上端290±×cm）・短軸長下端260cm（上端290cm）壁の高さは北西壁で41cm・南壁および北東壁で11cm前後である。床は全体的に北西から南～南東へと傾斜しており、その高低差はおよそ10cmである。また床面は、木根等による小さな凹凸が全面に見られるが概して平坦である。なお、床は北西よりが八戸火山灰（ⅩⅢB層）上部に、南～北東の床は南部浮石層上部に貼床が形成されている（壁も貼付けがなされている）。

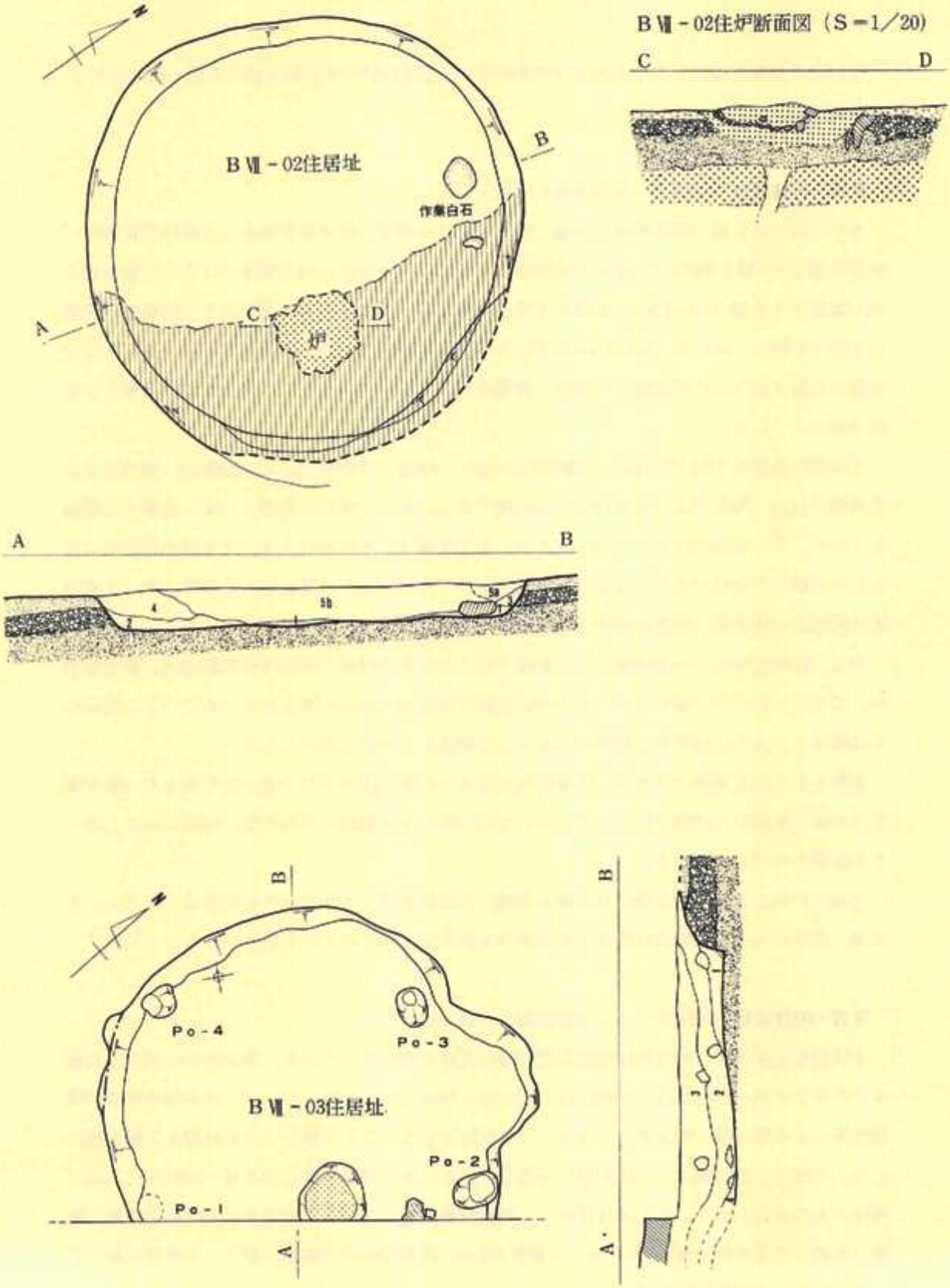
炉は、住居址中心より南南東よりに形成されておりその規模・形態は最大幅60cm、最小幅58cm、深さ7～10cmの不整形な炉であるが、底面には径10～20mmの礫を敷きつめている。周辺からは礫はもとより石囲炉等と推察できるような礫抜きとり痕は認められない。

遺物としては北東壁よりから、作業台石と考えられる上面が平担で粗い敲打痕をもつ偏平礫1点が床に密着した状態で出土している。台石以外には図版43－1の石器、図版45－21、52－1が床面より出土している。

主軸（炉および住居址の中心点を結んだ線）と磁北とがなす角度はNW35度ほどである。その他、柱穴については竪穴部外周や貼り床等を削平してみたが1口も検出できなかった。

BⅦ－03住居址（図版7－　，写真図版7－14・15）

本住居址を検出した地点の尾根は調査区域内で最も細くなっており、地表面から南部浮石層までの深さが35～25cmと浅く、南部浮石層も10～20cmとうすくなっている。昨年度の調査以降霜柱等による攪乱層が形成されており、これを除去したところⅩ層中に住居址埋土3層を検出した。3層は、西に偏よって楕円形に分布していたため、精査当初にはBⅦ－008の陥し穴状と同様のものと思われた。また本住居址は、調査対象区外にかかって検出されたため全体形、規模は不明であるが長軸長195＋α cm、短軸長221cm、深さ31cmの不整楕円形で、北東壁に張りだし部が存在する住居址である。



図版７：B Ⅶ－02・B Ⅶ－03住居址　平・断平図（S＝1／40）

埋土は全3層で黒褐色土～暗褐色土を主としたものであるが、黒色土・褐色土などのブロックを含んでいる。各層は概ね自然流入堆積と考えられるものの2層中および上面に南部浮石や褐色土（八戸火山灰）の大小ブロックが不規則に含まれている。また1a層および床面には炭化物が分布している。(自然→人為？→自然)

床は八戸火山灰層上部に形成され全体的に緩やかな起伏をもち、炉の周辺が最も低くなっている。更に木根による小さな穴が多数見られ、炉部分には不完全分解の太い木根が存在した。柱穴と考えられるものは4口検出したが、形状・規模ともに不ぞろいのものである。特に南のもの（Po－1）は、極く浅く柱穴としては凝問の多いものである。

炉：炉跡は45×45×深さ7cmの浅い掘りこみによるものと思われるが太い木根痕が喰いこんでいるため実際の深さや焼土層の有無は不明となっている。炉の埋土としてとらえたものは、焼土ブロックと炭化物とが多量かつ不規則に混じった黒色土（5B.G. 2/1）である。石組・石囲い等の礫は認められない。

張りだし部：住居址北東の張りだし部は、埋土の状態・床面のレベルから本住居址に付属した施設と考えられるが、用途を示唆する現象・遺物の出土は認められない。

出土遺物：土器片数点と硅質岩礫1点の他は、炉部・床面から炭化物が多く出土しており、この炭化物の樹種はクリ材で炭素14法による年代測定を行なっている。(図版44－7，45－20，写真図版39－2)

主軸（Po－1とPo－2の中点とPo－3・Po－4の中点とを結んだ線）線と磁北とがなす角度はNW56度前後である。

CⅦ－01住居址（図版8，写真図版8－16・17・18）

平面形および規模は、長軸長下端426cm（上端472cm）・短軸長下端366cm（上端422cm）の楕円形で、ほぼ中心に炉をもっている。柱穴および柱穴類似のものは、埋土の状態・検出面が同一のもの8口（Po－1～Po－8）を検出している。Po－4はPo－3のすげ替えか、あるいは補強柱のためのものと考えられる。Po－5は、土坑埋土部を掘りすぎており実際より深くなっているものの断面観察によれば、開口部34×32cm・深さ25～27cmの逆円錐台形を呈している。また、埋土は極うすい1層相当が下にあり、他は投げこみによる土層であるところから貯蔵穴の可能性が考えられる。

埋土は、最下層が黒褐色～暗褐色土を主として南部浮石を少量混じえたうすい層で各部によって層厚・混じり具合が異なっている(自然流入)。2層・4層は八戸火山灰土を主とした褐色～明褐色土層であるが、八戸浮石・南部浮石・黒褐色土などのブロックが不規則に混じりあっており全体的にブロック構成となっている。5・6・7層も同様であり、これらは他遺構形成時の掘

りあげ土を竪穴内に投げこんだものである。 3・8層は、褐色土ブロック等を含むものの黒褐色～暗褐色土を中心とした自然堆積層である。(自然→人為→自然→……→自然)

床は、八戸浮石・火山灰層に形成されており、緩やかに波うち周辺がやや高くなっている。壁は全体的に外傾しているが、八戸火山灰上部から上位～特に南部浮石層以上～は崩壊のため外傾度が強い。壁の高さは北西よりで40～50cm、南東より20～25cm、南西および北東の壁で30～40cmとなっている。なお南～東よりの床および壁には、貼付がなされている。

炉は住居中心からやや北東へ寄った地点に浅い掘りさげ部をもつ地床炉として形成されている(80×88×3cm)。主軸（Po－2とPo－8の中点およびPo－6とを結んだ線）と磁北とがなす角度は、NW50度ほどである。

他遺構との新旧関係としては、CⅦ－008フラスコ形土坑を切っている。このことは同土坑の埋土上部にPo－6が形成されていることからも理解できる。

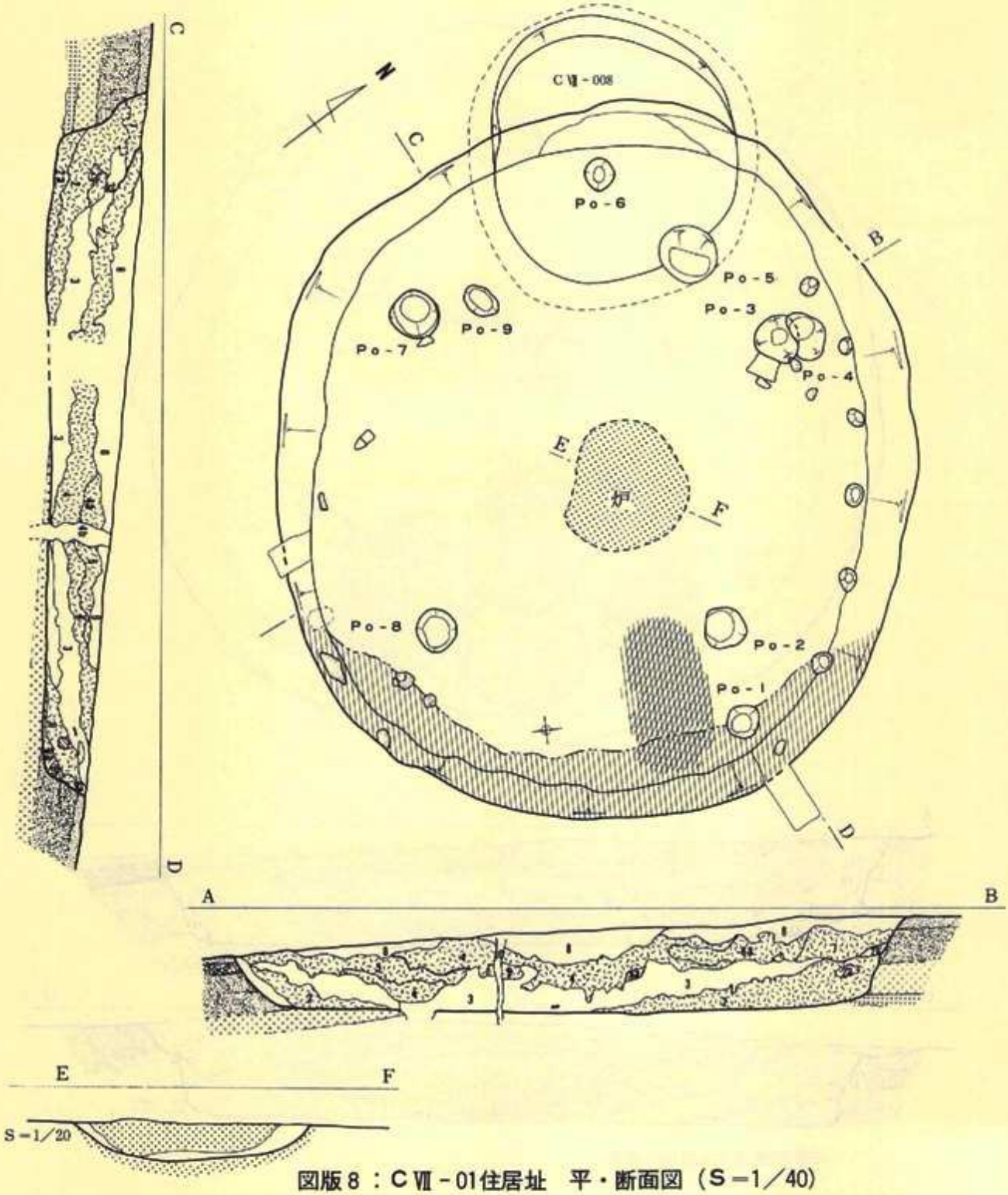
出土遺物としては、図版39－1の石鏃、同42－7・43－3・6の磨石・くぼみ石類が床や埋土から出土している。その他では図版42－7に示した磨製石斧が埋土から出土している。土器では図版51－8（写真図版44－10・11）などが出土している。

CⅦ－02住居址（図版9・10，写真図版9－19・20）

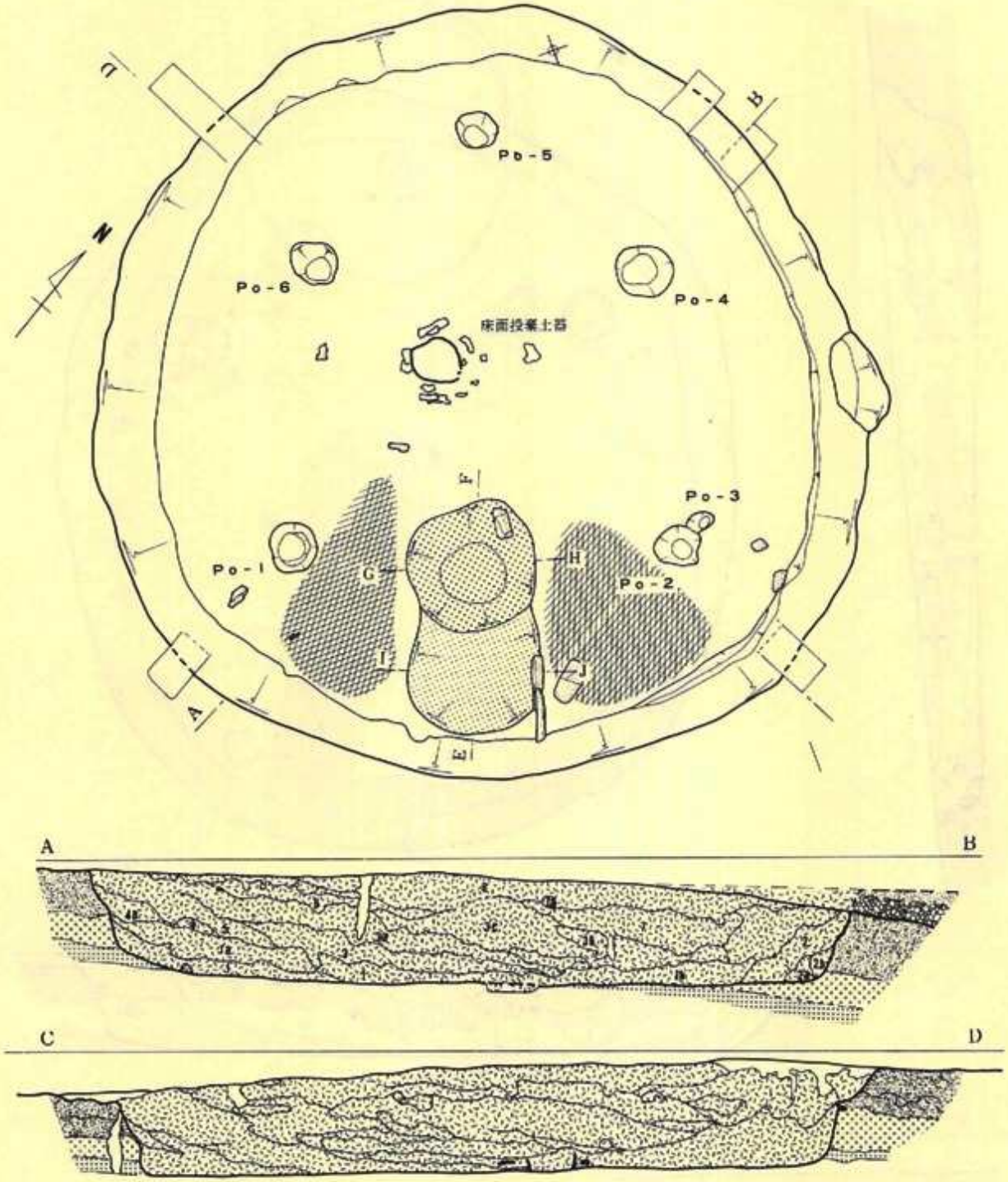
本住居址の検出：南部浮石層下部（八戸火山灰上部と混合しており境界が明確ではない。）に浮石をほとんど含まない円形の褐色～黄褐色土（8層）を検出した。この土層は、数種の土がブロック状に混合しており締り粘性等も自然堆積層とは大部異なっていた。しかし遺構であるとする確信がないためハンドボーリングしたところ深さ60～70cmの所に黒色～黒褐色のうすい層がブロック状に分布していることが判明した。これらの埋土は、壁際の床面に環状分布する黒色～黒褐色土層を除けばすべてが投げ込みによるものである。(全層人為)

平面形は、長軸長下端416cm（上端478cm）・短軸長下端480cm（上端412cm）で中心より南東が張らんだ不整円形で壁の高さは50～60cmである。柱は6口検出し、その配置は五角形で将棋の駒形に配置されている。

炉は南東壁よりに位置し、その平面形は円形で深い部分と浅い部分との2つの区画からなるマユ玉形を呈している。中心よりの部分は比較的深く掘りこまれ、底面は熱変の度合が強いが上端付近の熱変はまだらとなっている。また壁よりの浅い部分は、熱変の度合は弱いものの底面に炭化物小粒・焼土粒が散布している。なお壁よりには長い角礫（熱変色とクラックが生じている）1個と炉外に1個、そして住居中心よりの縁に1個の計3個の焼礫が残されている。その他では礫そのものは確認されないが抜きとり痕と思われる極浅いくぼみ（熱変がほとんど見られないか、あるいは存在しても極く弱い）が数ヶ所で確認されただけである。

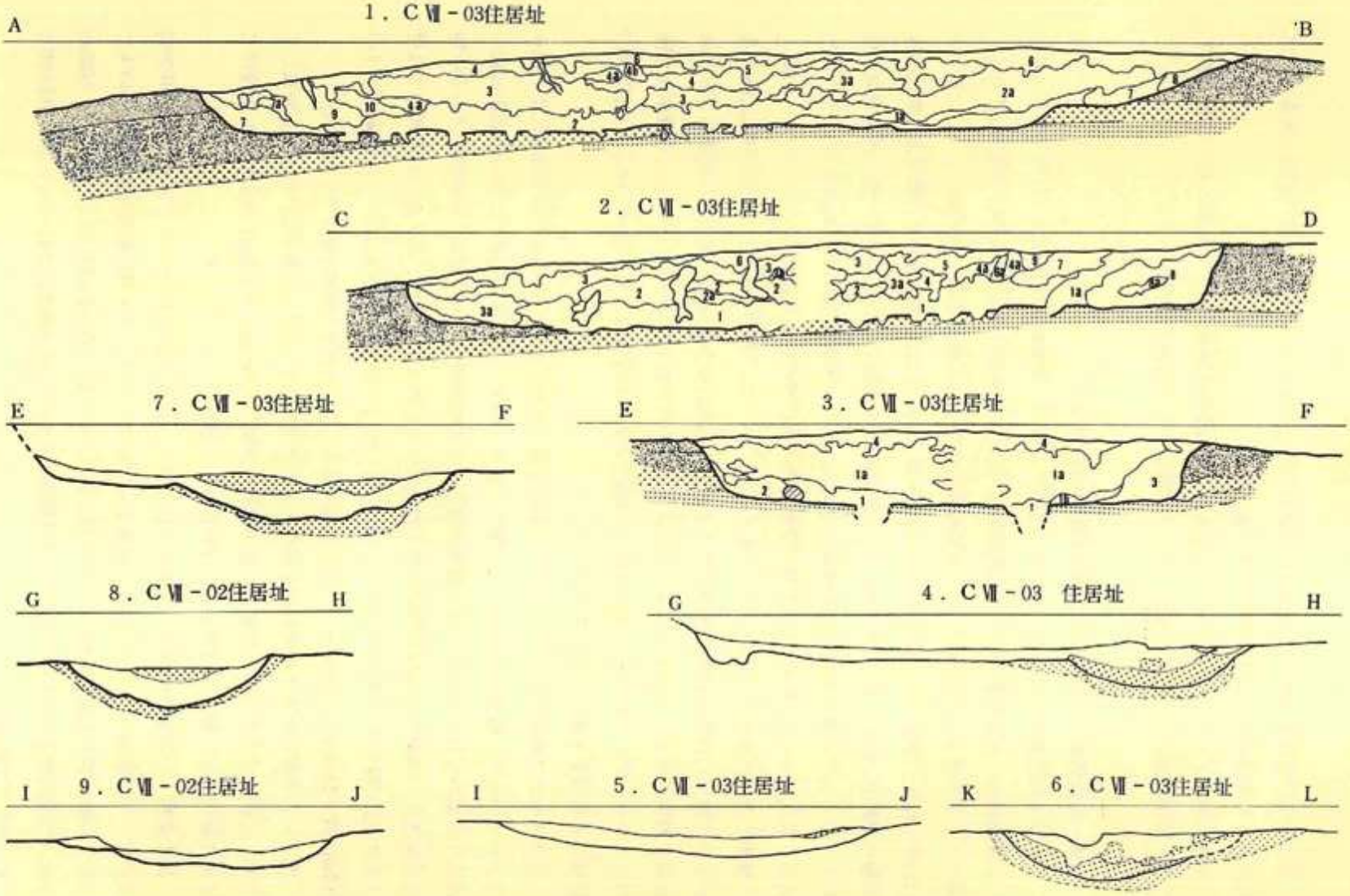


図版8：CⅦ-01住居址　平・断面図（S=1/40）



※炉断面図は図版10に掲載。

図版９：ＣⅦ－02住居址　平・断面図（Ｓ＝1／40）



図版10：CⅦ－03住居址土層断面図・炉断面図、CⅦ－02住居址炉断面図

床は、八戸浮石層を掘り抜きⅩⅡ層上部とⅩⅡD層とが床となっており、床の上部（床面）には粉砕された南部浮石がうすく敷かれている。(貼床)

主軸と磁北とがなす角度はNW40度である。出土遺物は床中央近くに廃棄された口縁付近だけの土器(図版49－5，写真図版43－4）と図版44－5の実測土器だけである。

CⅦ－03住居址（図版10・11，写真図版10－21・22・23）

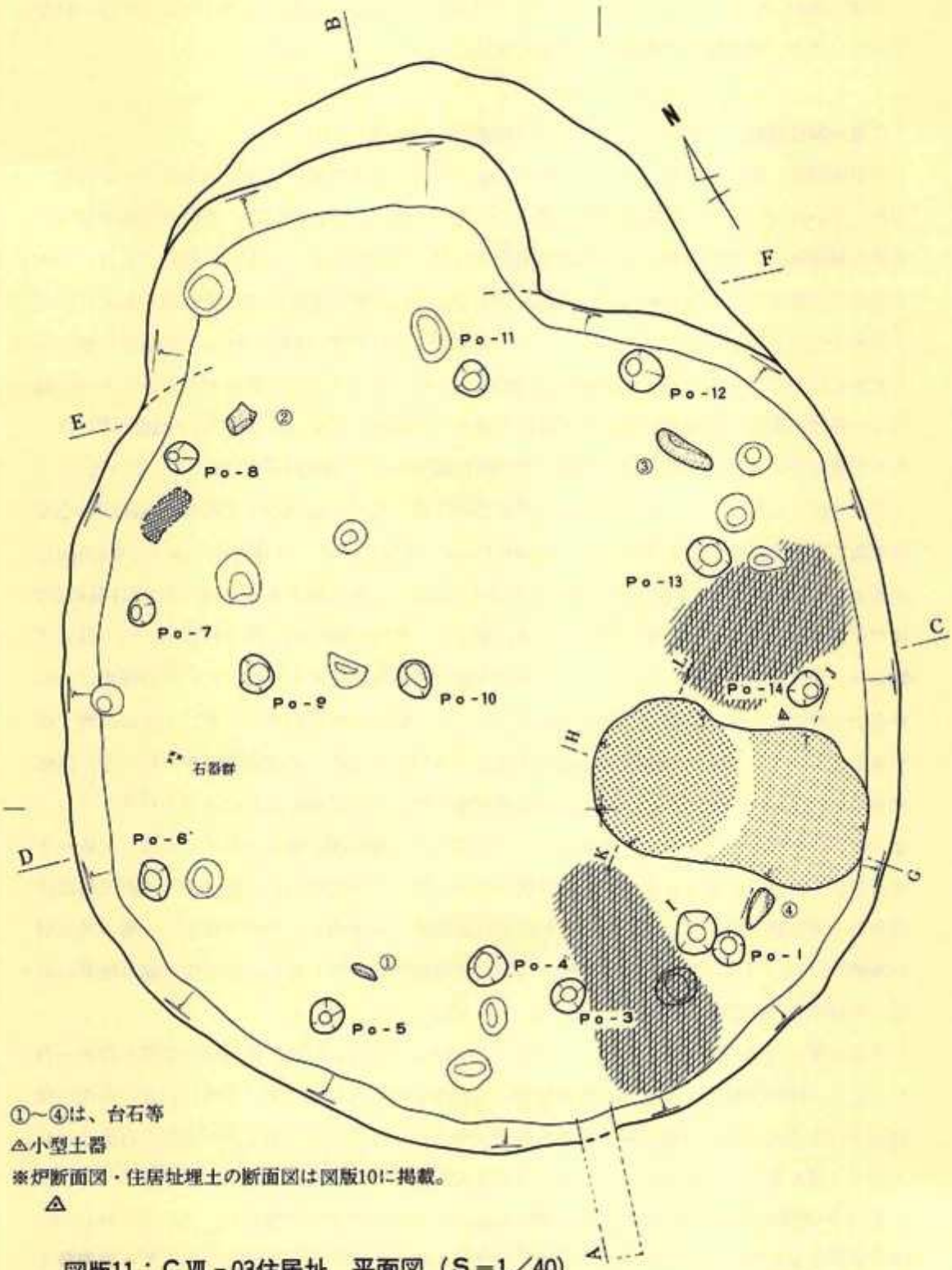
平面形は北北東部に張りだし部をもつものであるが、基本的には主軸長（北西－南東)494cm（上端534cm)、直交軸長488cm（上端526cm)、壁高30～54cmのほぼ円形を呈する住居址である。張りだし部を通る径は676cmとなり、床面の高さは中心の床面より15～20cm高くなっている。床は、南～南西～西壁に沿った区域は八戸火山灰層(A層)中に、中央付近および張り出し部は同浮石層(C層)に、北東～東辺は同D層上部に形成され、全体的に北北東から南～南に西の方向に傾斜している。その高低差は5～8cmほどである。また、床面全体に炭化物(木炭)の分布が認められ、特にPo－7とPo－8との間には割材状の炭化材が認められた(スクリーントーン部)。

検出した柱穴は全部で25口であるがPo－1～Po－13の番号を附与したもの以外は、極く浅いものや埋土の状態が新期の様相を呈するものである。なお張り出し部では不規則に分布し木根痕と判別できかねる径4～7cm、深さ未確認の小穴が数本認められたが、前述の理由から除外している。Po－1～Po－13の柱穴から推定される柱配置はCⅦ－02・05・06などの住居址と同様に五角形を基本としたものであろう。

炉は中心より南東壁よりにマユ玉形のものが設けられており、中心よりは半球状に深く掘りこまれているが、壁よりの部分は浅く掘りこまれている。深く掘りこまれた部分の底面は強い焼土化が認められるものの、浅い部分の焼土化は比較的弱いものである。炉の埋土は、下位層が黒褐色土～暗褐色土に炭化物粒・焼土粒を混じえた軟かい土層が、深く掘られた部分では更にその上位に焼土層（少量の炭化物混在)が形成されている。炉跡部の大きさはE～Fが176cm、I～Jが101cm（深さ14cm) G～Hが98cm（深さ6～8cm)である。なお石囲等の痕跡は確認できなかった。

埋土は、床面に分布する炭化物と混在する形で黒褐色土（0.5～1.5cm厚）がうすく分布しており、その上位の各層は自然層その他の黒色～黒褐色土層（0.5～2.5cm）を間層とした投げこみの土層である。(焼失→自然→人為→自然→……自然)

出土遺物：炉の東縁床面から図版48－15土器が、石器としてはPo－6とPo－9との中間付近の床から図版38－2・3・6の3点が重なって出土している。その他、東西南北の壁近くの床に点在する礫は、何れも敲打痕をもっており、特に東辺のものは、二面に強い敲打痕をもっている。(図版42－6)。その他の出土遺物としては、投げこみ土層中に含まれていた図版35－541－8の石器や文様が縄文のみの破片が少量出土している。



①～④は、台石等

△小型土器

※炉断面図・住居址埋土の断面図は図版10に掲載。

△

図版11：CⅦ－03住居址　平面図（S＝1／40）

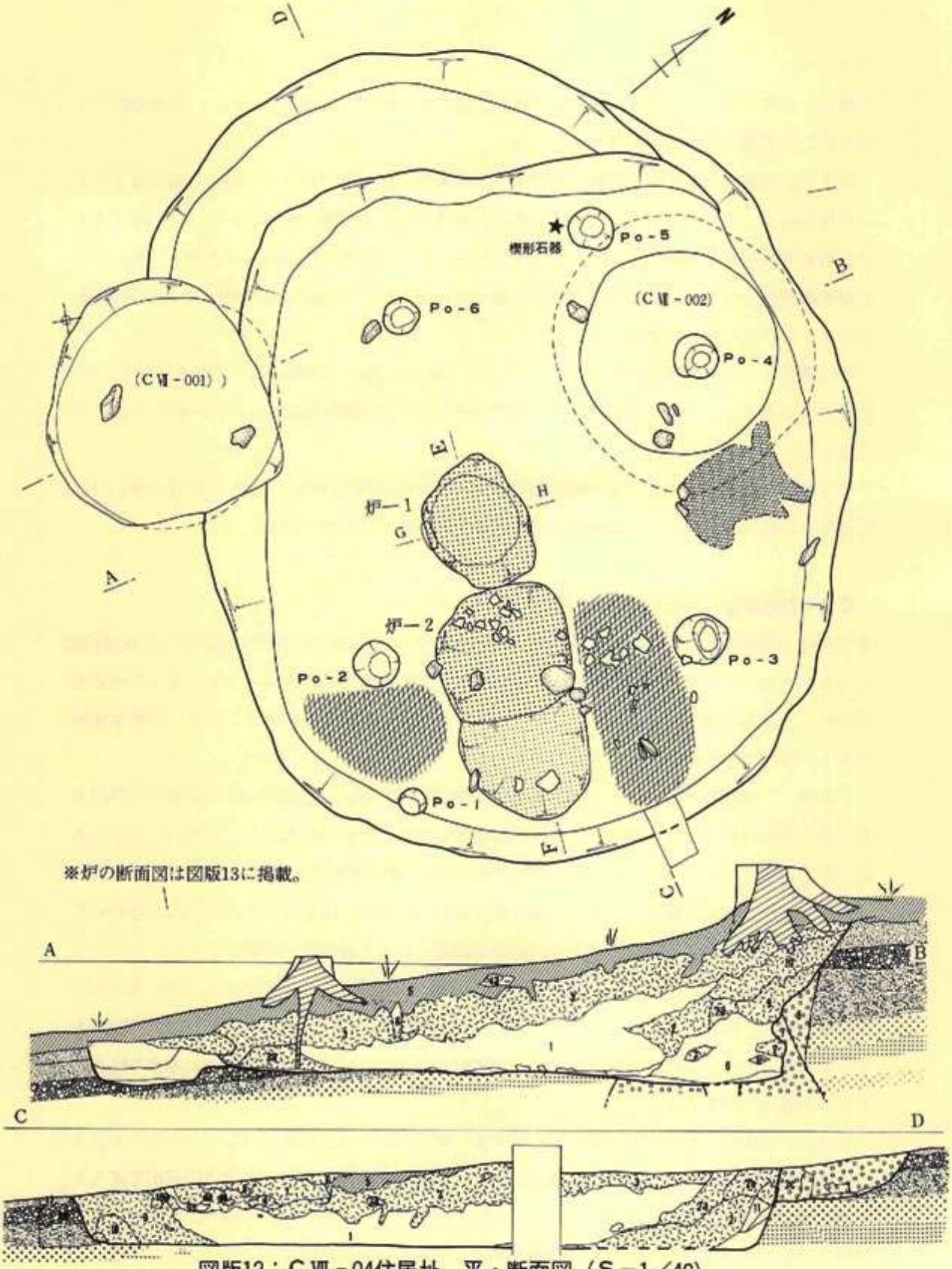
主軸（Po－1とPo－2の中点とPo－7とを結んだ線）と磁北とがなす角はNW42～43度である。なお、他遺構との重複は認められない。

CⅦ－04住居址（図版12、13－1・2，写真図版11－24・25）

検出確認は、表土層である黒色～黒褐色土層の直下に粘土質褐色土や灰白色浮石が不規則に分布していたところから住居址として認定したものである。検出当初は、西側の円弧部分をも含めた長軸560cm・短軸440cmほどの長楕円形住居址と考えていた。しかし、精査が進むにつれて西側の円弧部分は、住居周辺の造成部分かあるいは住居建設を途中で中止し埋めもどした部分と考えなければならない状況となった。円弧部分は、自然層の傾斜に沿って南部浮石層をおおまかに除去し、その部分に粘質褐色土(10YR 5/ 4)を主とした土が埋めもどされており、同様の土層は本住居の南東壁付近の床・壁にも貼りつけられている（CⅦ－001土坑部は欠失）。また円弧部分の底面の高低差は約60cm（2点間距離300cm）で傾斜角約11度となっている。

住居址部とした部分は、南東辺および北東辺が円弧となり、南西辺・北西辺が直線的となる胴張隅円方形に近い平面形を呈する。長軸長436cm（上端476cm）・短軸長370cm（上端436cm）、壁高104～25cmで炉は南東壁よりにマユ玉形のもの1基とこれに接する形で中心よりに1基の計2基が存在する。マユ玉形の炉（炉－2）は、壁よりの部分が幅84cm、深さ約19cm、他の部分は幅84cm，深さ12～8cmとなっており、底面は全面に焼土化が認められる。この炉の埋土は、底面直上に焼土粒・炭化物あるいは土器片などを含んだ軟かい暗褐色土が、更に上位には焼土層や焼土ブロックを含んだ黒褐色～暗褐色土などが堆積している。中心よりの炉（炉－1）は86×68×24（深）cmの楕円形で縁辺よりには板状礫を埋めこんだ跡と思われる穴が点在している。なお炉－2の周辺や内部には、赤変しクラックの入った礫や礫の破片が散布しており、炉－2は石囲炉であったと考えられる。底面は弱いながら焼土化が認められ、埋土である直上層は黒褐色土・炭化物・焼土粒などを混じえた軟かい暗褐色土が堆積し、その上位には3層の焼土層が堆積している。2基の炉を結ぶ中心線と住居址長軸線とは一致しない。炉の中心線は磁北に対してNW63度、住居址長軸はNW52度となっている。

床面全体に大粒の炭化物が分布しており、北東壁よりには、炭粉、炭化材の集積が認められた。また、柱穴上部には炭化材が遺存しているものも認められた。床は全体的に北から南へ傾斜しているが八戸浮石（XⅡC層）の露出部はやや高くなっており、南よりの南部浮石面や八戸火山灰（XⅡA層）を床とする所では南部浮石などを混じえた暗褐色～褐色土が貼りつけられている。また北隅にあるCⅦ－002土坑の開口部はシルト質褐色土で閉塞され、その上にPo－4の柱穴が形成されている。CⅦ－002土坑脇の壁は、八戸火山灰・浮石と混合したシルト質褐色土が厚く貼りつけられており、下部の貼付土はCⅦ－002土坑の埋めもどしや貼付土と区別が困難



図版12：CⅦ－04住居址　平・断面図（S＝1／40）

であった。

検出した柱穴は6口である。これらの柱穴は何れも本住居址に伴なうもので、南東壁際の1口を除けば不整は五角形に配置されている。

埋土は、床面に分布する炭化物と混合する形で黒色～黒褐色土がうすく堆積（層厚は1～6cm前後で波うっている)、その上位には自然流入か投げこみか不明の6層と、投げこみ層である3a層が異方向から堆積している。(焼失→自然→人為：一部自然？→自然→人為→自然）なお土層断面図A～Bの左にある白ヌキ部はCⅦ－001土坑の開口部縁辺部が崩壊したため周辺土層がズレをおこした部分である。

出土遺物としては図版49－1・2が炉－2の直上より出土し、図版46－2・3などが投げこみの埋土中より出土している。その他、Po－5の南西脇からは楔形石器5点他がまとまって出土している。

他遺構との関係についてCⅦ－002土坑は前述のとおりで本住居址より旧く，CⅦ－001土坑は円弧部や貼壁部が閃失している所から本住居址よりも新しいものである。

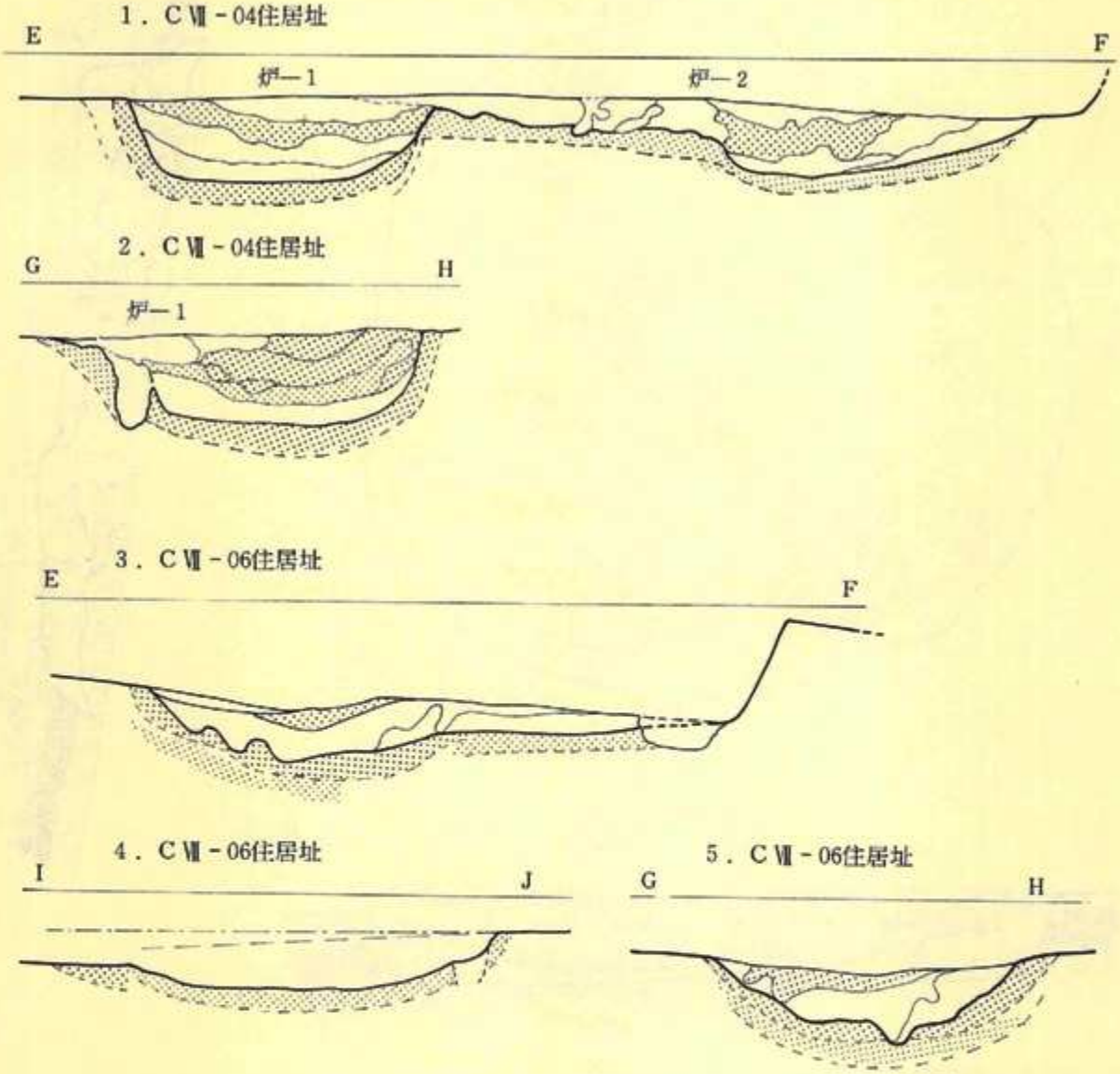
CⅦ－05住居址（図版16，写真図版12－26・27）

本住居址の検出確認は、CⅦ－003の陥し穴状遺構とともに南向きの斜面上位において検出確認したものである。CⅦ－003は、褐色～明褐色を呈する八戸火山灰を主とする土によって埋めもどされているが、本住居址もまた八戸火山灰その他によって埋めもどされており、自然堆積層である　層と明らかに区別されるものであった。

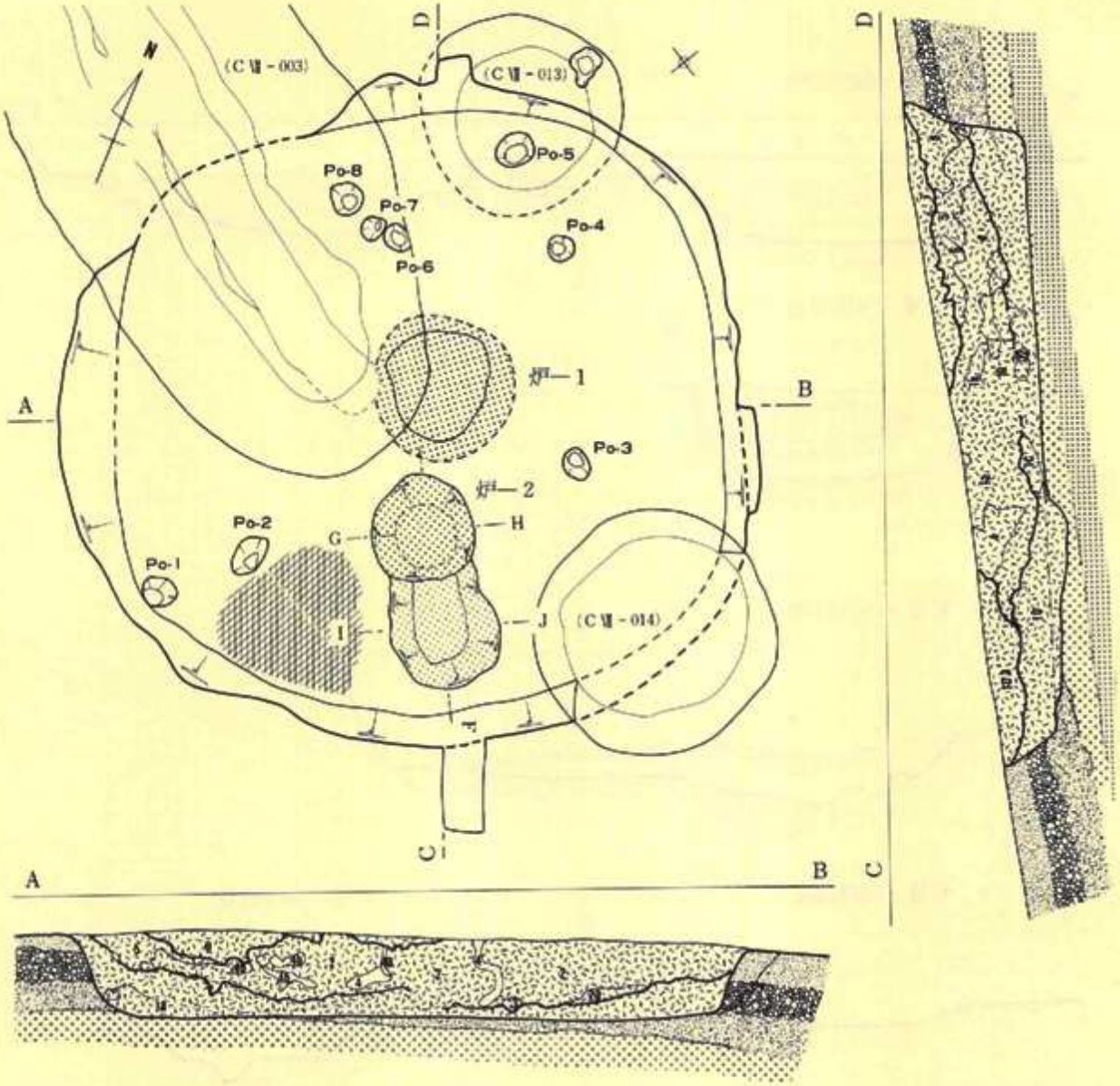
平面形は、長軸長下端338cm（上端374cm)・短軸長下端342cm（上端384cm)で胴張りの隅円方形に近い形を呈している。壁の高さは他の住居址と同様に斜面に形成されているところから各辺・各部によって異なっている。北北西壁で70～75cm，南南東壁でおよそ30cmを計る。床は八戸火山灰・八戸浮石層に形成されており貼り床は認められない。床面はほとんど凹凸が認められず、全体的に南～南東に傾むいており、その高低差はおよそ11cmほどである。

柱穴は、径15～25cm,深さ12～25cmと不ぞろいではあるがPo－1～Po－5，Po－8の6口を同様の条件で確認している。しかし、Po－5は浅すぎることから柱穴ではなく他の用途のものとも考えられる。北西壁をCⅦ－003に、南東壁をCⅦ－014に切られているため本来の柱穴数および配置は不明である。

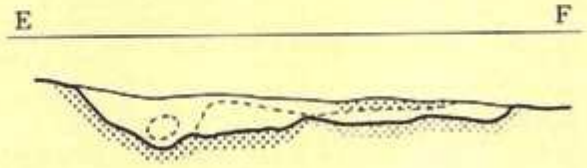
炉は、ほぼ中央に地床炉を（炉－1)、南南東の壁よりにマユ玉形あるいはダルマ形とも言える平面形態をもつ炉－2の計2基を確認した。炉－1は、60×60×3cmのほぼ円形炉であるが、石囲い等の痕跡は認められない。炉－2は、住居の中心よりが比較的深く掘りこまれ炉－1と同様に熱変が進んでいるが、壁よりの部分は浅く熱変の度合は弱い。



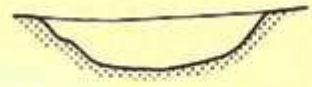
図版13：CⅦ－04・CⅦ－06住居跡・炉断面図（S＝1／20）



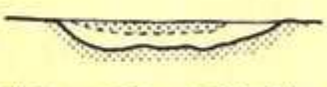
炉—2の断面図



炉—2の断面図



炉—2の断面図



※炉断面図は、S＝1／20　**図版14：CⅦ－05住居址　平・断面図、炉断面図（S＝1／40）**

埋土は、多量の炭化物を混じえた暗褐色～黒褐色が床面にうすく分布し、その上位には投げこみ土層が堆積している。その他には、上位の太線部に黒褐色～黒色土が間層となっている他は全て投げこみによる土層である。

出入口と推定できる部分としては、Po－3，Po－4と炉－2との間が他の床より硬く締っており（八戸浮石層露出床以外で)、またそれに続く竪穴部外も比較的硬く締っているところから、この部分が出入口として利用されたものと考えられる。

周溝や壁際の小穴、その他の施設は認められない。他遺構との新旧関係については前述のようにCⅦ－003・CⅦ－014は本住居址を切っており、CⅦ－013が本住居址に切られている。

出土遺物は、投げこみ土層中に少量の土器片（縄文のみ）が含まれていたものの時代・時期を推定できる状態のものではない。石器では図版39－9が投げこみ土から出土している。

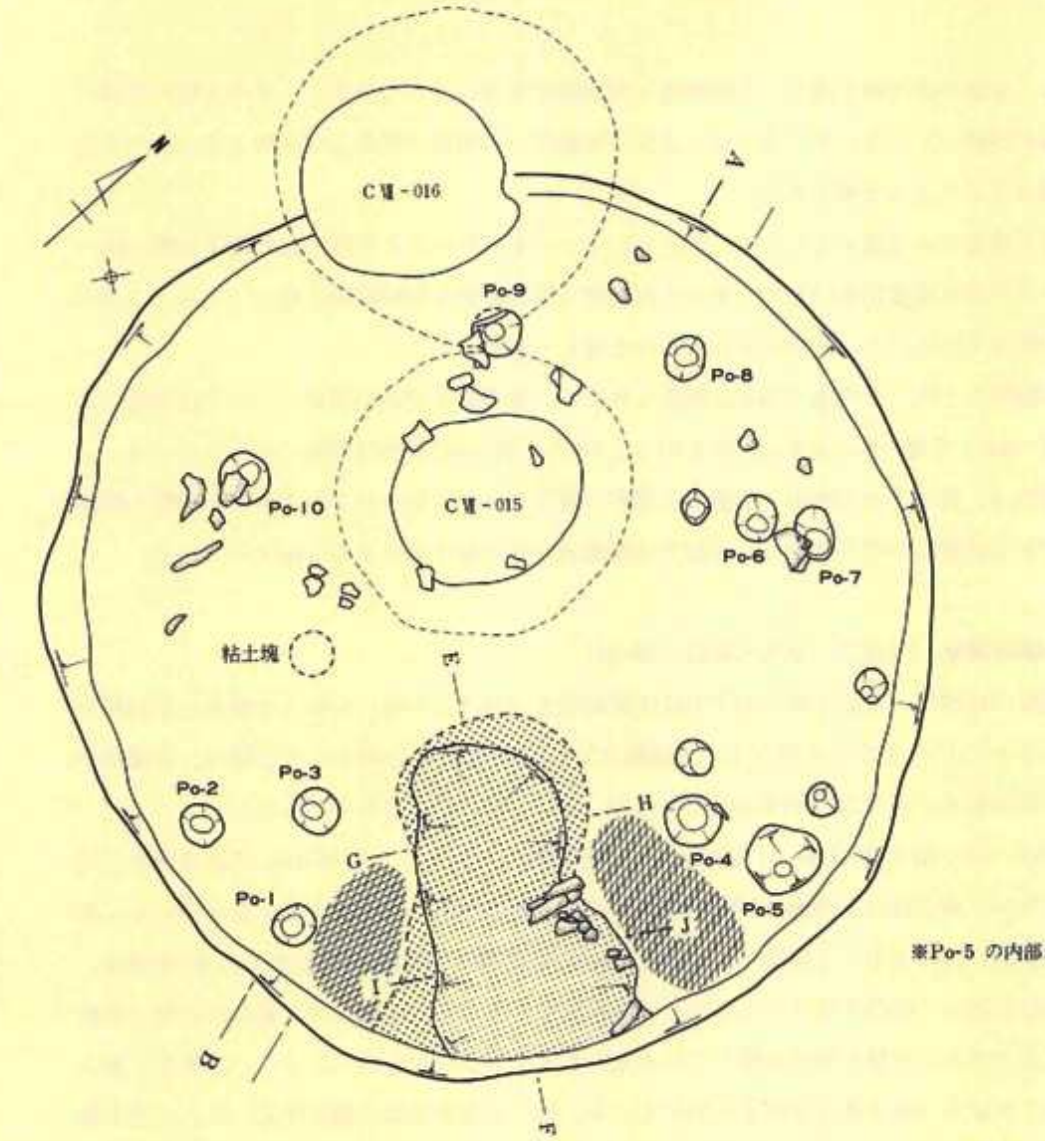
CⅦ－06住居址（図版15，写真図版13－28・29）

本住居址の検出は、Ⅵ層上部を削平中に住居址埋土（投げこみ層）である3層および12層を確認したことにより、その分布状況から住居址としたものである。3層および12層は、黄褐色や黄橙色の粘土質土で八戸浮石や暗褐色土を含み、かたく締っているものである。

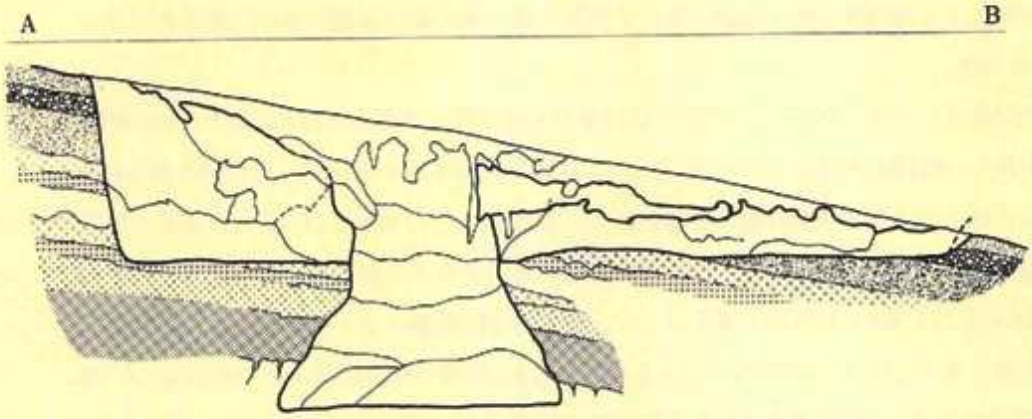
平面形は、中心軸下端444cm（上端460cm）・直交軸下端422cm（上端460cm）のほぼ円形で壁高は最大74cm、最小24cmと斜面部形成の関係から斜面上方が高く、下方が低くなっている。床面は、全体的に斜面下方へと傾斜し、その差は400cmの距離で約30cmの高低差である。床面は、他の住居址に比べて凹凸が見られるもののほぼ平担である。なお床面には多量の炭化物（炭粉状がほとんどであるが材の形状を残しているものも含まれる）が分布しており、北東から東よりの床および壁の一部は焼土化現象を生じている。床に分布する炭化物を除去したところ大塊の炭化物が点在する地点8ヶ所を確認した。この8ヶ所は次に述べる柱穴等の一部である(Po－1～6・9・10)。

柱穴は13口検出したが、Po－1～Po－10以外の4本は埋土上部から認められた所から本住居址よりも新しい時期のものと思われる。Po－5はガラス砂を多く含んだ灰白色粘土塊を検出したことから柱穴ではなく小型貯蔵穴と思われる。またPo－7・8の2口は、八戸浮石や南部浮石で埋めもどされているところから、ほぼ同時期のものと考えられるが、他の柱穴と共に上屋を支えるものとして用いられたとは考えにくい。基本的な柱配置はPo－3・4・6・9・10による五角形配置と考えられる。なおPo－3・4・6・9・10と同様の検出状況をもつものとしてPo－1・2の2本がある。この2本を含めた本住居址の柱穴は、埋土の上部から中ほどに大塊の炭化材が確認されている。

炉は住居の南東壁よりに設けられており、その平面形はマユ玉形でやや深い部分と浅い部分



※Po-5 の内部からも粘土塊出土



※炉断面図は、図版13に掲載。

図版15：CⅦ－06住居址　平・断面図（S＝1／40）

との２つの区画から構成されている。住居中心よりの部分は比較的深く（19cm±）掘りこまれ底面は強い熱変（焼土化）を生じているが、壁よりの浅い部分（床の低い面に比べると７cm±高い面に比べると15cm±）の低面は熱変の度合は弱い。なお炉掘込部周辺の床面にも焼土化が生じており深い方の周辺は色鮮やかな赤変となっている。浅い方の縁辺には赤変した礫や砕片となった礫が散在している。石囲等の痕跡は、図示した礫以外に炉の南辺に礫ぬきとり痕と思われる小穴数ヶ所を認めたが木根が張っているため明確な形状等は見いだせなかった。

中心軸方位は、磁北に対してNW49度となっているが、炉の中心軸とは一致しない。炉の中心軸は磁北に対してNW60度30分，住居中心軸とは西偏11度30分ほどとなっている。(中心軸の決定はPo－３とPo－４の中点とPo－９と結んだ線とした)

出土遺物としてはPo－３とPo－10との中間付近の床およびPo－５の底からガラス砂を多く含んだ粘土塊（各々1,200cm前後)、Po－９の北側からは図版48－２が焼けただれて出土している。土器は投げこみ層以外からは、焼けただれた破片数点が出土したのみである。

CⅦ－07住居址（図版16，写真図版14－30・31)

本住居址は、南斜面の中腹で検出したものである。10棟の住居址群のなかでは最も低い位置にある。本住居址を検出した付近の傾斜は約14度で、竪穴の掘りこみは北側（斜面上方）で約45cmの深さである。

平面形は、円形～楕円形と思われるが南側の床および壁の限界・位置が不明のため実形状・法量は不明である。炉を中心に柱配置などから推定すれば南北下端長300±cm（上端長340±ａcm）東西下端長286cm（上端長302cm）の若干南北に長い楕円形となる。

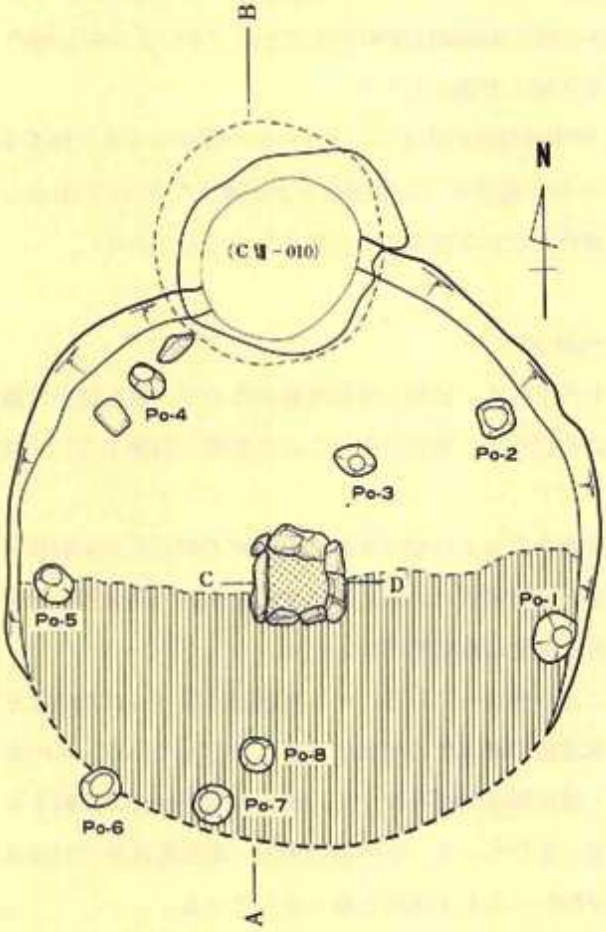
炉は方形で偏平な長い礫を横位に埋めこんで形造っている。炉の東西辺に設けられた礫はその長手方向が南北に平行となっており、南北辺の礫は東辺が狭まるようになっている。炉内部には顕著な焼土は認められないが焼土粒・炭化物は少量存在する。焼土の形成度合に比較すると炉石は、火熱によるクラック・赤変が強く生じている。炉内部の東西・南北長は共に30cmほどであるが、北辺はやや狭く、また礫の平均レベルも４cmほど高くなっている。

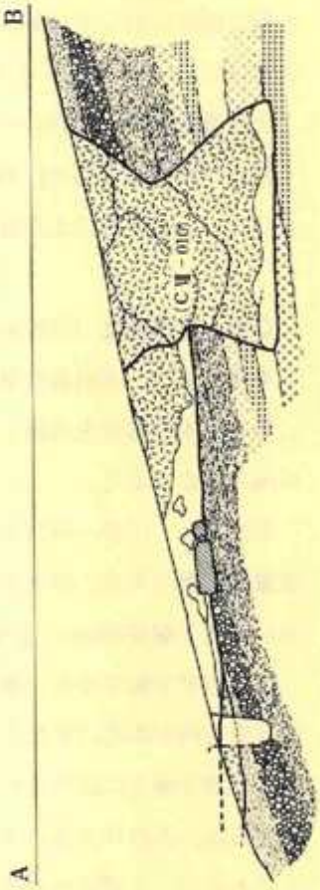
床は炉の北側が八戸火山灰層中に形成されているが、炉付近から斜面下方よりの南側では南部浮石層および暗褐色～黒褐色土のⅣ～Ⅶ層に形成されている。南側の南部浮石層部からⅣ～Ⅶ層の上部には南部浮石を混じえた暗褐色土で貼床がなされておりⅣ～Ⅶ層上部では貼付部との判別が困難である。床は全体的に北から南へと傾斜しており、その平均傾斜度はほぼ５度で、炉の傾斜度約７度（30～32cmで４cmの高低差）に比較してややゆるくなっている。

柱穴は、全部で８口を検出しているが、Po－７、Po－８,の２口は埋土の種類から比較すると本住居址のものではなく、新期のものと考えられる。柱配置は北をＣⅦ－010土坑に切られて

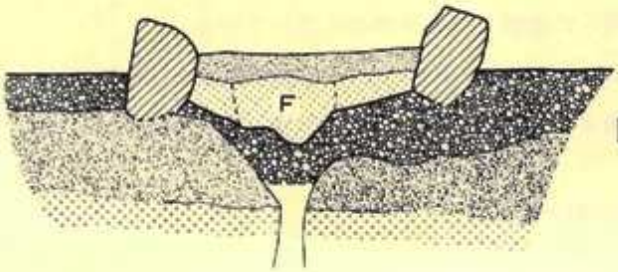
いること、南側では他に柱穴を検出できなかったことなどもあるが、Po－1からPo－6・の6口から推定すると南東にもう1口の住穴が存在し、基本的配置は6本柱で六角形を構成する配置と推定される。主軸方位の計測推定Po－1と5，Po－2と4の各々の中点を結ぶとNE12度ほどになる。

出土遺物としては、炉の北西壁よりから2点の礫を検出したが、何れの礫にも使用痕跡は観察されなかった。その他には出土していない。なお、北壁をCⅦ－010土坑によって切られているが、この土坑は八戸火山灰等によって埋めもどされている。





C　炉断面図S＝1／20　D



図版16：CⅦ－07住居址　平・断面図
（S＝1／40）

3．陥し穴状遺構について

陥し穴状遺構は、全部で5基検出している。ここで“陥し穴状遺構”としたものは“溝状ピット”とか“溝状土坑”などと呼ばれるものと類似形態を有する土坑である。その他に、陥し穴と考えられる土坑を2基検出しているが、それらは“土坑類”の項に一括した。

検出した5基は、その配置状況を観る限りでは一定の方向性・組み合せは認められない。しかし、北側斜面の上端に形成されたCⅥ－006（図版16）をのぞけば長さ(長軸長)350～400cm・深さ140～206cm・幅130～178cm・底部20～40cmの範囲にあり、ほぼ同様の規模・形態をもっている。

BⅦ－001（図版17，写真図版15－32・35）

開口部平面形は不整の小判形を呈し、短軸断面では比較的開口部が広く、中ほどから急速に落ちる壁となっている。また中ほどから口縁にかけての壁は崩落して緩傾斜となっている。埋土の1～7層までの中で3・6層を除いた層は壁の崩落土である。8層は、壁の崩落土小ブロックと周辺土の混合土層で南部浮石・八戸火山灰土を多量に混じえている。9・10層は、八戸浮石層より下位に位置する橙色～褐色の枯土質火山灰土を主とする層であり、層位関係から考えると他遺構形成時に掘りあげられた排土で埋めもどされたと判断できる。

開口部の長軸長406cm・最大幅162cm・底部長365cm・底部の幅は壁の崩落との関係から最大幅66cm・最小幅22cmを計る。底面はほぼ平坦で検出面から深さは160±αcmである。出土遺物はない。

BⅦ－008（図版17，写真図版15－33）

調査対象区域外にかかって検出しているため全体規模・形態が不明である。推定平面形は他と同様に不整の小判形あるいは長楕円形と思われる。短軸断面形はBⅦ－001と同様であるが、北壁の中ほどより下に抉れたような形で壁の崩落が生じている。(断面図は長軸に直交する方向ではなく斜交しているため実際の短軸断面形よりも幅広くなっている。)埋土の下半は壁の崩落土を主とし、上半は周辺土を主とする。埋土の1・2層は断面図左の凹部および上部の八戸火山灰土であり、3層は南部浮石が多量に混った褐色～暗褐色土である。4・5層も八戸火山灰土を主とする崩落土層で、5～7層は南部浮石・八戸火山灰土・浮石質暗褐色土などが不規則に混じりあった土層である。投げこみによる人為層および遺物は認められない。

検出開口部の長軸長245cm・最大幅140cm・低部長244cm・底部幅最大40cm・最小22cmを計る。低面はほぼ平坦で検出面からの深さ144cm、現地表面からの深さ165cmである。

C Ⅵ－002（図版21，写真図版15－37・38・39）

本遺構は、C Ⅵ－003の土坑に切られているため開口部平面形の一部が不明である。しかし推定形は他と同様に不整の小判形あるいは長楕円形と考えられる。他の陥し穴状遺構に比べて開口部付近の壁の崩落が少なく、中ほどから下位の壁はほとんどくずれていない。底面は、中央付近がやや高く、両端に行くに従って低くなっている。また底面中央には長軸方向に溝が形成されており、底部両端は開口部外形から外側へ張りだしている。検出開口部の長軸長354cm・最大幅130cm・底部長390cm・底部幅最大85cm・最小34cmで深さは172cmである。

埋土は、中ほどから下が崩落土（八戸火山灰等を）主とし、8層から上は自然の流入堆積土と考えられる。投げこみによる人為層および遺物は認められない。

C Ⅵ－006（図版18，写真図版15－34・36）

円形の土坑と推定して調査したところ、倒木根痕跡を切る形成された陥し穴状遺構であった。開口部平面形は不整の長楕円形を呈し、短軸断面形は底面が円味をおびたV字形である。倒木根痕跡に形成されたことから壁部と埋土との区別が困難で中端から開口部付近の壁に掘りすぎが生じている。全体的に斜面と同方向傾斜している。開口部長軸長247cm・短軸最大幅107cm・中端付近の長さ186cm・幅44cm、底部長162cm・底部幅15cm・深さ104cmである。

埋土は、底部付近に南部浮石を少量に混じえた暗褐色を主体とした土層が入り、上部には暗褐色土と南部浮石とが混合した土層が入っている。これらの土層は崩落および自然堆積と考えられる層であり人為層は認められない。出土遺物はない。

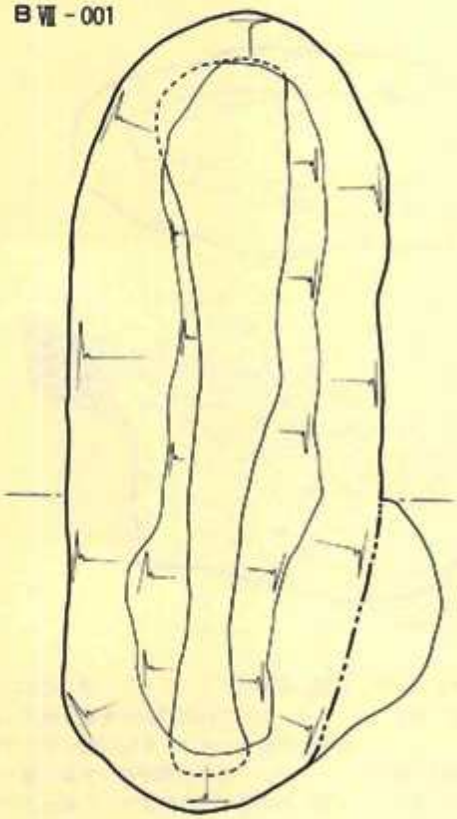
C Ⅶ－003（図版18，写真図版15－40・41）

C Ⅶ－05住居址の北西を切って形成されている。開口部平面形は不整の長楕円形を呈し、短軸断面形は口縁から中端にかけて急傾斜で中端から底部へはほぼ垂直に落ちる壁である。底部には僅かな（小量ながら）湧水があるため、常時水溜りが形成され、底部の詳細な状態は不明である。しかし長軸方向に並行して一部に溝が形成されており、底面全体は斜面に沿って傾斜している。開口部長390cm・最大幅178cm、底部長347cm・同最大幅36cm・同最小幅28cm、深さ206cmである。

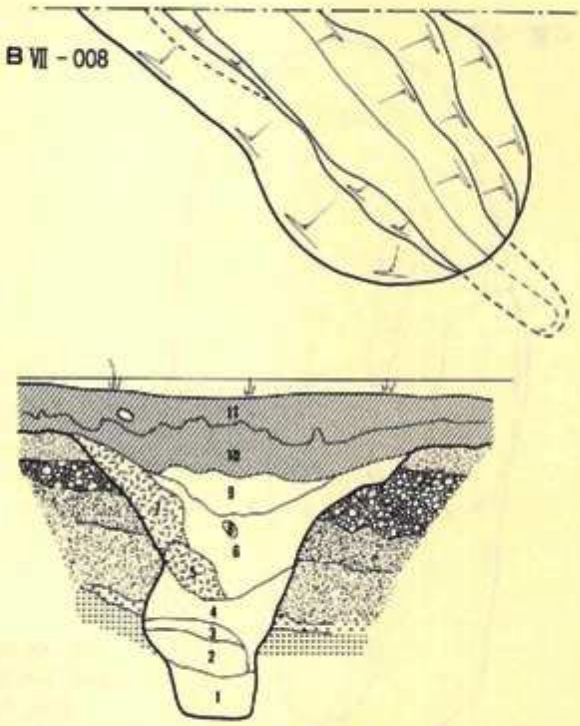
埋土は1～3層までは内壁の崩落であるが4～7層は崩落かあるいは投げこみであるかを決めかねる（両者混合？）。8～10層は投げこみによる埋めもどしの土層である。

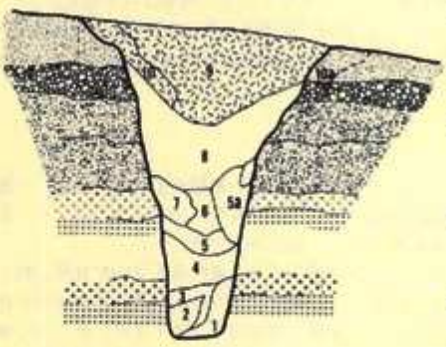
出土遺物としては、尖底土器片を含む数点の土器片と礫が見られたが、何れも8～10層の投げこみ土層からの出土である。

B Ⅶ - 001



B Ⅶ - 008





B Ⅶ - 001 註記

1層　明褐色土(7.5YR⅝)。やわらかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

2層　褐色土(7.5YR⅝)。やわらかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

3層　暗褐色土(7.5YR⅜) に明褐色土(7.5YR⅝) ブロックが混入し、硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が混入。

4層　橙色土(7.5YR⅝) に明褐色土(7.5YR⅝) ブロックが混入し、粘性があり軟らかい。小粒の南部浮石が混入。

5層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石が点在。

5a層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

6層　褐色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石が混入。

7層　明褐色土(7.5YR⅝) に褐色土(7.5YR⅝) ブロックが混入し、硬いがくずれやすい。南部浮石点在。

8層　暗褐色土(7.5YR⅜)。硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

9層　橙色土(7.5YR⅝) に明褐色土(7.5YR⅝) 小ブロックがわずかに入り、緻密だが、やや軟らかい。

10層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

10a層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。10層より小粒の南部浮石は少ない。

B Ⅶ - 008 註記

1層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝)。若干の粘性があり硬く締まっている。

2層　黄褐色土 (10YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石点在。

3層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝) に黄褐色土 (10YR⅝) ブロックが混入し、硬いがくずれやすい。南部浮石が多量に混入。

4層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝) に黄褐色土ブロックが少量混入し、硬いがくずれやすい。

5層　黄褐色土 (10YR⅝) ににぶい黄褐色土 (10YR⅝) ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が混入。

6層　暗褐色土 (10YR⅜) ににぶい黄橙色土 (10YR⅝) ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

7層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝)。硬いがしまりがない。南部浮石が多量に混入。

8層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝)。硬く締まっている小粒の南部浮石が少量混入。

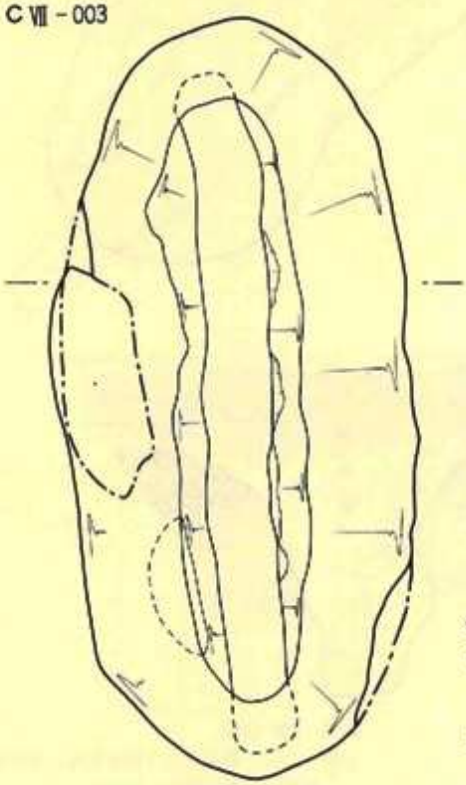
9層　黒褐色土 (10YR⅜)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石点在。

10層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石点在。

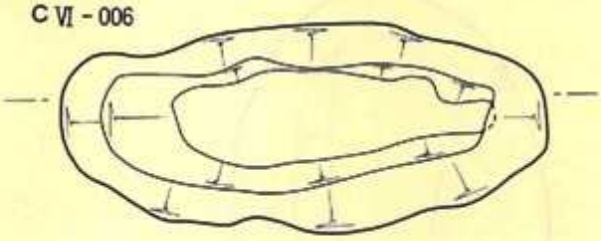
11層　にぶい黄褐色土 (10YR⅝)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石点在。

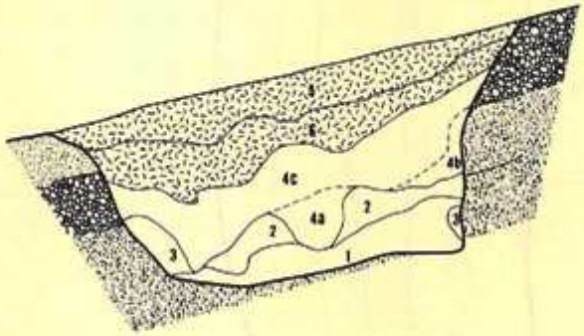
図版17：陥し穴状遺構実測図 -(1)

C Ⅶ - 003



C Ⅵ - 006





C Ⅵ - 006 註記

1 層　明褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）小ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

2 層　明褐色土(7.5Y R 5/6）の南部浮石層に暗褐色土(7.5Y R 5/6）ブロックが混入し、硬いがくずれやすい。

3 層　明褐色土(7.5Y R 5/6）の南部浮石層。締まりがない。

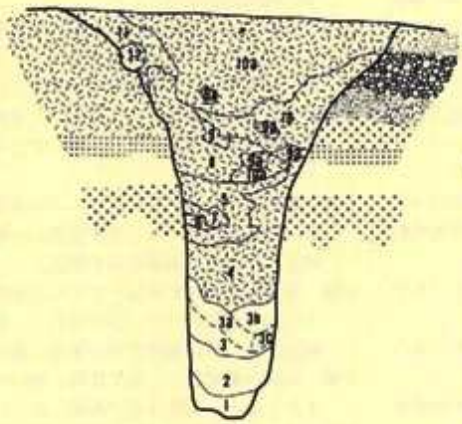
4a層　暗褐色土(7.5Y R 3/3)。南部浮石が多量に混入しているためくずれやすい。

4b層　暗褐色土(7.5Y R 3/3)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。4c

4c層　暗褐色土(7.5Y R 3/3)。硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が多量に混入。

5 層　明褐色土(7.5Y R 5/6）に褐色土(7.5Y R 5/6）ブロックが多量に混入し、硬く締まっている。南部浮石が混入。

6 層　明褐色土(7.5Y R 5/6)。硬く締まっている。南部浮石が混入。



C Ⅶ - 003 註記

1 層　黄褐色土(Y R 10/6）に明黄褐色土(10Y R 5/6）ブロックが混じり、粘性があり硬く締まっている。

2 層　黄褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、粘性がありきわめて硬く締まっている。

3 層　明黄褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、粘性がありきわめて硬く締まっている。

3a層　明黄褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）ブロックが多量に混じり、硬く締まっている。

3b層　明黄褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）ブロックが少量混じり、きわめて硬く締まっている。

4 層　にぶい黄褐色土（10Y R 5/4）に明黄褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

5 層　黄褐色土（10Y R 5/6)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石点在。

6 層　にぶい黄橙色土（10Y R 7/4）に褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、若干の粘性があり軟らかい。

7 層　にぶい黄橙色土（10Y R 5/4)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石点在。

8 層　黄褐色土（10Y R 5/6)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

9 層　黄褐色土（10Y R 5/6)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

9a層　黄褐色土（10Y R 5/6)。硬く締まっている。南部浮石が混入。

10層　褐色土（10Y R 5/6）に暗褐色土（10Y R 3/6）ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石点在。

10a層　褐色土（10Y R 5/6)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

11層　黄褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/4）ブロックが混じり、硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

12層　黄褐色土（10Y R 5/6)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

図版18：陥し穴状遺構実測図 -(2)

4．土　坑　類

陥し穴状遺構・土坑墓・ゴロタガメあるいは極新期の小土坑をのぞいたフラスコ形土坑・直円筒形土坑などは77基である。これらの中で最も多い形態は、フラスコ形土坑が最も多く64基である。フラスコ形土坑は、細部形状・規模・附帯構造・埋土の種類状況などの条件を組み合わせると10数種に区分されるが、形態上からは次の５種に大別できる。

(A)いわゆるフラスコ形の断面図をもち、底面中央付近に住穴状あるいは半球状の小穴をもつもの（A $_1$型）と、もたないもの（A $_2$型）とがある。この型の場合、頚部は長くはないが、口頚部径が比較的小さく、底部径と深さとが近似した値を示す。

(B)本来A型と同様の形態をもっていたと考えられるが、土坑廃棄後の埋めもどし崩壊等で開口部が広くなり漏斗状を呈するもの。この場合、開口部径と底部径とが近似した値となり頚部の位置が低い位置となるところから断面形が鼓形を呈する。また、深さの値が底部径の$\frac{3}{8}$～$\frac{1}{2}$程度と小さな値を示すものがあるが、この深さの値が小さいものは、後にのべるC型あるいはD型の変形したものと考えられる。

(C)底部径の割に深さがなく（$\frac{1}{2}$前後)、かつ開口部径の比が小さいもの。(DV－001・002）全体的に規模が小さいものの内部が広くなっている。

(D)開口部径と底部径との差が小さく断面形が台形に近いものである。深さの値は底部径・開口部径の値に比べて非常に小さいもの（D $_1$型）とそうでないものとがある。(D $_2$型)

(E)Bの項の中で述べている。

その他、様々の断面形状を呈するが、これらの土坑の多くは一部あるいは全部？が埋めもどされており、内壁・開口部等にほとんど崩壊が認められないものも存在する。また埋土中あるいは底部に土器等の遺物を包含した土坑は少ない。

土坑類の埋土の区別については、住居址と同様の方法で図示した。土層の堆積状況からは投げこみによるものと判断できるものでも、土の種類からは投げこみと自然層とを区別できないもの、開口部や壁などが崩落したりズレているもの、そして自然流入堆積と判断したものは白ヌキの層としている。人為層（投げこみ等）は、壁等の貼付補修部と投げこみ（埋めもどし層）とを区別している。(断面図のみ）以下に土坑埋土の状況を列記する。(F～N)

(F)全層が埋めもどしによる土坑。ただし埋めもどし土が締まったり落ちついた後、壁との間隙に自然層が入ったものも含める。

(G)底部付近の数層だけが自然層で他の埋土は、全て投げこみによるもの。

(H)底部付近と中間に自然層が堆積するもの。他は投げこみ層。

(I)底部と上部に自然層が堆積し、他は投げこみ層のもの。

(J)中ほどより上部にのみ投げこみ層が存在するもの。

(K)中ほどにだけ、あるいは中ほどと上部にだけ自然層が堆積しているもの。

(L)上部にのみ自然層が堆積しているもの。

(M)埋土の全層が自然堆積によるもの。

(N)全ての層が投げこみ等の人為層と考えられるが、明確に人為層と判断できない層をもつもの。

なお、全土坑についての文章説明は省略し、主なものについてだけ説明を加えるので“表2：土坑類一覧”を参照されたい。説明文中では各部の法量も省略する。

BⅦ—002（図版19，写真図版16—42・43）

本来A₁型のフラスコ形土坑と思われるが1～7層までが堆積する過程で口縁・内壁が崩壊したものと考えられる。5・8・9層は、八戸火山灰層等による埋もどし層である。1・2・10層は南部浮石を混じえた暗色～黒褐色土の混合土層で各々がうすい層となっている。7層は、壁の崩落である。底面は周辺から中心の副穴へと傾斜しているが全体的には斜面下方が低くなっている。出土遺物はない。

BⅦ—003（図版19，写真図版16—44・45）

平面開口部、底部ともにやや不整形で底面中心付近は副穴をもっている。底面の南西（図の下方）には小さな穴状の突出部が存在し精査の段階では空洞として出現している。底面は全体的に斜面下方が高いが、底面周辺から副穴へと向う傾斜をもっている。埋土の1層は黒色土、2層は黒褐色土と南部浮石との混合で2a層は南部浮石・褐色土小ブロックが多量に含まれる。出土遺物なし。

BⅦ—005（図版19，写真図版16—48・49）

平面形は開口部・底面ともに東西方向にやや長い楕円形で、底面のほぼ中心に副穴をもっている。断面形は頸部から底面への壁への壁が急に広くなるフラスコ形を呈するもので、開口部付近が若干崩壊して広くなっている。頸部は短かいが底部径の1/2と細くなっている。底面全体は斜面上方が高く、また底部周壁の一部は床面よりも外側へ張り出している。埋土の1層は、黒色土を主に黄褐色土粒を混じえた軟かい層であるが2～5・10層は黄褐色土・明黄褐色土あるいは褐色土などのブロックによって構成されている6層は黄褐色土粒（小中ブロック）・南部浮石を混じえた黒色～黒褐色土で構成されており、締まりも良くないところから2～5・10層で

埋めもどした後、土の落ちつきによって生じた空間に堆積したものと考えられる。なお3層は八戸浮石・灰白色土で内壁の崩落土とも考えられる。一応、全層埋めもどしの型とする。出土遺物なし。

BⅦ－007（図版20，写真図版17－51・52）

BⅦ－01住居址の精査段階で検出したフラスコ形土坑である。遺存部での推定形態は、開口部から頸部下端までがほぼ垂直に落ち（頸部長約40cm）、頸部下端から底面に至る壁は外方へ湾曲して急激に広くなっている。底面は若干の凹凸が見られ中央付近がやや高くなっている。平面図中における開口部の偏よりは検出開口部であることから生じたもので、復元推定の開口部は土坑中央付近（径約60cm）に存在したものであろう。埋土の1a層は、黒褐色土であるが堆積条件を考えれば他と同様に投げこみによるものである。出土遺物なし。

CⅤ－001（図版20，写真図版17－53・54）

断面形態E型の土坑で、底部径と開口部径とが近似した値となり、深さは底部径の1/2ほどの値いで頸部が深さの中ほどに位置するものである。底面はほぼ平坦であるが中央に比べて周辺がやや高くなっている。埋土は、4～8層を除けば明らかに投げこみ土層である。4～8層は、口縁の崩壊ブロックを混じえた黒褐色～褐色土である。この黒褐色土あるいは崩壊ブロックが自然崩壊であるか意図的にくずしたものかは不明である。9層および10層下部には投げこまれた土器片（0段多条の原体2種で羽状を構成する文様）が含まれている。

CⅥ－003（図版21，写真図版15－37・38）

平面はほぼ円形で断面形は逆台形を呈する大きな土坑と思われるが、CⅥ－002土坑との重複部が崩壊しているため実形態は不明である。検出当初は小型の住居址かとも考えられたが、柱穴・炉跡など住居址と想定される条件は全く見られなかった。底面は木根によるためもあるが凹凸が激しく、また中央付近が一段とくぼんでいる。9・10・15層をのぞけば、南部浮石・八戸浮石などを混じえた褐色土・明褐色土あるいは橙色土で構成される投げこみ土である。10a・10b層に多量の炭化物と焼土の小ブロックを含んでいる。出土遺物なし。

CⅥ－005（図版22，写真図版18－59・60）

精査当初は、土層の乱が強いところから倒木根痕跡かと思われたが、精査の結果図左上にフラスコ形土坑と判断できる掘りこみを確認した。しかし土層・形状の乱れかたから土坑に生えた木による倒木現象と重なったものと思われる。出土遺物なし。土層分類不明。

C Ⅵ－009（図版22，写真図版19－65・66）

平面形は開口部・底部ともに不整の円形を呈するものであるが、　側（図上方）には底面レベルが高い、推定径130～140cmの円となる張り出し部が存在する（C Ⅵ－009土坑）。張り出し部の埋土は南部浮石・八戸浮石を不規則に混えた暗褐色土で、黄褐色土・明褐色土で構成される土坑本体部（C Ⅵ－009A：断面図のとれている土坑）と異質の埋土となっている。A・B両土坑は、同時期に造られたものかあるいはC Ⅵ－009Bが古く、開口部がAのものと同化しているものか、不明である。A土坑の底面は曲面をなし、その中央付近に深さ5～6cm長径10cm短径40cmほどの浅い副穴が存在する。また断面図右には壁に径10～12cm、奥行き10cmほどの横穴状小穴が設けられている。B土坑の底面はほぼ平担であるが、三ヶ月状にしか確認できず詳細は不明である。壁は台形の斜辺のようにほぼ直線に傾斜している。両土坑ともに出土遺物なし。

C Ⅵ－010・011（図版23，写真図版19－67・68）

小判形の土坑（旧）とフラスコ形土坑（新）とが重複したものである。C Ⅵ－010土坑は全層埋めもどしであるが、011土坑の埋土1～4は自然か埋めもどしか不明である。他は八戸浮石や高舘火山灰相当の砂礫質土をブロックで含み黄褐色土・明褐色土などで構成される埋めもどしの土層である。両土坑とも出土遺物はない。

C Ⅶ－002（図版23，写真図版19－70・71）

C Ⅶ－04住居址精査中に検出したもので、図版23にはD型と受けとられる部分だけを図示しているが、図版12のC Ⅶ－04住居址断面図にはB型断面形の土坑として現われている。本来、深さ150＋a cm：底部径160cmほどのA型断面形のフラスコ形土坑と考えられる。底面は、中央がやや高い不整円形で、壁は直線的に内傾して立ちあがっている。また底面の中央にはC Ⅶ－04住の柱穴Po－4が掘りこまれてはいるが副穴は確認できない。埋土の最下層は浮石を含んだ軟かい黒色土で、10・12層は土坑内だけではなく土坑周辺の住居の床にも貼付られた状態で分布している。その他は、黒褐色・明褐色土あるいは灰白色土などの大小ブロックが不規則に堆積しているが、投げこみによる埋めもどし層と考えられる。少量の炭化物は含まれるが他の遺物はみられない。

C Ⅶ－008（図版24，写真図版20－77・78）

平面形はほぼ円形を呈し、断面形が台形を呈する。埋土を見るかぎりでは一部に崩落は認められるが、自然流入堆積は認められず全層が埋めもどしによるものである。なお、C Ⅶ－01住居址に切られており、平面中央には同住居址の柱穴Po－6が掘りこまれている。出土遺物なし。

CⅦ－013（図版25，写真図版12－26上方）

CⅦ－05住居址の北壁で検出したものであるが、同住居址精査の段階にほとんど掘りあげている。残った部分から判断すると同住居址より旧い直円筒形の土坑である。底面に偏って存在する小穴は住居址の柱穴であるが、もう一つの小穴は何れのものであるかは不明である。残っていた埋土は炭化物・焼土ブロックを含んだ暗褐色土であるが、土坑の壁は焼土化していた（底面には炭化物が集積しているが焼土化は認められない）。

CⅦ－015（図版25，写真図版21－89）

頸部の長いA型断面のフラスコ形土坑である。最下層の白ヌキ土層をのぞけば、全ての埋土が投げこみによるものである。最下層は、黒色土に明褐色土ブロックが混じった軟かい層であるが自然か投げこみかは不明である。底面には、板状に割れた礫や図版42に図示した石皿破片などが散乱していた。(図中の礫は、全点が底面のものである)

DⅤ－002（図版26，写真図版22－91・92・93）

E型を呈するフラスコ形土坑であるが底部の片隅に浅い穴を掘り、その壁に数個の土器破片を立てるようにして囲いを設けていたものである（径25cm×35cm深さ7cm±）底にも破片を敷いている。(図版46－5・6の土器)

DⅤ－005（図版27，写真図版22－98・99）

E型断面のフラスコ形土坑であるが底面のほぼ中央に浅い副穴をもっている。また図左よりの底面には土坑外方に向って斜めに掘りこまれた小穴が存在する。埋土の3～5層は黒色～黒褐色土に南部浮石や明褐色土ブロックを含んでいるが中央部に縦に投げこまれている明褐色土・黄褐色土との堆積状況を比べた場合、3～5層も投げこみの可能性が高い。

DⅤ－008（図版27，写真図版23－104・105）

本土坑もE型断面のフラスコ形である。平面形は、開口部・底部ともに楕円形を呈するものである。埋土のほとんどが埋めもどしの層であるが最上位層の8層は自然層と考えられる。出土遺物は投げこみの5層下部から図版52－15に図示した土器片が出土している。

DⅥ－001・002（図版29，写真図版26－123・124・125）

両土坑とも底部径に比べて深さが1/2前後のものである。新旧関係としては、002土坑が旧く001土坑が新しいものである。しかし002土坑の埋土で丸のスクリーントーンを表示した部分は他

の投げこみ土層とは異なり非常に固く締まっている（固められたもの？）。
002土坑の白ヌキ部（2ブロック）3層は八戸火山灰（XIIB）で、記号なしは南部浮石である。
001土坑の5・6層は、ほぼ同時堆積の自然層と思われるが、浮石質黒褐色土に明褐色土・褐色土の小ブロックが不規則かつ多量に含まれるなど自然層とは即断しかねる点もある。

D VI－006（図版30，写真図版27－131・132）

底面は不整の楕円形で開口部もまた崩壊等により不整形となっている。埋土は全体的に浮石質黒褐色土・褐色土で構成されており、自然・人為の区別は困難である。しかし4・5層および7～9層には南部浮石や黄褐色土ブロックが不規則に混在し、5・6層は平面図在下から右上の方へ傾斜し、その中に土器大破片を包含している（図版49－8，写真図版44－13）。このような状況から埋土の一部は投げこみによるものと考えられる。

D IV－011（図版32，写真図版28－139・140）

開口部平面形は不整の円形を呈し、底面は曲面を呈している。断面形は底部から開口部へと広がっているが埋土の1～6層を見ると内壁の崩壊土と自然流入堆積層とが互層をなしている。また8・9層は土の種類(XIII・XIV層を混じえた黄褐色土)から投げこみによるものと判断できる。

埋土1～6層の状態観察から本土坑の本来の形態は底面が曲面をなす直円筒形土坑であったと考えられる。出土遺物なし。

D VI－018（図版23，写真図版29－152・153）

平面形は、開口部・底部ともに小判形をなす土坑である。底面は大むね平担である。断面形は底部から深さの中ほどでは垂直に立ちあがっているが、中ほどの八戸火山灰部（XIIA層）から急に広がっている。埋土の1層は、壁上部が崩壊した南部浮石やXII層などの小ブロックを含んだ自然層であり、その他2～4層と考えられる。埋土の状況から本土坑の本来の形態は、平面形が小判形を呈する直円筒形の土坑と考えられる。出土遺物なし。

D VI－020（図版34，写真図版30－156・157）

平面形は開口部・底部ともに不整の円形を呈し、また壁の状態も部分によって変化に富んだ土坑である（全体的に不整形のフラスコ形土坑)。埋土のほとんどが埋めもどしによるものであるが、1・4・7層は投げこみによるものか口頸部壁の崩壊によるものか不明である。なお断面図左がわの白ヌキ部は埋土ではなく頸部である。この部分は平面図作成前に崩落したため平面図・断面図の口頸部法量が異なっている。なお平面図中の礫が断面図は図化されていないが礫は底

面の1層と4層との境に存在したものである。出土遺物なし。

EV－002（図版35，写真図版31－165・166）

平面形は不整の隅円長方形で断面は長軸・短軸ともに逆台形を呈する。底面はⅫB層上部に造られ不整面で斜面下方へと傾斜しているが、固く締っている（つき固めた？）。埋土は、一部に南部浮石やⅫAの小ブロックを混じえているが、1・2層ともⅡ・Ⅳ層に類似した層である。埋土の種類・堆積状況から比較的新期のものと思われる。

EV－003（図版35，写真図版31－167・168）

平面形は不整の卵形で断面形は長軸・短軸ともに円弧を呈する。本土坑は中掫浮石の二次集積層上位から掘りこんでおり、埋土は中掫浮石と黒褐色土とが混合した土層中に南部浮石のブロックが混在している。底面・壁とも固く締まっている。出土遺物なし。

表2：土坑類一覧（計測値等）

○陥し穴状遺構以外のもので開口部欄の上段は長径、下段が短径である。

○また（　）付の数値は推定復原値

○頸部数値欄の下段（　）付は陥状遺構等の中段幅・径を表わす。

○フラスコ形土坑の深さで（　）付は、副穴部での深さを表わす。他は、底面の最深か中央部の深さを表わす。

○陥し穴状遺構での開口部値・底部値は、上段が長軸長、下段が短軸幅であるが底部値の場合、左は最大幅、中が中央幅・右が最小幅の各値を示す。

○形態のA_1・B_2は、副穴（小柱穴をもつものもたないもの。B_1・B_2は大型小型の遺いを表わす。

通算	土坑番号	配置図番号	図版番号	写真図版番号	名称 形態	埋土型	法量（単位：cm） 開口部	頸部 (中段)	底部	深さ	出土遺物・その他
1	BⅦ－001	1	17	15-32・35	陥し穴状遺構	J	406 160	(62)	365 66・40・22	158	
2	BⅦ－002	2	19	16-42・43	フラスコ形 C	J	170 165	120	174 170	(115) 108	
3	BⅦ－003	3	19	16-44・45	フラスコ形 A_1	G	152 135	107	218 190	100	
4	BⅦ－004	4	19	16-46・47	フラスコ形 B_2 ?	H	190 180	120	126 125	101	
5	BⅦ－005	5	19	16-48・49	フラスコ形 A_1	F	140 110	82	175 165	(132) 123	
6	BⅦ－006	6	20	17-50	フラスコ形 C	K	162 154	128	207 196	85	
7	BⅦ－007	7	20、6	17-51・52	フラスコ形 A_2	F	100 100		167 164	130	BⅦ－01(新)と重複
8	BⅦ－008	8	17	15-33	陥し穴状	M		(66)	?	165	
9	CⅤ－001	9	20	17-53・54	フラスコ形 E	K	170 168	141	166 165	74	
10	CⅥ－001	10	20	17-55・56	フラスコ形 E	K	146 130	120	154 138	70	
11	CⅥ－002	11	21	15-37・38・39	陥し穴状	L	354 104	(65)	390 85・58・34	172	CⅥ－003に切られる。
12	CⅥ－003	12	21	15-37・38・39	陥穴状土坑	I	280		215	67	CⅥ－002を切っている。
13	CⅥ－004	13	21	18-57・58	フラスコ形 E	J	124 118	113	140 126	52	
14	CⅥ－005	14	22	18-59・60	?	?	220 177		182 150	78	

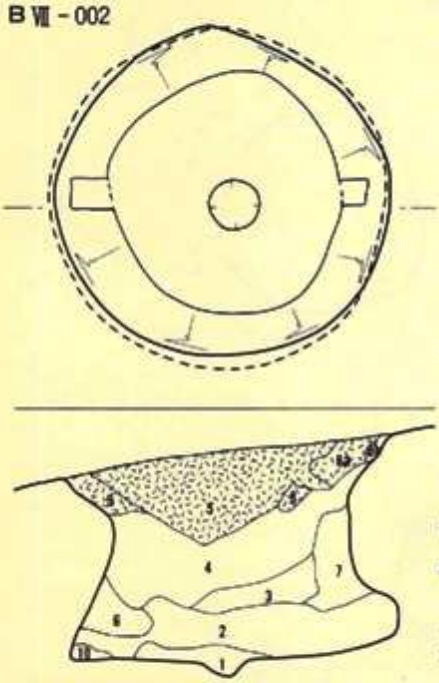
通算	土坑番号	配置図番号	図版番号	写真図版番号	名称 形態	埋土型	法量（単位：cm） 開口部	頸部（中段）	底部	深さ	出土遺物・その他
15	CⅥ－006	15	18	15-34・36	陥し穴状	M	247 98	(197)	162 50・44・15	104	
16	CⅥ－007	16	21	18-61・62	フラスコ形 E	G		155		78	
17	CⅥ－008	17	22	18-63・64	フラスコ形 B_1	F	130	80	134	104	
18	CⅥ－009A	18	22	19-65・66	フラスコ形	F					
19	CⅥ－009B	18	22	Aに同じ	フラスコ形 C	F					BはAより浅く狭い。開口部はAと同位している？
20	CⅥ－010	19	22	19-67・68	フラスコ形 E	F	150 135	101	130 110	73	CⅥ－011に切っている。
21	CⅥ－011	20	22	※CⅥ-010に同じ	（墓坑？）	N	257 170		167 85	77	CⅥ－010に切られている。
22	CⅦ－001	21	12, 23	19－ 19-69・70	フラスコ形 E	K	164		168	72	CⅦ－04住を切っている。
23	CⅦ－002	22	12, 23	19-71 11-24	フラスコ形 B_2	N	(150±)	(120±)	190 174	140±	CⅦ－04住より旧。
24	CⅦ－003	23	14, 18	15-40・41 12-26・27	陥し穴状	J	388 182	(88)	347 36・34・28	206	CⅦ－05住を切っている。
25	CⅦ－004	24	23	19-72・73	フラスコ形 A_2	N	148 120	67	152 142	110	CⅦ－005に切られている。
26	CⅦ－005	25	23	19-72・74	フラスコ形 B_1	K	168 (163)	120	180 (75)	140	CⅦ－004を切っている。
27	CⅦ－006	26	24	20-75・76	フラスコ形 C	(N？)	200	90	150 150	90	CⅦ－007を切っている。
28	CⅦ－007	27	24	20-75・76	フラスコ形 B_2	(N？)	187	(70)	170 170	140	CⅦ－006に切られている。
29	CⅦ－008	28	8, 24	20-77・78	フラスコ形 D_2	F	190 167	/	210 198	床面 138	CⅦ－01住に切られている。
30	CⅦ－009	29	24	20-79・80	フラスコ形 B_2	I	176 162	67	150 143	118	
31	CⅦ－010	30	16, 24	20-81・82 14-30・31	フラスコ形 B_2	G	120 105	80	120 120	92	CⅦ－07住を切っている。
32	CⅦ－011	31	25	21-83・84	フラスコ形		153 117	80	170 160	(118) 103	
33	CⅦ－012	32	25	21-85・86	フラスコ形 B_2	G	159 156	105	158 156	118	

通算	土坑番号	配置図番号	図版番号	写真図版番号	名称 形態	埋土型	法量（単位：cm） 開口部	頸部（中段）	底部	深さ	出土遺物・その他
34	CⅦ－013	33	14, 25	12-26	直円筒形？	(N)	(115)	/	80 78		CⅦ－05住に切られている。
35	CⅦ－014	34	14, 25	21-87 12-26	フラスコ形 E	N	135 133	107	125 125	51	CⅦ－05住を切っている。
36	CⅦ－015	35	15, 25	21-89 13-28・29	フラスコ形 A_2	N	150 130	75	150 145	143	CⅦ－06住より新しい。
37	CⅦ－016	36	15, 26	21-88 13-28	フラスコ形 D_2	I	108 100	/	160 158	115	CⅦ－06住に切られている。
38	DⅤ－002	38	26	22-91・92 ・93	フラスコ形	N	130 110	126	140 140	52	
39	DⅤ－003	39	26	22-94・95	フラスコ形 D_2	N	171 160	(154)	170 170	73	
40	DⅤ－004	40	26	22-96・97	フラスコ形 E	L	164 162	145	193 185	57	
41	DⅤ－005	41	27	22-98・99	フラスコ形 E	N	170 149	121	150 145	(76) 70	
42	DⅤ－006A	42	26	23-100 ・101	皿状	F	88 72	?	?	12	
43	DⅤ 006B	42	26	/	フラスコ形 E	L	145 135	92 98	110 105	42	Aに切られる。
44	DⅤ－007	43	27	23-102 ・103	皿？	M	183 165		162 137	21	
45	DⅤ－008	44	27	23-104 ・105	フラスコ形 E	L	160 127	109	155 142	65	
46	DⅤ－009	45	27	23-106 ・107	フラスコ形 D_1	H	116	/	150	59	
47	DⅤ－010 －011	46 /	無し	無し	(フラスコ形 B_1)	J メモによる	/	/	/	/	※強風により実測図紛失。
48	DⅤ－012	47	27	24-108 ・109	フラスコ形 E	N	135 107	92	160 150	94	
49	DⅤ－013	48	28	24-110 ・111	フラスコ形 D_1	H	180 165	(157)	190 187	(70) 63	
50	DⅤ－014	49	28	24-112 ・113	フラスコ形 C	J	131 130	80	121 118	54	DⅤ－015より新しい。
51	DⅤ－015	50	28	24-112 ・114	フラスコ形 D_2	N	187 150	150	200 183	102	DⅤ－014の一部に貼壁している。
52	DⅤ－016	51	28	24-115 ・116	フラスコ形 A_2	G	112 105	77	130 125	102	

通算	土坑番号	配置図番号	図版番号	写真図版番号	名称 形態	埋土型	法量（単位：cm） 開口部	頸部（中段）	底部	深さ	出土遺物・その他
53	DV－017	52	29	24－115 －118	フラスコ形 C	G	150 126	103	175 150	83	
54	DV－018	53	29	24－119 ・120	皿 ?	M	238 232	/	170 159	40	
55	DV－019	54	29	24－121 ・122	皿 ?	M	115	/	75	27	
56	DVI－001	55	29	25－123 ・124	フラスコ形 C	K	135 128	93	172 164	75	DVI－002の一部につき固め帽。
57	DVI－002	56	29	25－123 ・125	フラスコ形	N	140	91	165 125	67	DV－001に切られている。
58	DVI－003	57	30	25－128	フラスコ形 D_1	I	146 125	120	164 155	75	
59	DVI－004	58	30	25－126 ・127	フラスコ形 D_1	N	156 153	133	160 157	64	
60	DVI－005	59	30	25－129 ・130	フラスコ形 C	K	167 166	115	192 172	74	精査中に口縁別壊
61	DVI－006	60	30	26－131 ・132	フラスコ形 E	I	135 130	106	160 140	75	
62	DVI－007	61	31	26－133 ・137	フラスコ形 E	K	163 152	131	152 150	75	
63	DVI－008	62	31	27－135 ・136	フラスコ形 E	H	215 206	165	220 204	71	
64	DVI－009	63	31	27－137 ・138	フラスコ形 A_1	F	82 75	70 66	145 130	(86)	DVI－010に切られる。
65	DVI－010	64	31	27－137 ・138	フラスコ形	G	175 135	139	175 164	86	DVI－009を切っている。
66	DVI－011	65	32	28－139 ・140	直角筒形?	J′	135 132	108±	92 84	126	
67	DVI－012	66	32	28－143	フラスコ形 D_2	F	127 115	(110)	160 158	87	
68	DVI－013	67	32	28－141 ・142	フラスコ形 A_2	N	152 145	121	179 165	113	
69	DVI－014	68	32	28－145 ・146	フラスコ形 C	N	225 212	182	^230 225	89	
70	DVI－015	69	33	28－147	フラスコ形 A_2	F	136 102	74	130 125	76	
71	DVI－016	70	33	29－148 ・149	フラスコ形 D_1	J	203 186	/	180 175	86	

通算	土坑番号	配置図番号	図版番号	写真図版番号	名称 形態	埋土型	法量（単位：cm） 開口部	頸部（中段）	底部	深さ	出土遺物・その他
72	DⅥ－017	71	33	29－150・151	フラスコ形 B_2	K	116 110	84	140 140	85	
73	DⅥ－018	72	33	29－152・153	？（抜し穴状？）	M	170 135	110 80	98 62	120	
74	DⅥ－019	73	34	29－154・155		N	142 134	/	115 95	33	
75	DⅥ－020	74	34	30－156・157	フラスコ形 D_1	N	170 168	135	210 200	88	
76	DⅥ－21	75	34	30－158・159	フラスコ形 E	N	210 210	150	198 184	110	
77	DⅥ－002	76	34	30－160・161	時計皿形	M	160 130	/	/	20	※本図は、スクリーントーン部が口縁崩壊土・他は全自然層。
78	DⅥ－023	77	35	30－162・163	フラスコ形 D_1 ？	M？	182 172	153±	166 155	63	
79	DⅥ－024	78	36	31－169・170	（墓坑）	/	170 108	/	134 74	25	寛永通宝・鉄鏽化物出土。
80	DⅥ－025	79	36	31－171・172	（墓坑）	/	167 95	/	125 74	35	
81	DⅥ－026	80	36	31－173・174	（墓坑）	/	175 108	/	115 82	32	馬（小型種）遺骨出土。
82	EⅤ－001	81	35	31－164	フラスコ形 D_1	I	112 108	125±	155 150	48	
83	EⅤ－002	82	35	31－165・166	（ポッタ穴？）	M	178 85	/	150 73	20	
84	EⅤ－003	83	35	31－167・168		M	138 108		118 85	35	
85	EⅥ－001	84	/	/	大柱穴	/					※新期の大柱穴（掘方部・柱根部が明瞭）
86	DⅤ－001	37	36	21－90	ゴロタガメ（肥溜）	/	125 125	/ /	92 90	74＋α	※アワビ・イガイ・他出土。

B Ⅶ - 002



B Ⅶ - 002 註記

1層　暗褐色土(7.5YR3/4)　ににぶい褐色土(7.5YR5/4)　ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

2層　暗褐色土(7.5YR3/4)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が混入。

3層　褐色土(7.5YR5/4)。粘性があり締まっている。大粒の南部浮石偏在。

4層　褐色土(7.5YR5/4)。粘性があり締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

5層　黄橙色土〔10YR7/6〕。硬く締まっている。

6層　明褐色土(7.5YR5/6)。硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。

7層　明褐色土(7.5YR5/6)　に褐色土(7.5YR5/4)　ブロックが少量混入し、硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

8層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)。やや硬い。南部浮石点在。

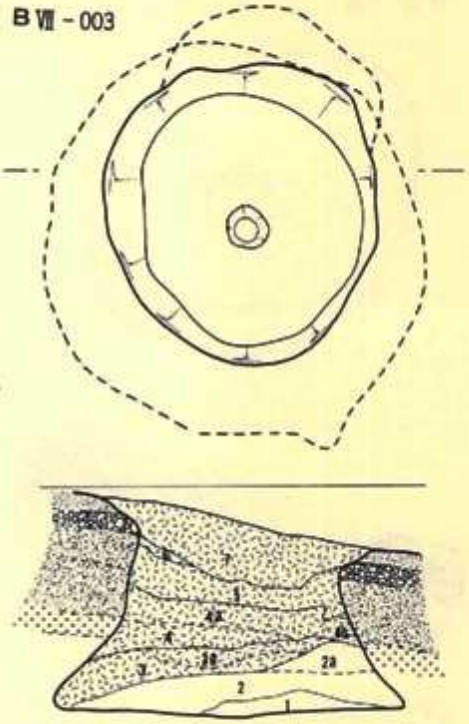
8a層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)。やや硬い。小粒の南部浮石が混入。

8b層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)。やや硬い。小粒の南部浮石が混入。

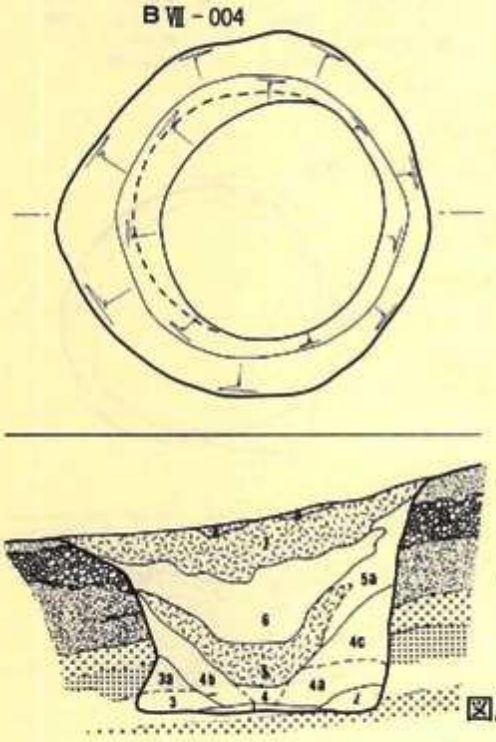
9層　橙色土(7.5YR6/6)。硬く締まっている。南部浮石が混入。

10層　淡黄橙色土(7.5YR8/6)。粘性があり軟らかい。

B Ⅶ - 003



B Ⅶ - 004



B Ⅶ - 005 註記

1層　褐色土（10YR4/4）で若干の粘性がある。

2層　明黄褐色土（10YR6/6）ににぶい黄橙色土（10YR6/4）ブロックが混入し、粘性があり軟らかいが締まっている。

3層　黄褐色土（10YR5/6）に暗褐色土（10YR3/4）ブロックが混入し、南部浮石が小量混入。

4層　黄褐色土（10YR5/6）ににぶい黄橙色土（10YR6/4）ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

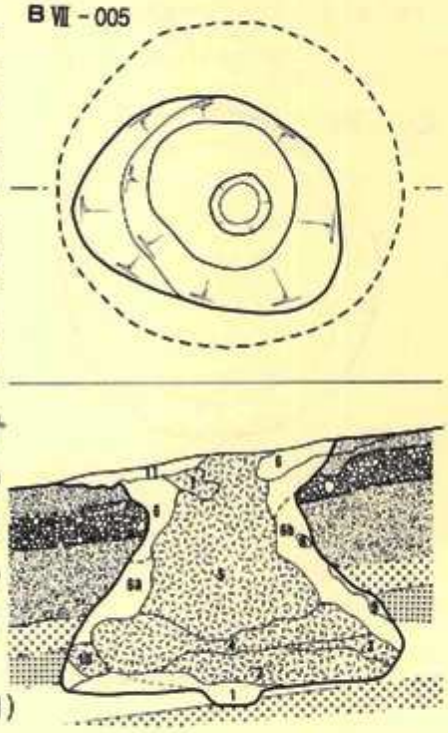
5層　黄褐色土（10YR5/6）ににぶい黄橙色土（10YR6/4）ブロックが混入し、粘性があり硬くしまっている。南部浮石点在。

6層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

6a層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）に黄褐色土（10YR5/6）小ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。

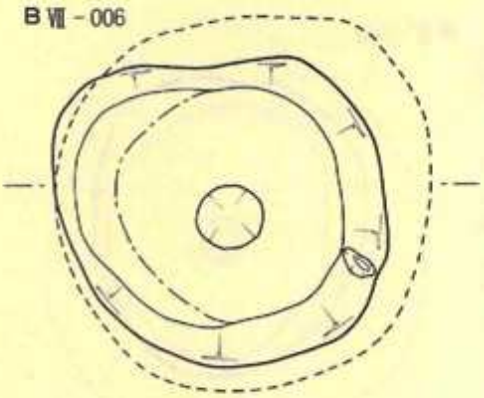
6b層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）に黄褐色土（10YR5/6）小ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

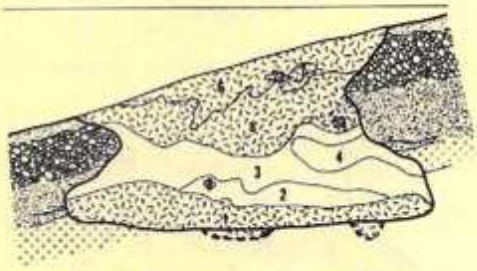
B Ⅶ - 005



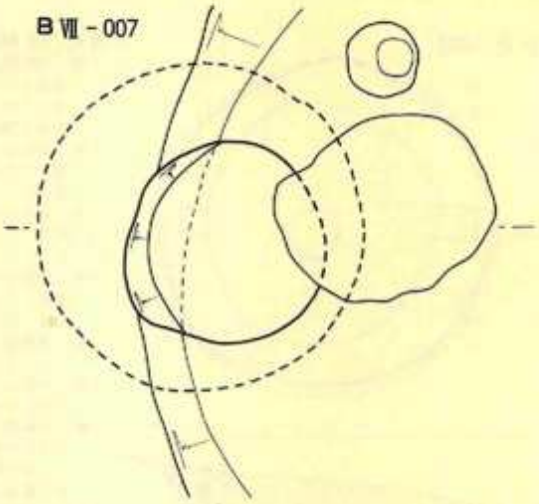
図版19：土坑実測図—(1)

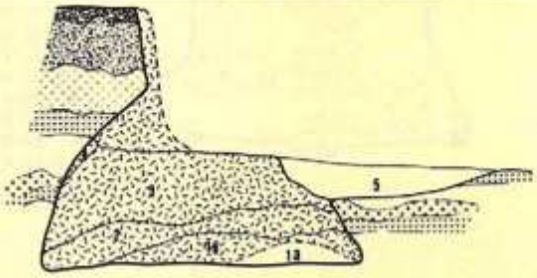
B Ⅶ－006





B Ⅶ－007





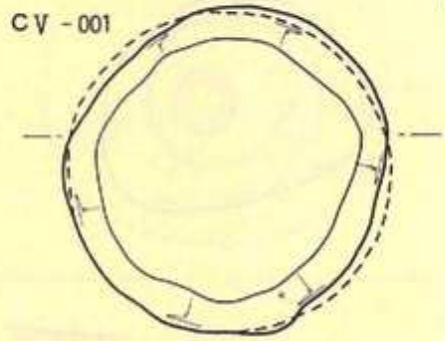
C Ⅴ－001 註記

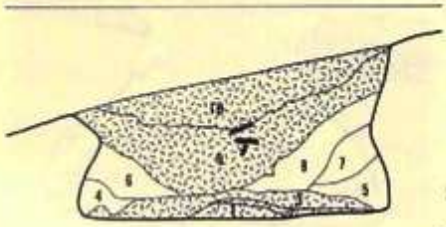
1層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。
2層　暗褐色土(7.5YR⅜)。中礫浮石が少量混入。
3層　明褐色土(7.5YR⅝)。きわめて硬く締まっている大粒の南部浮石点在。
4層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石点在。
5層　褐色土(7.5YR⅝)。締まりがない。小粒の南部浮石が混入。
6層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。
7層　明褐色土(7.5YR⅝)。締まりがない。大粒の南部浮石層。
8層　暗褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石点在。
9層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかい。南部浮石が多量に混入。
10層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。

B Ⅶ－007 註記

1a層　黒褐色土(10YR⅜)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が多量に混入。
1b層　黒褐色土(10YR⅜)。硬く締まっている。南部浮石が混入。
2層　明黄褐色土(10YR⅝)。若干の粘性あり硬く締まっている。
3層　灰黄褐色土(10YR⅝)の砂質土。きわめて硬い。
4層　暗褐色土(10YR⅜)。軟らかい。
5層　黒褐色土(10YR⅜)に多量の炭化物・焼土粒を含む。南部浮石が混入。

C Ⅴ－001

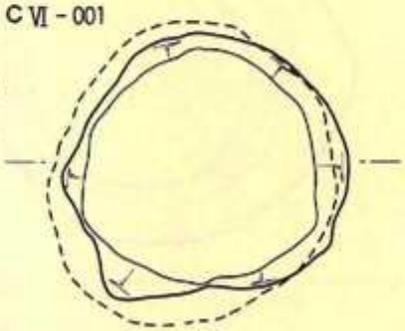


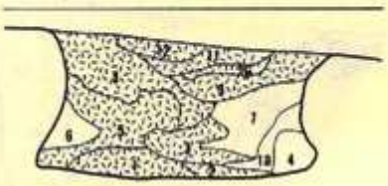


C Ⅵ－001 註記

1層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)小ブロックが混入し、軟らかい。南部浮石点在、1a層は南部浮石をほとんど含まない。
2層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、やや軟らかい。南部浮石点在。
3層　橙色土(7.5YR⅝)。きわめて軟らかい。南部浮石点在。
4層　褐色土(7.5YR⅝)。硬いが締まりがない。南部浮石が多量に混入。
5層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が混入。
6層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。
7層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、やや硬い。大粒の南部浮石が多量に混入。
8層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、緻密で軟らかい。南部浮石が混入。
9層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、きわめて軟らかい。南部浮石が少量混入。
10層　橙色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石点在。
11層　橙色土(7.5YR⅞)。やや硬い。南部浮石が少量混入。
12層　橙色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が少量混入。

C Ⅵ－001

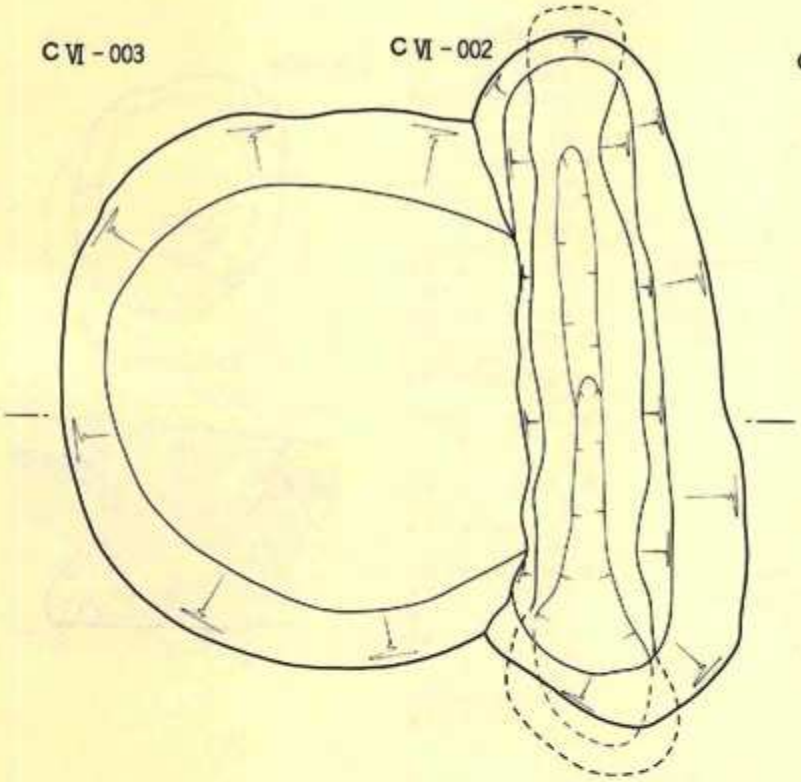




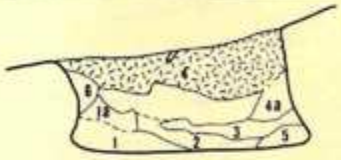
図版20：土坑実測図―(2)

CⅥ－003

CⅥ－002



CⅥ－004



CⅥ－004 註記

1層　暗褐色土(7.5YR⅗)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

1a層　暗褐色土(7.5YR⅗)。硬いが締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

2層　褐色土(7.5YR⅘)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。

3層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

4層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

4a層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混入し、硬いが締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

5層　黄橙色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。

6層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)小ブロックが混入し、硬いがいが締まりがない。

CⅥ－002(掘り穴状遺構)

CⅥ－003 註記

1層　橙色土(7.5YR⅝)。粘性があり硬い。

2層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。

3層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。

4層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が混入。

5層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

6層　褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。大粒の南部浮石点在。

7層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が多量に混入。

8層　暗褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石点在。

9層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

9a層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が少量混入。

10層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬い。南部浮石が多量に混入。

10a層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

10b層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。小粒の南部浮石が少量混入。

10c層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

11層　橙色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

11a層　橙色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬いが締まりがない。南部浮石が混入。

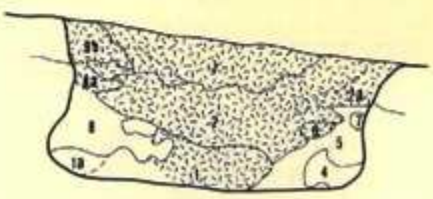
12層　明褐色土(7.5YR⅝)。きわめて硬い。南部浮石が少量混入。

13層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、やや硬い。南部浮石が少量混入。

14層　褐色土(7.5YR⅝)。硬いが締まりがない。

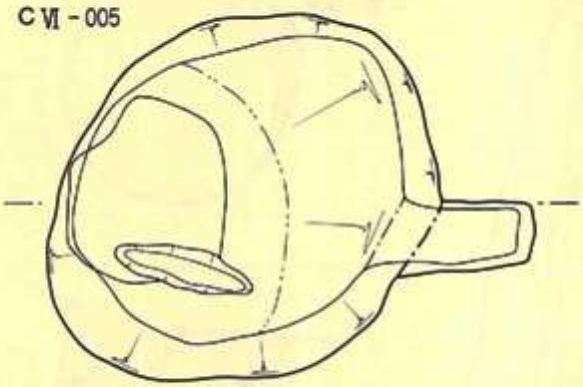
15層　褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

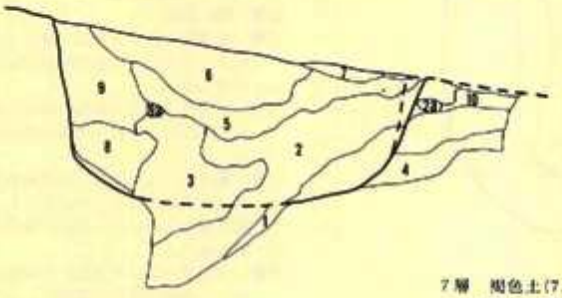
CⅥ－007



図版21：土坑実測図―(3)

CⅥ－005





CⅥ－005 註記

1層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層。下部には明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、きわめて締まりがない。

2層　砂質の明褐色土(7.5YR⅝)。やや硬いが粒状にくずれる。大粒の南部浮石偏在。

2a層　砂質の明褐色土(7.5YR⅝)。やや硬いが粒状にくずれる。大粒の南部浮石が多量に混入。

3層　暗褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

4層　黄褐色土（10YR⅝）の八戸火山灰層。硬く締まっている。

5層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が多量に混入。

6層　橙色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

7層　褐色土(7.5YR⅝)。きわめて硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

7層　褐色土(7.5YR⅝)。きわめて硬く締まっている。南部浮石点在。

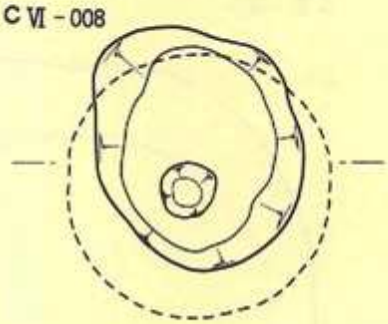
8層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

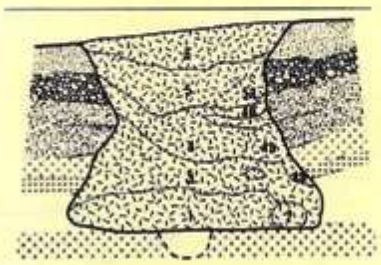
9層　橙色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

9a層　橙色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が混入。

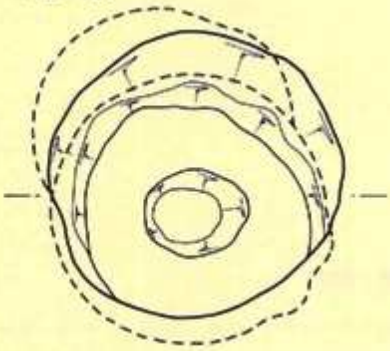
10層　橙色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石点在。

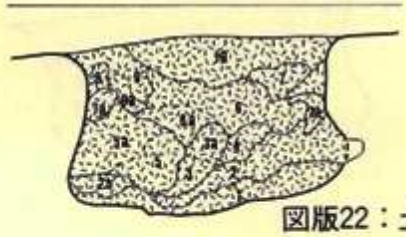
CⅥ－008

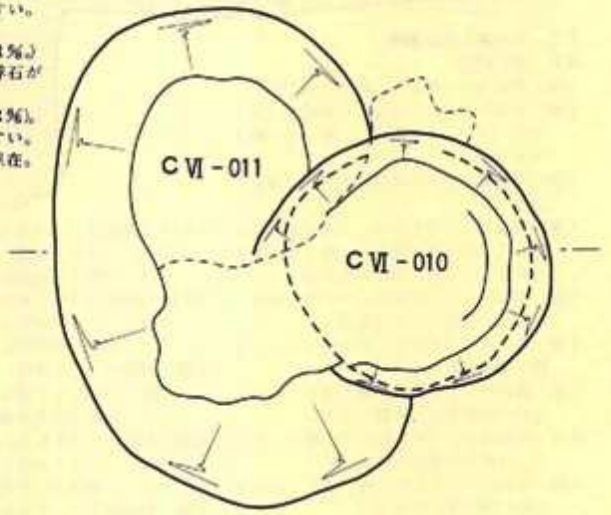


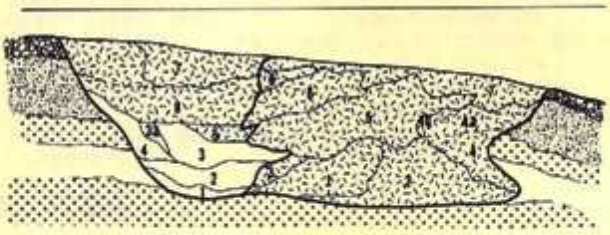


CⅥ－009



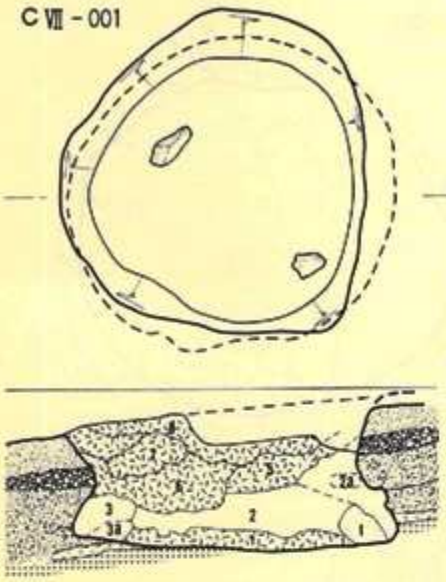






図版22：土坑実測図―(4)

C Ⅶ－001



C Ⅶ－001 註記

1層　褐色土（10Y R 5/6）に暗褐色土（10Y R 3/3）ブロックが混入し、硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が多量に混入。

2層　褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/3）が混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が多量に混入。

2a層　褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/3）が混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。

3層　暗褐色土（10Y R 3/3）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/4）ブロックが混入し、硬く締まっている。南部浮石が混入。

3a層　暗褐色土（10Y R 3/3）に3層より黄褐色土が多く混じり、硬く締まっている南部浮石が混入。

4層　黄褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/4）が混じり、きわめて硬く締まっている。南部浮石点在。

5層　黄褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/4）が混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。

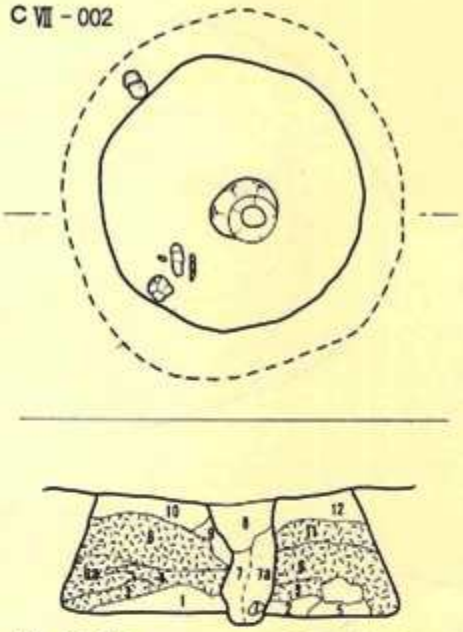
6層　にぶい黄褐色土（10Y R 5/4）に黄褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

7層　黄褐色土（10Y R 5/6）、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

7層　黄褐色土（10Y R 5/6）、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

8層　黄褐色土（10Y R 5/6）、やや軟らかい。小粒の南部浮石が混入。

C Ⅶ－002



C Ⅶ－002 註記

1層　黒褐色土（10Y R 3/2）に褐色土（10Y R 5/6）が少量混じり、硬く締まっている。南部浮石点在。

2層　褐色土（10Y R 5/6）に黒褐色土（10Y R 3/2）が少量混じり、硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

3層　褐色土（10Y R 5/6）に濃い褐色土（10Y R 3/3）ブロックが混入し、軟らかいが締まっている。

4層　褐色土（10Y R 5/6）に黒褐色土（10Y R 3/2）が少量混じり、硬く締まっている。

6層　黄褐色土（10Y R 5/6）に黒褐色土（10Y R 3/2）ブロックが混入し、硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

7層　褐色土（10Y R 5/6）、硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

7a層　褐色土（10Y R 5/6）、硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

8層　褐色土（10Y R 5/6）、軟らかく、締まりがない。

9層　黄褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）が混じり、硬く締まっている。

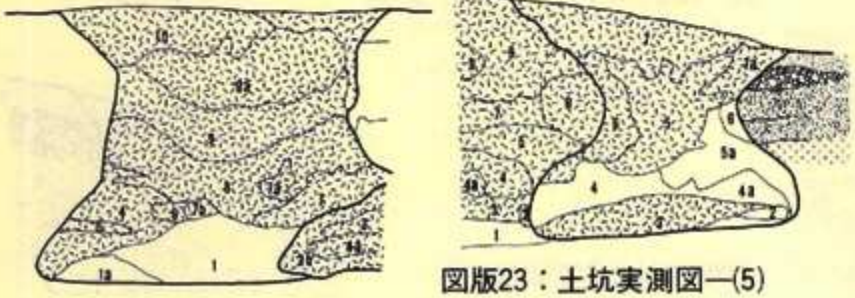
10層　黄褐色土（10Y R 5/6）、きわめて硬く締まっている。南部浮石が混入。

11層　黒褐色土（10Y R 3/2）に褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

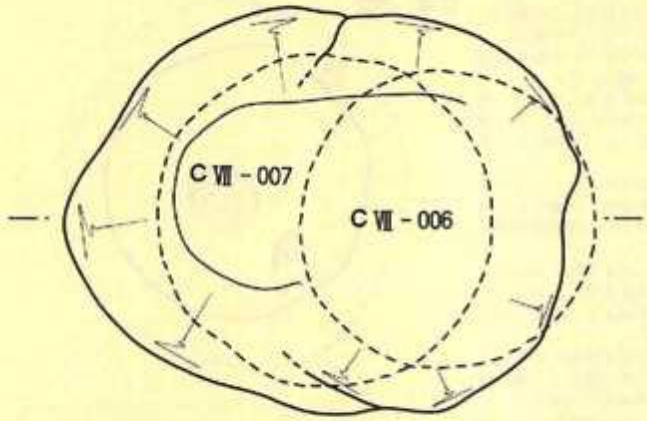
12層　明黄褐色土（10Y R 6/6）、きわめて硬く締まっている。

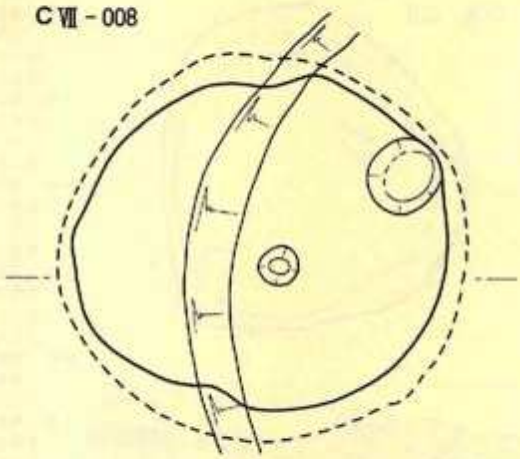
C Ⅶ－004

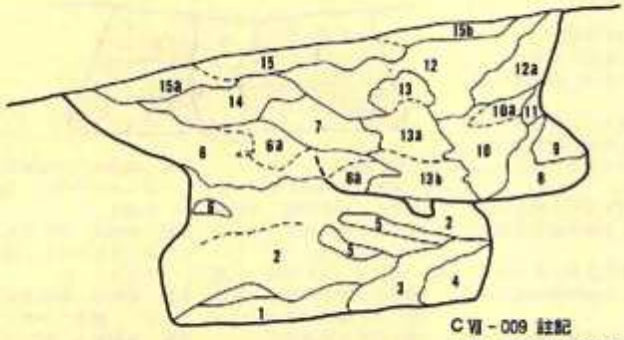
C Ⅶ－005

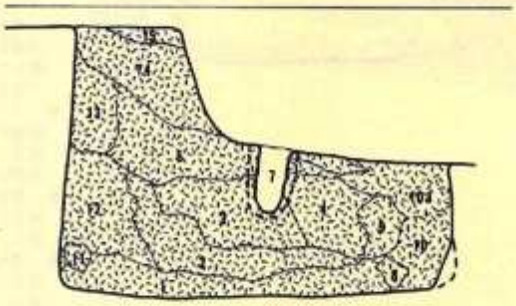


図版23：土坑実測図―(5)









C Ⅶ - 009 註記

1 層　褐色土（10Y R 5/6）。軟らかい。大粒の南部浮石が混入。

2 層　黄褐色土（10Y R 5/6）に褐色土（10Y R 5/6）が帯状に混じり、軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

3 層　黄褐色土（10Y R 5/6）。硬く締まっている。南部浮石点在。

4 層　黄褐色土（10Y R 5/6）に暗褐色土（10Y R 3/4）ブロックが少量混じり、軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

5 層　黄褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、軟らかいが締まっている。南部浮石点在。6

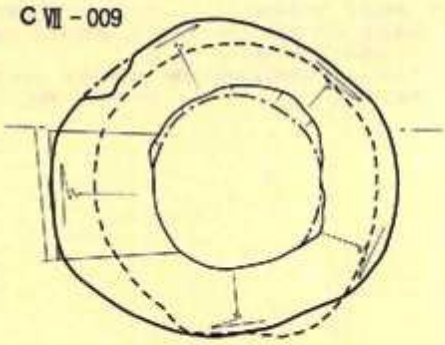
6 層　黄褐色土（10Y R 5/6）ににぶい黄褐色土（10Y R 5/6）ブロックが多量に混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が多量に混入。

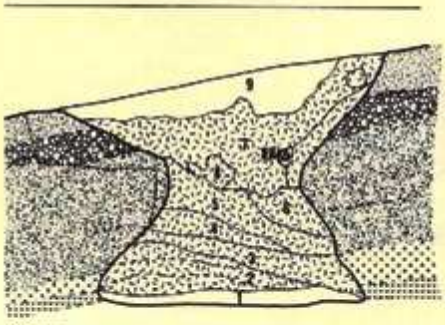
7 層　にぶい黄褐色土（10Y R 5/4）に黄褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が混入。

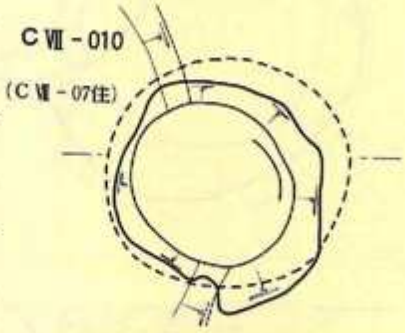
8 層　黄褐色土（10Y R 5/6）。硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。

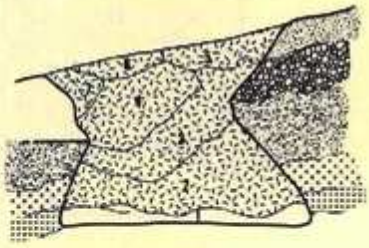
8a 層　黄褐色土（10Y R 5/6）。きわめて硬く締まっている。小粒の南部浮石が多量に混入。

9 層　褐色土（10Y R 5/6）。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

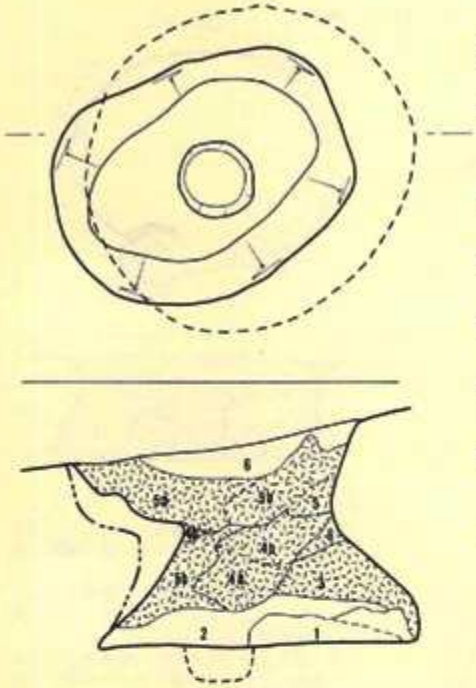








図版24：土坑実測図―(6)



C Ⅶ－011 註記

1 1層　褐色土（10YR⅝）と白色粘土の混土層。粘性あり。

2層　黒色土（7.5YR）に褐色土（10YR⅝）が混じったシルト質。締まっている。南部浮石が混入。

3層　褐色土・黒褐色土・南部浮石の各ブロックの不均質な混土層。締まっている。

4a層　黒色土（10YR⅝）に褐色土（10YR⅝）ブロックが少量混じり，南部浮石が混入。

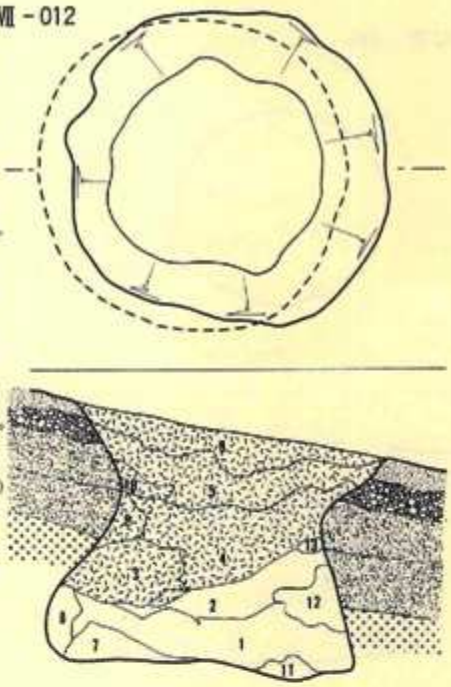
4b層　黒色土（10YR⅝），褐色土は4a層より多量に混じり，南部浮石が少量混入。

5層　褐色土（10YR⅝）に黒褐色土（10YR⅝）が混じっている。南部浮石が混入。

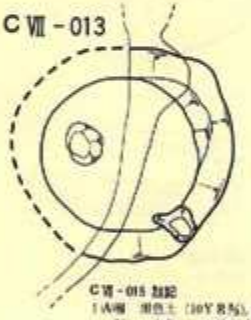
5a層　褐色土（10YR⅝）ブロックに5層より黒褐色土（10YR⅝）が多量に混じっている，南部浮石が混入。

6層　黒褐色土（10YR⅝）に炭化物が少量混じり，不均質に南部浮石混入。

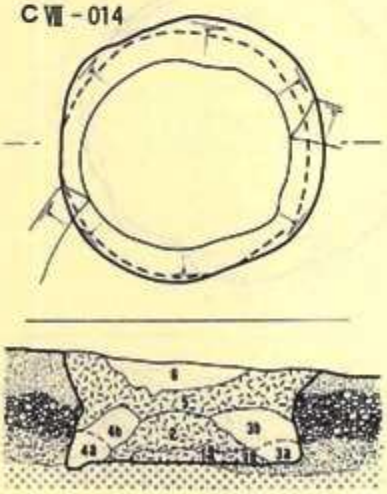
C Ⅶ－012



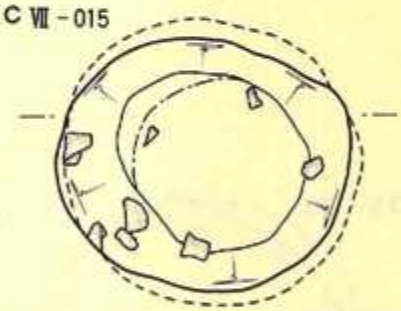
C Ⅶ－013



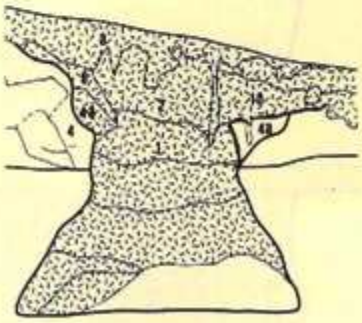
C Ⅶ－014



C Ⅶ－015



斜線は杭底に分布



C Ⅶ－015 註記

1(A)層　黒色土（10YR⅝），褐色土（10YR⅝）・白色シルト質土（X層相当？）の不規則な混合土層。軟らかく締まりがない。

2(B)層　明黄褐色土（10YR⅝）に白色粘土（10YR⅝）ブロックが多量に混じり，硬く締まっている。

3(C)層　明黄褐色土（10YR⅝）に白色土（10YR⅝）とにぶい黄橙色土（10YR⅝）ブロックが混じり，きわめて硬く締まっている。

4(D)層　明黄褐色土（10YR⅝）ににぶい黄橙色土（10YR⅝）ブロックが混じり，きわめて硬く締まっている。

5(4a)層　暗褐色土（10YR⅝）に黄褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり，硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が混入。

6(5)層　黄褐色土（10YR⅝）に黄橙色土（10YR⅝）ブロックが混じり，硬く締まっている。南部浮石点在。

7(6)　明黄褐色土（10YR⅝）ににぶい黄褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり，硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が少量混入。

8(5a)層　明黄褐色土（10YR⅝）に黄褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり，軟らかい。南部浮石点在。

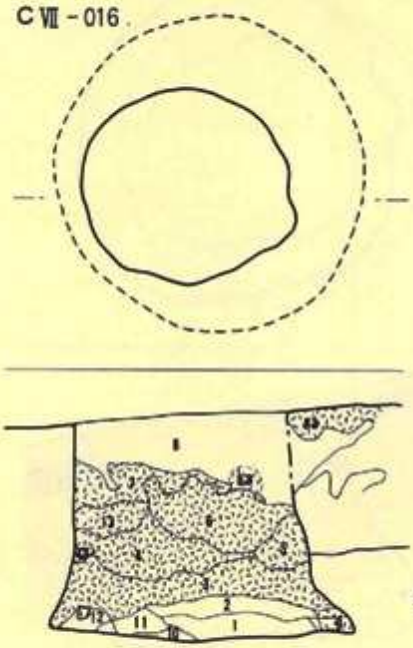
9(5)層　黄褐色土（10YR⅝）に褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり，硬く締まっている。南部浮石が混入。

10(5)層　黄褐色土（10YR⅝）ににぶい黄褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり，硬く締まっている。南部浮石点在。

※）内は第Ⅵ層の層序記号及び番号

図版25：土坑実測図－(7)

CⅦ－016



C区－016 註記

1層　黒褐色土（10YR⅓）。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が多量に混入。

2層　明黄褐色土（10YR⅝）の南部浮石層に黒褐色土（10YR⅓）ブロックが混じり、きわめてしまりがない。

3層　黄褐色（10YR⅝）。硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。

4層　明黄褐色土（10YR⅝）に黒褐色土（10YR⅓）ブロックが少量混じり、硬く締まっている。

5層　明黄褐色土（10YR⅝）に黒褐色土（10YR⅓）ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

6層　明黄褐色土（10YR⅝）に褐色土（10YR⅝）と黄橙色土（10YR⅝）の混合土層。やや硬い。南部浮石が少量混入。

7層　黄褐色土（7.5YR⅝）。硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

8層　オリーブ褐色土（2.5YR⅝）に褐色土（10YR⅝）ブロックが少量混じり、きわめて硬く締まっている。小粒の南部浮石が多量に混入。

8a層　オリーブ褐色土（2.5YR⅝）に褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

8b層　オリーブ褐色土（2.5YR⅝）に褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

9層　褐色土（10YR⅝）。軟らかいが締まっている。南部浮石点在。

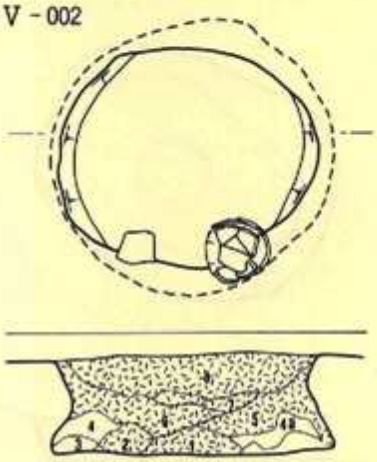
10層　褐色土（10YR⅝）。やや硬いがくずれやすい。南部浮石点在。

11層　明黄褐色土（10YR⅝）。きわめて硬く締まっている。

12層　明黄褐色土（10YR⅝）に褐色土（10YR⅝）ブロックが混じり、きわめて硬く締まっている。

13層　明黄褐色土（10YR⅝）。きわめて硬く締まっている。南部浮石が混入。

DⅤ－002



DⅤ－002 註記

1層　明褐色土（7.5YR⅝）に褐色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、硬く締まっている。

2層　明褐色土（7.5YR⅝）に褐色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、軟らかい。南部浮石混入。

3層　褐色土（7.5YR⅝）に明褐色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が少量混入。

4層　褐色土（7.5YR⅝）に橙色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、やや硬い。大粒の南部浮石が少量混入。

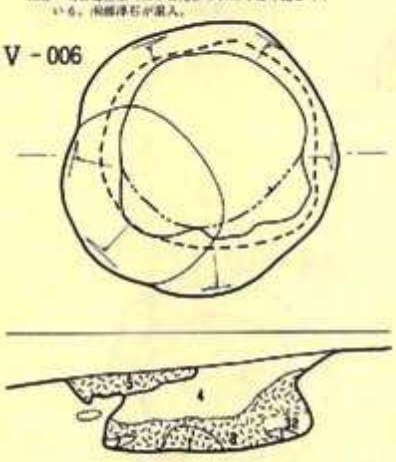
5層　明褐色土（7.5YR⅝）と褐色土（7.5YR⅝）の混混合土層。やや軟らかい。大粒の南部浮石が多量に混入。

6層　明褐色土（7.5YR⅝）と褐色土（7.5YR⅝）の混合土層で硬く締まっている。大粒の南部浮石が入量混入。

7層　褐色土（7.5YR⅝）に明褐色土（7.5YR⅝）小ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

8層　橙色土（7.5YR⅝）。やや硬い。小粒の南部浮石が多量に混入。

DⅤ－006



DⅤ－004 註記

1層　黄橙色土（7.5YR⅞）。硬く締まっている。南部浮石が少量点在。

2層　褐色土（7.5YR⅝）に橙色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

2a層　褐色土（7.5YR⅝）に橙色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

3層　褐色土（7.5YR⅝）に橙色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

4層　黄橙色土（7.5YR⅞）。硬く締まっている。

5層　黄橙色土（7.5YR⅞）に褐色土（7.5YR⅝）ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。

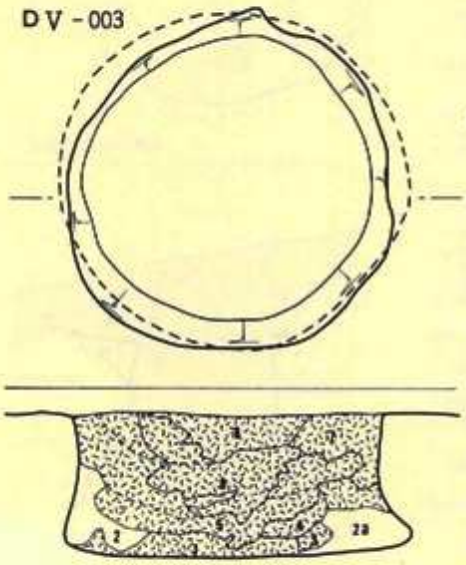
6層　黄橙色土（7.5YR⅞）。やや硬い。南部浮石が混入。

7層　褐色土（7.5YR⅝）。硬く締まっている。南部浮石が混入。

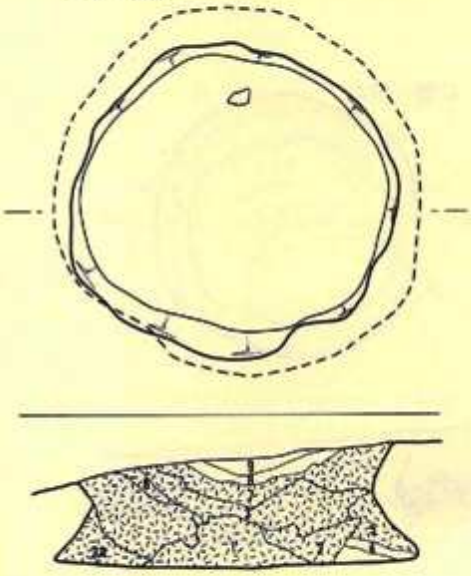
8層　明褐色土（7.5YR⅝）。やや硬い。南部浮石が混入。

9層　褐色土（7.5YR⅝）。きわめて硬く締まっている。

DⅤ－003

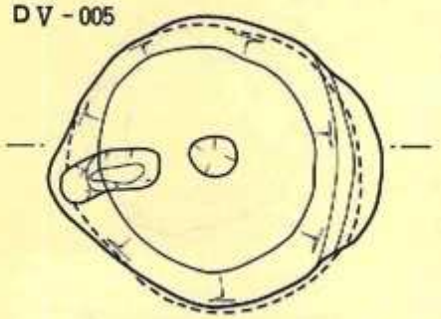


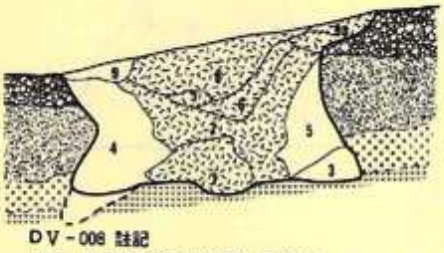
DⅤ－004



図版26：土坑実測図―(8)

DV-005





DV-005 註記

1層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかい。南部浮石が少量混入。

2層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかい。大粒の南部浮石が混入。

3層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。

4層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかい。南部浮石が多量に混入。

5層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが少量混じり、きわめてくずれやすい。

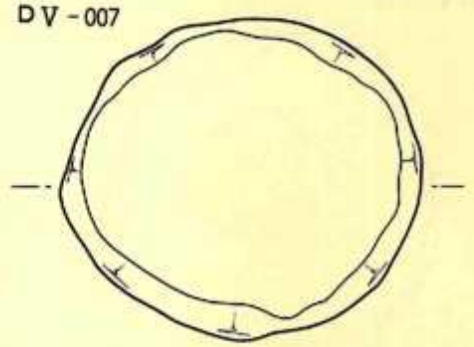
6層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

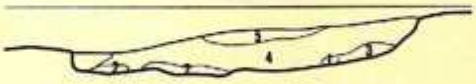
7層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

8層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。南部浮石が混入。

9層　褐色土(7.5YR⅝)。硬い。南部浮石が少量混入。

DV-007





DV-007 註記

1層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。

2層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

3層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかい。

4層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬い。南部浮石が多量に混入。

5層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

DV-008 註記

1層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石点在。

2層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石が混入。

3層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。

3a層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

4層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。大粒の南部浮石が多量に混入。

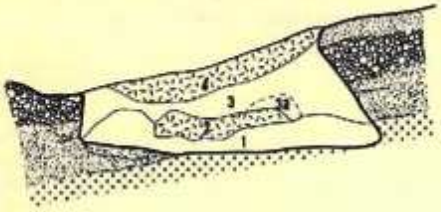
5層　明褐色土(7.5YR⅝)。きわめて硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

6層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、きわめて硬い。南部浮石が多量に混入。

7層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

8層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

DV-009



DV-009 註記

1層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が少量混入。

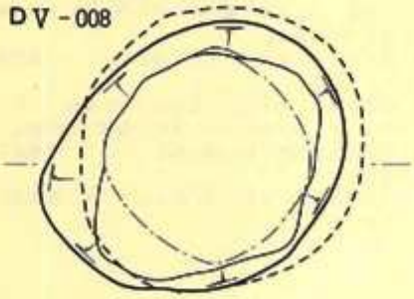
2層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかい。南部浮石点在。

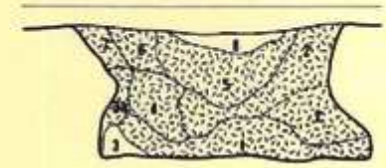
3層　褐色土(7.5YR⅝)に中粗浮石が混じっている。南部浮石が混入。

3a層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかい。南部浮石が少量混入。

4層　褐色土(7.5YR⅝)に中粗浮石が混じっている。南部浮石が混入。

DV-008





DV-012 註記

1層　にぶい橙色土(7.5YR⅝)。軟らかい。

2層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている南部浮石が多量に混入。

3層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。

4層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が混入。

5層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかいが締まりが良い。南部浮石が少量混入。

6層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)軟らかく締まりがない。

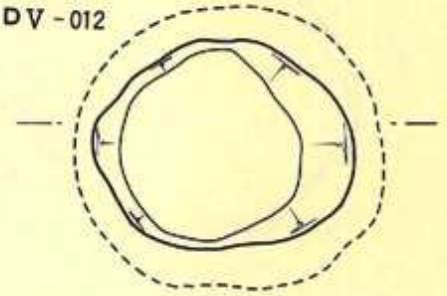
7層　橙色土(7.5YR⅝)ににぶい褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬い。南部浮石が少量混入。

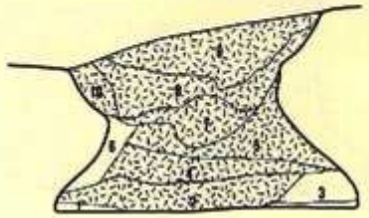
8層　橙色土(7.5YR⅝)ににぶい褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬い。南部浮石が多量に混入。

9層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が混入。

10層　橙色土(7.5YR⅝)の南部浮石層。くずれやすい。

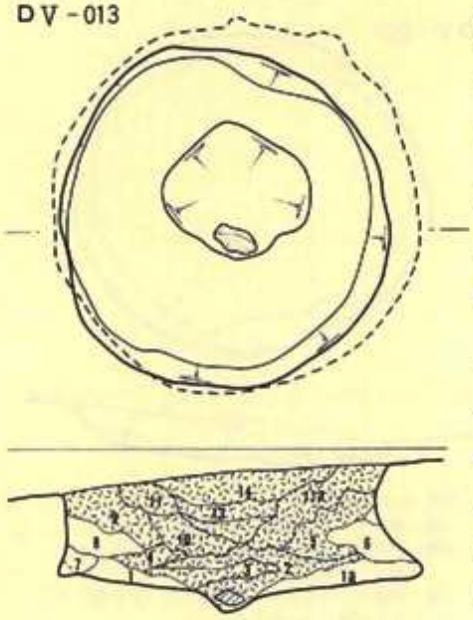
DV-012





図版27：土坑実測図—(9)

DV-013



DV-013 註記

1層　褐色土(7.5YR4/4)。硬いがくずれやすい。南部浮石が多量に混入。

2層　明褐色土(7.5YR5/6)。硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。

3層　明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、きわめて硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

4層　褐色土(7.5YR5/6)。やや硬い。大粒の南部浮石が点在。

5層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。南部浮石点在。

6層　明褐色土(7.5YR5/6)に暗褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、きわめて軟らかく締まりがない。南部浮石点在。

7層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

8層　褐色土(7.5YR5/6)。きわめて軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

9層　明褐色土(7.5YR5/6)。硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が混入。

10層　橙色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

11層　明褐色土(7.5YR5/6)。きわめて軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。

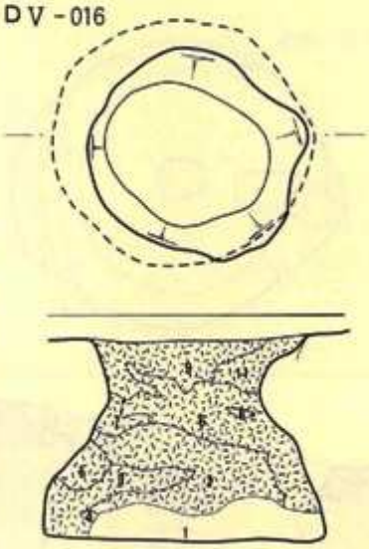
11a層　明褐色土(7.5YR5/6)。やや軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。

12層　明褐色土(7.5YR5/6)。軟らかい。南部浮石が少量混入。

13層　明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

14層　明褐色土(7.5YR5/6)。きわめて軟らかい大粒の南部浮石が概入。

DV-016



DV-016 註記

1層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

2層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石点在。

3層　明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

4層　橙色土(7.5YR5/6)のブロック。硬く締まっている。南部浮石点在。

5層　橙色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石点在。

6層　明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が混入。

7層　橙色土(7.5YR5/6)。硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が少量混入。

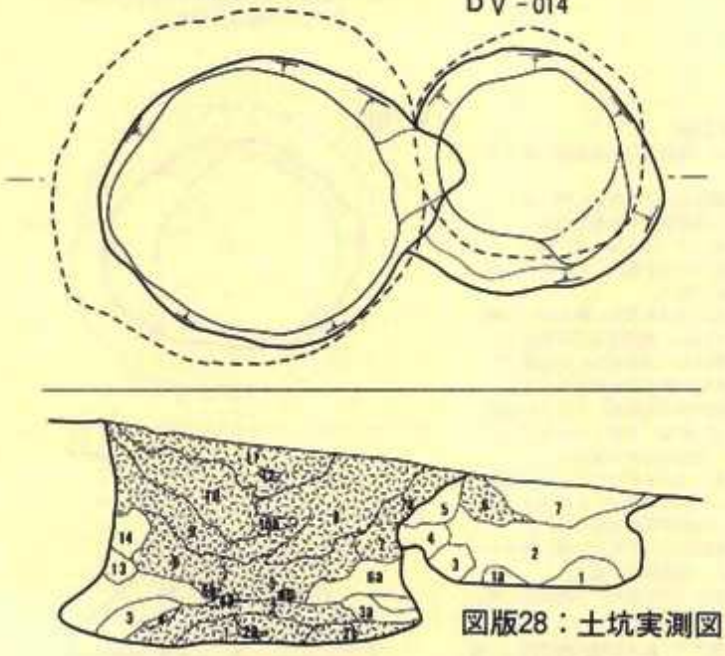
8層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

9層　明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、やや軟らかい。大粒の南部浮石が混入。

10層　明褐色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

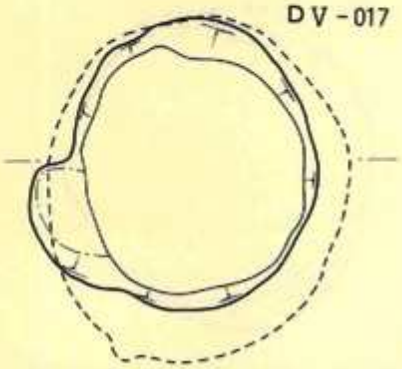
11層　明褐色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

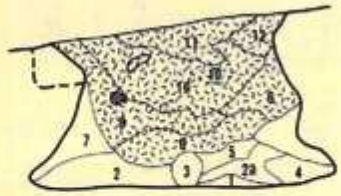
DV-015　DV-014



図版28：土坑実測図－(10)

DⅤ-017





DⅥ-001 註記

1層　明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、軟らかい。

2層　褐色土(7.5YR5/6)に明褐色土(7.5YR5/6)ブロックが少量混じり、軟らかい。南部浮石が混入。

3層　褐色土(7.5YR5/6)、軟らかい。

4層　橙色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

5層　褐色土(7.5YR5/6)に明褐色土(7.5YR5/6)ブロックが少量混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

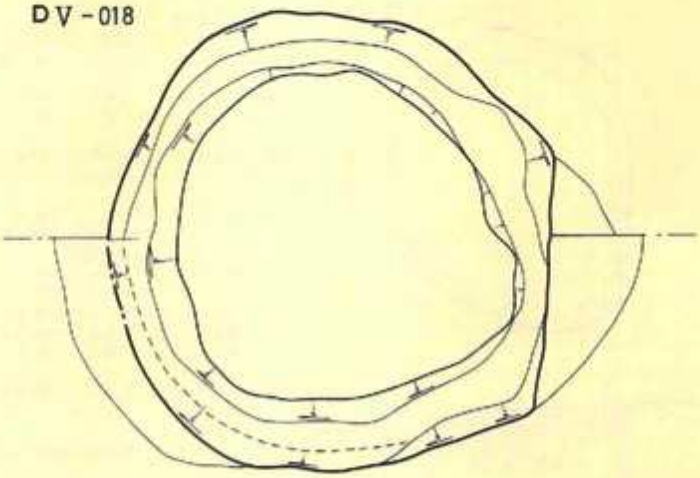
6層　褐色土(7.5YR5/6)に明褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石が多量に混入。

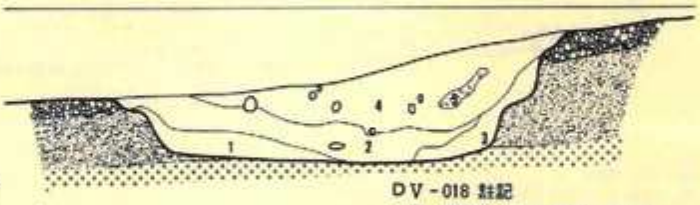
7層　褐色土(7.5YR5/6)と橙色土(7.5YR5/6)の混合土層。軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

8層　褐色土(7.5YR5/6)と橙色土(7.5YR5/6)の混合土層。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

9層　褐色土(7.5YR5/6)に明褐色土(7.5YR5/6)ブロックが少量混じり、硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

DⅤ-018





10層　明褐色土(7.5YR5/6)と褐色土(7.5YR5/6)の混合土層、硬く締まっている。南部浮石点在。

11層　黄橙色土(7.5YR7/6)、硬く締まっている。

DⅤ-018 註記

1層　褐色土 7.5YR5/6、軟らかく　く締まりがない。

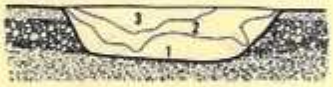
2層　褐色土(7.5YR5/6)、やや硬い。南部浮石が多量に混入。

3層　褐色土(7.5YR5/6)、硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。

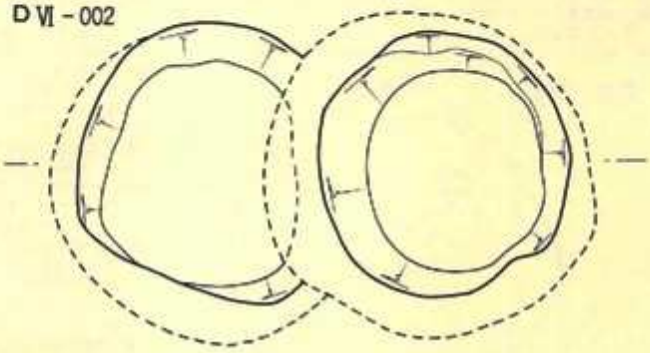
4層　褐色土(7.5YR5/6)、硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

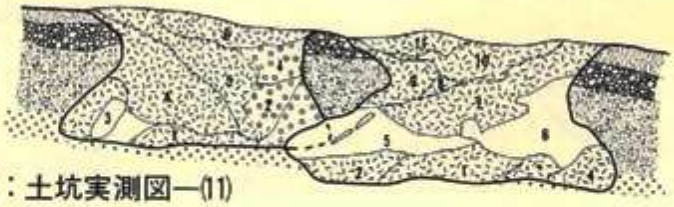
5層　橙色土(7.5YR5/6)の周囲に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、硬く締まっている。

DⅤ-019



DⅥ-002





DⅥ-002 註記

1層　橙色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、軟らかい。小粒の南部浮石が少量混入。

2層　明褐色土(7.5YR5/6)、やや硬い。南部浮石が少量混入。

3層　橙色土(7.5YR5/6)、やや軟らかい。

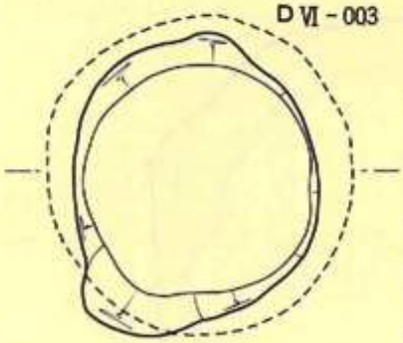
4層　橙色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、やや硬い。大粒の南部浮石が混入。

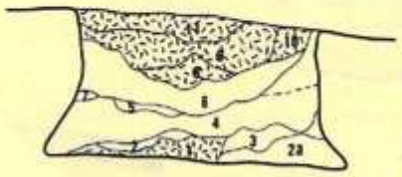
5層　橙色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

6層　橙色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混じり、南部浮石が混入。

図版29：土坑実測図―(11)

D Ⅵ－003





D Ⅵ－003 註記

1層　橙色土(7.5Y R⅝) に明褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、強く締まっている。

2層　暗褐色土(7.5Y R⅝) に橙色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。

2a層　暗褐色土(7.5Y R⅝) に橙色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、きわめて軟らかい。

3層　橙色土(7.5Y R⅝) に明褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

4層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

5層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。

6層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石混入。

7層　黄橙色土(7.5Y R⅞)。粘性があり、軟らかい。

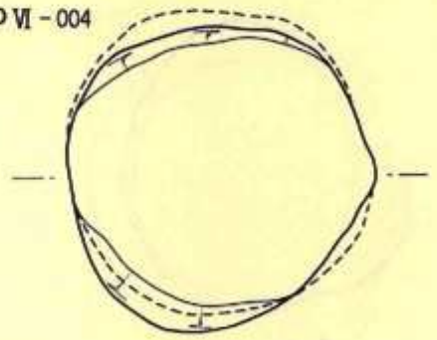
8層　明褐色土(7.5Y R⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

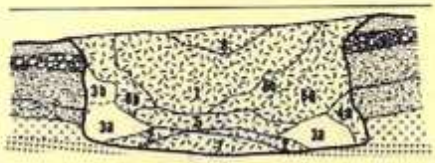
9層　橙色土(7.5Y R⅝)。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

10層　明褐色土(7.5Y R⅝)。軟弱で締まりがない。

11層　明褐色土(7.5Y R⅝)。きわめて硬く締まっている。南部浮石が混入。

D Ⅵ－004





D Ⅵ－004 註記

1層　橙色土(7.5Y R⅝)。やや硬い。小粒の南部浮石が混入。

2層　褐色土(7.5Y R⅝) に橙色土(7.5Y R⅝) ブロックが少量混じり、軟らかい。南部浮石が小量混入。

3a層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、きわめて軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

3b層　橙色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが少量混じり、やや硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

4a層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

5層　橙色土(7.5Y R⅝) に褐色土が混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

6a層　橙色土(7.5Y R⅝) と褐色土(7.5Y R⅝) の混合土層。きわめて軟らかい。南部浮石が多量に混入。

6b層　橙色土(7.5Y R⅝) と褐色土の混合土層。やや軟らかい。南部浮石が混入。

7層　明褐色土(7.5Y R⅝) に橙色土(7.5Y R⅝) が混じり、やや硬い。大粒の南部浮石点在。

8層　明褐色土(7.5Y R⅝)。硬い。南部浮石が少量混入。

D Ⅵ－005 註記

1層　褐色土(7.5Y R⅝) に明褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや硬い。大粒の南部浮石が混入。

2層　褐色土(7.5Y R⅝)。やや軟らかい。南部浮石が混入。

3層　褐色土(7.5Y R⅝) に明褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが少量混じり、軟らかい。

4層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

5層　褐色土(7.5Y R⅝)。きわめて軟らかい。南部浮石が少量混入。

6層　暗褐色土(7.5Y R⅝)。やや硬い。大粒の南部浮石点在。

7層　明褐色土(7.5Y R⅝)。硬いがくずれやすい。

8層　橙色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が少量混入。9

9層　橙色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや硬い。大粒の南部浮石が少量混入。

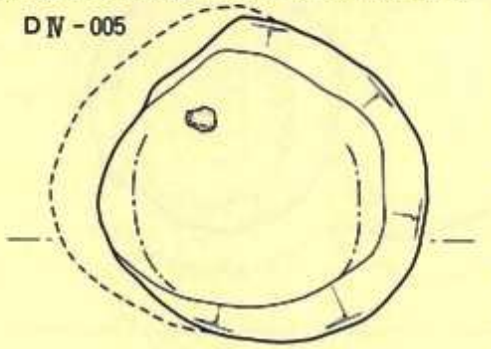
10層　明褐色土(7.5Y R⅝) に褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石偏在。

11層　橙色土(7.5Y R⅝)。やや硬い。南部浮石が多量に混入。

12層　明褐色土(7.5Y R⅝)。やや硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。

13層　褐色土(7.5Y R⅝)。やや硬い。小粒の南部浮石が混入。

D Ⅳ－005



D Ⅵ－006 註記

1層　褐色土(7.5Y R⅝) に濃い褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

1a層　褐色土(7.5Y R⅝) に濃い褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、やや軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が混入。

1b層　褐色土(7.5Y R⅝) に濃い褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石が混入。

2層　褐色土(7.5Y R⅝)。やや軟らかい。小粒の南部浮石が混入。

3層　明褐色土(7.5Y R⅝) に中礫浮石が混じり、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。

4層　褐色土(7.5Y R⅝) に暗褐色土(7.5Y R⅝) ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。

5層　褐色土(7.5Y R⅝)。やや軟らかい。

6層　褐色土(7.5Y R⅝)。硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が混入。

7層　褐色土(7.5Y R⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。

8層　褐色土(7.5Y R⅝)。硬く締まっている。南部浮石が混入。

9層　褐色土(7.5Y R⅝)。やや硬く締まっている。

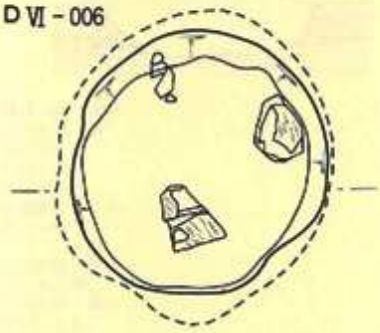
10層　明褐色土(7.5Y R⅝)。きわめて硬く締まっている。

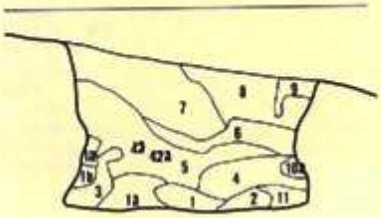
11層　明褐色土(7.5Y R⅝) の南部浮石層。やや硬いがくずれやすい。

12層　明褐色土(7.5Y R⅝)。硬い。

12a層　明褐色土(7.5Y R⅝)。やや軟らかい。

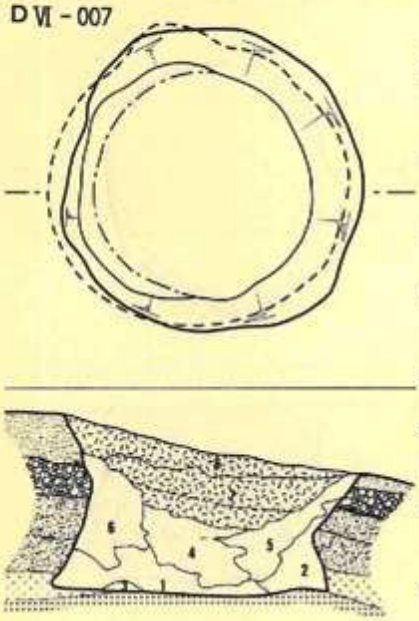
D Ⅵ－006



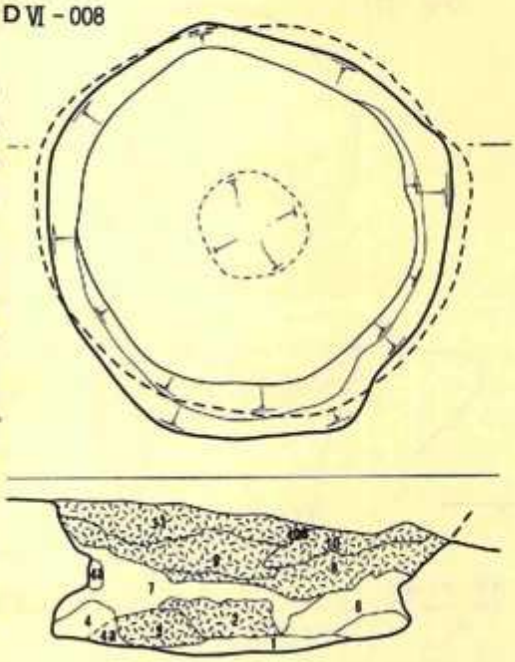


図版30：土坑実測図―(12)

DⅥ－007



DⅥ－008



DⅥ－007 註記

1層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

2層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。大粒の南部浮石が多量に混入。

3層　褐色土(7.5YR⅝)。硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。

4層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが少量混じり、やや硬い。南部浮石が多量に混入。

5層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が混入。

6層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が多量に混入。

7層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)が少量混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

8層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

DⅥ－008 註記

1層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が混入。

2層　黄橙色土(7.5YR⅞)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。大粒の南部浮石が混入。

3層　明褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかい。南部浮石が少量混入。

4層　橙色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

4a層　橙色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。

5層　橙色土(7.5YR⅝)の南部浮石層。締まりがない。

6層　褐色土(7.5YR⅝)に暗褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

7層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が多量に混入。

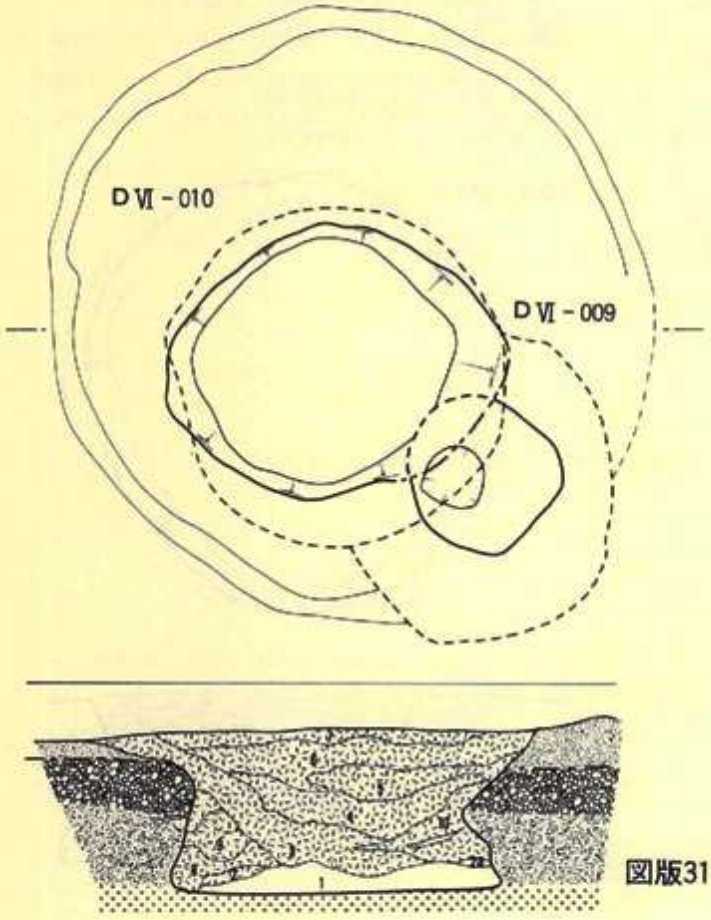
8層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が混入。

9層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかい。南部浮石が混入。

10層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが少量混じり、やや硬い。南部浮石が混入。

10a層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが少量混じり、やや硬い。

11層　褐色土(7.5YR⅝)。きわめて軟らかい。南部浮石が混入。



DⅥ－010 註記

1層　褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。小粒の南部浮石が混入。

2層　橙色土(7.5YR⅝)のブロック。

3層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかい。大粒の南部浮石が多量に混入。

4層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石が少量混入。

5層　褐色土(7.5YR⅝)。硬い。南部浮石が少量混入。

6層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石が混入。

7層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

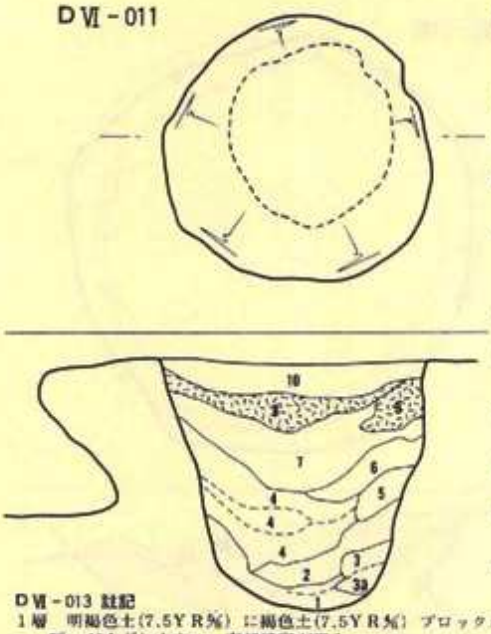
8層　褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、きわめて軟らかい。小粒の南部浮石が少量混入。

9層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

10層　橙色土(7.5YR⅝)。大粒の南部浮石層。褐色土(7.5YR⅝)がうすく混じっている。締まりがない。

図版31：土坑実測図―(13)

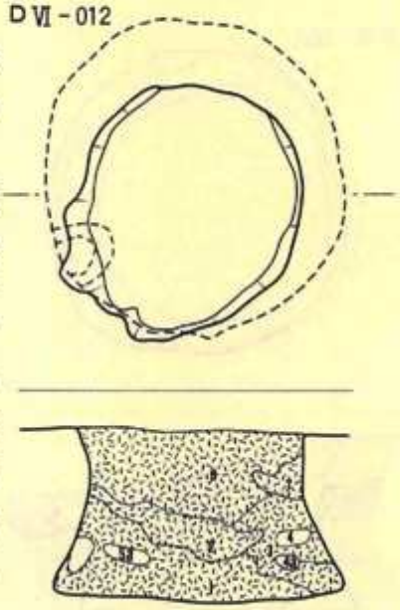
DⅥ-011



DⅥ-011 註記

1層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかい。
2層　橙色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が少量混入。
3層　橙色土(7.5YR⅝)。湿気を含み、軟弱である。
3a層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが少量混じり、軟らかい。南部浮石が少量混入。
4層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。大粒の南部浮石が多量に混入。
5層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。
6層　橙色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が多量に混入。
7層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。
8層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が混入。
9層　明褐色土(7.5YR⅝)に橙色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。南部浮石が多量に混入。
10層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

DⅥ-012



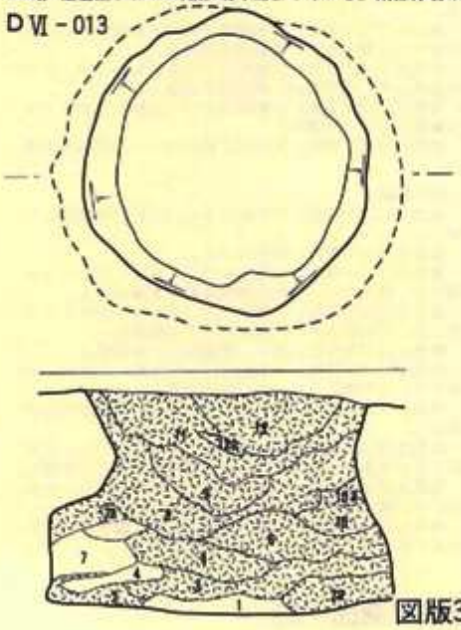
DⅥ-012 註記

1層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや硬いが粘性あり、南部浮石が少量混入。
2層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石点在。
3層　褐色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。
4層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石点在。
4a層　明褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。
5a層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。
6層　橙色土(7.5YR⅝)に明褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。
7層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

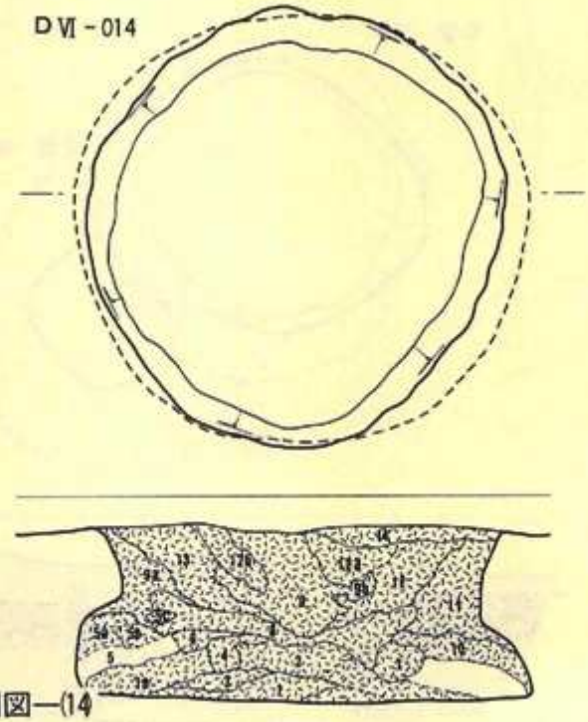
DⅥ-013 註記

1層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。
2層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。
3層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、軟らかく締まりがない。
4層　橙色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入し、粘性があり軟らかい。
5層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。
6層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。
7層　明褐色土(7.5YR⅝)。湿気を含んでいる。やや硬い。
7a層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。
8層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。
9層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。
10層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。
10a層　明褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。
11層　明褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。
12層　橙色土(7.5YR⅝)。やや硬い。南部浮石が少量混入。
12a層　橙色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

DⅥ-013

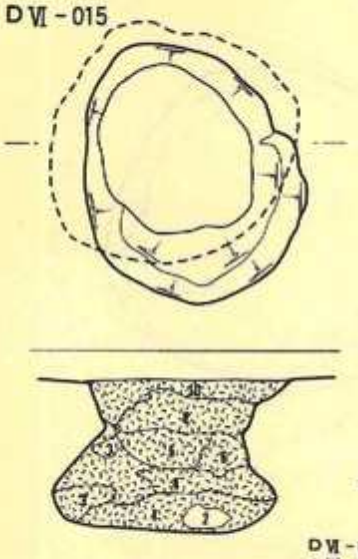


DⅥ-014



図版32：土坑実測図―(14)

DⅥ-015



DⅥ-015 註記

1層　明褐色土(7.5YR5/6) に褐色土(7.5YR5/6) ブロックが混じり、軟らかい。南部浮石が少量混入。

2層　明褐色土(7.5YR5/6) に褐色土(7.5YR5/6) ブロックが混入。やや硬く締まっている。

3層　橙色土(7.5YR5/6)。やや硬い。

4層　明褐色土(7.5YR5/6) に褐色土(7.5YR5/6) ブロックが混じり、硬く締まっている。南部浮石が混入。

5層　明褐色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。南部浮石が多量に混入。

6層　褐色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。南部浮石が混入。

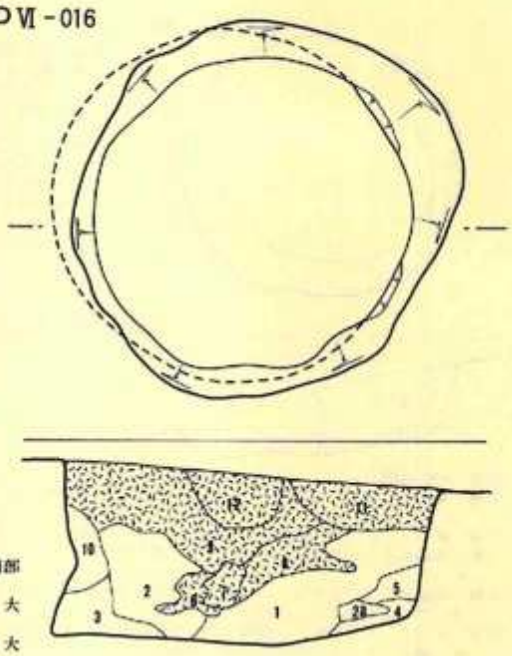
7層　明褐色土(7.5YR5/6) に褐色土(7.5YR5/6) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。

8層　橙色土(7.5YR5/6) に褐色土(7.5YR5/6) ブロックが混じり、極めて硬く締まっている。小粒の南部浮石が多量に混入。

9層　橙色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。

10層　橙色土(7.5YR5/6)。極めて硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

DⅥ-016



DⅥ-016 註記

1層　褐色土(7.5YR5/6)。やや軟らかい。大粒の南部浮石が混入。

2層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が多量に混入。

2a層　褐色土(7.5YR5/6)。やや硬く締まりがない。大粒の南部浮石点在。

3層　明褐色土(7.5YR5/6) の南部浮石層に褐色土((10YR5/6) ブロックが少量混じり、極めてくずれやすい。

4層　褐色土(7.5YR5/6) 明褐色土(7.5YR5/6) ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

5層　明褐色土(7.5YR5/6)。極めて硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

6層　明黄褐色土 (10YR5/6) に褐色土 (10YR5/6) ブロックが混じり、やや硬く締まっている。小粒の南部浮石が少量混入。

7層　明黄褐色土 (10YR5/6) に褐色土 (10YR5/6) ブロックが混じり、やや硬く締まっている。小粒の南部浮石が少量混入。

8層　明黄褐色土 (10YR5/6) に褐色土 (10YR5/6) ブロックが混じり、硬く締まっている。小粒の南部浮石が少量混入。

9層　黄褐色土 (10YR5/6)。軟らかいが締まっている。南部浮石が混入。

10層　明褐色土(7.5YR5/6)。やや硬い。南部浮石が混入。

11層　黄褐色土 (10YR5/6)。軟らかいが締まっている。南部浮石が混入。

12層　黄褐色土 (10YR5/6)。軟らかいが締まっている。南部浮石が多量に混入。

DⅥ-018 註記

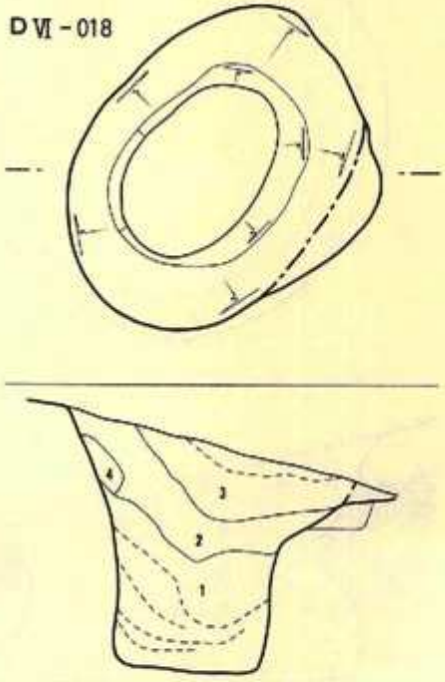
1層　明褐色土(7.5YR5/6) の南部浮石層に褐色土(7.5YR5/6) ブロックが少量混じり、締まりがない。

2層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかいが締まりがよい。南部浮石が混入。

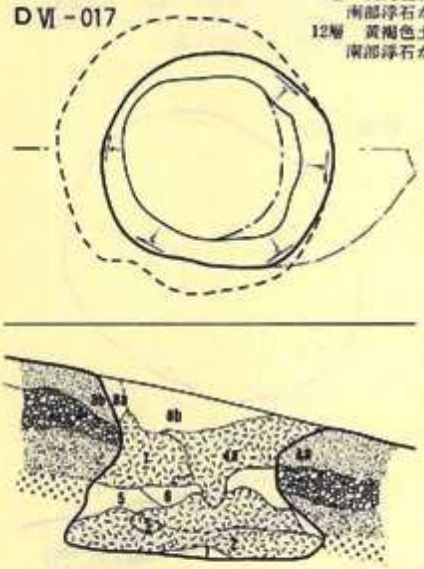
3層　褐色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。南部浮石が少量混入。

4層　褐色土(7.5YR5/6)。硬いがくずれやすい。南部浮石が多量に混入。

DⅥ-018



DⅥ-017



DⅥ-017 註記

1層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかい。

2層　黄褐色土 (10YR3/6)。粘性がありやや硬い。南部浮石が少量混入。

3層　褐色土(7.5YR5/6) に黄橙色土 (10YR3/6) ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。

4a層　黄褐色土 (10YR5/6) に明褐色土 (10YR5/6) ブロックが混じり、やや軟らかい。大粒の南部浮石点在。

5層　褐色土 (10YR5/6)。軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。

6層　褐色土 (10YR5/6)。極めて軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が多量に混入。

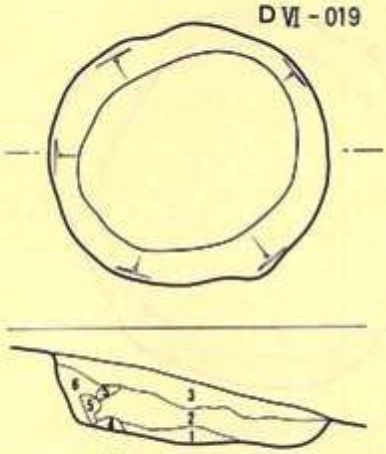
7層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかい。南部浮石が多量に混入。

8層　褐色土(7.5YR5/6)。軟らかいが締まっている。南部浮石が混入。

8a層　褐色土(7.5YR5/6)。硬く締まっている。南部浮石点在。

図版33：土坑実測図—(15)

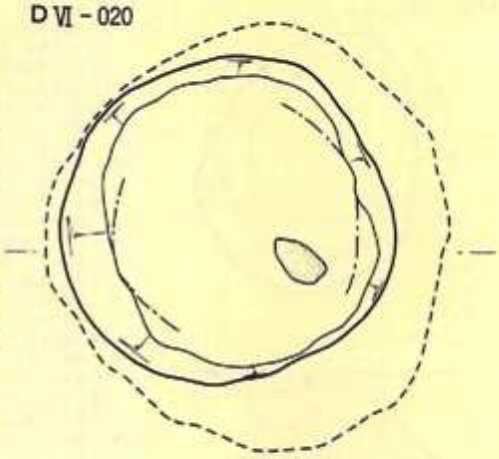
DⅥ-019

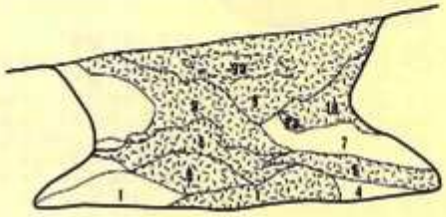


DⅥ-019 註記

1層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬い。大粒の南部浮石が多量に混入。
2層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬らかい。南部浮石混入。
3層　褐色土(7.5YR⅝)。やや軟らかい。南部浮石が少量混入。
4層　橙色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、やや硬い。
5層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。
5a層　褐色土(7.5YR⅝)。やや硬く締まりがない。大粒の南部浮石点在。
6層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石偏在。

DⅥ-020

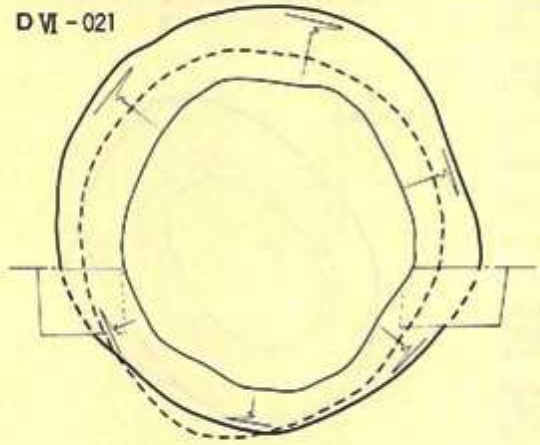


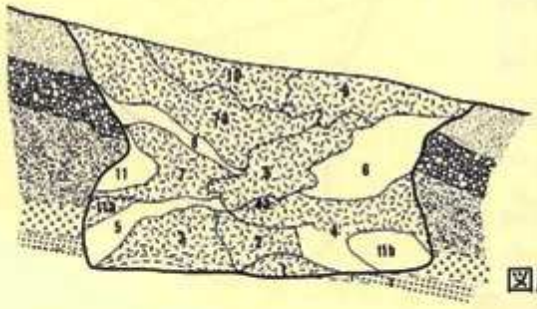


DⅥ-020 註記

1層　褐色土(10YR⅝)。軟らかいが締まっている。南部浮石が少量混入。
2層　褐色土(10YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。
3層　黄褐色土(10YR⅝)に暗褐色土(10YR⅜)ブロックが混ぜり、軟らかい。
4層　明褐色土(7.5YR⅝)に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。
5層　褐色土(10YR⅝)に暗褐色土(10YR⅜)ブロックが混じり、硬く締まっている。大粒の南部浮石点在。
6層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。
7層　暗褐色土(10YR⅜)。やや硬い。南部浮石が少量混入。
8層　明黄褐色土(10YR⅝)。軟らかいが締まっている。大粒の南部浮石点在。
8a層　明黄褐色土(10YR⅝)。軟らかいが締まっている。
9層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。
9a層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。大粒の南部浮石が混入。
10層　褐色土(10YR⅝)。硬いがくずれやすい。南部浮石が少量混入。
11層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬いがくずれやすい。
11a層　11層と類似しているが、粘性がある。

DⅥ-021

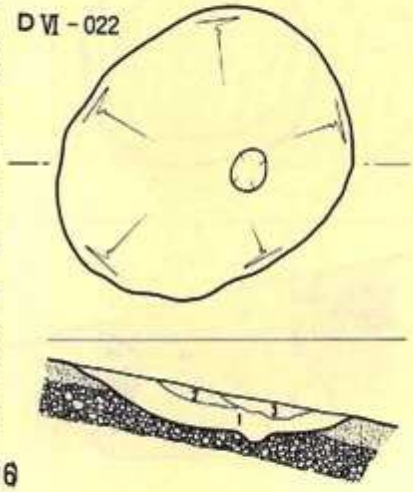




DⅥ-021 註記

1層　明黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、極めて硬く締まっている。
2層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。小粒の南部浮石が少量混入。
3層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。
4層　褐色土(10YR⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。
4a層　褐色土(10YR⅝)。硬く締まっている。
5層　黄橙色土(10YR⅞)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、やや軟らかい。南部浮石が多量に混入。
6層　褐色土(10YR⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が混入。
7層　黄褐色土(10YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が混入。
7a層　黄褐色土(10YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。
8層　褐色土(10YR⅝)。やや硬い。南部浮石が少量混入。
9層　黄褐色土(10YR⅝)に褐色土(10YR⅝)ブロックが混じり、軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。
10層　暗褐色土(10YR⅜)。やや軟らかい。大粒の南部浮石が少量混入。

DⅥ-022

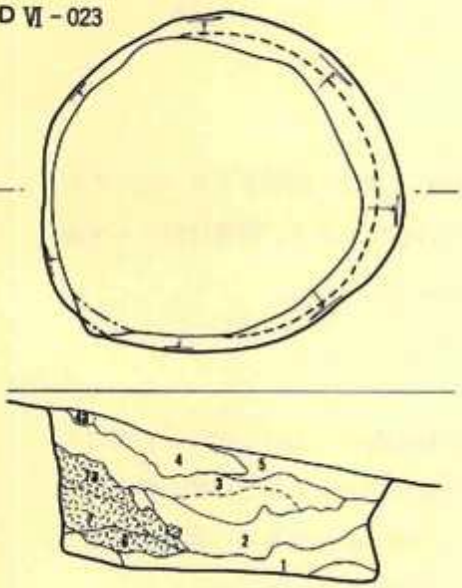


DⅥ-022 註記

1層　黒褐色土(7.5YR⅜)のシルト質土。緻密ではあるが軟らかい。少量の炭化粒と南部浮石が多量に混入。
2層　黒褐色土(10YR⅜)の細砂質土。やや軟らかい。炭化粒と南部浮石が混入。
3層　褐色土(7.5YR⅝)。わずかに粘性あり、炭化粒と南部浮石が混入。

図版34：土坑実測図―(16

D Ⅵ - 023



D Ⅵ - 023 註記

1 層　褐色土（10Y R 5/4）。緻密ではあるが軟らかい。大粒の南部浮石点在。

2 層　褐色土（10Y R 5/4）。硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

3 層　褐色土（10Y R 5/4）に黄褐色土（10Y R 5/6）ブロックが混じり、硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

4 層　褐色土（10Y R 5/4）。やや硬いがくずれやすい。小粒の南部浮石が少量混入。

4a 層　褐色土（10Y R 5/4）。やや硬いがくずれやすい。

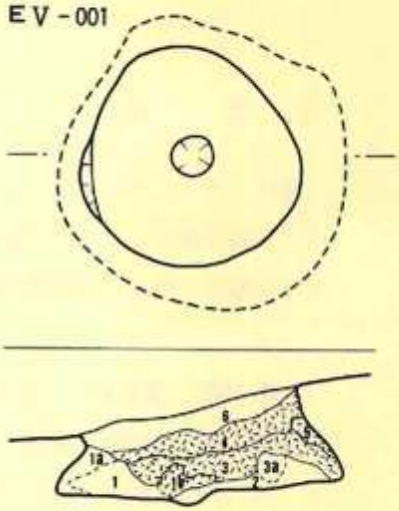
5 層　暗褐色土（10Y R 5/6）。硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

6 層　黄褐色土（10Y R 5/6）。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が多量に混入。

7 層　黄褐色土（10Y R 5/6）。硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石が混入。

7a 層　黄褐色土（10Y R 5/6）。硬いがくずれやすい。大粒の南部浮石点在。

E Ⅴ - 001



E Ⅴ - 001 註記

1 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。やや硬い。大粒の南部浮石が多量に混入。

1a 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。硬い。南部浮石が混入。

2 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。やや硬い。小粒の南部浮石が混入。

2a 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が少量混入。

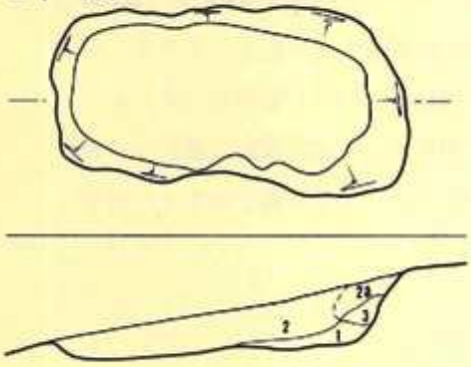
3 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。硬く締まっている。南部浮石が混入。

4 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。硬く締まっている。南部浮石が混入。

5 層　明褐色土（7.5Y R 5/6）。硬いがくずれやすい。南部浮石が混入。

6 層　褐色土（7.5Y R 5/4）。硬く締まっている。南部浮石が混入。

E Ⅴ - 002



E Ⅴ - 002 註記

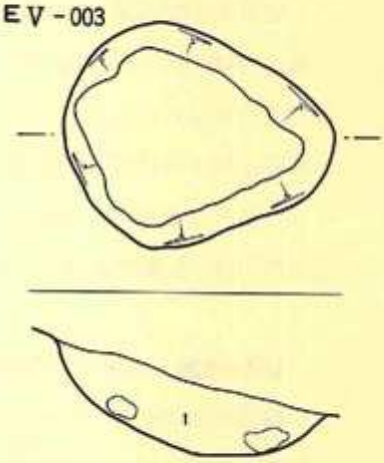
1 層　暗褐色土（7.5Y R 5/4）。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石が混入。

2 層　暗褐色土（7.5Y R 5/4）。やや硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

2a 層　暗褐色土（7.5Y R 5/4）。やや硬く締まっている。小粒の南部浮石が混入。

3 層　明褐色土（7.5Y R 5/6）の南部浮石層に褐色土（7.5Y R 5/4）ブロックが混じり、汚れてくずれやすい。

E Ⅴ - 003



E Ⅴ - 003 註記

1 層　褐色土（10Y R 5/4）に暗褐色土（10Y R 5/6）ブロックが少量混じり、硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。

2 層　明褐色土（7.5Y R 5/6）の南部浮石ブロック。極めてくずれやすい。

図版35：土坑実測図—(17)

5．墓　坑

墓坑と考えられる土坑は3基検出した。しかし、土坑内部から遺骨・副葬品を見いだしたものは2基であり、しかも遺骨は人骨ではなく、小型種の“馬の骨”である。形態は何れも平面形は不整の小判形～隅円長方形を呈し、底面もまた不整面をなす。

DⅥ－024（図版36，写真図版31－169・170）

原地表から遺構検出面までの深さは約80cmである。土坑の検出段階における規模は長軸 170cm（底134cm）、短軸108cm（底74cm）、深さ25cmほどである。底面凹凸が見られ全体的に斜面下方に形成されている。断面形は、長軸・短軸ともに立あがり部付近が、円味をもつ逆台形である。埋土は、八戸火山灰土・南部浮石などを混じえた土層で、全体的に明るく見える。

出土遺物としては、寛永通宝1点、鉄錆化物1点である。鉄錆化物は本体そのものの形状が不明である。土坑長軸方向と磁北との角度はNW16度である。

DⅥ－025（図版36，写真図版31－171・172）

検出面までの深さは約80cmである。平面形は不整の隅円長方形で、その規模は167cm（底125cm）、短軸95cm（底74cm）、深さ35cmほどである。底面は、八戸火山灰層上面で止まっており、やや凹凸が見られるもののほぼ平担である。断面形は、長軸・短軸両方向とも逆台形（立ち上がり部と接する付近は円味をもつ）である。埋土は黒褐色土・褐色土などが不規則に混じっており、多少の差はあれ全体に南部浮石を含んでいる。出土遺物はない。土坑長軸と磁北との角度はNE60～61度である。

DⅥ－026（図版，写真図版31－173・174）

検出面までの深さは90～100cmほどである。平面形は不整の隅円長方形で長軸175cm（底115cm）短軸108cm（底82cm）、深さ32cmほどである。断面形は、長軸方向が不整の逆台形で短軸は立上り付近が円味をもった逆台形である。なお北西壁には段がある。底面は南部浮石層中で止まっており、やや不整な面となっている。出土遺物としては特にないが検出された。（本遺骨については“馬”の鑑定結果がでており、詳細については別章“鑑定・分析”を参照されたい。

土坑長軸と磁北とがなす角度はNW44度前後ある。

6．作業小屋跡（図版37，写真図版32－175～178）

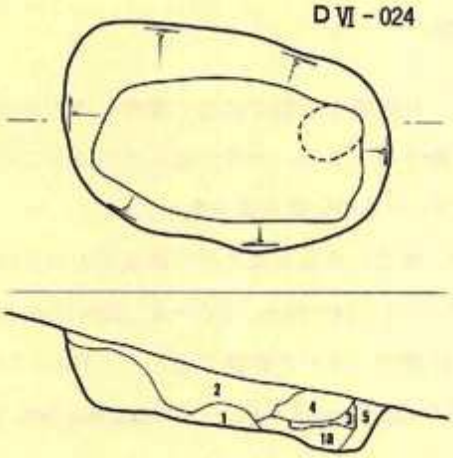
柱穴間距離、掘方規模などが不規則な建物跡であり、柱配置も方形ではなく菱形にゆがんでいる。間取りは1間1間で南辺よりの中央付近が硬く締まっており、ややくぼんでいるところから、この南辺に出入口があったものと考えられる。（Po－4の位置が最も低い。）

掘方は4基で何れも柱痕跡から寸法を推定できるが、埋土のゆるみなどから確実なものとは言えない。Po－1：20×18cm、Po－2：21×20cm、Po－3：24×24cm、Po－4：20×17cm。柱間距離は、カッコ付を芯々間、カッコなしを柱外点を直線でつないだ距離で表わす。Po－1～Po－2：254.0cm（208.0cm）、Po－3：226.0cm（206.0cm）、Po－2～Po－4：228.0cm（206.0cm）Po－3～Po－4：246.0cm（226.0cm）。

7．ゴロタガメ（図版36，写真図版21－90）

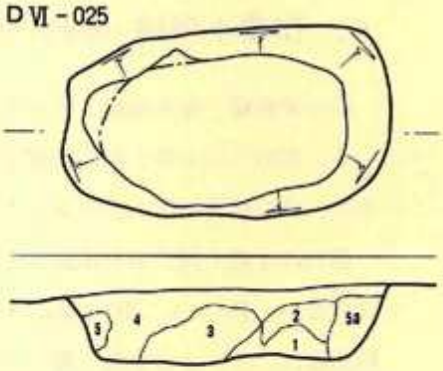
南部浮石が分布する地域で造られた肥溜の一種である。この肥溜は通称“ゴロタ”と呼ばれる南部浮石と石灰とを混ぜ合せたものを叩き固めて形造ったものである。口縁が破壊されているためその実深は不明であるが平面形は円形で底面が丸く、壁体は直円筒をしている。径130cm、深さ74cm＋α。埋土は、廃棄の時点で口縁を破壊し周辺の黒色土で埋めもどしたものである。内部から出土遺物はアワビの貝がら片、口縁等の破片、陶器片などである。

DⅥ－024



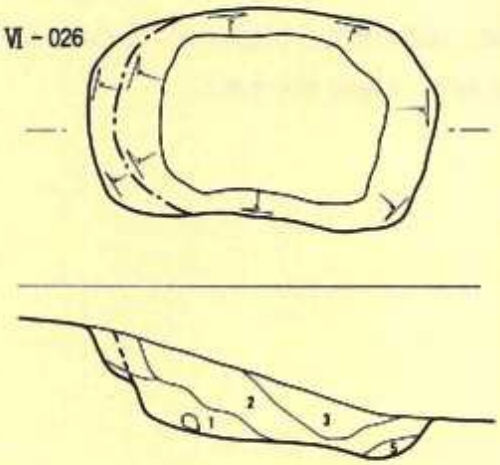
DⅥ－024 註記
1層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層。極めてくずれやすい。
1a層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、極めてくずれやすい。
2層　褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。南部浮石が混入。
3層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。大粒の南部浮石点在。
4層　明褐色土(7.5YR⅝)。極めて硬く締まっている。南部浮石が混入。
5層　褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。

DⅥ－025



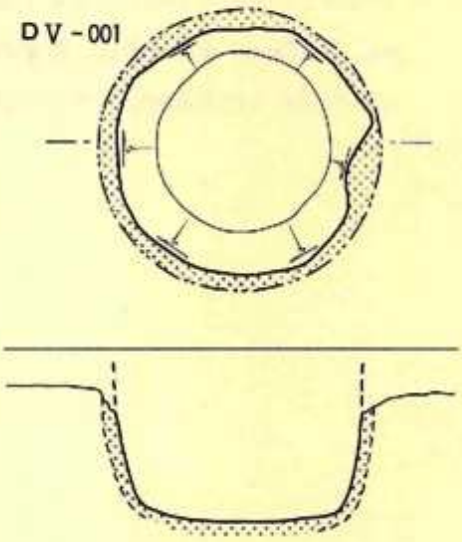
DⅥ－25註記
1層　暗褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。
2層　暗褐色土(7.5YR⅝)。硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。
3層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混じり、硬く締まっている。
4層　褐色土(7.5YR⅝)。極めて硬く締まっている。大粒の南部浮石が多量に混入。
5層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層。極めてくずれやすい。

DⅥ－026

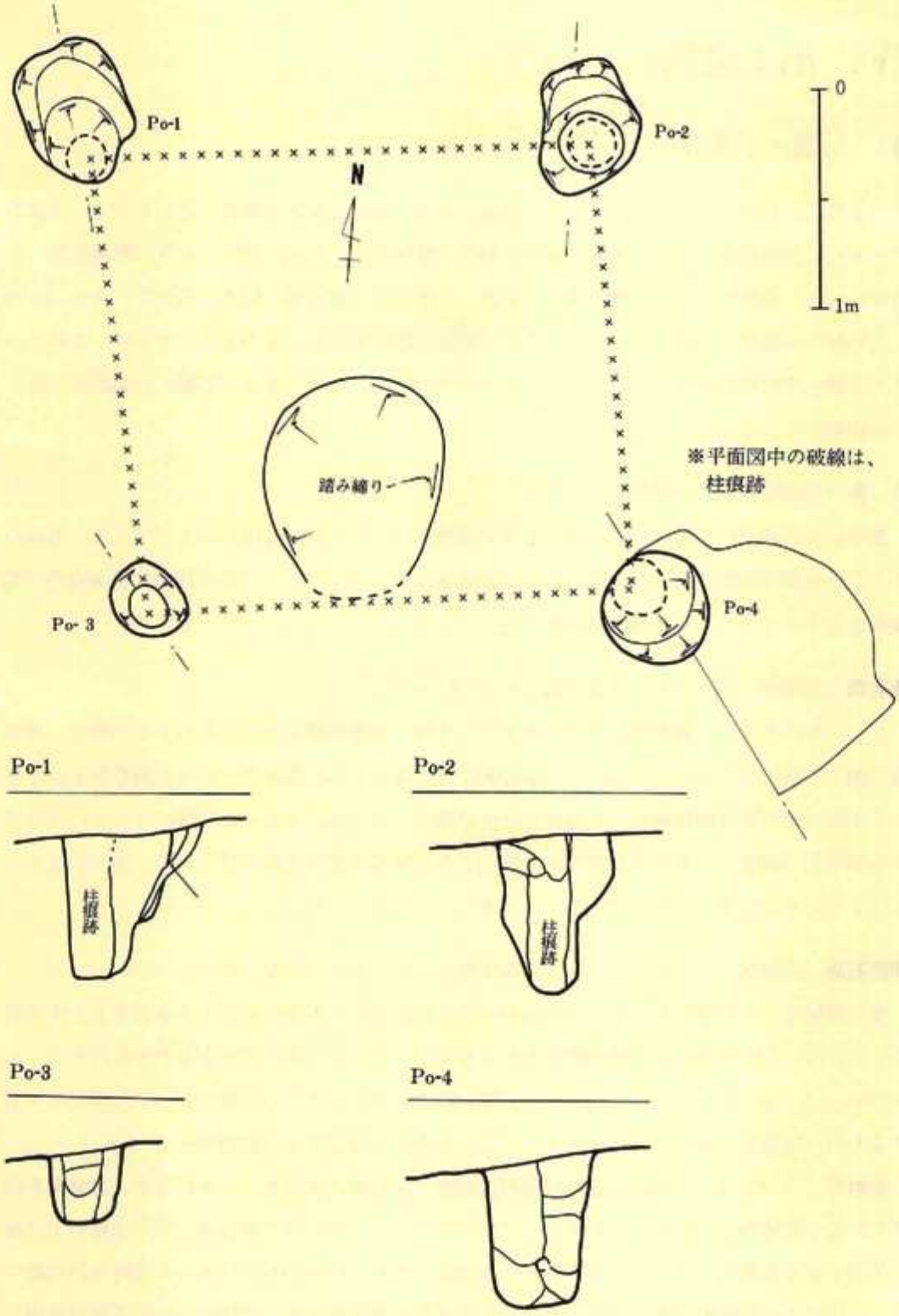


DⅥ－026 註記
1層　暗褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が多量に混入。
2層　暗褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。小粒の南部浮石が混入。
3層　暗褐色土(7.5YR⅝)。軟らかく締まりがない。南部浮石が少量混入。
4層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層。硬く締まっている。
5層　明褐色土(7.5YR⅝)の南部浮石層に褐色土(7.5YR⅝)ブロックが混入。くずれやすい。

DⅤ－001



図版36：土坑実測図―(18（墓坑・ゴロタガメ）



図版37：作業小屋跡実測図

V．出土遺物について

1．石器・石製品

石器等は、石鏃　2点、石匙　1点、掻器、5点，掻器と錐とが複合したもの1点，尖頭器片？1点，楔形石器　9点、使用痕をもつ剥片・器種不明　6点，剥片　8点，磨製石斧（含断片）8点，石鍬片　1点、礫石錘？　1点，くぼみ石・磨石類　10点，石皿片　2点，石棒・石剣類の未製品　1点，その台石　7点（明瞭な敲打痕をもつもの4点）である。これらのうち石鏃・楔形石器各1点は紛失し、台石3点は不明瞭のため“表3：石器・石製品等一覧”には掲載していない。

石　匙（図版38－1，写真図版33－1）

部厚い貝殻状剥片を素材として剥片中央の基部にツマミをもつ横形のものである。刃部の作りだしは押圧剥離によるが両面に第1次剥離面を残している。ツマミの周辺には黒褐色～暗褐色を呈するアスファルト様の樹脂が点在している。

掻器類（図版38－2・5・6，写真図版33－2・5・6）

2・5・6の石器は、縦長剥片の側縁あるいは先端に調整剥離を加えたもので6の場合、両側縁に加工が施こしてある。3は部厚い横長剥片の先端を主に、側縁の一部にも調整加工がなされている。4の石器は縦長剥片の先端付近だけが遺存している。これらの石器のうち3・5・6では基部周辺（両面）に光沢が観察され、特に3の打瘤部に強い光沢が見られる。出土状況としては2・3・6はCⅦ－03住の同一地点から重なって出土している。

楔形石器（図版38－7・39－3～9，写真図版33－7，34－3～6，35－1～3）

本石器種は、不明瞭なもの1点（図版39－9）および行方不明のもの1点を加えると9点出土している。この石器は、両極剥離痕をもつもので二辺一対の鋭い刃部を有するものがほとんどであるが、図版39－3は一辺が平担で荒い敲打痕をもっている。形状としては四辺形を呈するもの（図版39－3・5・8）と、そうでないものとが存在する。(図版39－4・7)

剥離痕については、2次加工と使用過程の剥離とを明確に区別をつけかねるが、刃部角を作るため荒く調整加工したものを石器として用いている。これらの刃部には、先の調整加工の後に使用による不規則な大きさの剥離痕が（ほぼ同一方向）形成されている。また何れの石器でも、使用による剥離痕の奥に刃部に並行した光沢部が観察される。図版39－6は下端が欠損したもので欠損縁付近と側縁の一部に磨滅光沢が見られる。

これらの石器のうち図版38－7，39－3・4・6・7・9，図版40－1の7点はCⅦ－04住居址の奥壁付近からまとまって出土したものである。

石　鏃（図版39－1，写真図版34－1）

石鏃はCⅦ－01住，CⅦ－02住から各々1点づつ出土したが、CⅦ－02住居址のものは雨あがりの夕刻、カラスに持ち去られている。図示したものは比較的荒い調整剥離が加えられ、片面には一次剥離面を残している。

磨製石斧（図版41－1～6・7，42－7，写真図版36－1～7）

図版41－1～3は、住居址群前面の雨裂部からおり重なるような状態で出土したものである。3点とも同様の形態を示しており、製作方法も同様である。1・2では側面および両面に敲打整形痕を残しており刃部付近の両面には擦痕・光沢が形成されている。3では敲打整形痕は見られないが、刃部に沿って幅2mほどの擦痕面とその奥に光沢部形成されている。

5では、基部よりが欠損し、刃部もまた荒く剥離欠損している。この石斧の製作は、粗い敲打剥離の後、直接片面だけを研磨している。この研磨も片面の全面には及んでいない。7は、頂部に敲打整形痕を残しているが、他は全面、研磨面で多面体となっている。図版42－7も頂部に敲打剥痕を残し、他は全面研磨されている。

くぼみ石・磨石類（図版43他，写真図版37他）

本種の中には片面あるいは両面に敲打痕をもつ台石や叩き石も含めて説明を進める。これらの石器種は、磨擦面とくぼみとを併せもつもの（図版43－1）、磨擦面だけのもの（図版43－6・7）くぼみだけのもの(図版42－2，図版43－2・4・8)、そして粗い敲打痕をもつもの（台石を含める）とに分けられる。しかし粗い敲打痕をもつものは大・小の2種があり、大きい石（ほとんど台石）では片面あるいは両面に不規則な敲打痕をもっている。反面、小さな石では敲打痕が円形に集中し、なかには石の一端にも敲打痕をもっている（図版43－5，42－3）。くぼみとはなっていない。

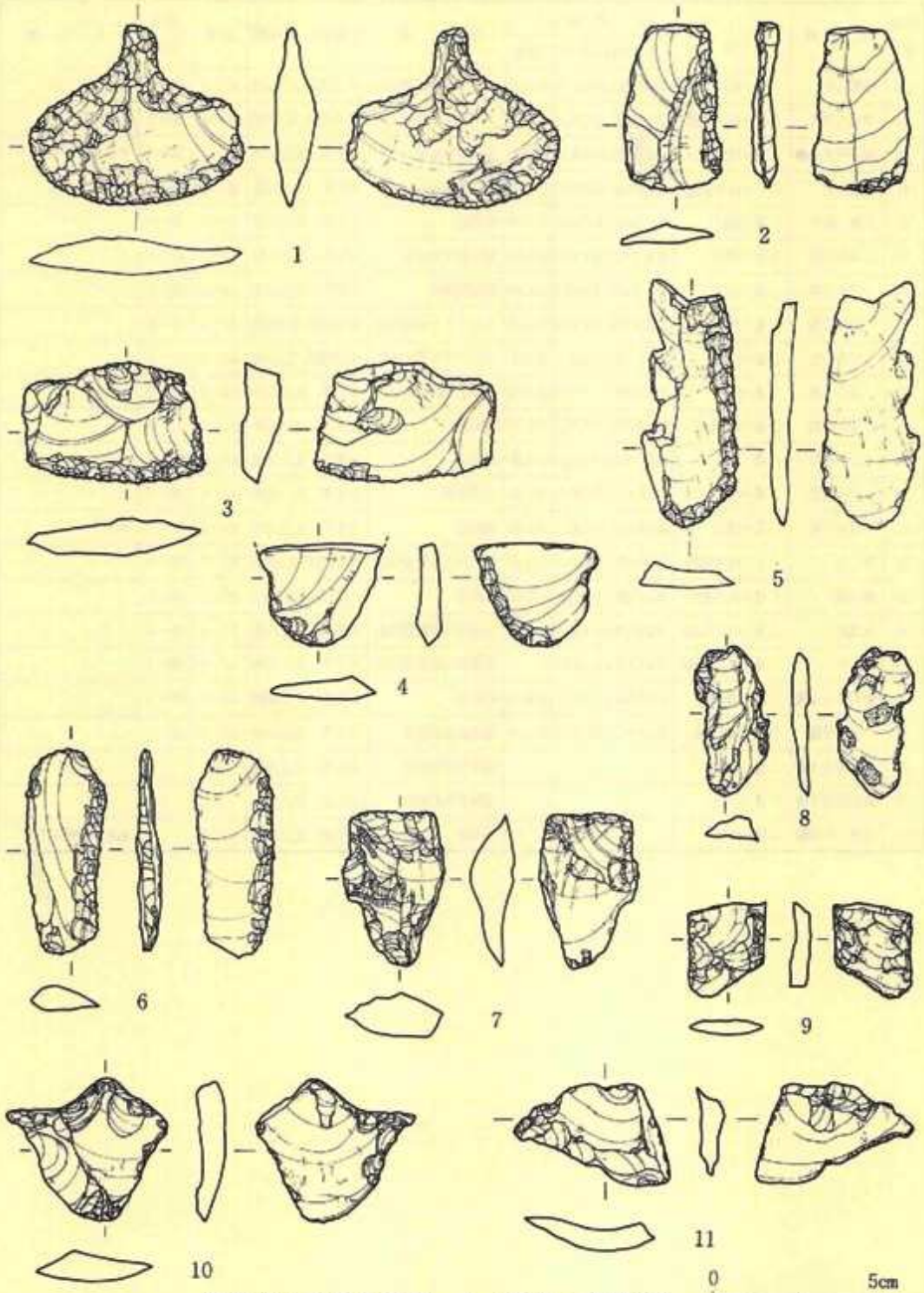
石皿片（図版42－4・5，写真図版38－3・4）

この2点はCⅦ－015フラスコ形土坑の底面から出土したものである。同一の石質であり、また同一地点の出土であることから同一個体の破片と思われるが、接合面は見いだせない。両破片共、皿面から縁辺へあがる所は緩やかなカーブで、縁の上面と皿面の縁よりは比較的粗い面であるが中央よりは滑らかとなっている。裏面は剥離が激しく、脚等の有無は不明である。側面には加工の痕跡は認められない。

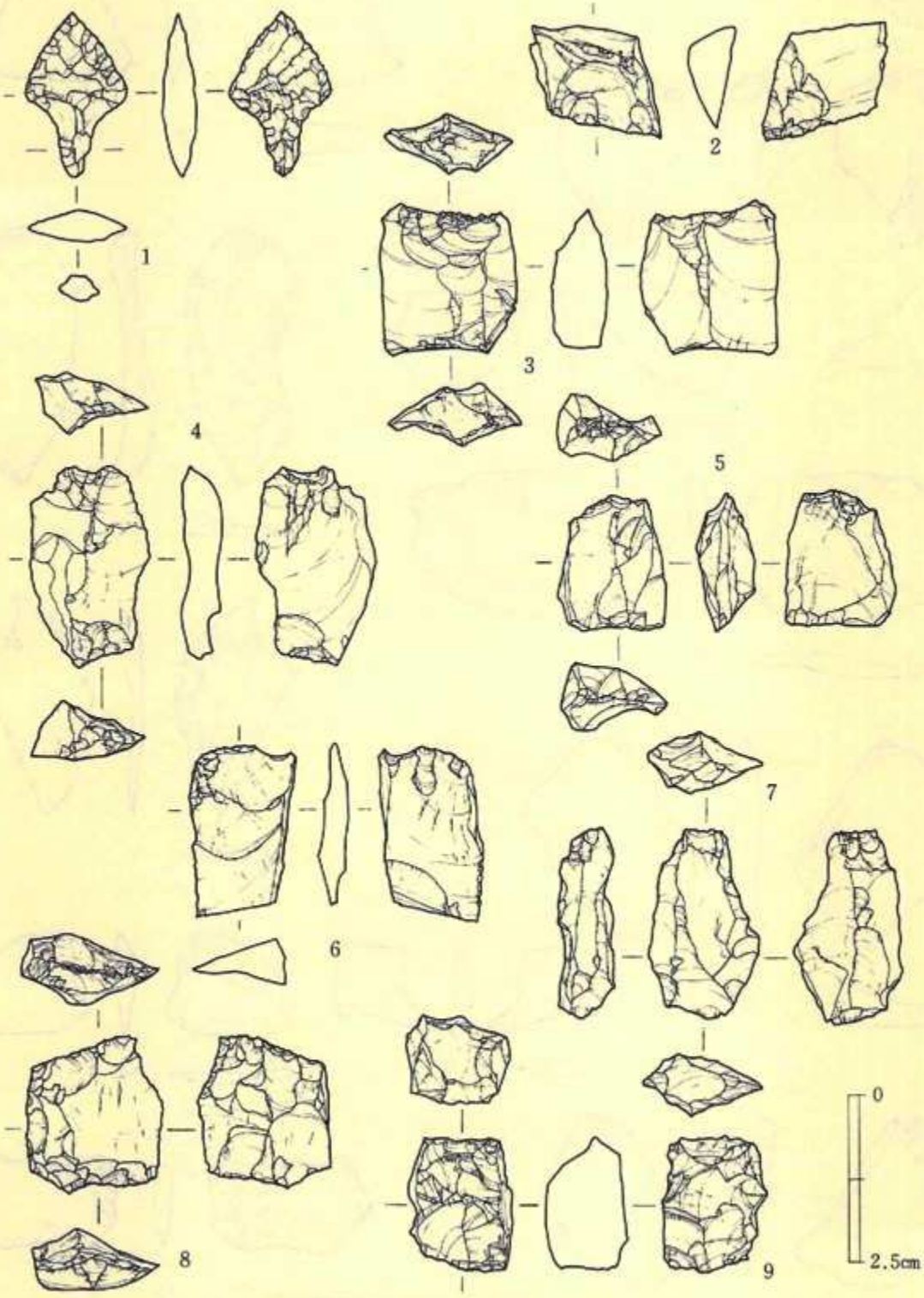
表3：石器・石製品一覧

通算番号	石器種	出土区 層位等	法量(mm, g) 長さ×幅×厚さ	重量	岩質	生成年代・産地等	図版	写真図版	その他
1	掻器	C Ⅶ−03住	35.6×56.0×11.6	24.25	珪質泥岩	中新統，奥羽山地	38−3	33−3	
2	掻器	C Ⅶ−03住	48.8×28.6× 7.0	9.90	珪質泥岩	中新統，奥羽山地	38−2	33−2	
3	掻器	C Ⅶ−03住	60.0×23.4× 7.9	11.25	硬質凝灰岩質泥岩	中新統，奥羽山地	38−6	33−6	
4	不定形石器	C Ⅶ−003	30.0×49.7× 7.8	9.90	粘板岩	古世界，北上山地	38−11	33−11	
5	掻器	C Ⅶ−03住	73.0×29.0× 7.0	17.10	チャート質粘板岩	古世界，北上山地	38−5	33−5	
6	掻器？	B Ⅶ−01住	30.0×37.0× 6.0	7.23	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	38−4	33−4	
7	不定形石器？	B Ⅱ粗	29.0×46.0× 6.5	7.65	珪質泥岩	中新統，奥羽山地	40−11	35−5	
8	横型石匙	81年粗	52.0×63.0×11.0	30.60	珪質凝灰質泥岩	中新統，奥羽山地	38−1	33−1	
9	不定形石器	C Ⅶ−06住	44.0×22.0× 6.8	6.45	珪質泥岩	中新統，奥羽山地	38−8	33−10	
10	剥片	C Ⅶ−06住	77.0×34.0× 5.0	17.10	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40−4	33−9	
11	複合石器？	C Ⅶ−002	42.0×47.0× 9.0	14.65	珪質凝灰質泥岩	中新統，奥羽山地	38−10	33−8	旋・掻器の複合
12	楔形石器	C Ⅶ−04住	45.0×29.2×13.0	15.85	チャート質粘板岩	古世界，北上山地	38−7	33−7	
13	不明（欠損品）	C Ⅶ−05住	26.8×22.4× 4.2	3.35	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	38−9	/	尖頭器片？
14	石鏃	C Ⅶ−01住 No.16	24.0×15.0× 4.3	1.00	珪質泥岩	中新統，奥羽山地	39−1	34−1	
15	楔形石器	C Ⅶ−04住	26.2×14.6× 6.8	2.37	泥岩質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	39−3	34−3	
16	楔形石器	C Ⅶ−L区 中段混合土	22.5×21.0× 8.5	4.04	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	39−5	34−6	
17	不明	C Ⅶ−04住	26.0×20.0×13.8	4.20	チャート	古生界，北上山地	40−1	35−4	
18	楔形石器	C Ⅶ−04住	29.4×18.4× 8.6	3.85	チャート	古生界，北上山地	39−4	34−4	
19	楔形石器	C Ⅶ−04住	27.2×16.7× 8.0	3.60	チャート	古生界，北上山地	39−7	35−2	
20	楔形石器	C Ⅶ−04住	20.0×16.0× 9.0	3.15	輝緑凝灰岩	古生界，北上山地	39−6	34−5	
21	楔形石器	C Ⅶ−M区検出	23.6×20.0× 9.3	3.45	珪質泥岩	中新統，奥羽山地	39−8	35−1	
22	楔形石器	C Ⅶ−04住	19.6×14.6×11.7	4.54	硬質凝灰岩泥岩	中新統，奥羽山地	39−9	35−3	
23	不明（欠損品）	C Ⅶ−04住	16.7×20.0× 7.0	1.93	チャート質粘板岩	古生界，北上山地	39−2	34−2	
24	剥片	C Ⅶ−012土坑	48.4×32.4× 9.6	12.89	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
25	剥片	C Ⅶ−012土坑	40.0×34.4× 9.0	13.50	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	※No.24~31は一括出土
26	剥片	C Ⅶ−012土坑	42.0×65.3× 7.0	18.63	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
27	剥片	C Ⅶ−012土坑	58.3×28.6× 3.6	3.66	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
28	剥片	C Ⅶ−012土坑	57.4×46.4×12.7	26.00	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
29	剥片	C Ⅶ−012土坑	27.7×36.2× 4.0	3.60	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
30	剥片	C Ⅶ−012土坑	20.0×20.5× 6.2	2.95	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
31	剥片	C Ⅶ−012土坑	30.0×39.0× 6.5	6.15	泥質細粒凝灰岩	中新統，奥羽山地	40	/	
32	磨製石斧片	D Ⅶ−Ⅱ層	31.0×40.0×14.6	20.00	輝石安山岩	中生界，北上山地	/	/	刃部破片
33	磨製石斧片	C Ⅶ−012土坑	27.0×36.8× 9.5	11.87	凝灰質粘板岩	古生界，北上山地	/	/	刃部破片
34	磨製石斧	C Ⅶ−C区	86.5×46.5×19.2	125.00	凝灰質粘板岩	古生界，北上山地	41−1	36−1	↓ No.34~36の磨製石
35	磨製石斧	C Ⅶ−C区	51.0×25.0× 9.0	19.45	凝灰質粘板岩	古生界，北上山地	41−3	36−3	↓ 斧は、同一地点か
36	磨製石斧	C Ⅶ−C区	77.2×38.3×15.3	70.00	スピライト質凝灰岩	中・古生界，北上山地	41−2	36−2	↓ ら出土。
37	磨製石斧	C Ⅶ−01住	112.0×61.0×34.0	340.00	スピライト質凝灰岩	中・古生界，北上山地	42−7	36−6	刃部より欠損

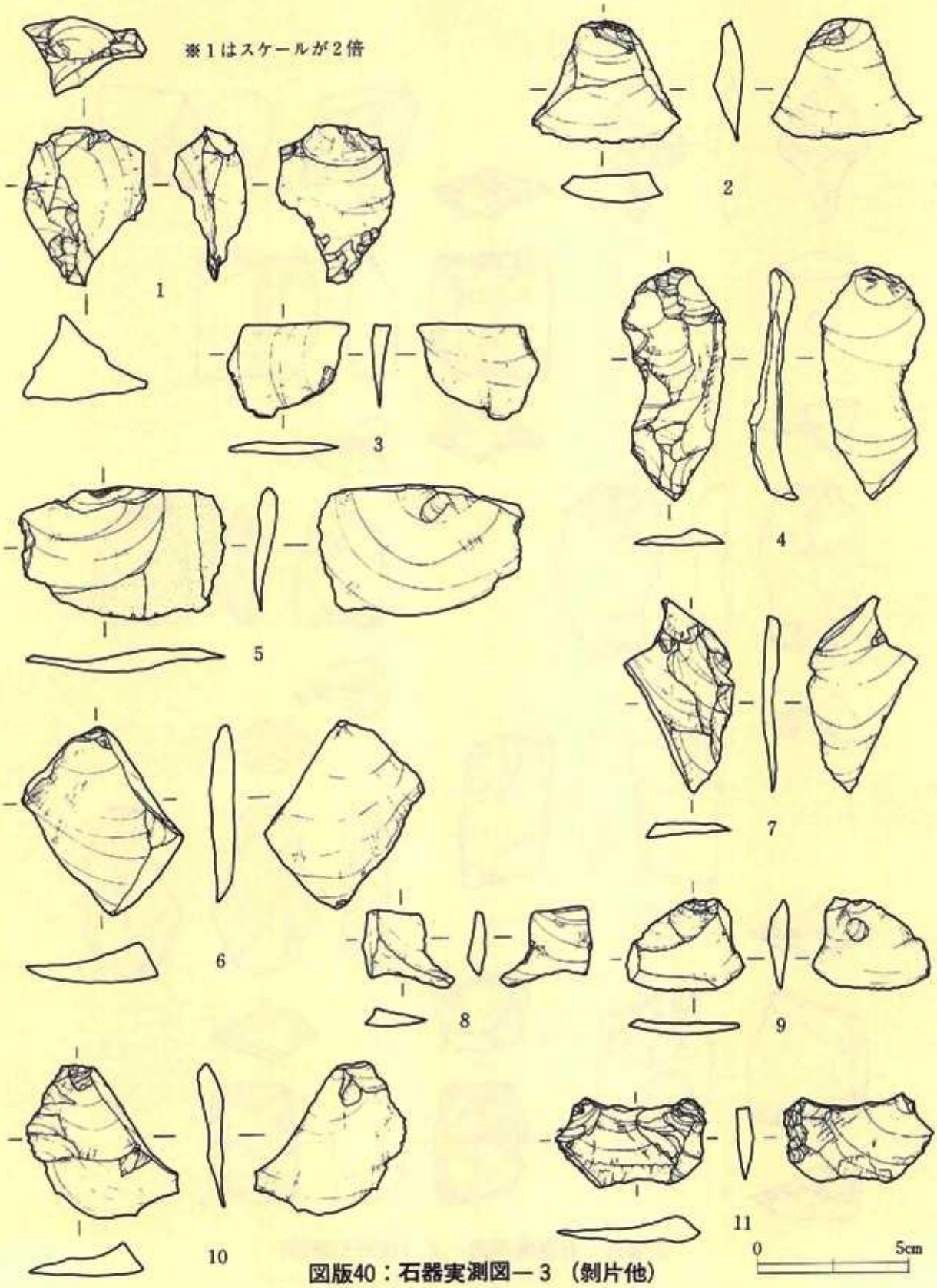
通算番号	石器種	出土区 層位等	法量(mm, g) 長さ×幅×厚さ	重量	岩質	生成年代・産地等	図版	写真図版	その他
38	磨製石斧	CⅠ−81年粗掘	65.0×53.0×31.0	165.00	スピライト質凝灰岩	中・古生界, 北上山地	41−5	36−7	頂部より欠損
39	磨製石斧片	BⅢ−81年粗掘	31.0×35.0×15.0	14.70	スピライト質凝灰岩	中・古生界, 北上山地	41−4	36−5	刃部破片
40	敲打痕ある礫	CⅦ−01住床	60.0×26.6×18.0	45.90	凝灰質粘板岩	古生界, 北上山地	41−6	38−6	片側縁にアスファルト
41	磨製石斧	DⅠ−81年粗掘	82.0×48.0×33.5	210.00	凝灰質粘板岩	古生界, 北上山地	41−7	36−4	刃部より欠損
42	石鏃（破片）	CⅦ−03住	89.0×59.0×19.0	130.00	粘板岩	古生界, 北上山地	41−8	36−8	
43	くぼみ石類	BⅦ−02住	118.0×73.0×43.0	540.00	凝灰質中粒砂岩	中生界, 北上山地	43−1	37−8	
44	くぼみ石類	CⅦ−01住	120.0×71.0×62.0	740.00	花崗閃緑岩	中生界, 北上山地	43−3	38−1	
45	くぼみ石類	CⅦ−P	145.0×60.0×27.0	340.00	スピライト質凝灰岩	中・古生界, 北上山地	43−4	37−5	
46	くぼみ石類	CⅦ−04住	97.0×45.0×24.6	180.00	スピライト質凝灰岩	中・古生界, 北上山地	43−5	37−1	
47	くぼみ石類	BⅦ−01住	127.0×53.0×37.4	330.00	凝灰質中粒砂岩	中生界, 北上山地	43−2	37−7	
48	くぼみ石類	CⅦ−012土坑	136.0×55.0×37.0	350.00	硬砂岩	古生界, 北上山地	43−8	37−2	
49	くぼみ石類	CⅦ−04住	201.0×49.0×46.0	600.00	硬砂岩	古生界, 北上山地	43−9	37−6	
50	くぼみ石類	CⅦ−01住	78.0×71.0×49.0	380.00	半花崗岩	中生界, 北上山地	43−6	38−2	
51	くぼみ石類	CⅦ−04住	143.0×39.0×36.0	360.00	硬砂岩	古生界, 北上山地	42−3	37−3	叩石？
52	磨石	CⅠ−81年粗掘	59.0×53.0×23.0	120.00	スピライト質凝灰岩	中・古生界, 北上山地	43−7	37−9	
53	礫石錐	CⅦ−U（覆）	80.0×87.0×20.0	195.00	粘板岩	古生界, 北上山地	42−1	38−5	
55	石皿片	CⅦ−013土坑底	100.0×103.0×53.0	635.00	石英安山岩質凝灰岩	中生界, 北上山地	42−5	38−3	
55	石皿片	CⅦ−013土坑底	125.0×161.0×36.5		石英安山岩質凝灰岩	中生界, 北上山地	42−4	38−4	
56	敲打痕ある礫	CⅦ−03住床	387.00×116.0×61.0	4020.00	硬砂岩	古生界, 北上山地	42−6	37−4	
57	くぼみ石類	DⅤ−009土坑	94.0×67.0×46.0	330.00	凝灰質中粒砂岩	中生界, 北上山地	42−2	38−7	
58	敲打痕ある礫	CⅦ−03住			凝灰質中粒砂岩	中生界, 北上山地	/	/	
59	敲打痕ある礫	CⅦ−03住			凝灰質中粒砂岩	中生界, 北上山地	/	/	
60	石棒・石剣類	CⅦ−06住			粘板岩	古生界, 北上山地	42−8	/	敲打・擦痕あり。



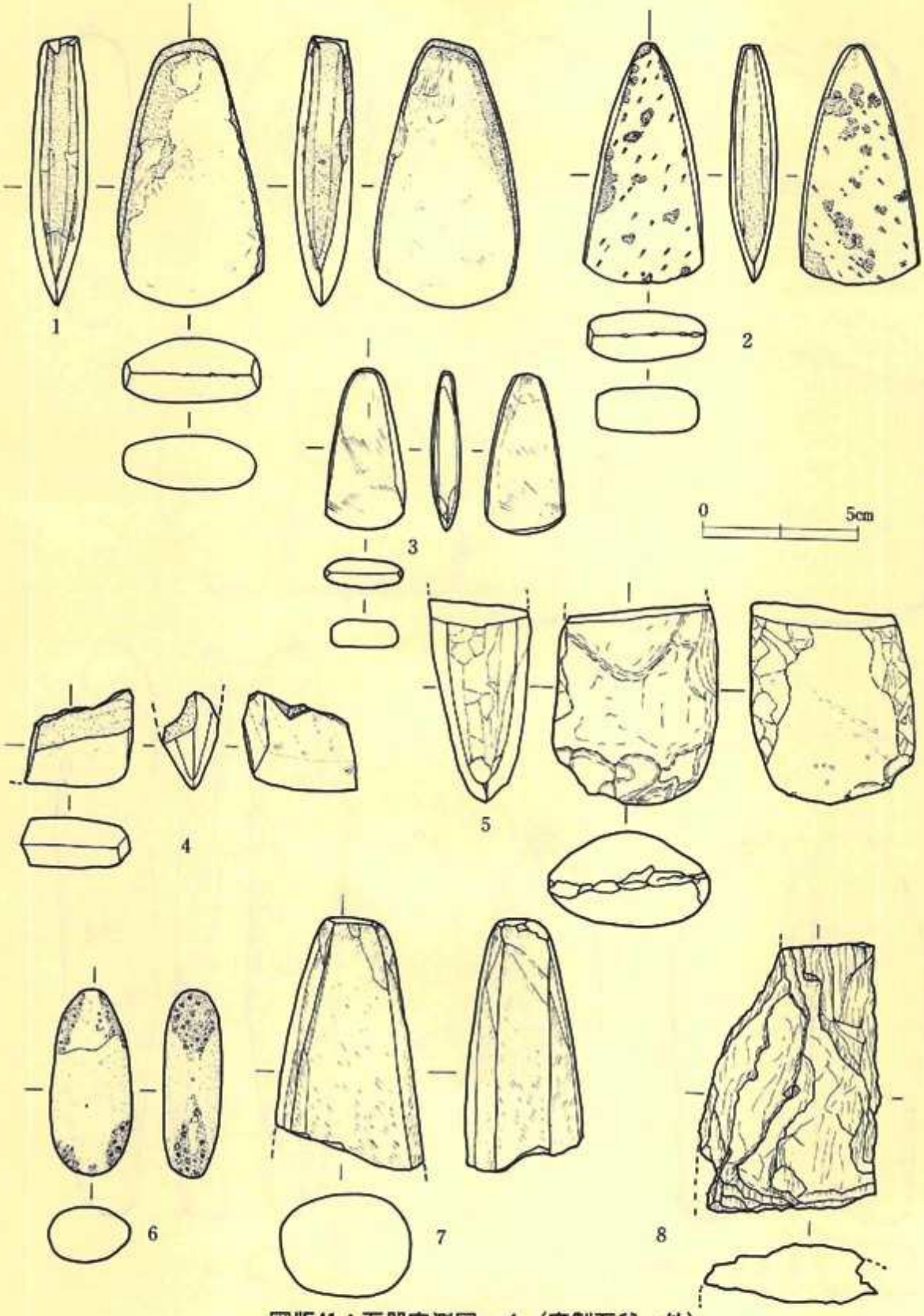
図版38：石器実測図―1（石匙・掻器他）



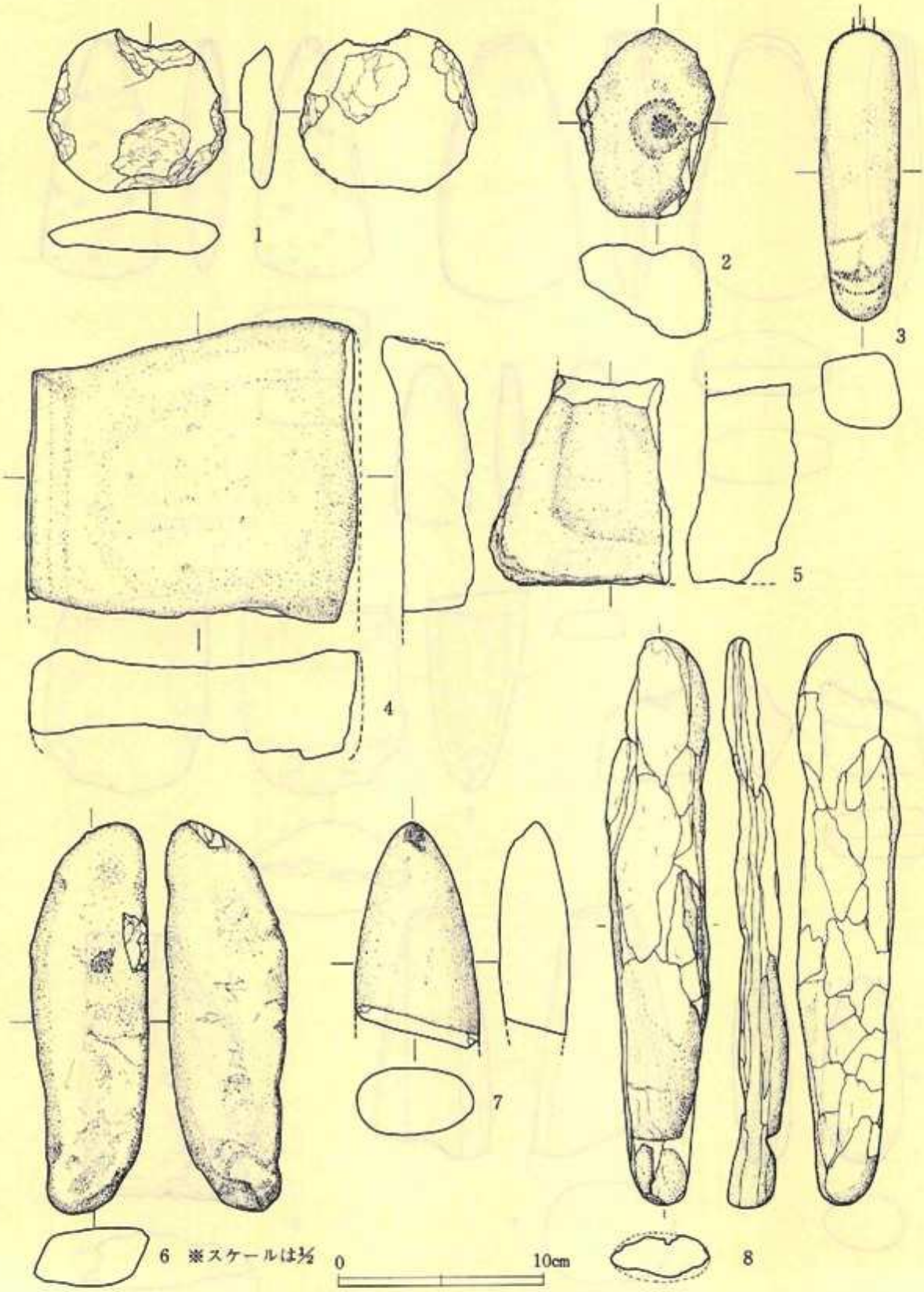
図版39：石器実測図―2（楔形石器他）



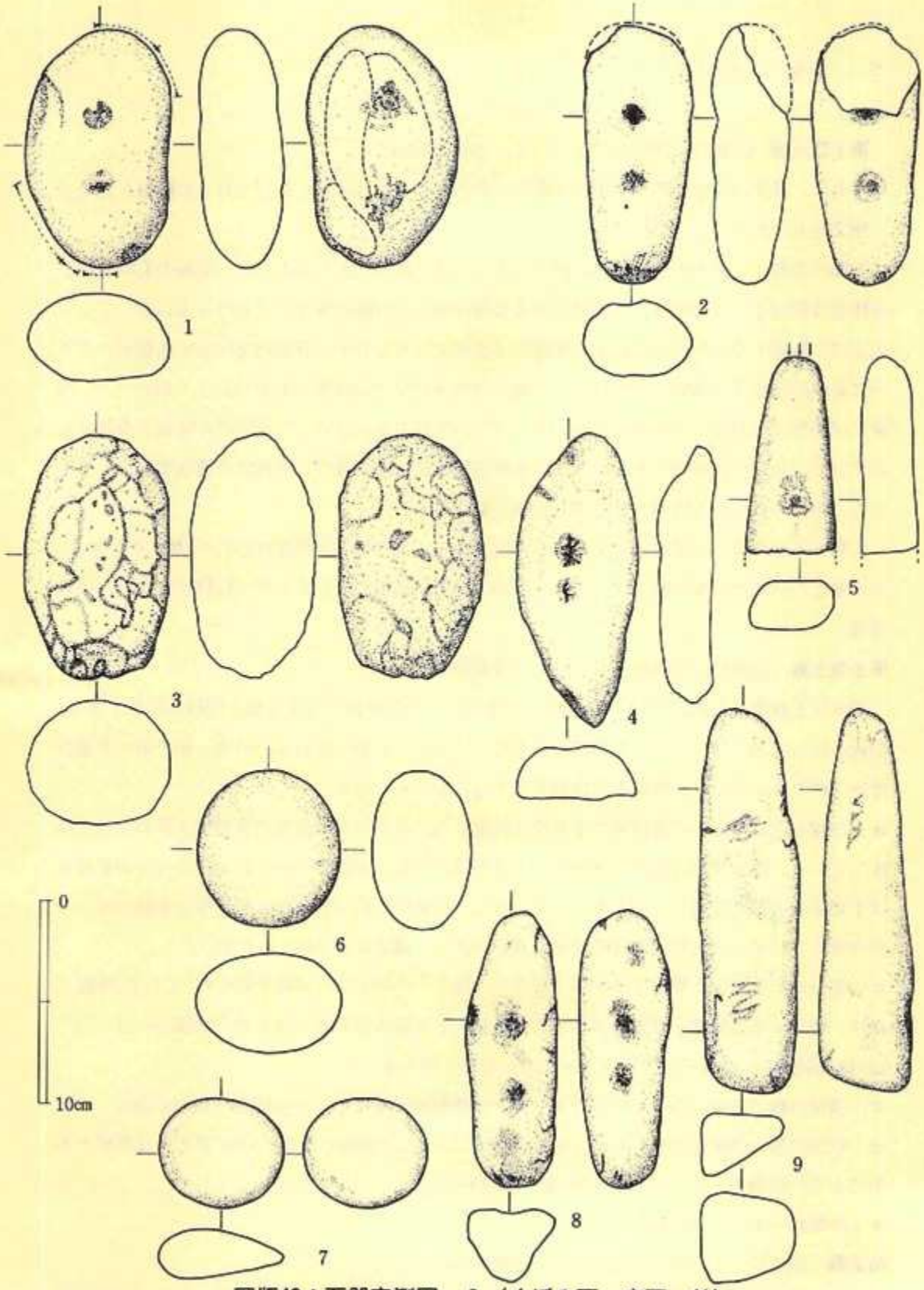
図版40：石器実測図―3（剥片他）



図版41：石器実測図―4（磨製石斧　他）



図版42：石器実測図―5（礫石錘・石皿　他）



図版43：石器実測図―6（くぼみ石・磨石　他）

2．土器・土製品

第Ⅰ類土器（図版44，図版49－1・2・5，写真図版39）

本群は、縄文時代中期の大木10式土器に比定されるもの（a類）、及びこれらに酷似した胎土・施文をもつもの（Ⅰb類）である。

a類の器形は、緩やかな大波状口縁か、あるいは口縁突起をもつものと、平縁のものとある。全体形は胴部なかばが膨み、頸部付近が最も締った後、口縁が外反するものが多いが、“く”の字状に外傾するものもみられる。文様には渦巻文は見られず、磨消縄文による曲線的、あるいは直線的区画文で構成されている。口縁の文様単位区では外面に竹管等により刺突文が、内面には渦巻文の退化したものと思われる“の”の字形あるいは“し”の字形の隆起文が付けられている。また、頸部付近から胴体部には磨消帯の終始点や接点に半円状の鰭状突起をもっている。用いられている縄文はLR・RL両者が見られる。

Ⅰ類bとしたものは図版49－1・2・5などである。器形的には胴部の膨みがa類よりも弱いものの胎土の特徴が非常に酷似している。色調は褐色～暗褐色のシルト質で砂粒は少ない。焼成普通。

第Ⅱ類土器（図版45，図版46－1・2・3，写真図版40～　）

器形はⅠ類よりも膨み、締まりの変化が少ないが、粗製深鉢ではⅠa類と同様の器形である。口縁はほとんど平縁で、4つの口縁突起をもっている。Ⅰ類と区別したのは、胎土中に多量のガラス砂を含んでおり、色調も灰白色を呈することからである。

a：口縁および突起下の磨消帯で4単位に区画され、各々の中は直線の磨消縄文帯が文様を構成している。口縁突起の内面は半円あるいは円形の隆起文が貼りつけられている（このⅡ類aはⅠ類aの一部と関連した施文をもっている）。色調は灰白～灰色で、胎土中に多量のガラス砂を含んでいる。また胎土の締り焼成も良好である。縄文は多子撚LRが多い。

b：器形的にⅠ類似と類似するが縁は平縁で一部のものは4つの口縁突起をもっている。体部文様は、縦走する綾繰文と無節の斜行縄文（LR）とが組み合わさったもの（図版45－11～13・15・18，図版46－1・3その他）とそうでないものとがある。

c：波状口縁で口縁に沿って円形竹管文および隆起線が周るもの（図版45－19・23・24）。

d：網目状等の撚糸文をもつもの。胎土の特徴はa～cと同様であるが、多くのものは器形が不明である。（図版46－4，47－34～38・42～45・48～50）

e：図版48－1～3・12・14

第Ⅲ類（図版47－1～33，図版52－1，写真図版41～　）

数本の淡線あるいは櫛描文で文様を描くものを一括した。これらの中にはa：地文が無文で

4～5本の沈線で文様を描く一群（同一個体の可能性大）。b：櫛描文だけで曲線文を構成するもの。c：沈線による曲線区画文の間を櫛描文状（刷毛目）で充填するもの。d：3～4本の比較的幅の広い並行沈線で曲線文を構成するもの。この類に地文が無文のものと縄文のものとがあり、地文が縄文のものでは沈線間を磨消している。

第Ⅳ類（図版52－6・7・13・15，図版53－25・26・30～38，写真図版45－27・15・28・29・他）

三又状文の無文部をもつ入組み文で文様が構成され、イボ状突起や刺突文を一部にもつもの。これらは口縁に山形突起をもち突起の中央に刻みが施こされている。また、特に区分はしないが図版48－8・9・10・11・13などは本類と混在している。

第Ⅴ類（図版52－9，図版53－39・41～45，写真図版45－26・30・31・32）

これらは三又文・羊歯状文をもつ一群で大同B式とBC式とに分けられる。

第Ⅵ類

羽状縄文と1・2本の沈線だけをもつものなどを一括して本類とした。

a：平縁と壁は底部から口縁へと緩やかなカーブで立ちあがり口縁付近に最大幅をもつ。口縁は緩やかに内反している。これらは、更に縄文の施こし方で図版49－4・6・7・8と図版51－6・7・9に区別される。

b：器形はaに類似するが、最大幅の部位がより下にあり、縄文は二種原体の施転で羽状縄文を構成している。図版50－1・2，図版51－1～4，図版53－1～13。これらの原体は3～4子撚りがほとんどである。

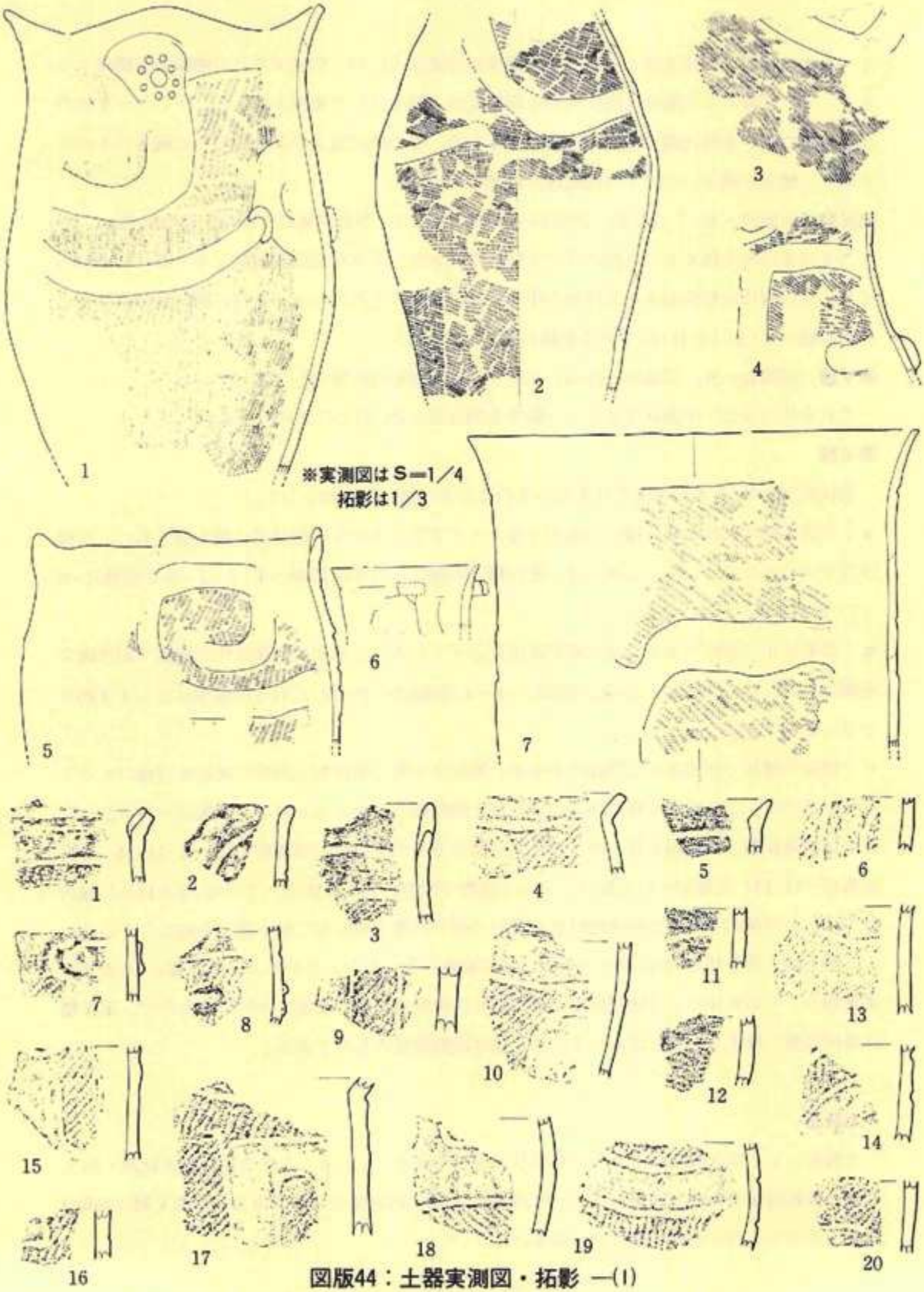
c：縄文の種類・状態はbと同様であるが、器形は小型で第Ⅳ類と同様の突起を口縁にもっている。このような特徴から第Ⅵ類cは第Ⅳ類と同時期のものと思われる。（図版53－14～21，）

d：ほぼ第Ⅳ類と同時期と思われるが縄文が異なるものを一括。（図版52－2～5・11・14，写真図版45－11・14）図版52－11と14は、入れ子状態で雨裂付近から出土している。なお11は口縁の一方に2つの突起をもった側突起付近を境いに撚りの異なる原体二種で縄文を施こしている。

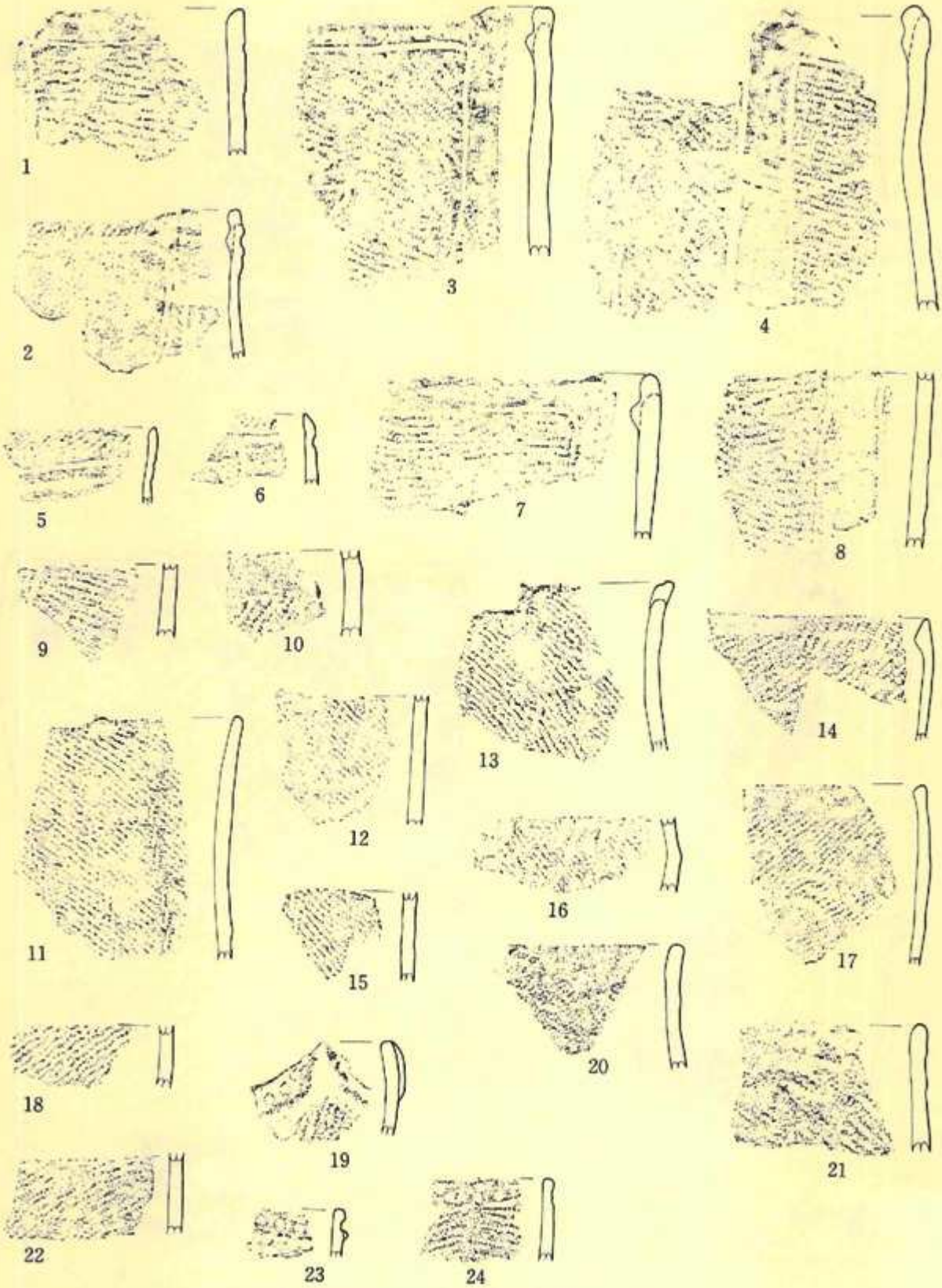
第Ⅰ類・第Ⅱ類a・bは同一の大木10式の範疇に入るものと思われる。第Ⅱ類c・dおよび第Ⅲ類そして第Ⅵ類のaは後期前葉。第Ⅵ類bは後期中葉から後葉にかけてのもので、第Ⅳ類は後期後葉に属するものと思われる。第Ⅴ類は晩期前葉のものである。

土製品

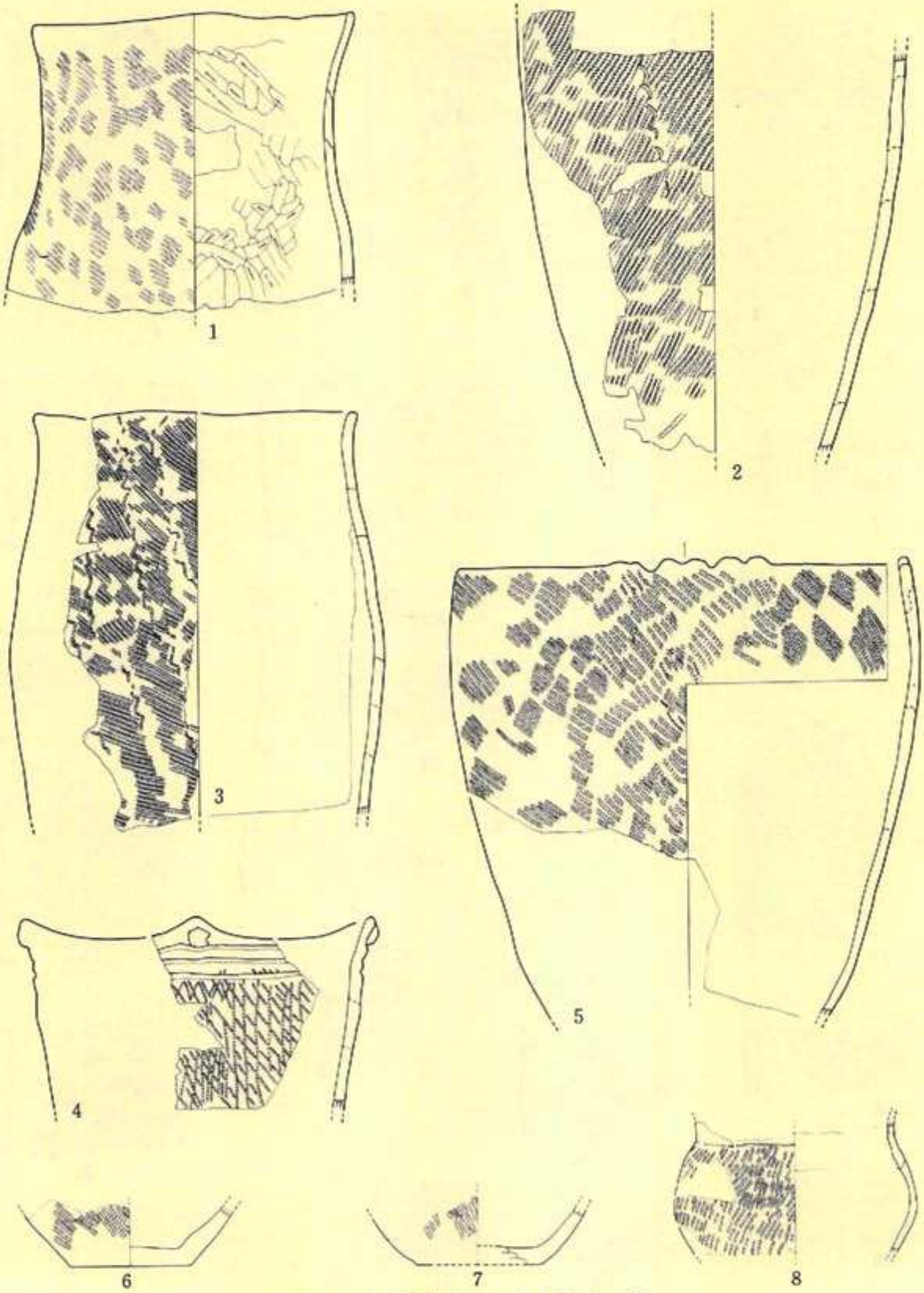
土製品としては図版48－1～5の耳飾り・土球が出土している。1と2は、出土状況・胎土等から後期前葉のものと言えるが、3つの耳飾りは胎土の状態が第Ⅳ類あるいは第Ⅴ類に類似するところからこれらと同時期と思われる。



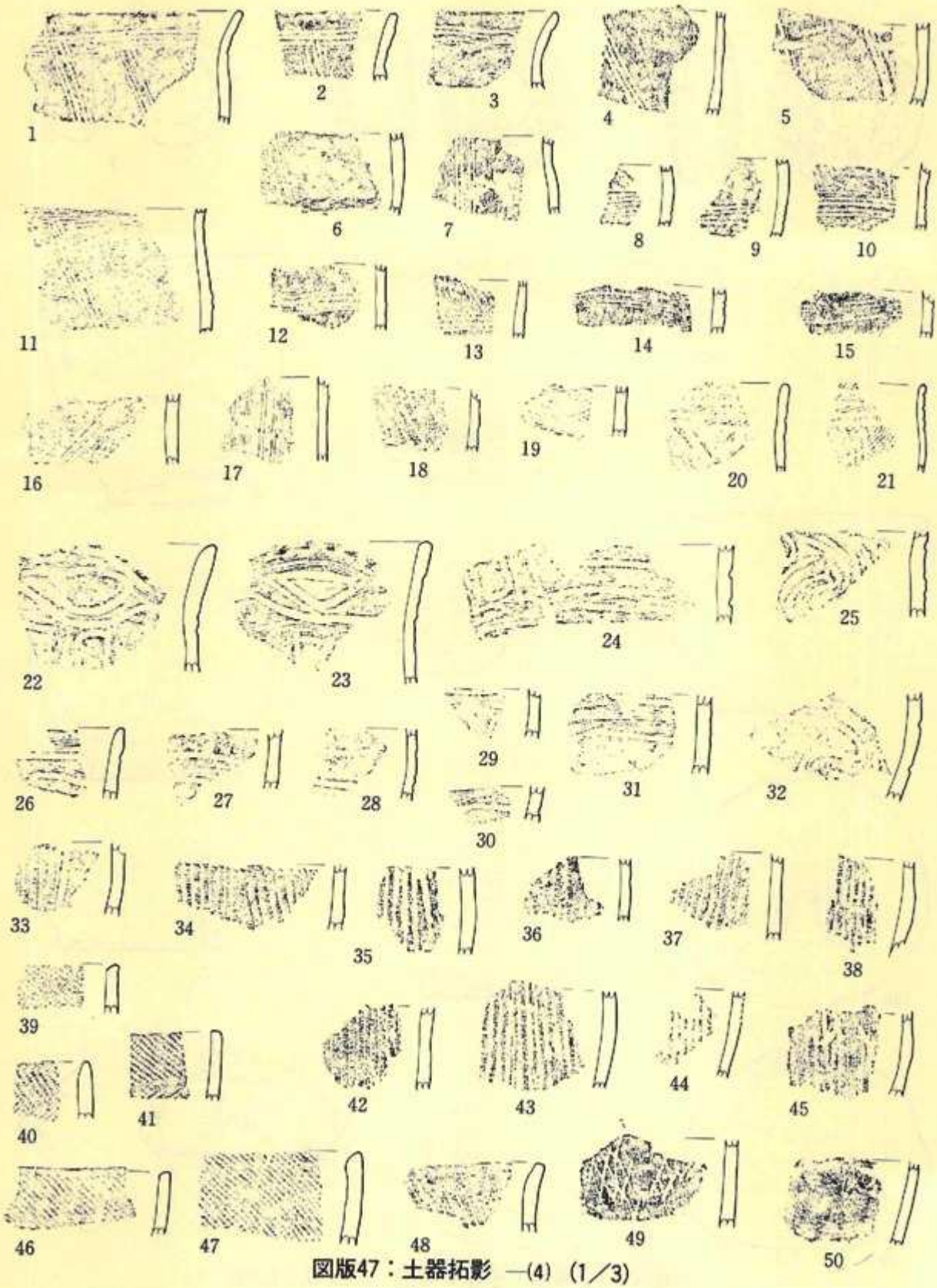
図版44：土器実測図・拓影 —(1)



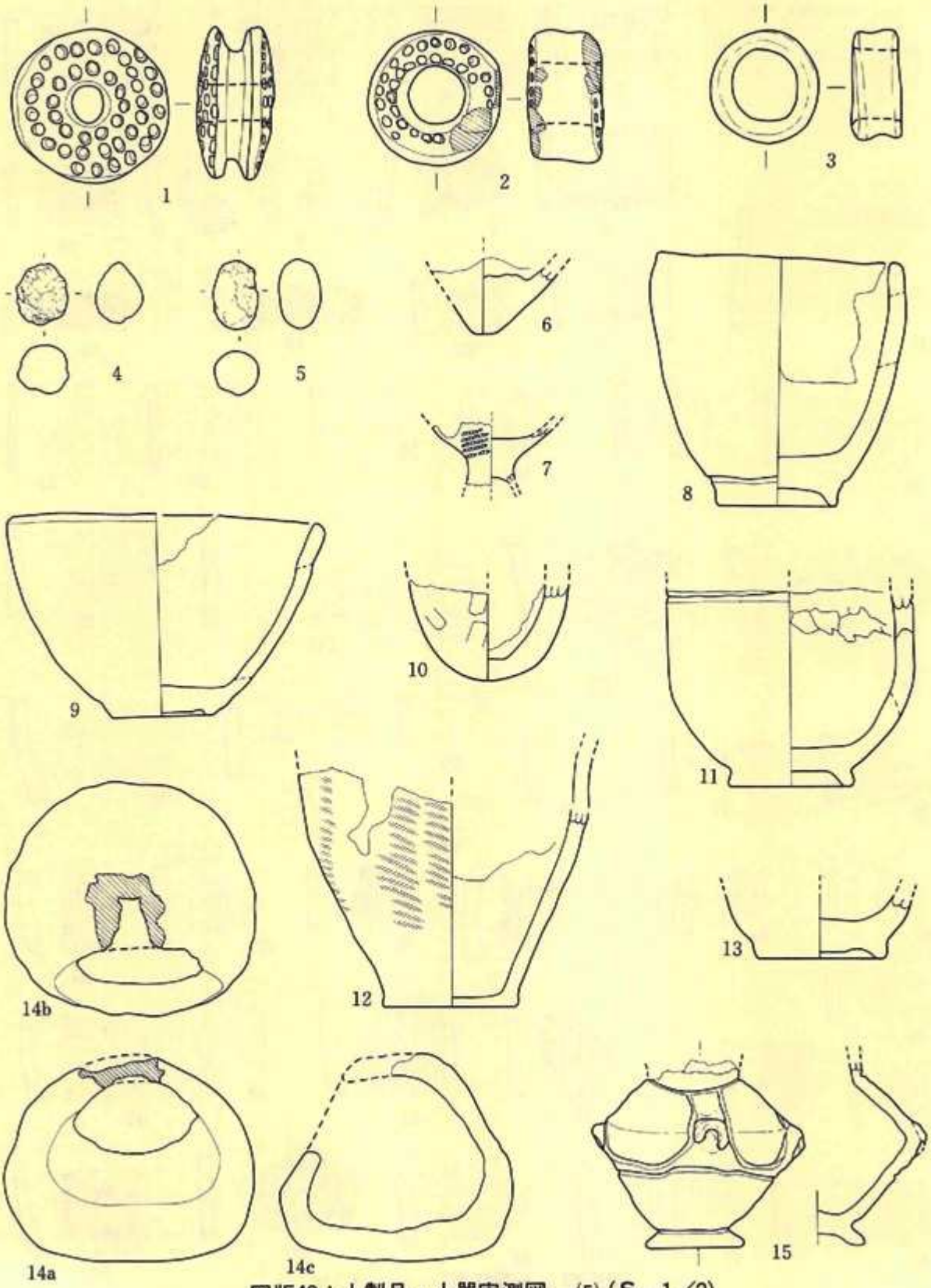
図版45：土器拓影 —(2)（S＝1／3）



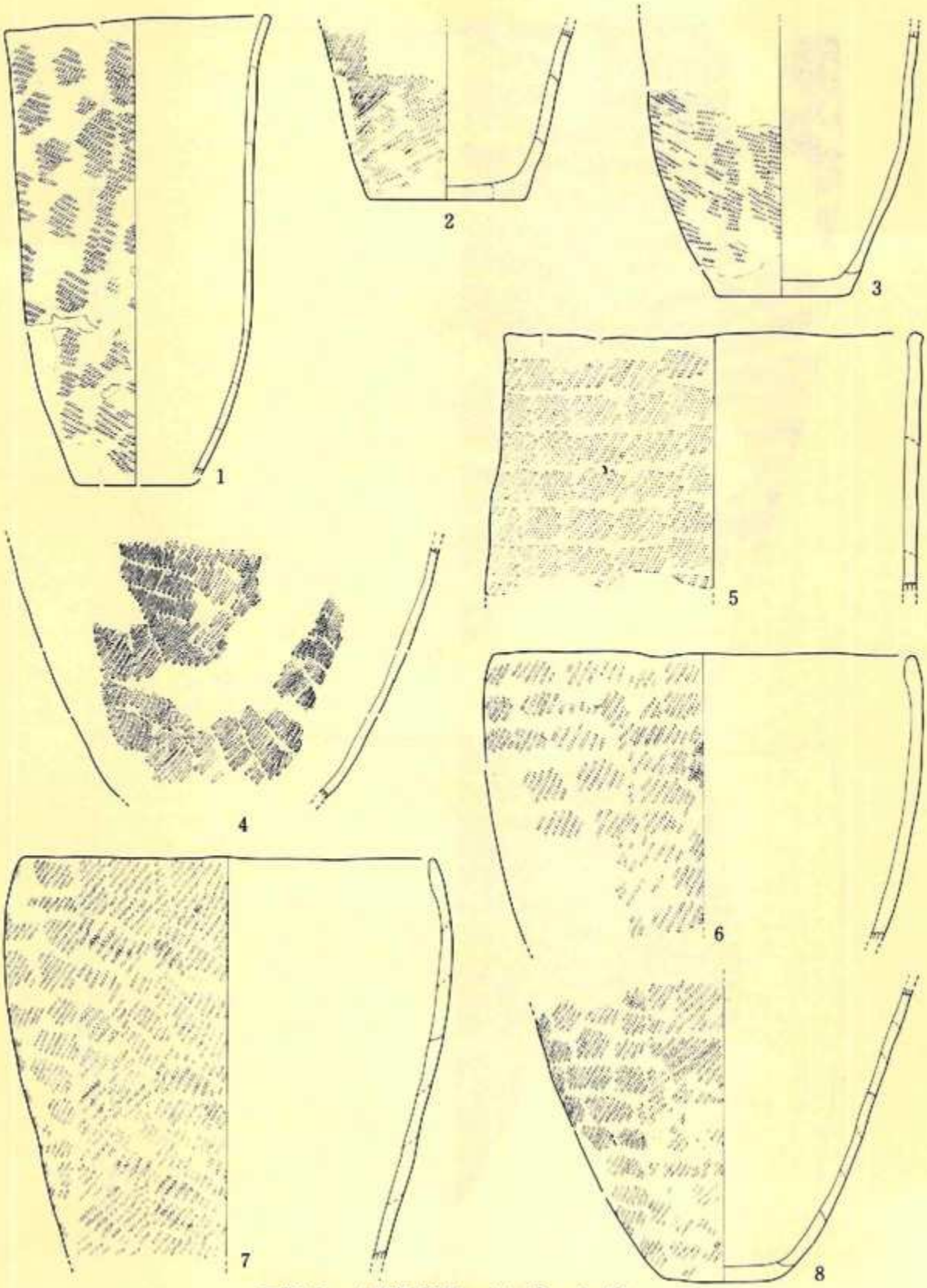
図版46：土器実測図—(3)（S＝1／4）



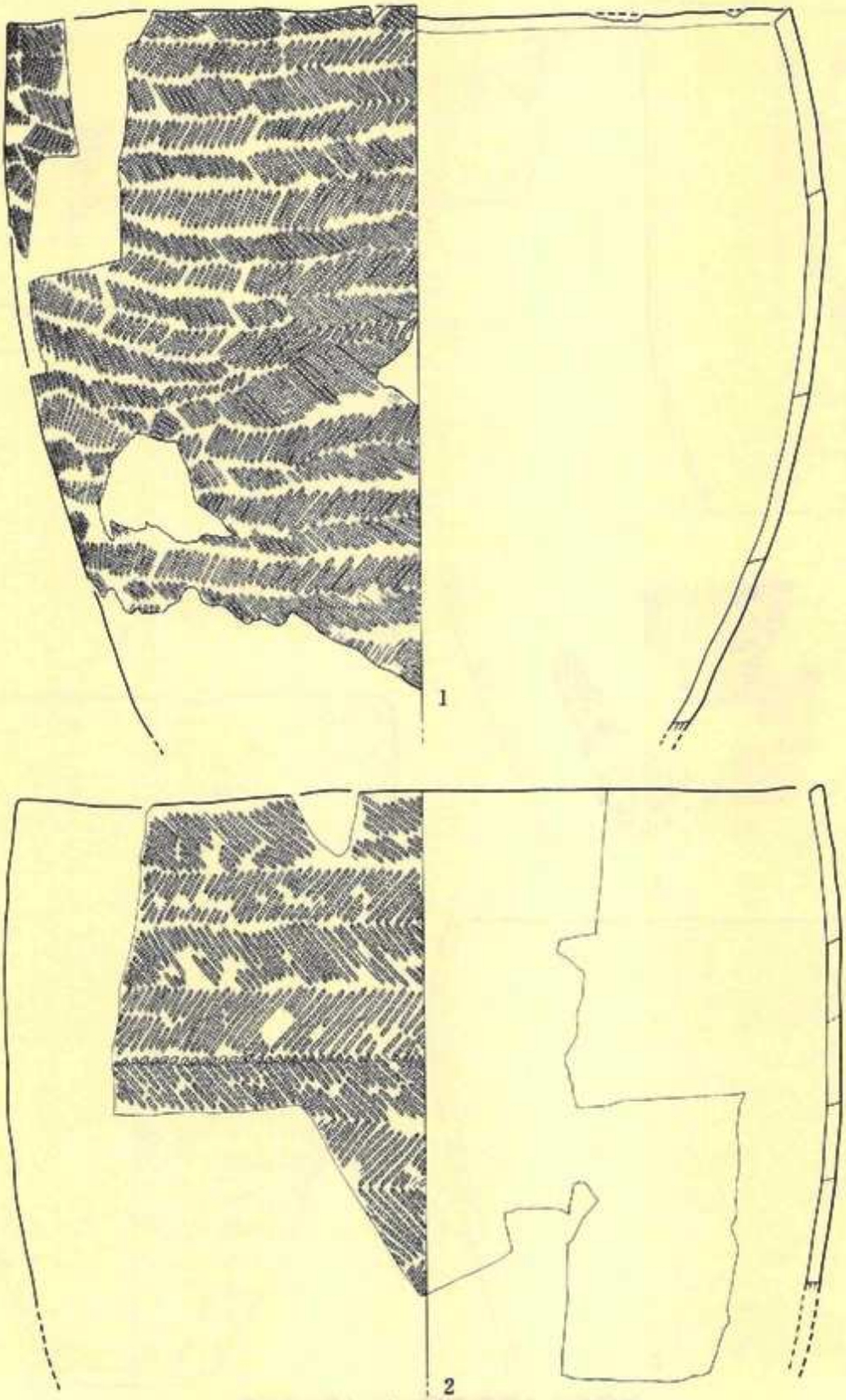
図版47：土器拓影 —(4) (1／3)



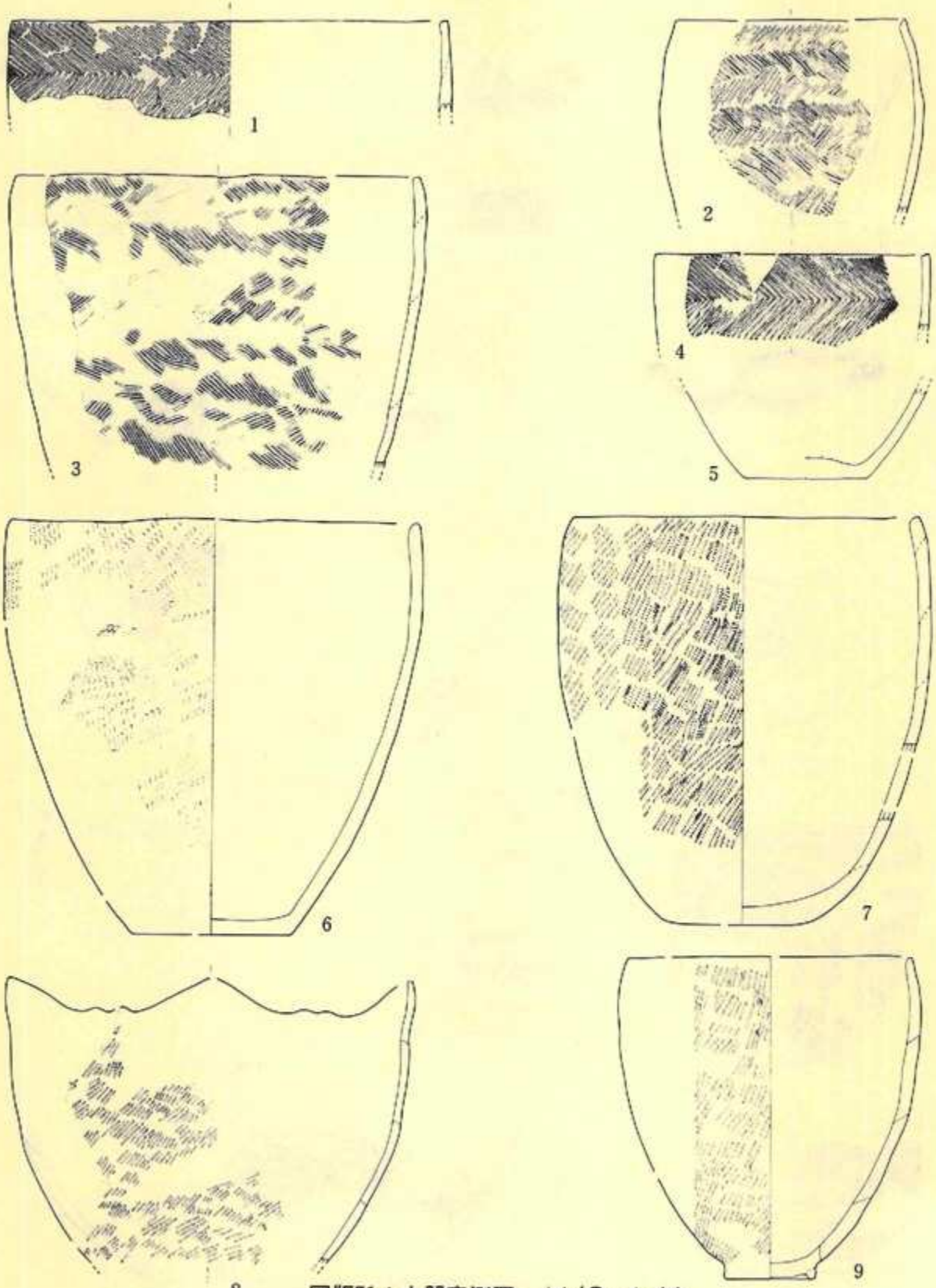
図版48：土製品・土器実測図 —(5) (S＝1／2)



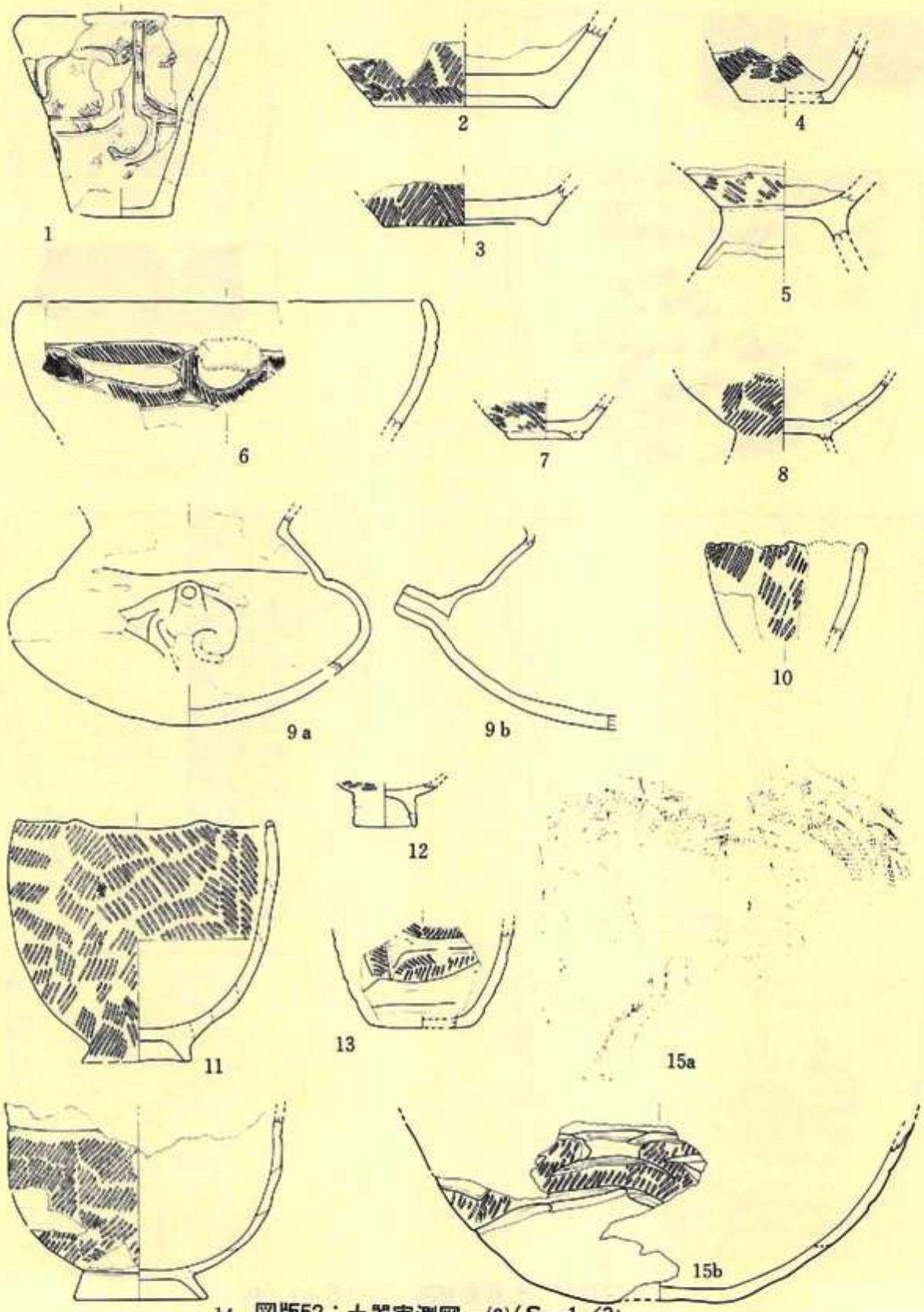
図版49：土器実測図 —(6) (S＝1／4)



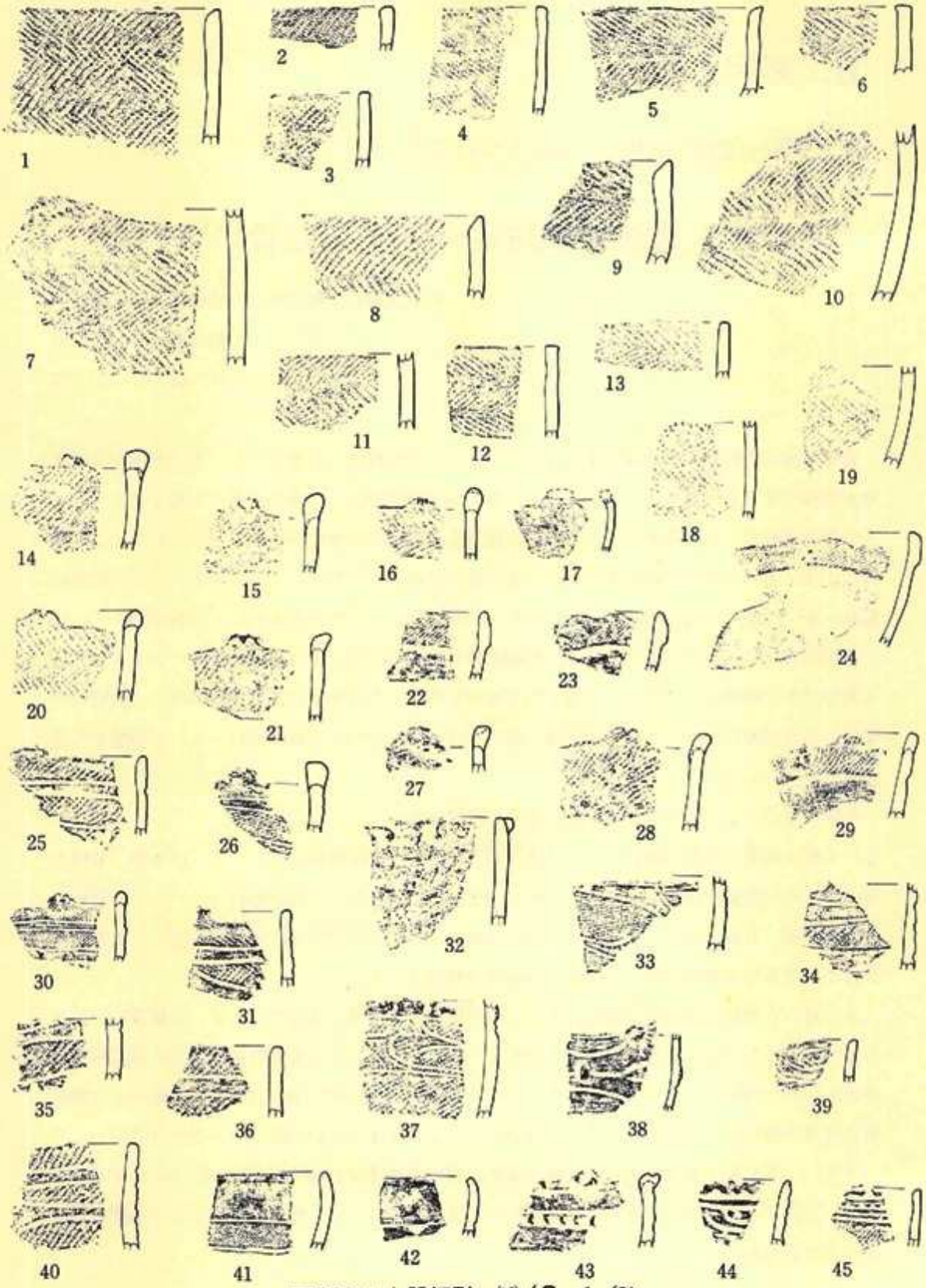
図版50：土器実測図 —(7) (S=1／3)



図版51：土器実測図 —(8)（S＝1／4）



図版52：土器実測図—(9)(S=1/3)



図版53：土器拓影―(10)（S＝1／3）

Ⅶ. まとめ

1．住居址について

検出した住居址は縄文時代中期末から晩期初頭までの何れかに属するものと考えられる。またこれらの分布状況は尾根部東よりに集中しており、所属時期・同時存在などの関係を無視して観た場合、弧状をなすように配置されている。この配置の背景には、第1に住居建設区域と貯蔵穴等の土坑構築区域との使い分け……場の区別……に対して各時期ともに共通した社会的認識が存在していたことが考えられる。(註1) 第2に、住居址配置がなす円弧の内側は急傾斜のくぼ地（雨裂）となっており、当然住居の構築はこの地点を避けなければならない。 第3は第1と係わるが、住居の配置は極く近接はしているものの重複が見られず、新住居の構築は旧住居構築地点を回避して行なわれていたことが明瞭である。

これらの事象から、貯蔵穴区域と住居区域とが明瞭に区別され、制約された区域内での住居構築では旧住居部を回避して行なわれたことが明瞭である。それ故、これらの現象は単に結果的配列ではなく社会的制約・認識に基づいた結果と言えよう。

〈柱穴配置と炉の位置・形態〉

全柱穴を検出できなかったＣⅦ－05住そして10数口を検出したＣⅦ－03住も含まれるが、住居址10棟のうち5棟は五角形配置を基本とするものである。ＣⅦ－03住の場合、5本以上の配置も考えられるが炉の形態から見た場合、他の4棟と同様で面積との関係から柱数が増加していると考えられる。これら5棟の炉は、石囲炉あるいは石組炉と地床炉との2種があり、ＣⅦ－01住を除けば、"複式炉" 的構成となっている。炉の位置は五角形の底辺（南東よりの柱穴2本間）の中点を頂点柱穴とを結ぶ主軸上で、南東壁に接するように偏在している。ＣⅦ－01住居址は、中央付近に円形炉(1基)が位置し、ＣⅦ－04・05住居址では2基の炉が設けられ、複式炉的形態の炉は中心軸が住居の中心軸と同一ではない。

ＢⅦ－02・03住居址では、柱穴配置が不明であるが炉は南東壁よりに偏在する不整円形の地床炉？である。またＢⅦ－01住居址の場合、炉は中心軸の両端より2基存在するが、このような複数配置は各々の炉が果たす主な "役割・機能が相異する" ためと考えられる。

〈出入口〉出入口については明確な施設をもつ住居址は見られないが、複式炉的構成の炉では壁よりの片側あるいは両側に、特に固く締まった部分が存在する（ＣⅦ－02住・ＣⅦ－03住・ＣⅦ－06住）ところから、出入口に係わる場所、あるいは炉を対象とした "作業の場" が考えられる。また複式炉的構成の炉をもたないＢⅦ－01・ＣⅦ－01住の3棟では、主軸線上の南東壁付近に固く締まった床が存在する。ＣⅦ－05住の場合竪穴部外にも同様の固く締まった部

分がつづいている。

以上の観察状況から、出入口は壁高の低い東壁～南壁の方向に設けられていることが推定できる。(註２) 炉の両脇に固い踏み締めが見られる住居址の場合、床面レベルの高い方が出入口付近で低い方を炉を対象とした作業場と考えられる。

〈その他の機能・役割を果たす場〉

炉を中心とした出入口・作業場については前述の通りである。その他、遺物の在り方から住居内の場の在り方をみると……。

①作業台石が設けられているもの（ＢⅦ－01住・ＢⅦ－02住・ＣⅦ－03住）

②貯蔵用の土器埋設施設や貯蔵穴をもつもの。(ＢⅦ－01住・ＣⅦ－01住・ＣⅦ－06住)

③奥壁付近の柱の周辺に石器等がまとまっている。(物置き的場)(ＣⅦ－03住・ＣⅦ－04住・ＣⅦ－06住)

④床面より未成形・未焼成の粘土塊を出土。(ＣⅦ－06)

各住居址が所属する時代時期について以下のように推定しておく。

ＢⅦ－01住：埋土の１・２層上部および５・６層中に図版45－１～８・10～13などが含まれている。(第Ⅱ類ａ　土器)　床面および直上層からは他の土器群が出土していないところから第Ⅱ土器群に近い時期とする――縄文時代後期初頭。

ＢⅦ－02：南隅の床面から第Ⅲ類土器が圧砕された状態で出土している。――後期初頭。

ＢⅦ－03住：第Ⅰ類ｂ土器が床面から出土（図版44－７，45－20)。古い土器が流れこんだ可能性も考えられることから、中期末～後期初頭と推定する。

ＣⅦ－01住：投げこみ土層中から図版51－３・８，52－12などの第Ⅵ類土器が出土している他は、時期を推定できる土器は出土していない。一応後期前葉としておく。

ＣⅦ－02住：図版44－５，49－５などが床面に投棄されていること、図版44－１などが本住居址周辺から多く出土していることから第Ⅰ類土器と同じか、やや新しい時期と考える―中期末。

ＣⅦ－03住：炉の脇、第１層から図版48－15が出土している。土器には二次火熱の痕跡が見られる所から住居の時期は本土器と同じか、新しいものと考えられる。――後期中葉。

ＣⅦ－04住：炉前庭部の炭化物・焼土粒に混じって図版49－１・２、そして上部の投げこみ土層中から図版46－２・３などが出土している。図版49－１・２の土器は、片面に一次火熱を受けており、第Ⅰ類土器に酷似した胎土であることから中期末以降～後期と推定する。

ＣⅦ－05住：出土遺物としては、東よりの床面から図版48－４・５の土球が出土しているが、他の遺物は投げこみ土層中からのものだけである。柱穴配置には不明の点が多いが、住居址平面形・炉の形態にＣⅦ－04住などに類似するところから、ＣⅦ－04住と同様に中期末～後期と推定。

CⅦ－06住：埋土中から第Ⅱ類D（図版47－48など）が出土しているが、床面からはPo－9の奥より図版48－2の耳飾りが出土している。この耳飾りの胎土は第Ⅱ類a～dと同様で、炉付近の小貯蔵穴や床から出土した粘土と同様の調整が見られるところから第Ⅱ類b・c土器と同様に後期初頭と考える。

CⅦ－07住：時期を推定できる遺物は出土していない。

2．土坑類について

土坑類は、竪穴状・直円筒・陥し穴・皿形・フラスコ形など数種が見られたが、ここではフラスコ形土坑を中心として分析を進めてみる。

フラスコ形土坑として形態分類したものは全62基である。(不明瞭なものは除外) これらを形態毎に百分率で表わすと“表4の(イ)欄”の章に、そして各々を集約して行くと右の欄へと変化し〈A＋B〉型21基33.9%、〈C～E〉41基66.1%の大別2群となる。しかしA_1・B_1そしてA_2・B_2が本来同一形態であった場合A_1B_1＝7基(11.3%)A_2+B_2＝14基(22.6%)となる。これら62基を大別すると〈A_1+B_1〉型、〈A_2＋B_2〉型〈C＋D_1＋E〉型、〈D_2〉型の4種となる。しかしこの形態分類は規模等の関係を満たしていないので必ずしも妥当なものとま言えない。

表4：フラスコ形土坑形態比

形　態	基数	イ) %	ロ) %	ハ) %
A_1	3	4.8%	14.5%	21基 33.9%
A_2	6	9.7		
B_1	4	6.5	19.4%	
B_2	8	12.9		
C	10	16.1	(16.1%)	41基 66.1%
D_1	9	14.5	21.0%	
D_2	4	6.5		
E	18	29.0	(29.0%)	

フラスコ形土坑の埋土の状況を百分率で表わすと表5のようになり、何らかの形で埋めもどしているものは61基98.4%、自然埋没のみのものは1基1.6%である。

新期の墓坑・土坑・ゴロタガメ・大柱穴を除いた土坑類で埋めもどし・自然堆積の割合を見ると90%以上が、また住居址を加えると95%以上の遺構に何らかの形で“埋めもどし”と言う人間の行為現象が認められる。

表5：フラスコ形土坑埋土型比率

型(基数　)	型(基数　)	型(基数　)
F (10基, 16.1%)	I (6基, 9.7%)	L (3基, 4.8%)
G (7基, 11.3%)	J (5基, 8.1%)	M (1基, 1.6%)
H (4基, 6.5%)	K (9基, 14.5%)	N (17基, 27.4%)

住居址群、土坑群とが混在する東側区域では18基の土坑が重複関係にあり10基は住居址と関係している。住居址に切られているのは、フラスコ形土坑（D_2）2基・同A_2・B_2各1基・直円筒形1基、そして住居址を切っているものはフラスコ形土坑（B_2）2基・同(E)2基・陥し穴状遺構1基である。また、西側区域の土坑群では重複するもの8基で、このうちフラスコ形土坑同志が重複しているもの6基である。

土坑類のうち遺物の廃棄が見られたものは、フラスコ形土坑3基で、そのうち2基は土器、

1基は剝片である。他の土坑で遺物を出土したものは少なく、数点が埋土に混在していただけである。

その他……フラスコ形の特徴

※底部あるいは埋土中に自然礫をもつもの……6基（石皿片等が底面にあるもの＋1基…7基）

※底面中央付近に副穴（小穴）をもつもの（A_1・B_1以外を含む）…11基（不明瞭＋2基…13基）

※その他の施設をもつもの底面中央以外に副穴等をもつもの……6基（2基は壁に小穴あり）

3．陥し穴状遺構について

陥し穴状遺構とした5基の他にDⅥ－011土坑・DⅥ－018土坑も陥し穴の可能性が考えられる。この2基を含めると計7基で、3種類の形態が検出された事になる。これら7基の底面からは杭等の痕跡は検出されていないが、陥し穴状遺構としたものは底面中央と両端からは排水に関係したと考えられる溝と窪地の部分をもっている。他の2基は各々丸底と平坦な底で、壁の立ちあがりは垂直であったと思われる。

埋土は、壁の崩壊によって下半が埋没しているが、途中から上部に投げこみの土層をもっているものも多い。

4．墓坑について

Ⅳの5項で説明した墓坑3基は、出土遺骨から人間の墓ではなく家畜のものであろう。本遺跡の名称および小字名からも判るように周辺地域では古くから馬の生産育成が行なわれており明治以降には軍馬の供給も行なわれている。墓坑以外には、馬生産と係わる遺構は検出されていないが、周辺地域の尾根筋や沢沿いなどに牧柵・育種場あるいは囲い場等の施設が存在したものと思われる。

5．遺構の廃棄について

住居址・土坑類ともに埋土の状況・過程について調査成果の一つとして各遺構の前段で説明してきた。本項では、それらと重複する内容となるが埋土を通して遺構の廃棄・排土についてまとめることとする。

住居址の場合、住居を廃棄する前提には大きく次の3種が考えられ、住居廃絶後の埋設過程に新遺構形成時の掘りあげ土で埋めもどすと言う行為・行動が大きな役割を果たしている。またフラスコ形土坑・陥し穴状遺構などの土坑類にも同様の行為・行動の結果が表われており、両遺構群の形成・廃棄には相関関係が存在するものと考える。

〈住居を廃棄する前提状況〉

1）何らかの理由により住居そのものが不要となり、上屋構造物を解体・撤去して竪穴部を埋めもどす。この場合、住居の老朽化も含まれよう。(CⅦ－02住居址)

2）火災による焼失後、加な地点あるいは地域へと居住の主体が移動する。本遺跡の場合、焼失と考えられる3棟（CⅦ－03，CⅦ－04，CⅦ－06）では焼失を示す層の上に自然層が薄く形成されているから、第1段階の埋めもどしが始まるまでの間この居住地が利用されていない（単位集団で災害地をある一定期間忌避)。

3）1)・2）以外の前提として生産的・会社的な条件や制約の中で、単位集団としての居住地を変更する。この場合、住居は解体・埋めもどし等の行為がなされず放棄されるものと考える。

同一居住地内での住居の変更では、新住居土坑構築の排土によって埋めもどされることが多いと考える。土坑類の場合、90%以上のものが何らかの形で埋めもどしながなされており、中には全く崩壊現象の認められないものも埋めもどされている。これらの埋土の種類・状態から土坑類の“構築～廃棄”までの使用期間および“廃棄の条件”は何であるかと言う問題が生じる。

また住居数と各土坑との関係、例えば1住居当りの構成員数と、フラスコ形土坑を貯蔵穴として用いた場合の食料保存量の問題などが残る。因に本遺跡の調査区域は路線幅という限定された範囲ではあるが、貯蔵穴と考えるフラスコ形土坑は住居址1棟に対して6･2基の割合である。この比率は、形態・容積等の条件を無視したものである。

6．その他の“場”

遺構の掘りあげ土・不要な容器・道具の捨て場として確認された地点は、住居址部の前面（南～南東）斜面と深掘D地点周辺の北斜面との2ヶ所である。住居址群の前面斜面の調査範囲内での量は少ないが遺物の集中が見られ、遺構構築の排土は全く認められない。(註3）反対に、北面部では200～250㎡の範囲に厚さ5～25cmで南部浮石・八戸火山灰群その他の排土の分布が確認されている。

7．遺物について

土器類・石器類とも遺物の出土量が少ないことはすでに述べている。ここでは、住居内出土の遺物についてまとめてみる。住居址からの遺物出土状態には、1)日常の不要器物を投棄したものと、2）焼失等による住居の廃棄に伴って器物その他を遺棄したものとの2形態が存在する。

1）の例としては、BⅦ－01住居址の埋もどし層に含まれる土器、CⅦ－02住址床面から出土した土器が相当する。2）の例としてはCⅦ－03住の掻器3点、CⅦ－04住の楔形石器等、そ

してCⅦ—06住居址の耳飾り、粘土塊などが相当する。その他、台石・磨石類が床面から出土するのも 2) の行為であろう。2)例の遺棄の状況は住居内の利用方法——場の利用区分——を解明する重要な手がかりとなる。

おわりに

本遺跡と類似する地形条件を備えた遺跡は、軽米町のみならず隣接する九戸村や青森県南郷村にも多数多く分布している。これらの遺跡は、図版2・図版4に示した遺跡を始めとして縄文時代中期末から晩期の遺構群をもつ遺跡が主体を占めており、雪谷川流域や瀬月内川に沿った九戸村の折瓜岳東山麓や軽米町の丘陵・段丘地帯から南郷村・八戸市へかけて縄文時代中期末から晩期に至る遺跡群の一大密集地域と言える。

これらの遺跡群は、縄文時代を通して形成された縄文社会の歴史的・地域的な動態の一つ一つとして顕現したものであり、馬場野Ⅰ遺跡がもつ内容もそのような動態に関連した一部を構成するものである。

(1983年6月末)

註　記

註1：麻生1優「縄文時代後期の集落」『考古学研究—26』1960年
　　坪井清足他「縄文文化論」『日本歴史　原始及び古代1』1967年
　　菅原正明　「縄文時代の集落」『考古学研究—74』1972年

註2：市川金丸　「水木沢遺跡」「泉山遺跡」等でも同様の事実が報告されている。

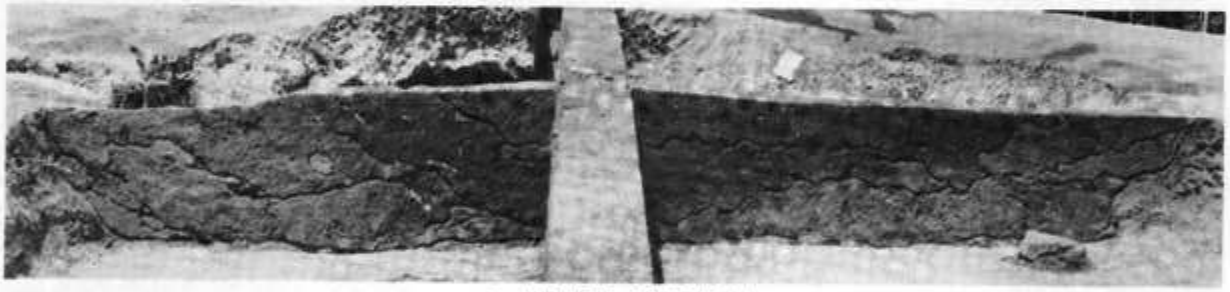
註3：出土遺物の多くはこの雨裂部より出土しており、雨裂は調査区外の山林へ扇形に広がっている。平坦地であれば集落中心の“広場”的機能を果たすかも知れないが急傾斜のくぼ地で、しかも多くの遺物を出土している所から“廃棄の場”と考えられる。

参考文献

1）1975年「泉山遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会。
2）1976年「水木沢遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会。
3）その他、註記中の文献等。

写　真　図　版

7. 精査中（南東より）



8. 土層断面（南東より）

9. 床面出土々器

10. 埋設土器検出

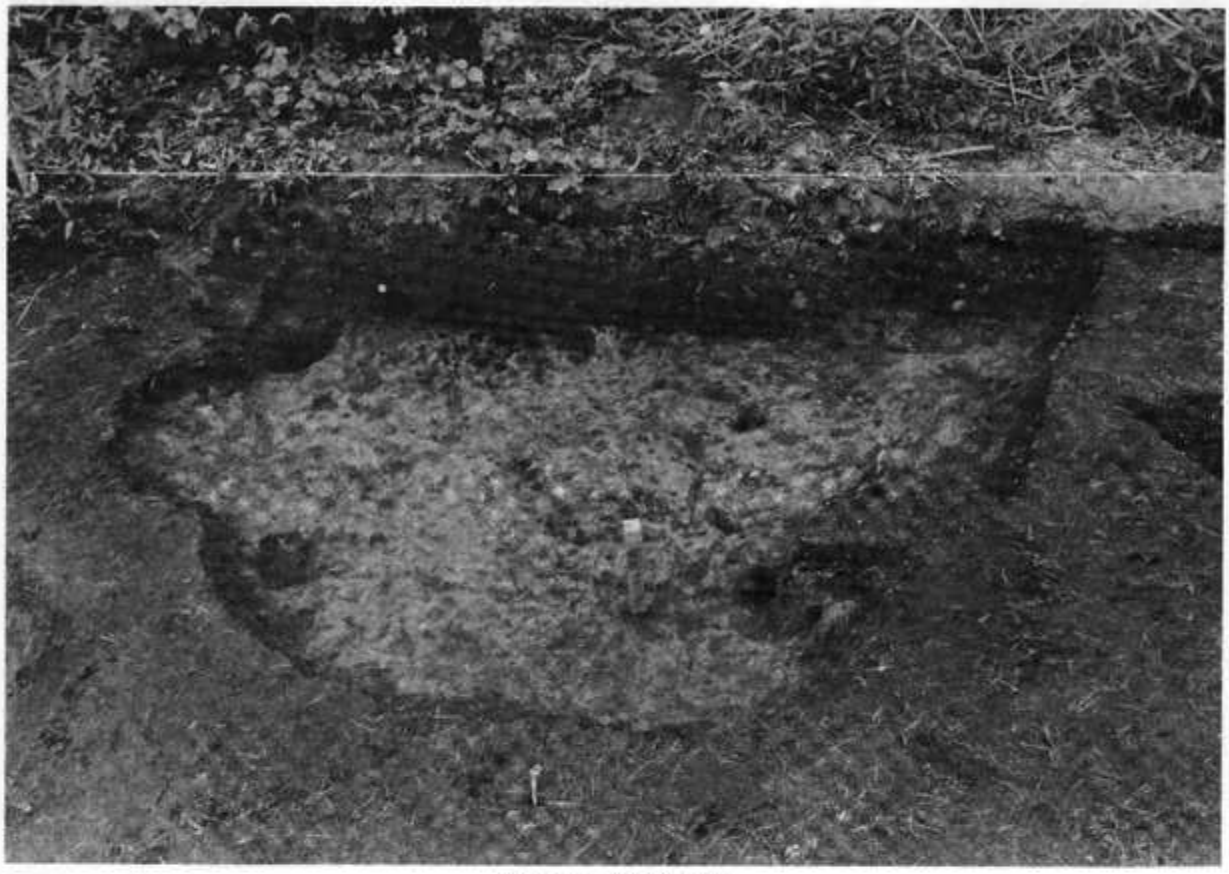
11. 壁中段出土土器

写真図版 5 ： B Ⅶ—01住居址

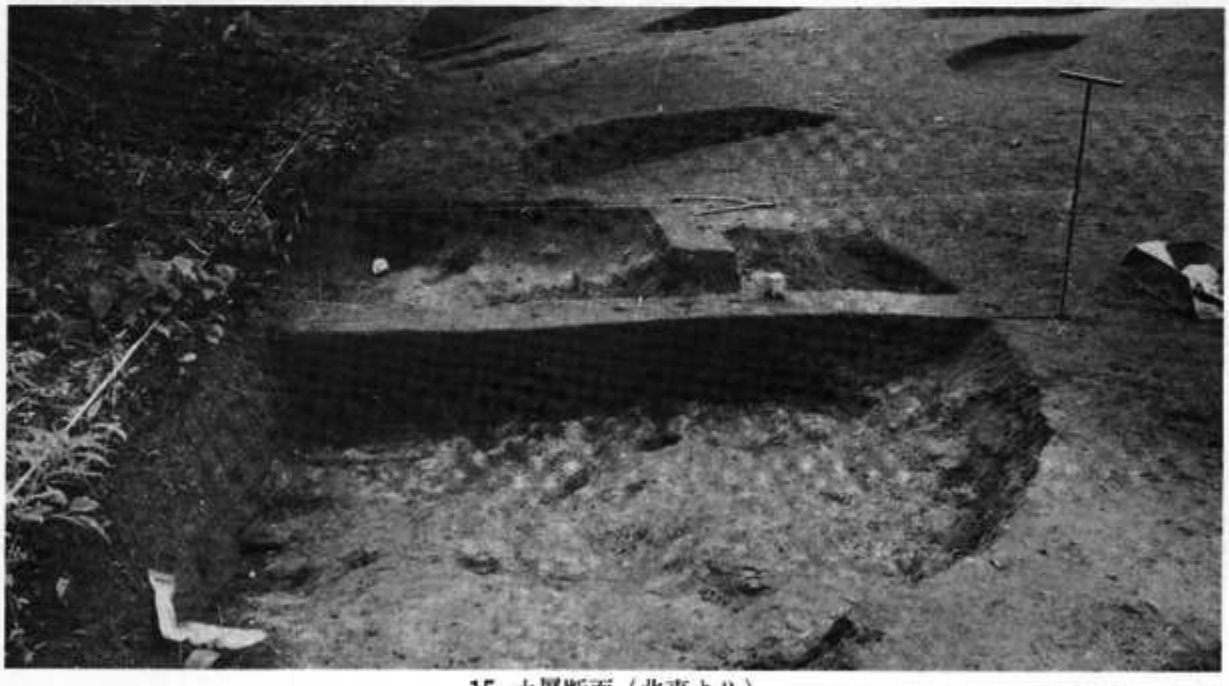
12. 完掘（南西より）

13. 土層断面（北西より）

写真図版 6 ： B Ⅶ—02住居址



14. 完掘（北西より）



15. 土層断面（北東より）

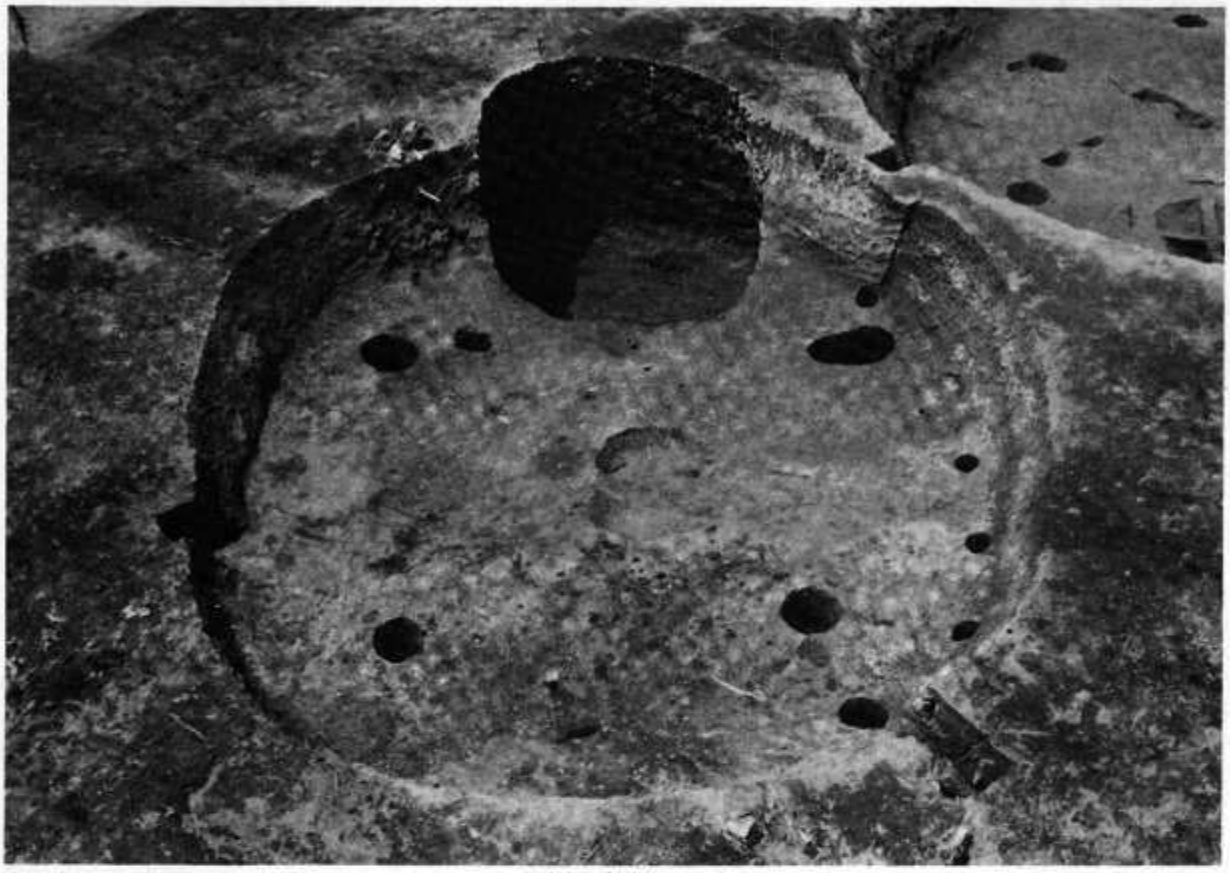
写真図版 7 ： B Ⅶ—03住居址

16. 精査中（南東より）

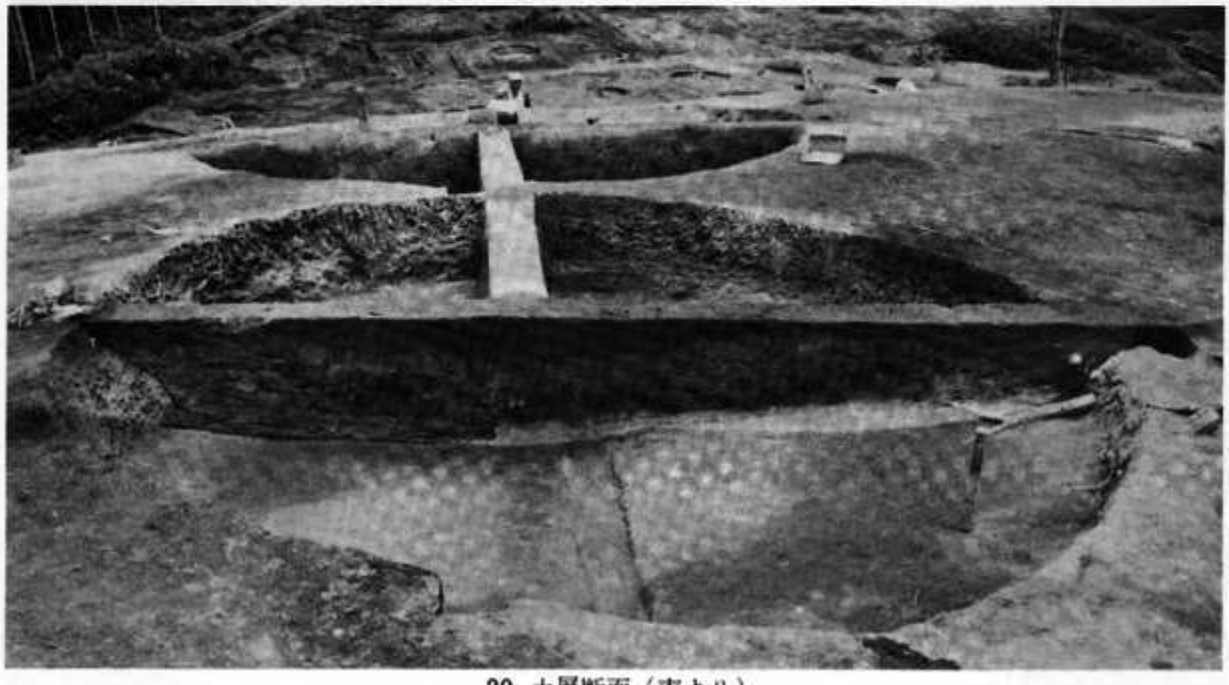
17. 土層断面（北より）

18. 廃棄された床面の土器

写真図版 8 ：ＣⅦ—01住居址



19. 完掘（南東より）



20. 土層断面（南より）

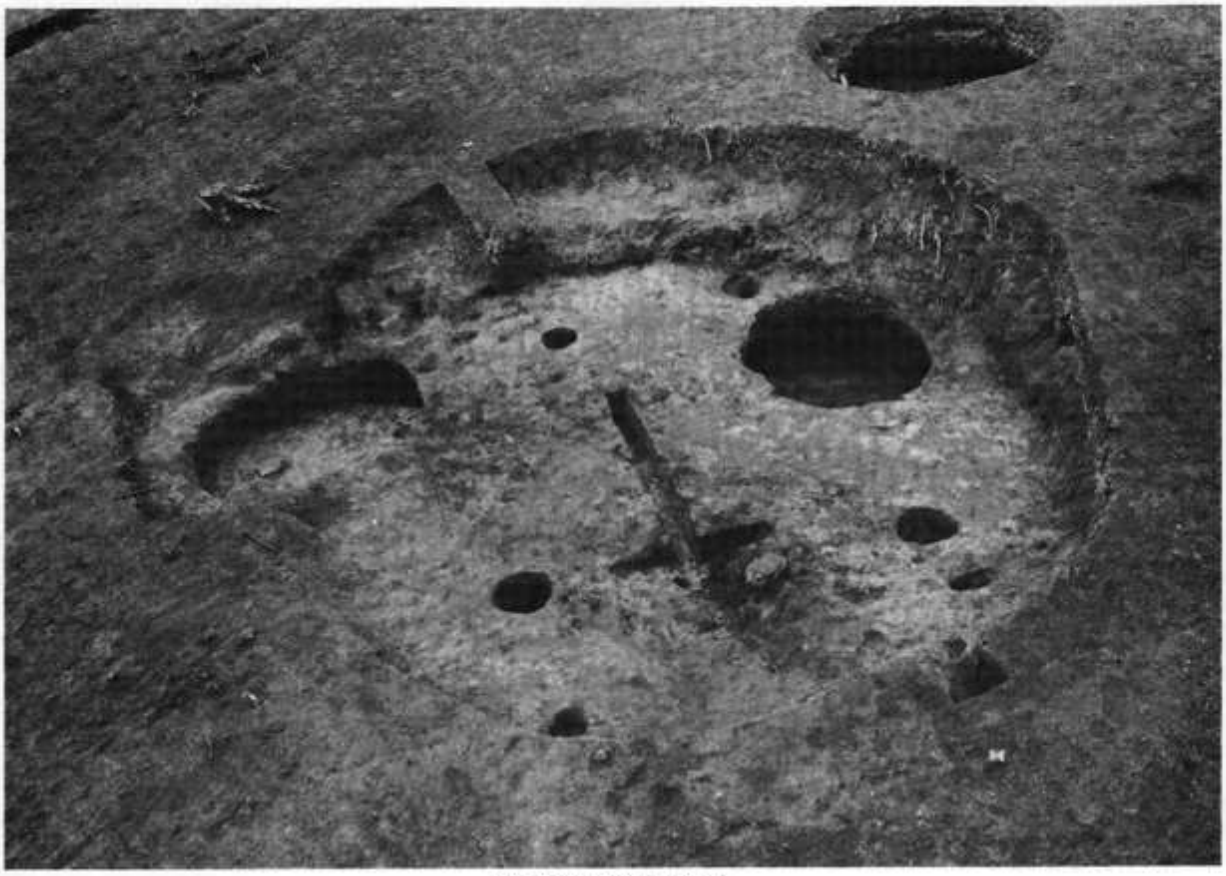
写真図版 9 ： C Ⅶ—02住居址

21. 完掘（南東より）

22. 土層断面（東より）

23. 床面出土の土器

写真図版10：C Ⅶ—03住居址



24. 完掘（南東より）

25. 土層断面（南東より）

写真図版11：CⅦ—04住居址

26. 完掘（南東より）

27. 土層断面（南東より）

写真図版12：C Ⅶ—05住居址

28. 完掘（南東より）

29. 土層断面（西より）

写真図版13：C Ⅶ—06住居址

30. 完掘（南より）

31. 土層断面（東より）

写真図版14：CⅦ—07住居址

32. BⅦ—001完掘

33. BⅦ—008

34. CⅥ—006完掘

36. CⅥ—006断面

35. BⅦ—001断面

40. CⅦ—003完掘

37. CⅥ—002・003完掘（東より）

41. CⅦ—003断面

38. CⅥ—003断面（西より）

39. CⅥ—002断面

写真図版15：陥し穴状遺構他

42. BⅦ—002完掘

44. BⅦ—003完掘

43. BⅦ—002土層断面

45. BⅦ—003土層断面

46. BⅦ—004完掘

48. BⅦ—005完掘

47. BⅦ—004土層断面

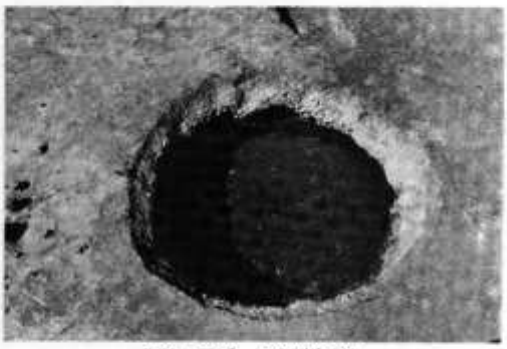
49. BⅦ—005土層断面

写真図版16：土坑類写真（1）

51. BⅦ—007完掘

50. BⅦ—006土層断面

52. BⅦ—007土層断面



53. CⅤ—001完掘

55. CⅥ—001完掘

54. CⅤ—001土層断面

56. CⅥ—001土層断面

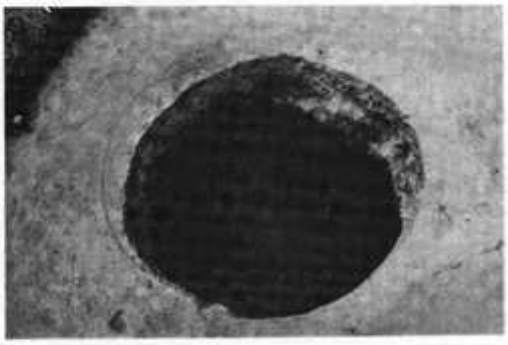
写真図版17：土坑類写真（2）

57. CⅥ—004完掘

59. CⅥ—005完掘

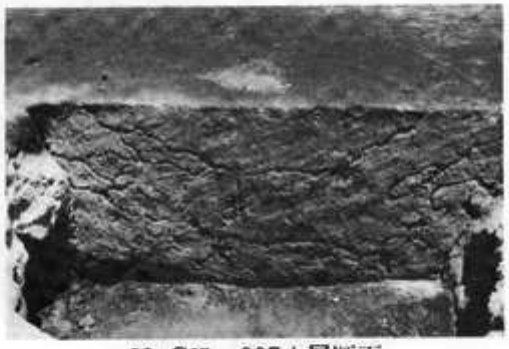
58. CⅥ—004土層断面

60. CⅥ—005土層断面



61. CⅥ—007完掘

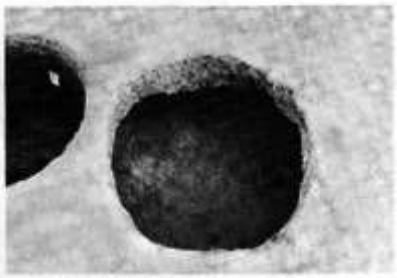
63. CⅥ—008完掘



62. CⅥ—007土層断面

64. CⅥ—008土層断面

写真図版18：土坑類写真（3）



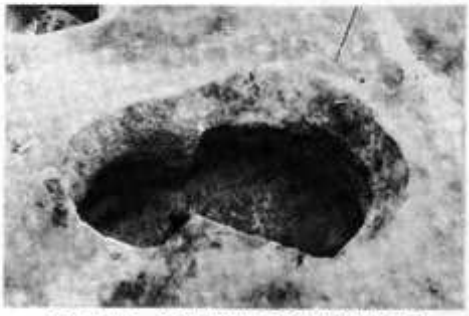
65. CⅥ—009完掘

67. CⅥ—011(左), 010(右)完掘

66. CⅥ—009土層断面

68. CⅥ—010土層断面

69. CⅦ—001完掘



72. CⅦ—005(左)：004(右)完掘

70. CⅦ—001土層断面

73. CⅦ—004土層断面

71. CⅦ—002土層断面

74. CⅦ—005土層断面

写真図版19：土坑類写真（4）

75. CⅦ—007(左). 006(右)完掘

77. CⅦ—008完掘

76. CⅦ—007(左). 006(右)土層断面

78. CⅦ—008土層断面

79. CⅦ—009完掘

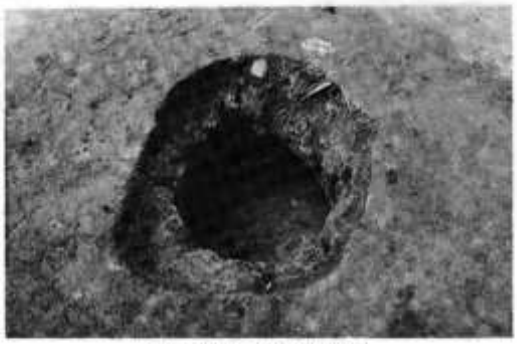
81. CⅦ—010完掘

80. CⅦ—009土層断面

82. CⅦ—010土層断面

写真図版20：土坑類写真（5）

83. CⅦ—011完掘



85. CⅦ—012完掘

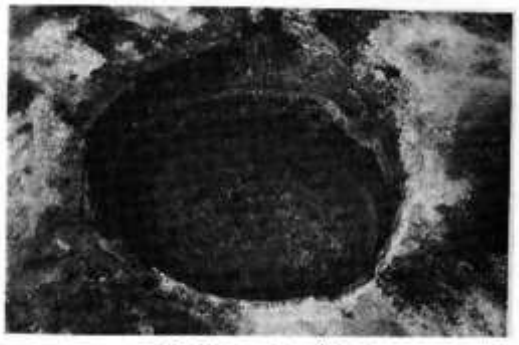
84. CⅦ—011土層断面

86. CⅦ—012土層断面

87. CⅦ—014土層断面

89. CⅦ—015土層断面

88. CⅦ—016土層断面



90. DⅤ—001完掘(ゴロタガメ)

写真図版21：土坑類写真（6）

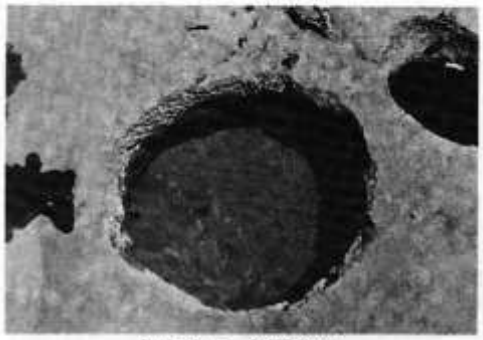
91. DV—002完掘

92. DV—002土層断面

93. DV—002土器出土状態

96. DV—004完掘

97. DV—004土層断面



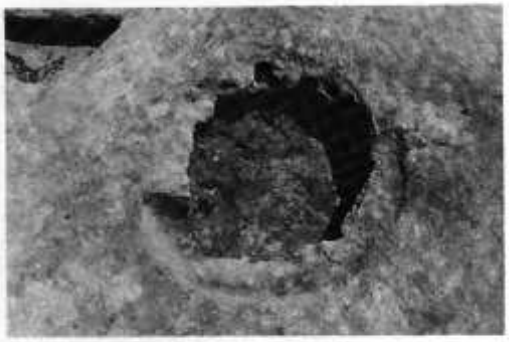
94. DV—003完掘

95. DV—003土層断面

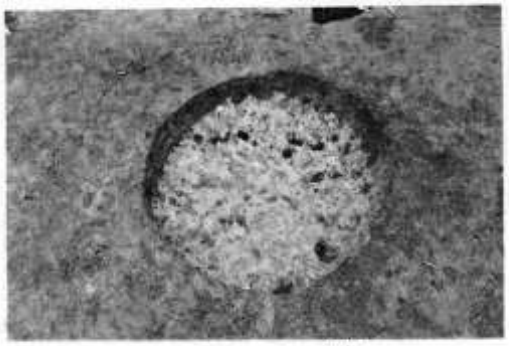
98. DV—005完掘

99. DV—005土層断面

写真図版22：土坑写真（7）



100. D V —006完掘



102. D V —007完掘

101. D V —006土層断面

103. D V —007土層断面

104. D V —008完掘

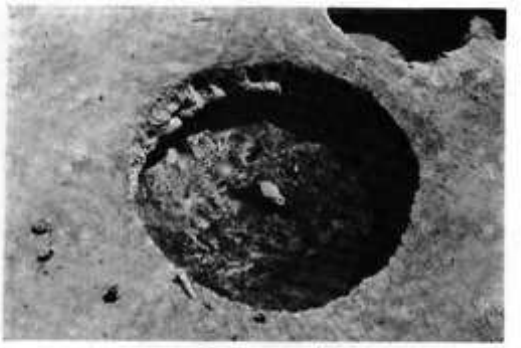
106. D V —009土層断面

105. D V —008土層断面

107. D V —011完掘

写真図版23：土坑類写真（8）

108. DV—012完掘



110. DV—013完掘

109. DV—012土層断面

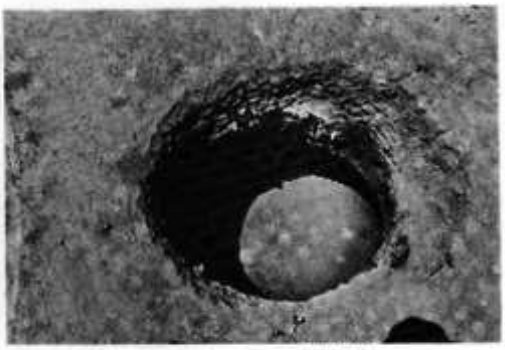
111. DV—013土層断面

112. DV—014(上).015(下)完掘

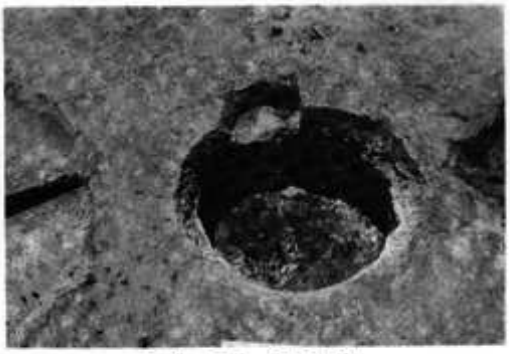
113. DV—014土層断面

114. DV—015土層断面

写真図版24：土坑類写真（9）



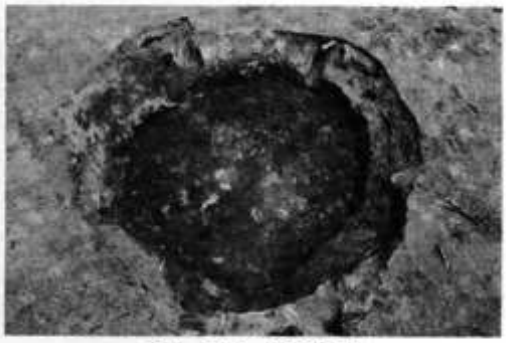
115. DV—016完掘



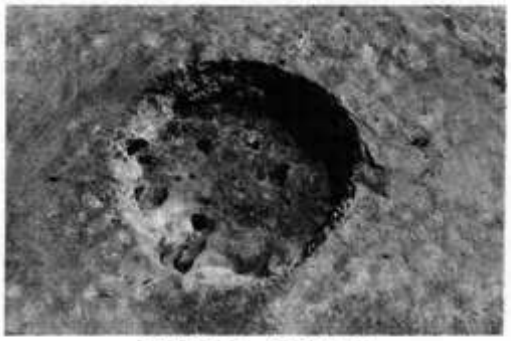
117. DV—017完掘

116. DV—016土層断面

118. DV—017土層断面



119. DV—018完掘



121. DV—019完掘

120. DV—018土層断面

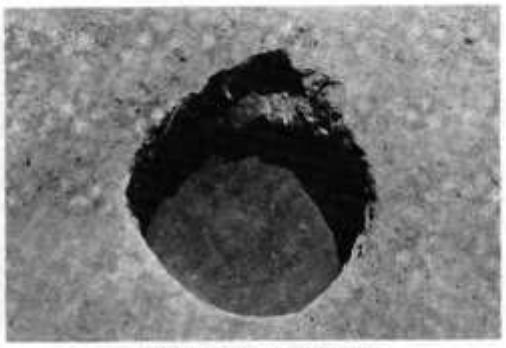
122. DV—019土層断面

写真図版25：土坑類写真（10）

123. DⅥ—001(右).002(左)完掘

124. DⅥ—001土層断面

125. DⅥ—002土層断面



128. DⅣ—003完掘

126. DⅥ—004完掘

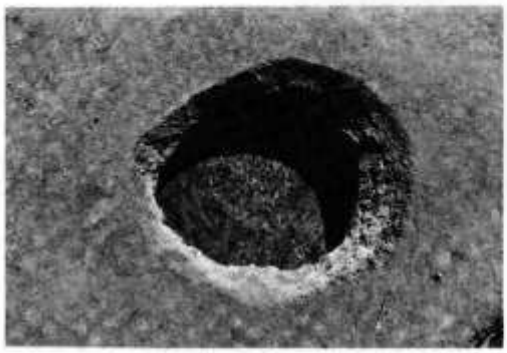
127. DⅥ—004土層断面

129. DⅥ—005完掘

130. DⅥ—005土層断面

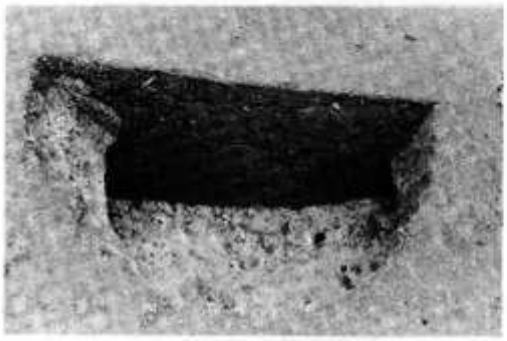
写真図版26：土坑類写真（11）

131. DⅥ—006完掘

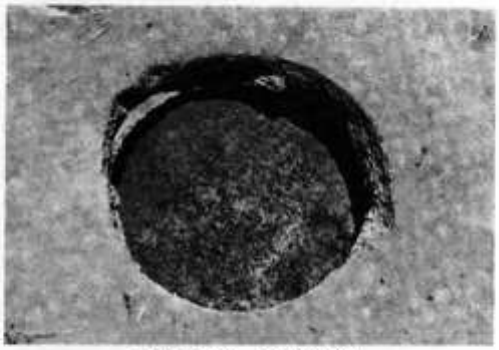


133. DⅥ—007完掘

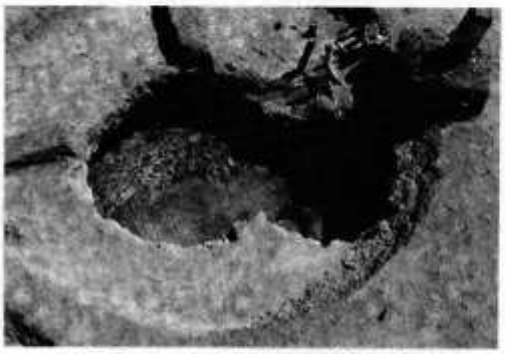
132DⅥ—006土層断面



134. DⅥ—007土層断面

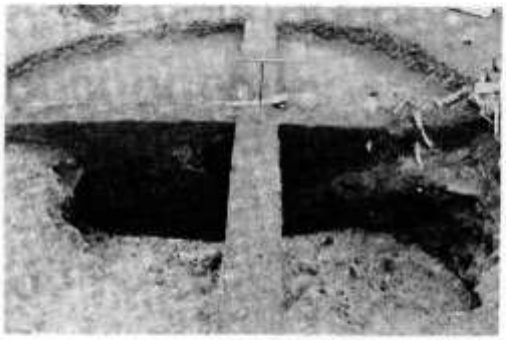


135. DⅥ—008完掘



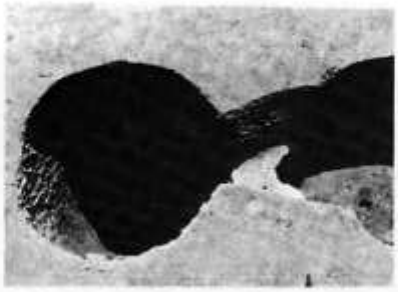
137. DⅥ—010(左). 009(右). 完掘

136. DⅥ—008土層断面



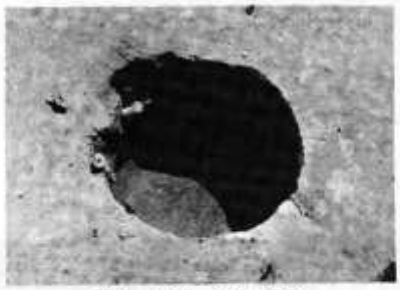
138. DⅥ—010土層断面

写真図版27：土坑類写真（12）

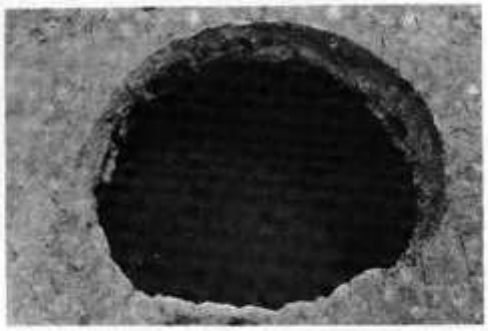


139. DⅥ—011完掘

140. DⅥ—011土層断面

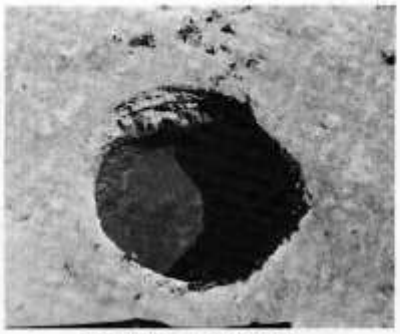


143. DⅥ—012完掘



144. DⅥ—014完掘

145. DⅥ—014土層断面



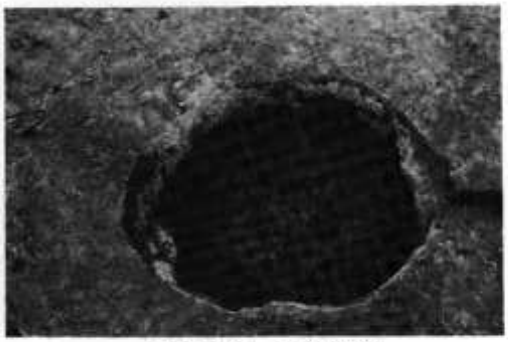
141. DⅥ—013完掘

142. DⅥ—013土層断面

146. DⅥ—006土器出土状態

147. DⅥ—015土層断面

写真図版28：土坑類写真（13）

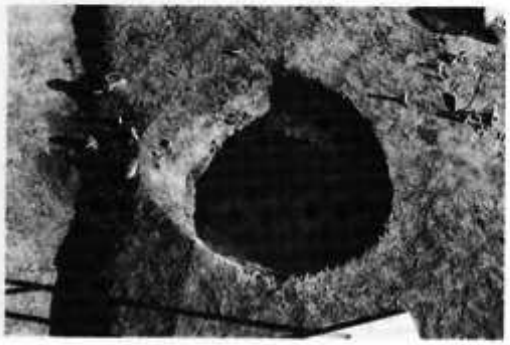


148. DⅥ—016完掘

150. DⅥ—017完掘

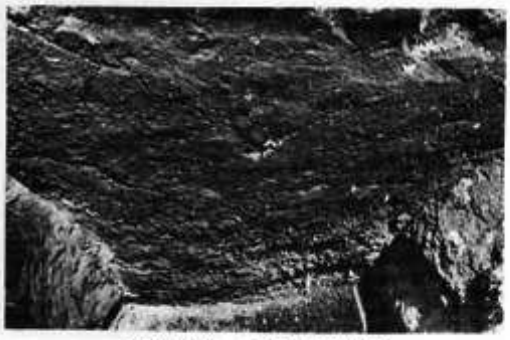
149. DⅥ—016土層断面

151. DⅥ—017土層断面



152. DⅥ—018完掘

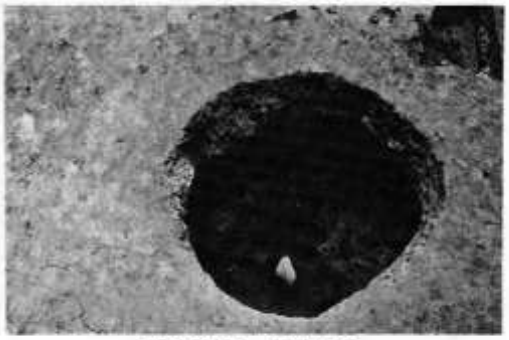
154. DⅥ—019完掘



153. DⅥ—018土層断面

155. DⅥ—019土層断面

写真図版29：土坑類写真（14）



156. DⅥ—020完掘

158. DⅥ—021完掘

157. DⅥ—020土層断面

159DⅥ—021土層断面

160. DⅥ—022完掘

162. DⅥ—023完掘

161. DⅥ—022土層断面

163. DⅥ—023土層断面

写真図版30：土坑類写真（15）

164. E V —001完掘

165. E V —002完掘

167. E V —003完掘

166. E V —002土層断面

168. E V —003土層断面

169. D Ⅵ—024完掘

170. D Ⅵ—024土層断面

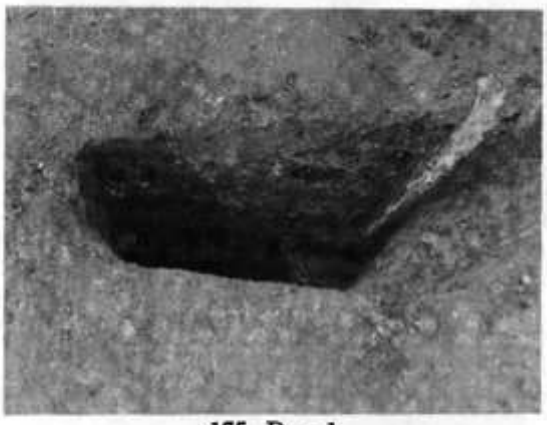
171. D Ⅵ—025完掘

172. D Ⅵ—025土層断面

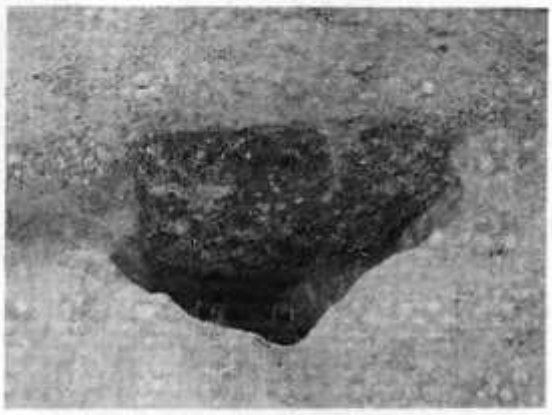
173. D Ⅵ—026完掘

174. D Ⅵ—026土層断面

写真図版31：土坑類写真（16）



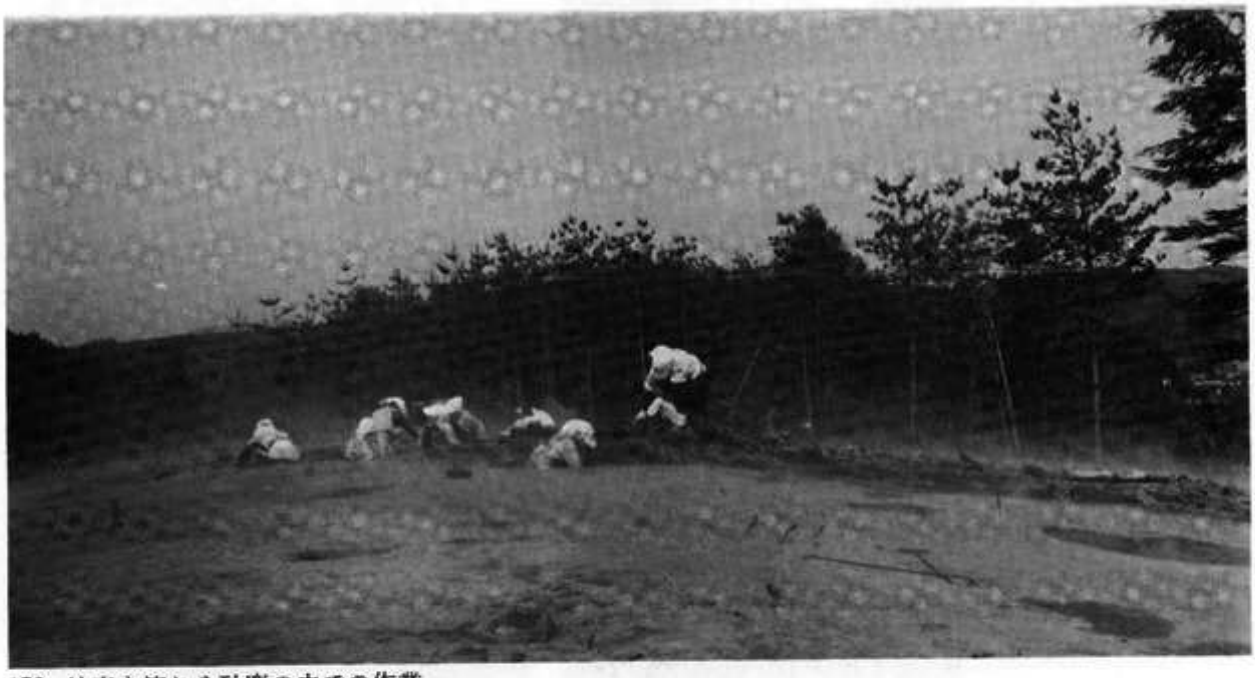
175. Po—1



176. Po—2

177. Po—3

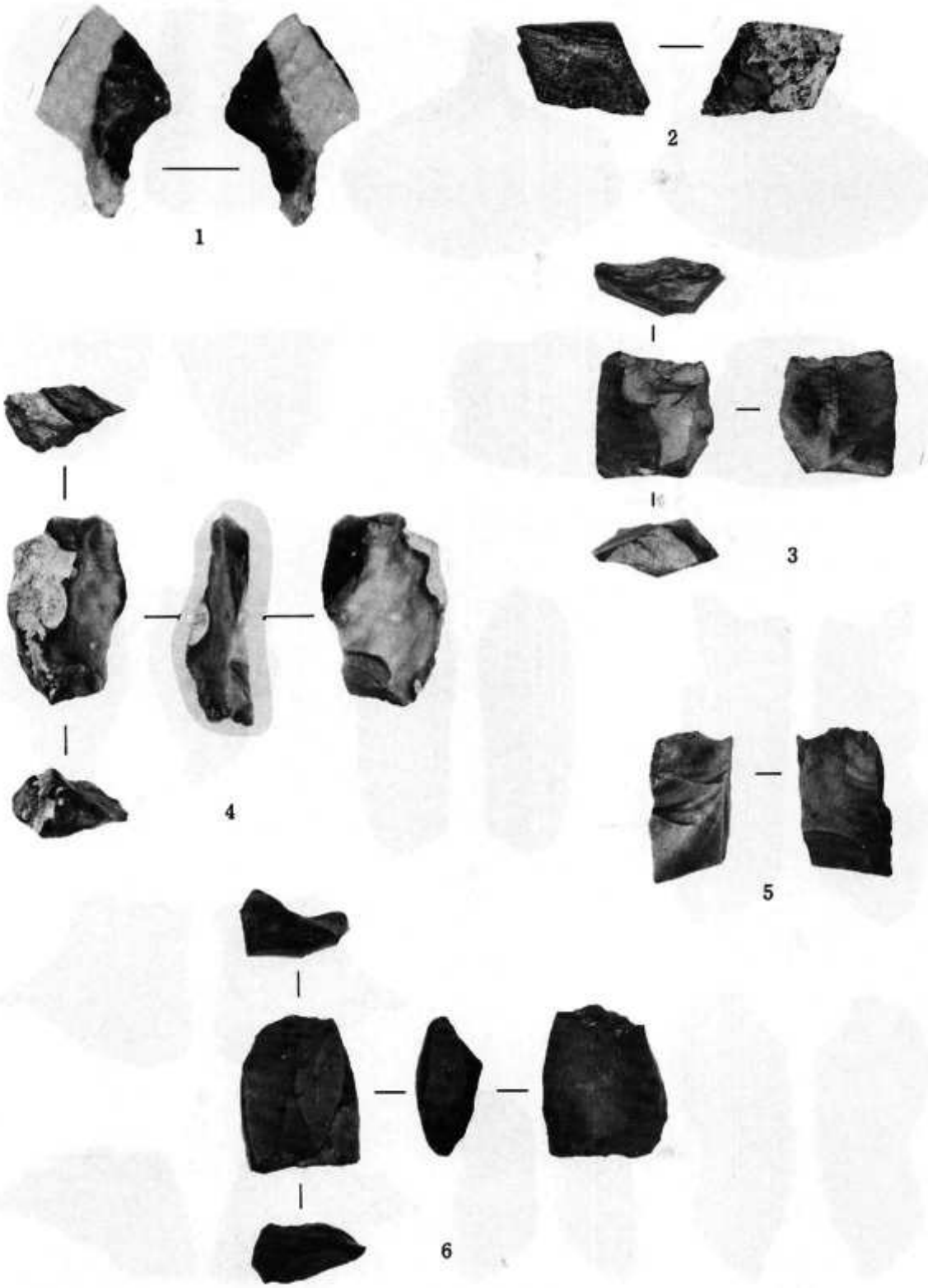
178. Po—4



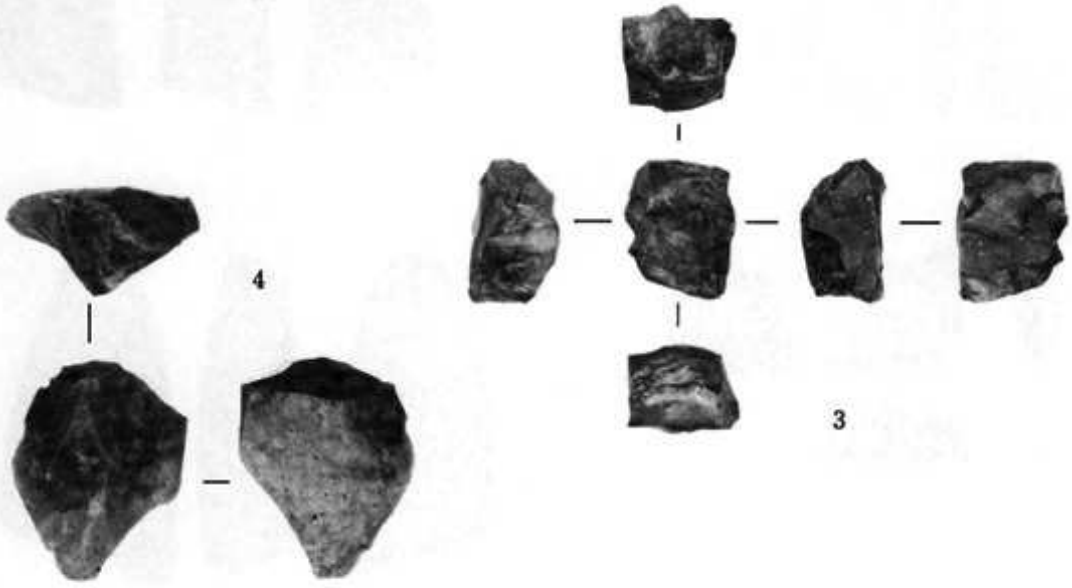
179. 地表を流れる砂塵の中での作業

写真図版32：作業小屋柱穴断面と作業風景

写真図版33：石器写真—Ⅰ（石匙・掻器他）

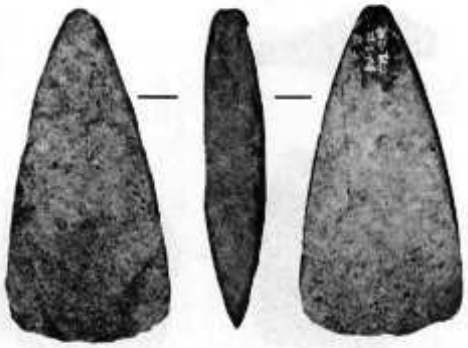


写真図版34：石器写真－2（楔形石器他）



写真図版35：石器写真— 3 （楔形石器他）

1

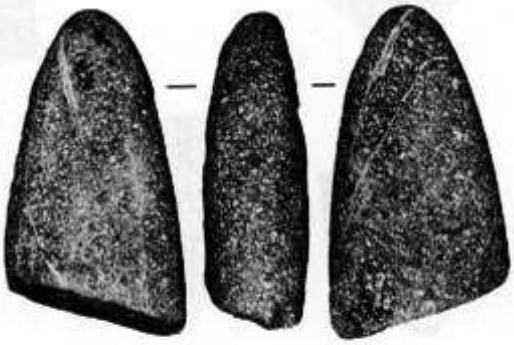


2

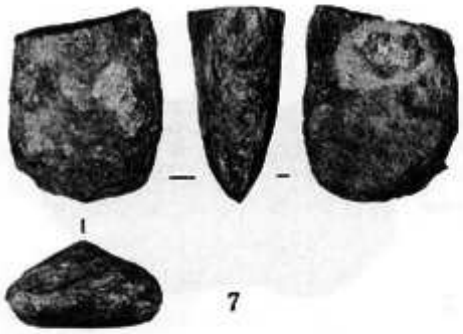
3

4

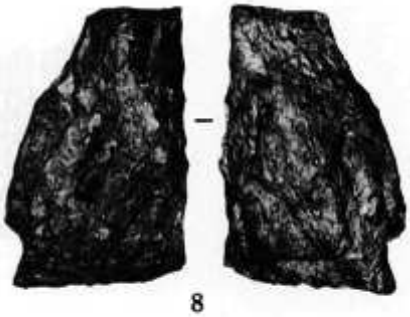
5



6

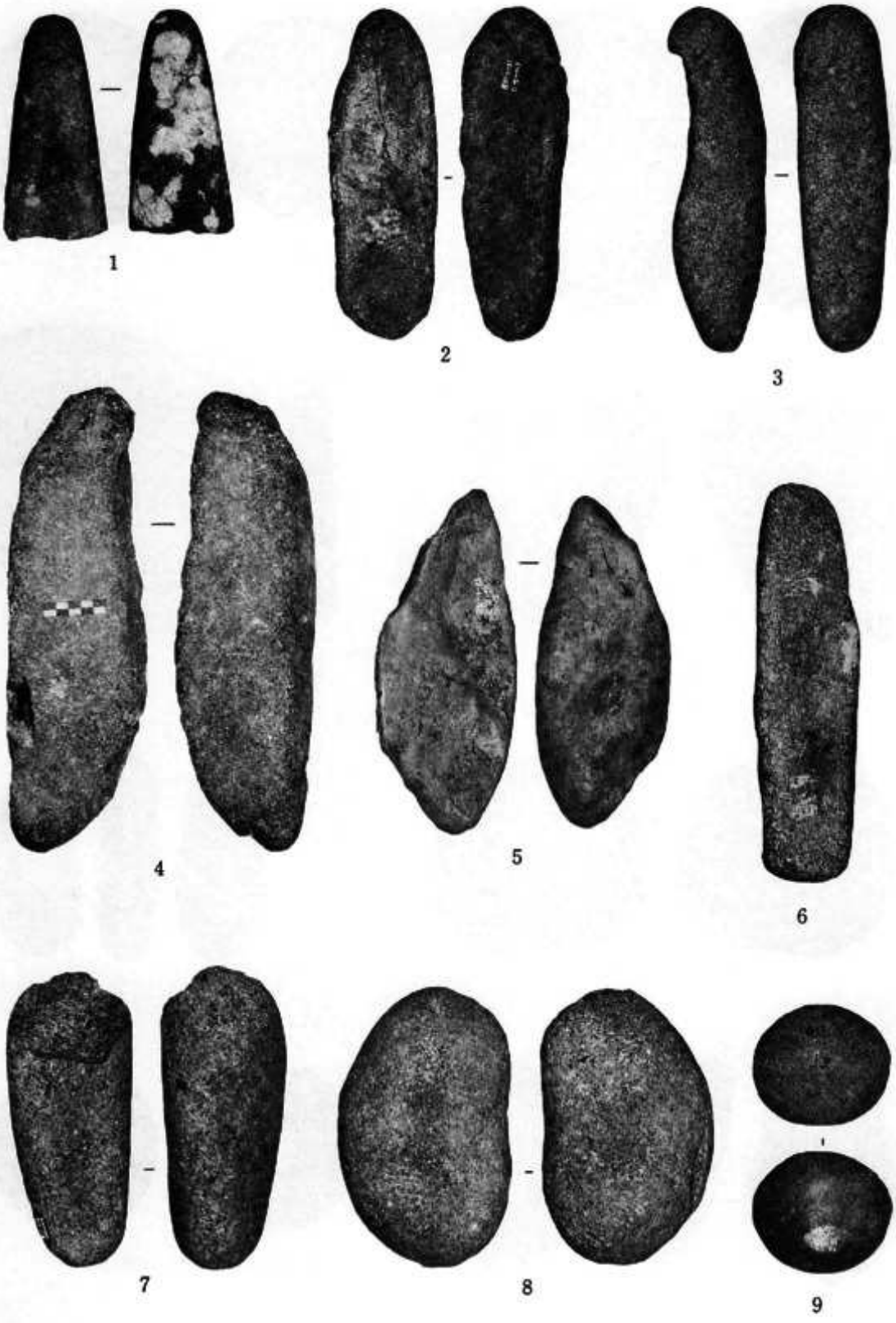


7



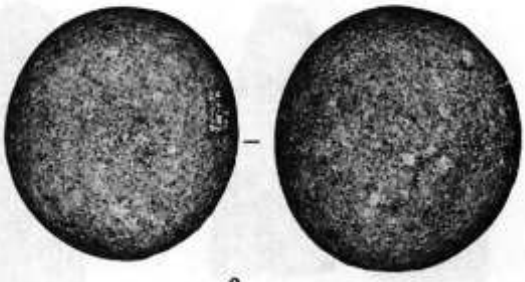
8

写真図版36：石器写真— 4 （石斧他）

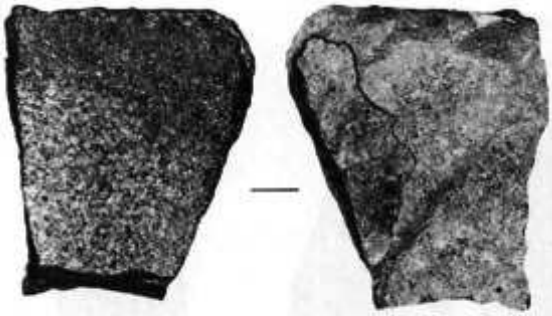


写真図版37：石器写真―5（くぼみ石類）

1



2

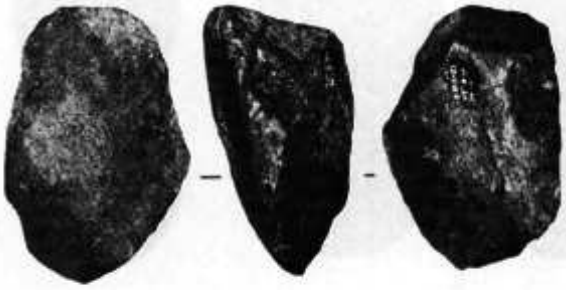


3

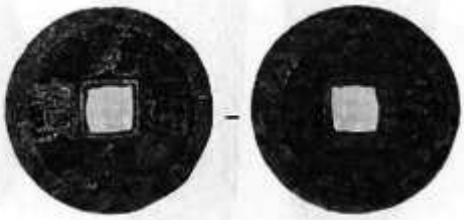
4

5

7



6



8 ※DⅥ—024土坑出土

写真図版38：石器写真—6（石皿・磨石・他）

1. CⅦ—F
※8と同一個体

2. BⅦ—03住

3.

4. CⅦ—C

5. AⅢ

6. AⅢ

8. CⅦ—F

9. BⅢ

7. CⅦ—02住

10. CⅦ—02住

11. CⅦ—06住

12.

13.

14. CⅦ—06住

15. CⅦ—06住

16. CⅦ—06住

17. CⅦ—011

18. CⅦ—011

写真図版39：土器写真—Ⅰ

1. BⅦ—01住

2. BⅦ—01住

3. CⅦ—01住

4. BⅦ—03住

5. BⅦ—01住

6. BⅦ—01住

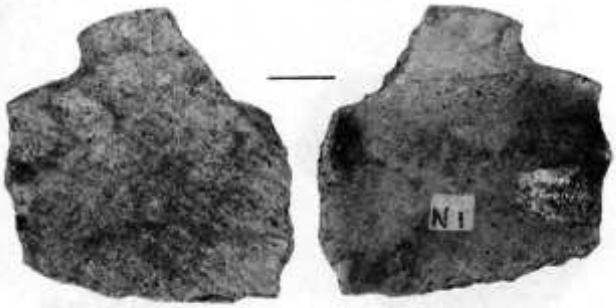
7. BⅦ—01住

8. BⅦ—01住

9. BⅦ—01住

10. BⅦ—01住

11. BⅦ—01住



12. BⅦ—01住

13. CⅦ—04住

14. ?

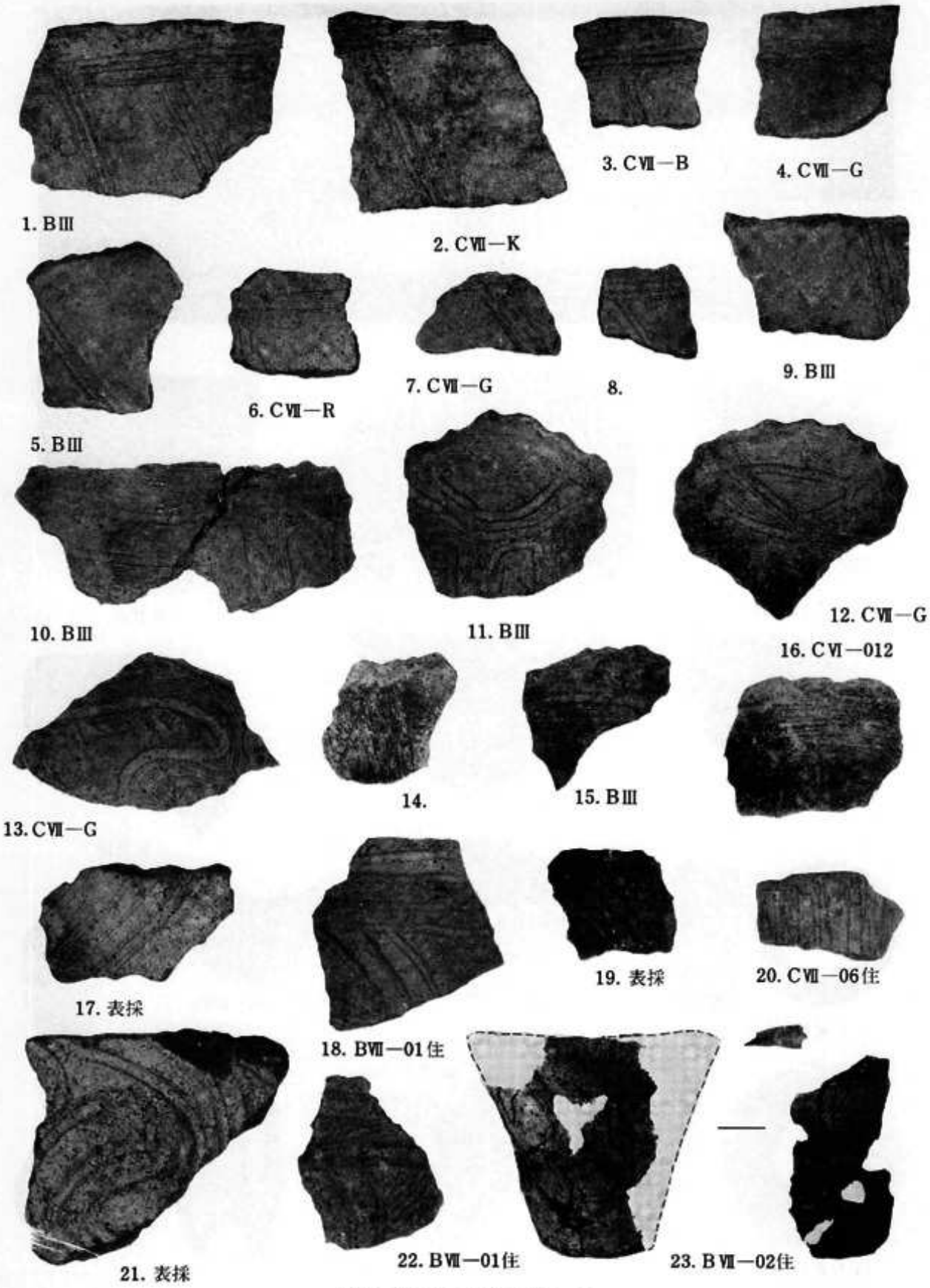
15. CⅦ—W

16. CⅦ—05住

17. CⅣ—W

18. BⅢ

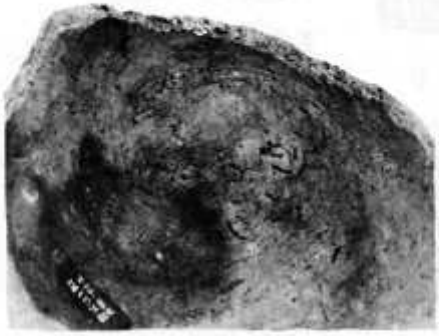
写真図版40：土器写真—2



写真図版41：土器写真—3

1. BⅦ—01住

2. BⅦ—01住



5. BⅦ

3. BⅢ

4. BⅦ—01住

6. BⅢ

7. E I

8. CⅦ—03住

9. CⅦ—05住

10.

11. CⅦ—06住

12. CⅦ

13.

写真図版42：土器写真—4

1. CⅦ－04住

2. CⅦ－04住

5. DⅤ－002

3. CⅦ－04住

4. CⅦ－04住

6. BⅦ－01住

7. DⅥ－005

8. DⅥ－005

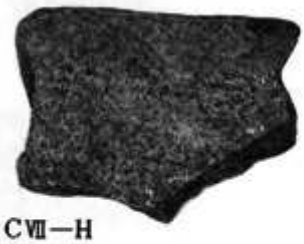
9. BⅢ

10. DⅥ－005

14. DⅤ－002

11. BⅦ－01住

12. CⅦ－01住



13. CⅦ－H

写真図版43：土器写真－5

1. CⅦ—H

2. BⅦ—01

3. CⅡ

4. CⅦ—K

5. CⅥ—01

6. DⅥ—13

7. BⅢ

8. CⅦ—12

9. DⅤ—015

10. CⅦ—02住

11. CⅦ—01住
・CⅥ—D

12. DⅥ—022

13. DⅥ—006

14.CⅥ—01住

15. AⅢ

16. BⅡ

17. DⅥ—019

18. BⅦ—01

写真図版44：土器写真—6

1. BⅢ

2. CⅦ—05住

3. CⅦ—B

4. CⅦ—02住

5. BⅢ

6. BⅦ—01住

7. BⅦ—01住

8. CⅦ

9. BⅢ

10. BⅢ

11. CⅦ—G

12. CⅡ

13. CⅦ—05住

14. BⅡ

15. BⅡ

16. CⅦ—H

17. CⅦ—6

18. BⅦ

19. BⅥ

20. BⅦ—G

21. CⅦ—M

22. CⅢ

23. 表採

24. CⅦ—05住

25. CⅦ—H

26a

26. BⅢ

26b

BⅦ—01

32. 表採

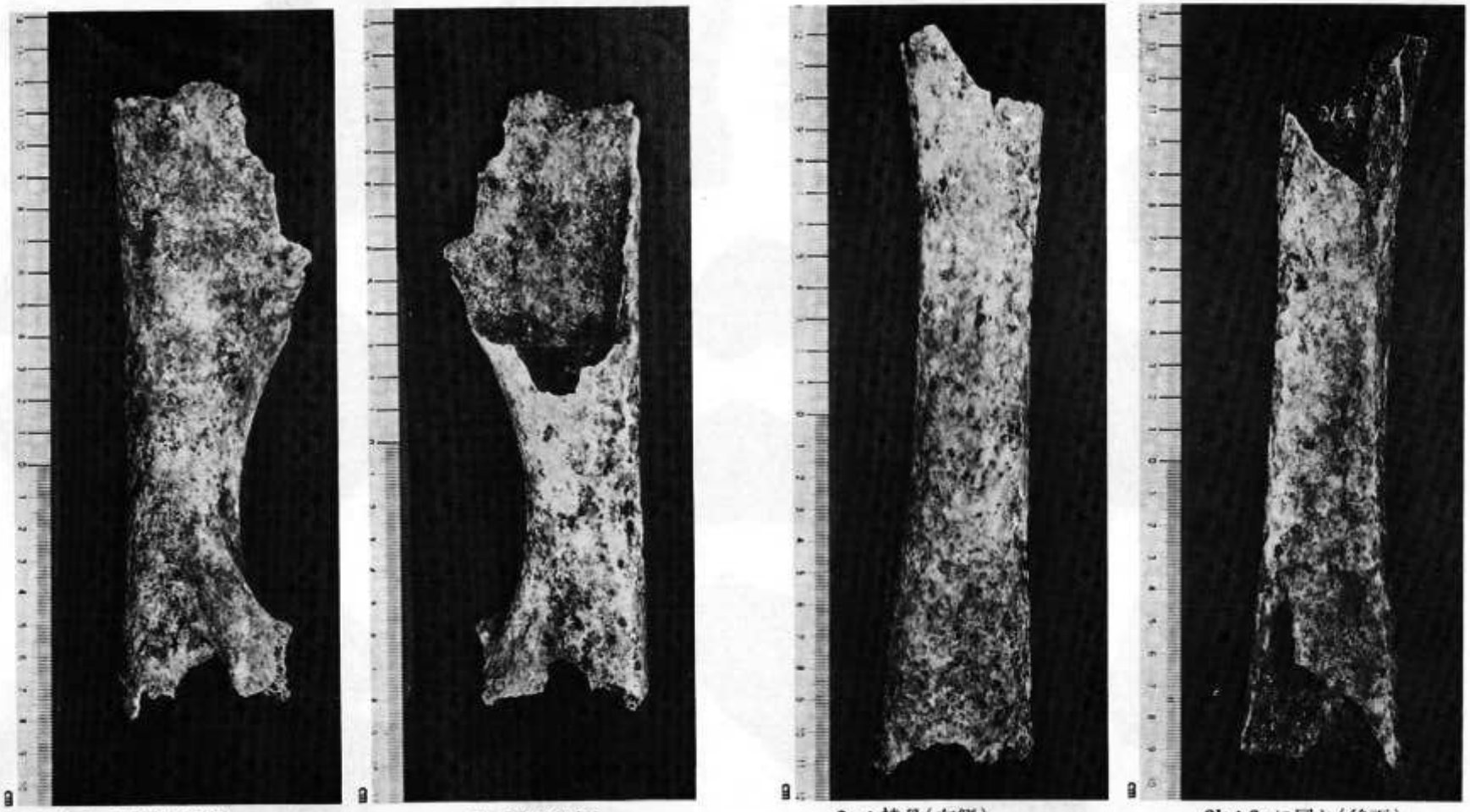
28. DⅤ—008

29. DⅤ—008

30. BⅢ

31. BⅡ

写真図版45：土器写真—7



1a：上腕骨（右側）
上方が近位端（前面）

1b：1aに同じ
（後面）

2a：橈骨（右側）
上方が近位端（前面）

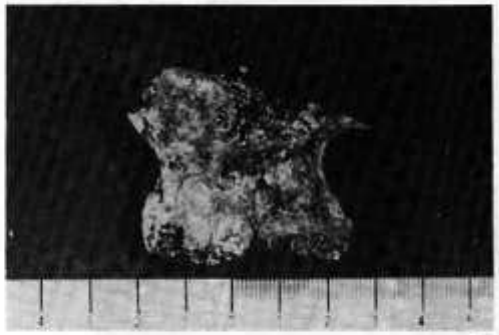
2b：2aに同じ（後面）

写真図版46：ＤⅥ—026土坑出土の骨について（１）

3a：中手骨（右側）
上方が近位端（後面）

3b：3aに同じ（前面）

4：距滑
（滑車面）



5：肩甲骨片

写真図版47：ＤⅥ－026土坑出土の骨について（２）

6：肋骨

7：骨細片

8：橈骨
（軟X線撮影）

写真図版48：DⅥ—026土坑出土の骨について(3)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第68集

九戸郡軽米町

馬場野Ⅰ遺跡発掘調査報告書

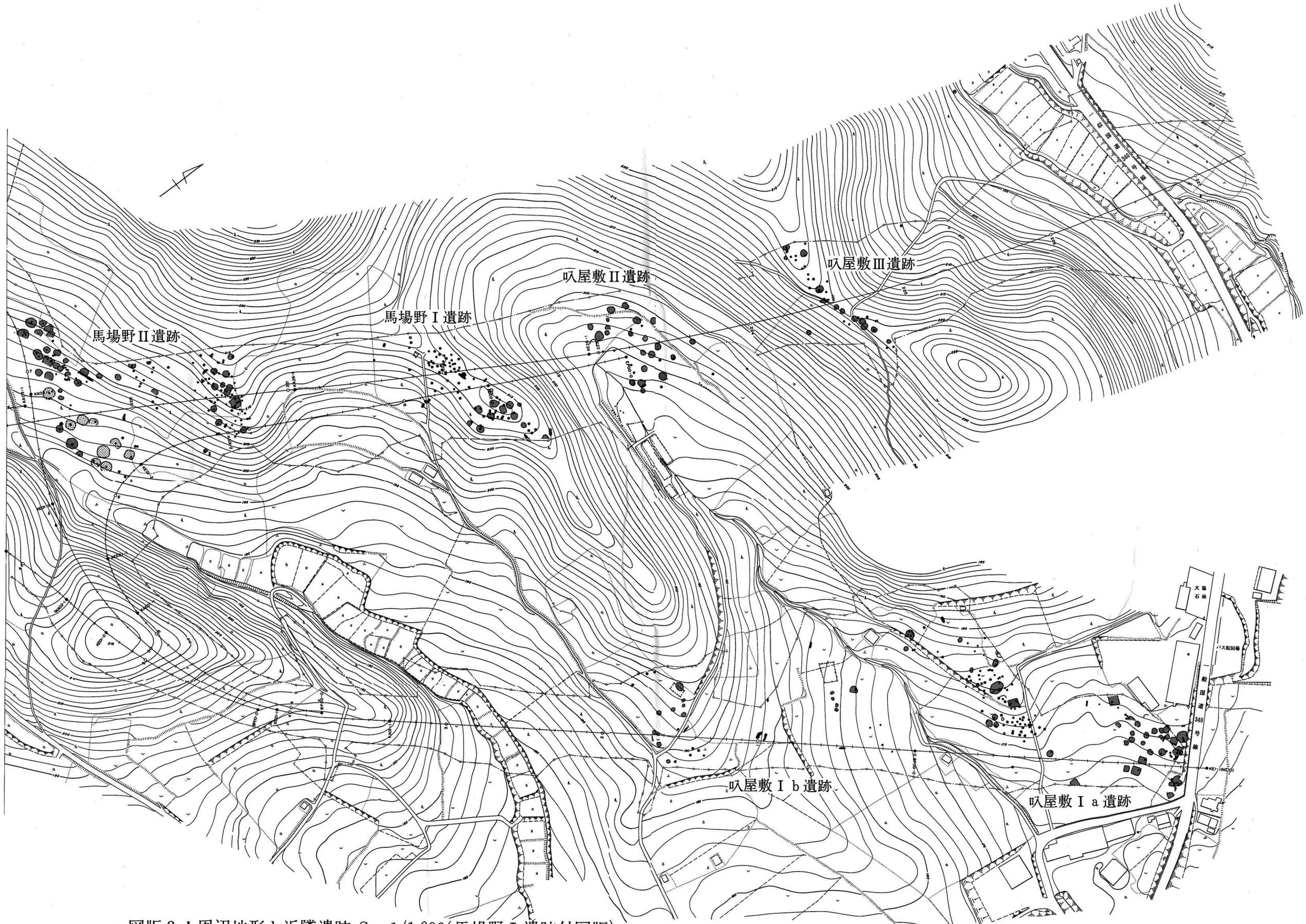
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷　昭和58年10月20日
発行　昭和58年10月31日

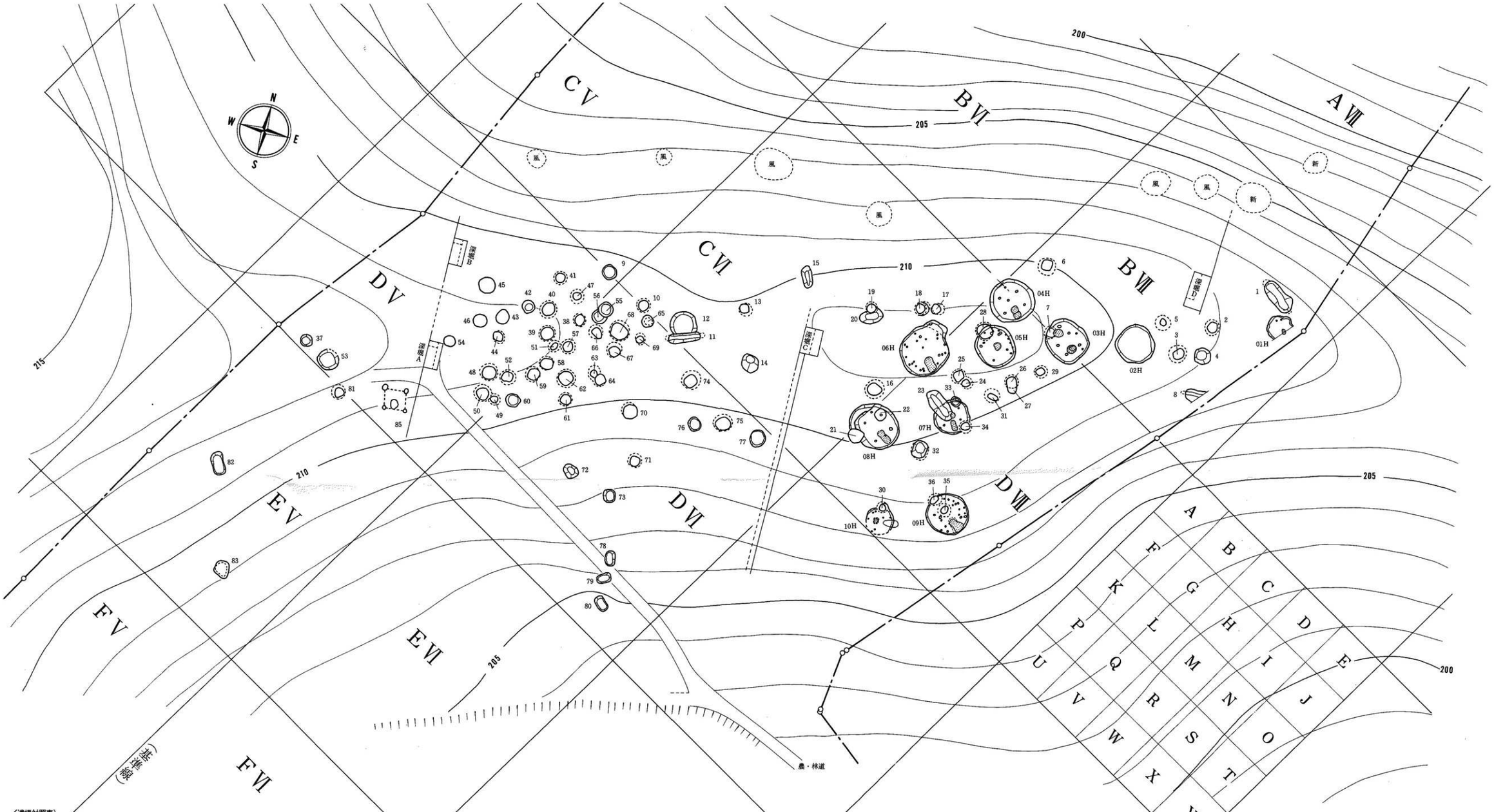
発行　(財) 岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷
TEL (0196) 38－9001～2

印刷　(株) 杜陵印刷

© 岩手県埋文センター 1983



図版３：周辺地形と近隣遺跡 S＝1/1,000(馬場野Ⅰ遺跡付図版)



〈遺構対照表〉

01H：BⅦ—01住居址，02H：BⅦ—02住居址，03H：BⅦ—03住居址，04H：CⅦ—01住居址，05H：CⅦ—02住居址，06H：CⅦ—03住居址，07H：CⅦ—04住居址，08H：CⅦ—05住居址，09H：CⅦ—06住居址，10H：CⅦ—07住居址。

1：BⅦ—001 土坑，2：BⅦ—002 土坑，3：BⅦ—003 土坑，4：BⅦ—004 土坑，5：BⅦ—005 土坑，6：BⅦ—006 土坑，7：BⅦ—007 土坑，8：BⅦ—008 土坑，9：CⅤ—001 土坑，10：CⅥ—001 土坑，11：CⅥ—002 土坑，12：CⅥ—003 土坑，13：CⅥ—004 土坑，14：CⅥ—005 土坑，15：CⅥ—006 土坑，16：CⅥ—007 土坑，17：CⅥ—008 土坑，18：CⅥ—009 土坑，19：CⅥ—010 土坑，20：CⅥ—011 土坑，21：CⅦ—001 土坑，22：CⅦ—002 土坑，23：CⅦ—003 土坑，24：CⅦ—004 土坑，25：CⅦ—005 土坑，26：CⅦ—006 土坑，27：CⅦ—007 土坑，28：CⅦ—008 土坑，29：CⅦ—009 土坑，30：CⅦ—010 土坑，31：CⅦ—011 土坑，32：CⅦ—012 土坑，33：CⅦ—013 土坑，34：CⅦ—014 土坑，35：CⅦ—015 土坑，36：CⅦ—016 土坑，37：DⅤ—001 土坑，38：DⅤ—002 土坑，39：DⅤ—003 土坑，40：DⅤ—004 土坑，41：DⅤ—005 土坑，42：DⅤ—006 土坑，42：DⅤ—007 土坑，44：DⅤ—008 土坑，45：DⅤ—009 土坑，47：DⅤ—010 土坑，47：DⅥ—012 土坑，48：DⅤ—013 土坑，49：DⅤ—014 土坑，50：DⅤ—015 土坑，51：DⅤ—016 土坑，52：DⅤ—017 土坑，53：DⅤ—018 土坑，54：DⅤ—019 土坑，55：DⅥ—001 土坑，56：DⅥ—002 土坑，57：DⅥ—003 土坑，58：DⅥ—004 土坑，59：DⅥ—005 土坑，60：DⅥ—006 土坑，61：DⅥ—007 土坑，62：DⅥ—008 土坑，63：DⅥ—009 土坑，64：DⅥ—010 土坑，65：DⅥ—011 土坑，66：DⅥ—012 土坑，67：DⅥ—013 土坑，68：DⅥ—014 土坑，69：DⅥ—015 土坑，70：DⅥ—016 土坑，71：DⅥ—017 土坑，72：DⅥ—018 土坑，73：DⅥ—019 土坑，74：DⅥ—020 土坑，74：DⅥ—021 土坑，76：DⅥ—022 土坑，76：DⅥ—023 土坑，78：DⅥ—024 土坑，79：DⅥ—025 土坑，80：DⅥ—026 土坑，81：EⅤ—001 土坑，82：EⅤ—002 土坑，83：EⅤ—003 土坑，84：大柱穴：位置未記録（EⅥ—001 土坑）

85：作業小屋跡

〈凡　例〉

1．等高線は原地形を表わしたもので1ｍ毎。
2．一点鎖線は道路の用地幅を表わしている。
3．方眼は一辺30ｍの調査用大区画である。
4．図中の数字1～83は土坑類、01H～10Hは住居址を通算番号で示したものである。
5．破線と“風”との組み合せは、風倒木痕と考えられるものを示す。
6．図中の方位は磁針方位を表わしている。真北は磁針に対して東偏約7゜10′である。

図版4：馬場野Ⅰ遺跡遺構配置図